兵庫県文化財調査報告　第381冊

姫路市

南畝町遺跡・西延末遺跡

－ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－

2010年3月（平成22年3月）

兵庫県教育委員会

南畝町遺跡・西延末遺跡

兵庫県文化財調査報告　第381冊

兵庫県教育委員会

21教Ⓣ1-027A4

姫路市

のうねんちょう　　にしのぶすえ

南畝町遺跡・西延末遺跡

－ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－

2010年3月（平成22年3月）

兵 庫 県 教 育 委 員 会

例　　言

1. 本書は、姫路市南畝町・高尾町に所在する南畝町遺跡、姫路市西延末に所在する西延末遺跡の発掘調査報告書である。
2. 両遺跡の発掘調査はＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に先立つもので、兵庫県姫路土木事務所からの依頼を受け、兵庫県教育委員会が本発掘調査を実施した。

　南畝町遺跡の発掘調査は、平成11年度・平成12年度・平成14年度・平成15年度に実施した。平成12年度の発掘調査は、株式会社神崎組が請負い、実施した。

　西延末遺跡の発掘調査は、平成11年度・平成12年度・平成19年度にそれぞれ実施した。平成12年度が大鉄工業株式会社、平成19年度が株式会社岩山組が、それぞれ請け負い実施した。

3. 南畝町遺跡の本発掘調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（現:兵庫県立考古博物館）西口和彦・水口富夫・松岡千寿（平成11年度）、中川　渉・松岡千寿（平成12年度）、小川良太・仁尾一人（平成14年度）、仁尾一人（平成15年度）が、それぞれ担当した。

　西延末遺跡の本発掘調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（現:兵庫県立考古博物館）甲斐昭光・川村慎也・田中秀明（平成11年度）、中川　渉・松岡千寿（平成12年度）、山田清朝（平成19年度）が担当した。

4. 南畝町遺跡調査後の空中写真の撮影および図化は、平成11年度が株式会社　サンコム、平成12年度が写測エンジニアリング株式会社、平成14年度が株式会社　大設・富士測量株式会社、に委託して行った。また、平成15年度の調査に関しては、調査員が直接図化を行った。

　西延末遺跡調査後の空中写真の撮影および図化は、平成12年度が中日本航空株式会社に、平成19年度が株式会社　サンコムに、それぞれ委託して行った。また、平成11年度の調査に関しては、調査員が実測し、図化が行われている。

5. 整理作業は、平成20年度から兵庫県立考古博物館にて実施した。
6. 遺物写真の撮影は、兵庫県教育委員会が株式会社谷口フォトに委託して行った。
7. 調査は、姫路市街区多角点をもとに3級基準点を設置して行った。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第Ｖ系に位置する。平成14年度以前の調査成果については、ＴＫＹ2ＪＧＤにより世界測地系に変換している。
8. 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
9. 本書で使用した遺構番号は、遺跡ごとに呼称した。また、各遺構は以下のように呼称した。

　竪穴住居跡→ＳＨ　掘立柱建物跡→ＳＢ　柱穴→Ｐ　土坑→ＳＫ　溝→ＳＤ

10. 第7図は、国土地理院発行1/25000地形図『姫路南部』を使用した。また、第2図は、国土地理院発行1/200000地形図『姫路』を使用した。
11. 本書に用いた遺物番号は、遺跡ごとにつけ、それぞれ本文・挿図・図版ともに統一している。
12. 本書の編集は森本貴子の補助を得て山田が行い、第4章を除いては山田が執筆した。
13. 本報告にかかわる遺物・写真・遺構図等は、兵庫県立考古博物館に保管している。
14. 最後に、発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示をいただいた。ここに感謝の意を表するものである。

　小柴治子・亀田修一

目　　次

第1章　南畝町遺跡と西延末遺跡
第1節　地理的環境……1
第2節　歴史的環境……6
第2章　調査の経緯
第1節　調査の起因……8
第2節　確認調査……10
第3節　本発掘調査……14
第4節　整理作業……18
第3章　調査の成果
第1節　南畝町遺跡の調査
1．調査の概要……19
2．第1次調査……19
3．第2次調査……31
4．第3次調査……54
5．第4次調査……72
第2節　西延末遺跡の調査
1．調査の概要……104
2．調査の成果……106
第4章　分析・鑑定
第1節　南畝町遺跡出土サヌカイトの産地推定……126
第2節　石製品の石材鑑定……130
第5章　まとめ
第1節　南畝町遺跡……132
第2節　西延末遺跡……138

挿 図 目 次

第1図　遺跡の位置……vi
第2図　姫路市の位置 ……1
第3図　遺跡の位置 ……2
第4図　姫路平野の地形分類 ……3
第5図　南畝町・西延末遺跡周辺の微地形 ……4
第6図　姫路平野（西上空から）……5
第7図　主要周辺遺跡 ……7
第8図　工事計画と発掘調査……8・9
第9図　南畝町遺跡確認調査位置図……10
第10図　西延末遺跡確認調査位置図……12
第11図　南畝町遺跡調査位置図……15
第12図　住居跡検出作業……16
第13図　西延末遺跡調査位置図……16
第14図　遺跡見学会……17
第15図　第1次調査平面図 ……18
第16図　Ｂ区南壁……19
第17図　第1次調査出土土器(1)……24
第18図　第1次調査出土土器(2)……25
第19図　第1次調査出土土器(3)……26
第20図　第1次調査出土土器(4)……27
第21図　第1次調査出土土器(5)……28
第22図　第1次調査出土土器(6)……29
第23図　第1次調査出土土製品 ……30
第24図　出土砥石……30
第25図　第2次調査基本土層図 ……31
第26図　第2次調査平面図 ……32
第27図　ＳＤ01土器出土状況……37
第28図　ＳＤ02・ＳＤ03断面……39
第29図　ＳＤ04断面……41
第30図　第2次調査出土石器(1)……45
第31図　第2次調査出土石器(2)……45
第32図　第2次調査出土土器(1)……46
第33図　第2次調査出土土器(2)……47
第34図　第2次調査出土土器(3)……48
第35図　第2次調査出土土器(4)……49
第36図　第2次調査出土土器(5)……50
第37図　第2次調査出土土器(6)……51
第38図　第2次調査出土土器(7)……52
第39図　第2次調査出土土器(8)……53
第40図　第3次調査平面図 ……54
第41図　第3次調査ＳＫ03断面 ……55
第42図　第3次調査ＳＫ04断面 ……55
第43図　第3次調査出土石器 ……63
第44図　第3次調査出土土器(1)……64
第45図　第3次調査出土土器(2)……65
第46図　第3次調査出土土器(3)……66
第47図　第3次調査出土土器(4)……67
第48図　第3次調査出土土器(5)……68
第49図　第3次調査出土土器(6)……69
第50図　第3次調査出土土器(7)……70
第51図　第3次調査出土土器(8)……71
第52図　第4次調査基本土層図 ……72
第53図　第4次調査平面図 ……73
第54図　第4次調査出土土器(1)……74
第55図　第4次調査出土土器(2)……75
第56図　西延末遺跡調査位置図 ……104
第57図　西延末遺跡基本土層図 ……105
第58図　調査風景 ……106
第59図　平面図 ……107
第60図　ＳＨ01 ……108
第61図　ＳＨ02 ……109
第62図　ＳＸ01周溝断面 ……110
第63図　ＳＸ01 ……110
第64図　ＳＫ01 ……111
第65図　ＳＤ01断面 ……112
第66図　ＳＤ03断面 ……112
第67図　ＳＤ04断面 ……113
第68図　ＳＤ05断面 ……114

第69図　ＳＤ06断面 ……115
第70図　ＳＤ07断面 ……115
第71図　ＳＤ09断面 ……116
第72図　ＳＤ10断面 ……116
第73図　ＳＤ11断面 ……117
第74図　西延末遺跡出土土器(1) ……119
第75図　西延末遺跡出土土器(2) ……120
第76図　西延末遺跡出土土器(3) ……121
第77図　サヌカイト産地推定判別図(1) ……128
第78図　サヌカイト産地推定判別図(2) ……129
第79図　石製石材の実体顕微鏡による拡大写真 …131
第80図　弥生時代中期の分類(1) ……133
第81図　弥生時代中期の分類(2) ……135
第82図　弥生時代後期の分類 ……136

表　目　次

第1表　出土土錘一覧表 ……30
第2表　南畝町遺跡出土土器観察表(1) ……76・77
第3表　南畝町遺跡出土土器観察表(2) ……78・79
第4表　南畝町遺跡出土土器観察表(3) ……80・81
第5表　南畝町遺跡出土土器観察表(4) ……82・83
第6表　南畝町遺跡出土土器観察表(5) ……84・85
第7表　南畝町遺跡出土土器観察表(6) ……86・87
第8表　南畝町遺跡出土土器観察表(7) ……88・89
第9表　南畝町遺跡出土土器観察表(8) ……90・91
第10表　南畝町遺跡出土土器観察表(9) …92・93
第11表　南畝町遺跡出土土器観察表(10) …94・95
第12表　南畝町遺跡出土土器観察表(11) …96・97
第13表　南畝町遺跡出土土器観察表(12) …98・99
第14表　南畝町遺跡出土土器観察表(13) …100・101
第15表　南畝町遺跡出土土器観察表(14) …102・103
第16表　西延末遺跡出土土器観察表(1) …122・123
第17表　西延末遺跡出土土器観察表(2) …124・125
第18表　原石採取地と判別群名称 ……126
第19表　分析対象資料と産地推定結果 ……127
第20表　出土した石質遺物とその岩石名 ……130

図 版 目 次

写真図版1　南畝町遺跡　第1次調査
　全景　南上空から
　全景　西上空から
写真図版2　南畝町遺跡　第1次調査
　Ａ区全景　南から
　Ｂ区全景　南から
写真図版3　南畝町遺跡　第1次調査
　Ｂ区全景　北から
　Ｂ区南壁　北から
　Ｂ区旧河道断面　北から
写真図版4　南畝町遺跡　第1次調査
　旧河道出土土器（1～7）
写真図版5　南畝町遺跡　第1次調査
　旧河道出土土器（8・9・11～14）
写真図版6　南畝町遺跡　第1次調査
　旧河道出土土器（15～21）　19把手（①）
写真図版7　南畝町遺跡　第1次調査
　旧河道出土土器（23～28）

写真図版8　南畝町遺跡　第1次調査
旧河道出土土器（29～32・34・36・37）
写真図版9　南畝町遺跡　第1次調査
旧河道出土土器（38～45・47・49）
写真図版10　南畝町遺跡　第1次調査
旧河道出土土器（48・50・51・55～59）
写真図版11　南畝町遺跡　第1次調査
旧河道出土土器（60～67）
写真図版12　南畝町遺跡　第1次調査
旧河道出土土器（68～72）
写真図版13　南畝町遺跡　第1次調査
旧河道出土土器（73～78・80）
写真図版14　南畝町遺跡　第1次調査
旧河道出土土器（82・83・86・87）
82充填部内面（①）
写真図版15　南畝町遺跡　第1次調査
旧河道出土土製品（88～94）
写真図版16　南畝町遺跡　第1次調査
旧河道出土石器（Ｓ1）
写真図版17　南畝町遺跡　第2次調査
東半部全景　西から　　俯瞰　上空から
全景　東から
写真図版18　南畝町遺跡　第2次調査
ＳＤ01　南から
ＳＤ01土器出土状況　北から
写真図版19　南畝町遺跡　第2次調査
ＳＤ01～ＳＤ03　南から
ＳＤ02断面　南から
ＳＤ04断面　南から
写真図版20　南畝町遺跡　第2次調査
ＳＤ01出土土器
（102～104･107･108･115･118）
写真図版21　南畝町遺跡　第2次調査
ＳＤ01出土土器（127）
ＳＤ02出土土器（129・131・133）
ＳＤ04出土土器（160・161）
写真図版22　南畝町遺跡　第2次調査
ＳＤ05出土土器（163・176）
土器溜り出土土器（177・179・180・188）
写真図版23　南畝町遺跡　第2次調査
土器溜り出土土器（189・192～194・196）
写真図版24　南畝町遺跡　第2次調査
土器溜り出土土器（197）
包含層出土土器（208・215）
写真図版25　南畝町遺跡　第2次調査
包含層出土土器（220・224・225）
ＳＤ01出土石器（Ｓ2）
包含層出土石器（Ｓ3）
写真図版26　南畝町遺跡　第2次調査
包含層出土石器（Ｓ4・Ｓ5）
写真図版27　南畝町遺跡　第3次調査
全景　北上空から
全景　東から
写真図版28　南畝町遺跡　第3次調査
俯瞰　東上空から
写真図版29　南畝町遺跡　第3次調査
ＳＫ01断面　西から
ＳＫ02断面　西から
ＳＫ03全景　東から
写真図版30　南畝町遺跡　第3次調査
ＳＤ01全景　南西から
ＳＤ03全景　南西から
ＳＤ03土器出土状況　南から
写真図版31　南畝町遺跡　第3次調査
ＳＤ03・04全景　南西から
ＳＥ01全景　西から
写真図版32　南畝町遺跡　第3次調査
ＳＤ01出土土器（246・247）
ＳＤ02出土土器（254・255・263）
ＳＤ03出土土器（271・272）
写真図版33　南畝町遺跡　第3次調査
ＳＤ03出土土器
（279～281・283・284・289）
281体部中位施文（①）
写真図版34　南畝町遺跡　第3次調査
ＳＤ03出土土器（291・292・294・301・313）

写真図版35　南畝町遺跡　第3次調査
ＳＤ03出土土器（328・329・340・341）
ＳＤ04出土土器（344）
包含層出土土器（347・350）
写真図版36　南畝町遺跡　第3次調査
包含層出土土器
（351・352・355・357・360・361・368）
写真図版37　南畝町遺跡　第3次調査
包含層出土土器（369）
ＳＤ05出土石器（Ｓ6・Ｓ8）
包含層出土石器（Ｓ7）
ＳＤ02出土石器（Ｓ9）
写真図版38　南畝町遺跡　第4次調査
全景　東から　　ＳＤ01　北から
写真図版39　南畝町遺跡　第4次調査
包含層出土土器
（370・372・380・382・384・387）
写真図版40　西延末遺跡
遺跡俯瞰　南上空から　　遠景　西から
写真図版41　西延末遺跡
近景　北東上空から　　近景　北上空から
写真図版42　西延末遺跡
第2次調査全景　北東上空から
第2次調査全景　南西上空から
第2次調査全景　北東から
写真図版43　西延末遺跡
第3次調査全景　北東から
第3次調査中央部　南西から
第3次調査俯瞰　南西上空から
写真図版44　西延末遺跡
ＳＨ01　北西から　　ＳＨ01　南東から
ＳＨ01土器出土状況　西から
ＳＨ01土器出土状況　東から
写真図版45　西延末遺跡
ＳＨ02全景（第3次）　南東から
ＳＨ02全景（第1次）　北から
ＳＸ01全景（第3次）　東から
写真図版46　西延末遺跡
ＳＸ01（第3次）土器出土状況　北から
ＳＤ03全景（第1次）　北東から
ＳＤ03全景（第1次）　南東から
写真図版47　西延末遺跡
ＳＤ04・06（第1次）北東から
ＳＤ04・06（第3次）北東から
ＳＤ05全景　南西から
ＳＤ05断面　北東から
写真図版48　西延末遺跡
ＳＤ06断面　北西から
ＳＤ09断面　南から
ＳＤ10全景　北東から
写真図版49　西延末遺跡
ＳＤ11全景　南西から
ＳＤ11断面　北東から
写真図版50　西延末遺跡
ＳＤ11土器出土状況　　埴輪出土状況
ＳＫ01全景　南東から
写真図版51　西延末遺跡
ＳＨ01出土土器（1～3）
ＳＨ02出土土器（5）
ＳＤ04出土土器（8・10）
ＳＤ02出土土器（12）　　8接合部（①）
写真図版52　西延末遺跡
ＳＤ05出土土器（13）
ＳＤ06出土土器（14）
ＳＤ10出土土器（16）
ＳＤ11出土土器（18・21～23）
写真図版53　西延末遺跡
ＳＤ11出土土器
（24・25・27・28・30・31）
写真図版54　西延末遺跡
ＳＤ11出土土器
（17・19・20・26・33～36・38）
写真図版55　西延末遺跡
包含層出土土器（32・37・41）

第1図　遺跡の位置

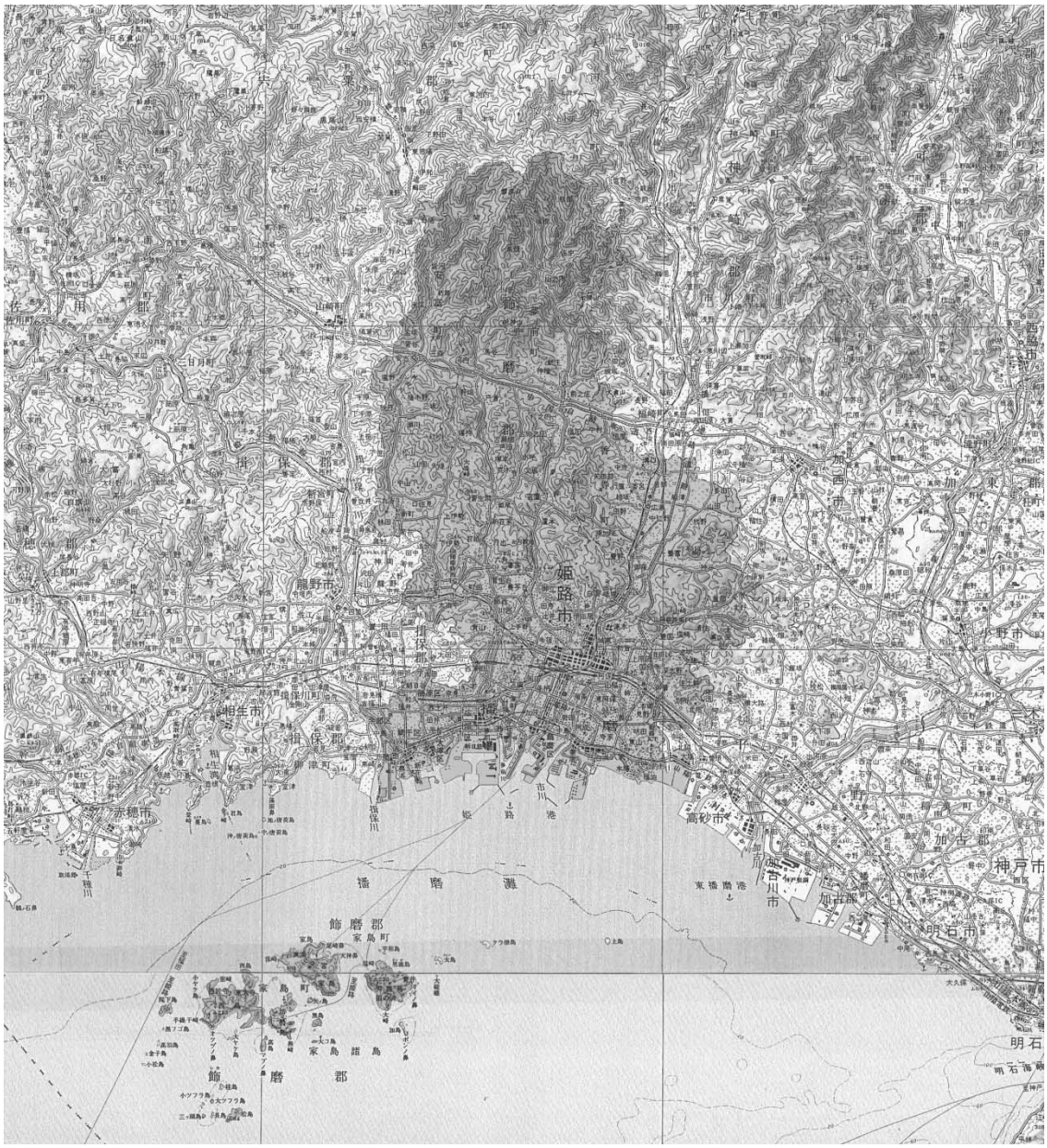
第1章　南畝町遺跡と西延末遺跡

第1節　地理的環境

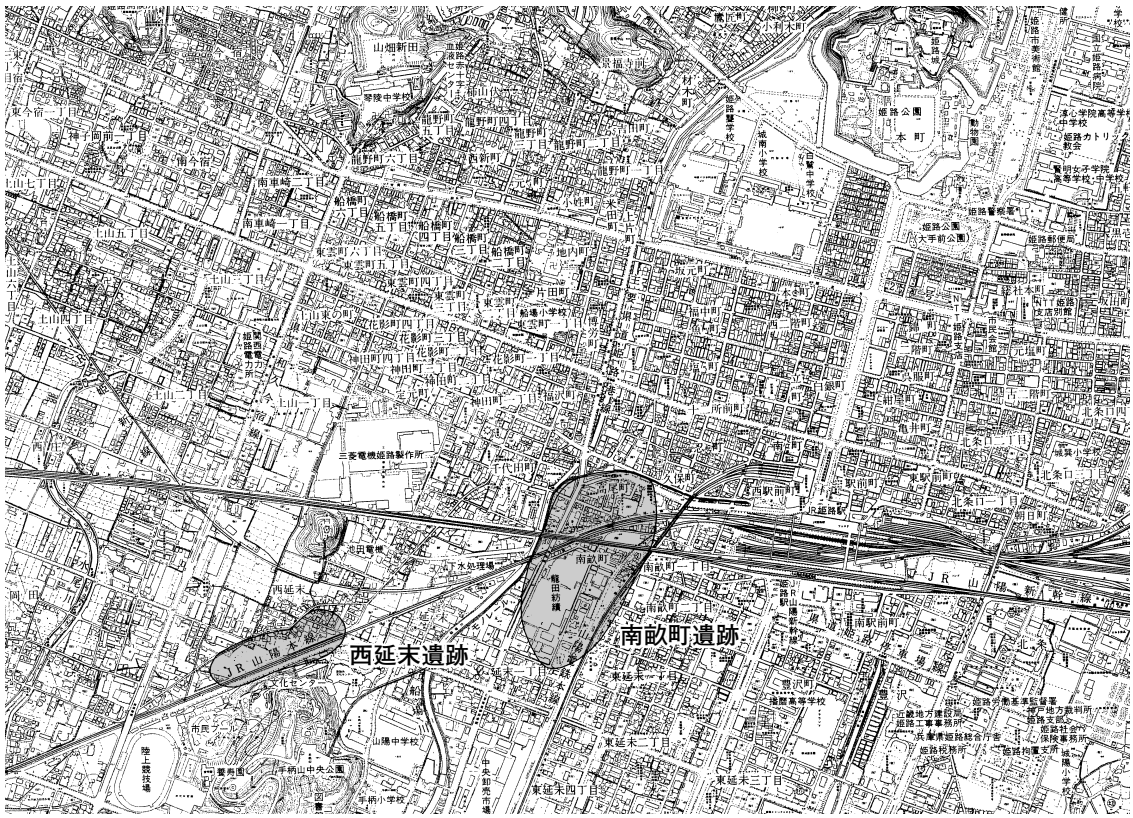
1．遺跡の位置

姫路市

南畝町遺跡は姫路市南畝町に、西延末遺跡は同市西延末に所在する。両遺跡の所在する姫路市は、兵庫県第二の都市で、瀬戸内海に面した、旧播磨地域の中央部に位置する（第1図）。平成18年3月27日に、いわゆる平成の大合併により、飾磨郡家島町・同安富町・夢前町および神崎郡香寺町を併せ、現在の姫路市となっている（第2図）。市域の面積は534.27㎢、人口は約53万人（平成22年1月現在、姫路市ホームページによる）である。市域は、西側を



第2図　姫路市の位置



第3図　遺跡の位置

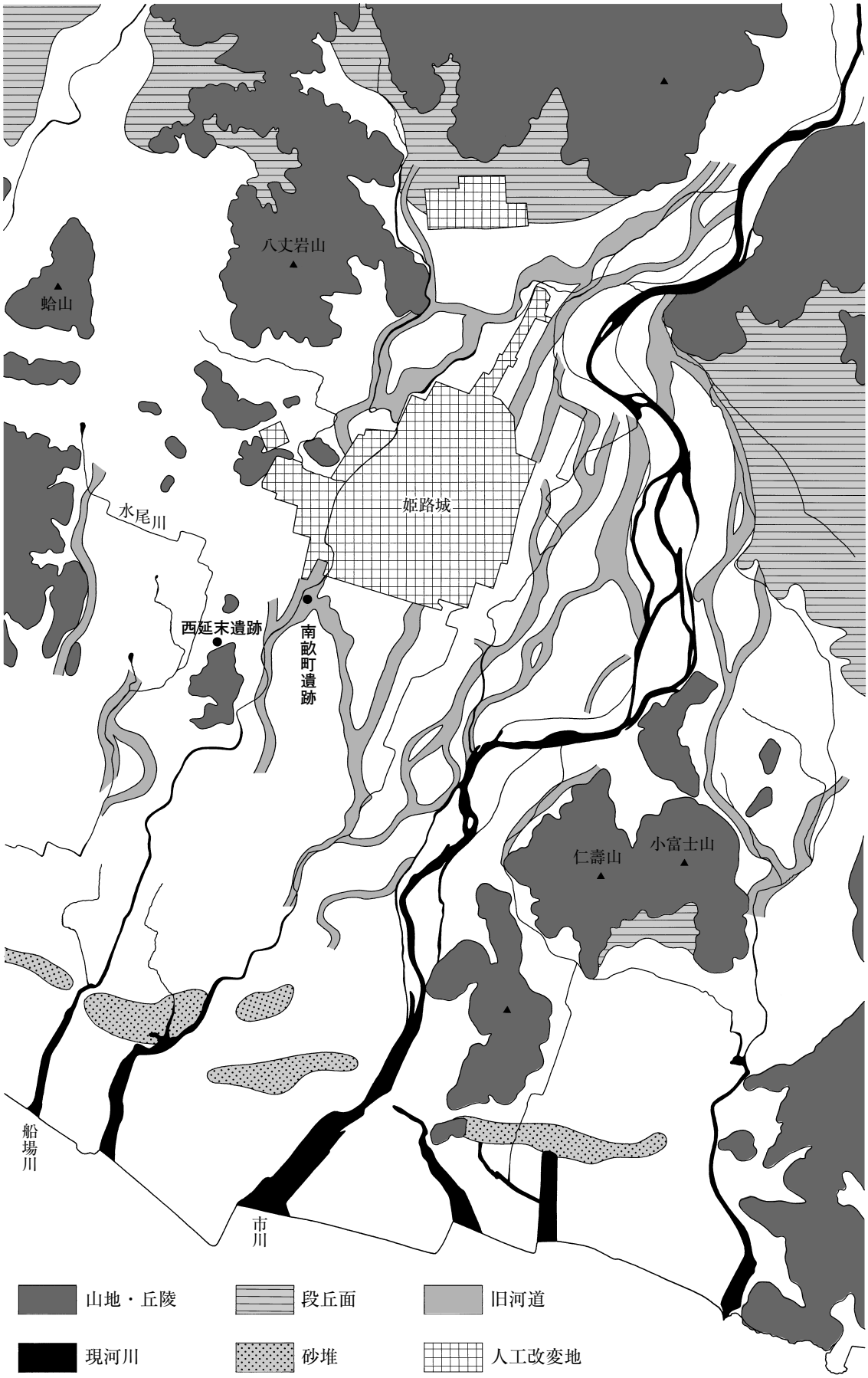
揖保郡太子町・たつの市（平成7年10月に合併後改称）・宍粟市、東側を神崎郡福崎町・同市川町・加西市・高砂市と接している。

姫路市は、古代においては山陽道を中心とした交通の要衝として、江戸時代以降は姫路城を中心とした城下町として栄えてきた町である。また、昭和時代においては、沿岸部を中心に製鉄業を中心とした企業城下町として発展してきた。

現代においても、瀬戸内側と日本海側を結ぶ交通（播但連絡道路・JR播但線・国道312号）の起点ともなり、交通の要衝として重要な位置を占めている。そして、平成8年4月1日には中核都市に移行している。

南畝町遺跡　南畝町遺跡は、ＪＲ姫路駅の西500ｍに所在する（第3図）。ＪＲ山陽本線と山陽新幹線がＪＲ姫路駅の西側で交差している地点の北側に位置する。姫路市中心部の南西部にあたる。当遺跡の中心を、県道姫路港線が南北に貫いている。また、当遺跡の西縁を船場川が流れている。本遺跡一帯は住宅の密集地となっており、調査が行われるまでは、実態が全く不明な遺跡であった。

西延末遺跡　西延末遺跡は、南畝町遺跡の西側に約700ｍの距離をおいて所在する（第3図）。ＪＲ山陽本線と姫新線が分岐した地点より西側、手柄山の北側に位置する。姫路市中心部よりやや南西郊外にあたる。遺跡の大半は、ＪＲ山陽本線およびこれと平行して走る道路が占めている。これ以外の大半は、調査前まで畑地であった。



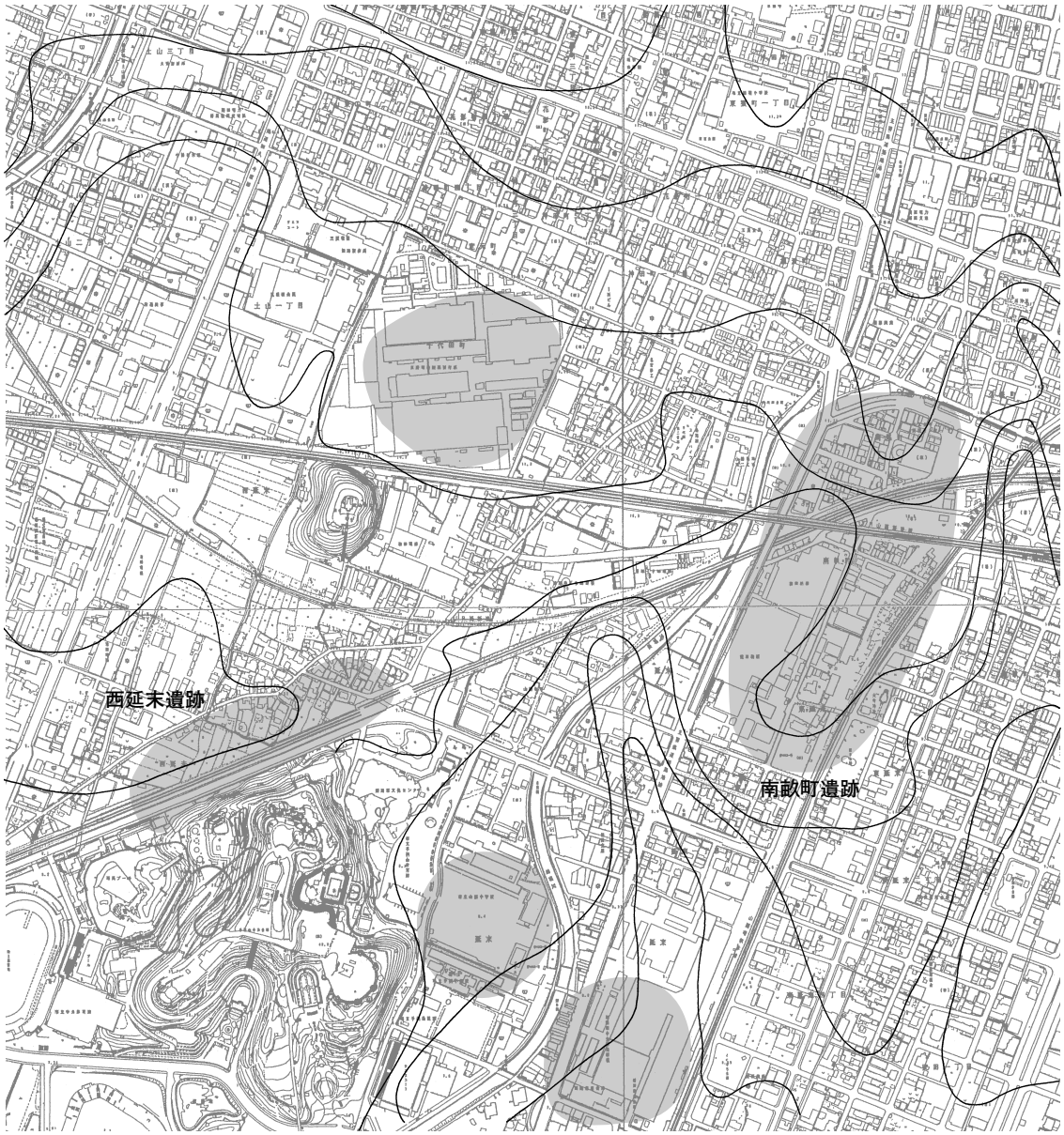
第4図　姫路平野の地形分類（1：50000）

2. 地形的環境

市川　南畝町遺跡と西延末遺跡は、市川下流域に形成された姫路平野のほぼ中央部に立地する。姫路平野を形成した市川は、朝来市生野町の三国岳(855m)付近を源とする一級河川で、神崎郡神河町・市川町・福崎町を経て、姫路市飾磨区妻鹿で播磨灘に注いでいる。全長73㎞を測り、その流域面積は496㎢に及ぶ。

姫路平野　現在の市川は、姫路の中心部を大きく迂回するように東側に蛇行し、姫路平野の東縁をなしている。しかし、明治40年に作成された地形図･昭和41年に作成された土地条件図（1:25000）をもとに復元した地形分類図（第4図）をみると、小河川が網状に流れていたようである。現在、その幾筋かが用水路として、遺存している。

姫路城の西側を流れる船場川もその一つである。この船場川沿いにあるのが南畝町遺跡である。第4図によると、調査地の多くは旧河道に分類される地帯と一致する。また、西延末遺跡についても、付近に河川は認められない。しかし、空中写真判読によると、手柄山



第5図　南畝町・西延末遺跡周辺の微地形

との間に船場川と水尾川を結ぶような、東西方向の旧河道状の低地を確認することができる。上記の網状に流れていた小河川の一つの可能性が考えられる。

微地形

南畝町遺跡と西延末遺跡の立地する微地形を詳細に観察すると（第5図）、両遺跡とも微高地上に立地していることが理解できる。ただし、同じ微高地上に立地しているのではなく、両遺跡間には大きな谷地形が認められる。

南畝町遺跡は、南北方向に主軸をとる微高地上に、西延末遺跡は北東－南西方向に主軸をとる微高地に、それぞれ立地している。そして、両遺跡を隔てる谷は、現船場川の旧流路にあたるものと考えられる。

第6図　姫路平野（西上空から）

第2節　歴史的環境

1．はじめに

前節でも触れたように、南畝町遺跡（1）と西延末遺跡（2）は、約700mの距離をおいて所在する。そこで、本節では、これらの遺跡に近接し、かつ調査が行われた遺跡を中心にまとめていくことにする。ここでとり上げるのは、豆腐町遺跡（22）･仮称　姫路駅周辺第4地点（20）・北条遺跡（23）・八反町遺跡（6）・堂田遺跡（9）・手柄山北丘群集墳（11）・橋詰遺跡（15）・小山遺跡（17）である（第7図）。

2．主要周辺遺跡

豆腐町遺跡　南畝町遺跡の東側100mに位置する遺跡である。平成10年度から平成18年度にかけて、兵庫県教育委員会により断続的に調査が行われている。その成果の一部は、平成18年度に調査報告書としてまとめられている[(1)]。

これによると、弥生時代の溝・土坑、奈良～平安時代の掘立柱建物・井戸・土坑・旧河道、中世の掘立柱建物・土坑・水田などが明らかとなっている。特に、奈良～平安時代の二彩壺・漆工房関連遺物・墨書土器（「郡」･「郷」）の出土は、本遺跡との関連においても、注目されるものである。

第4地点遺跡　豆腐町遺跡の北東側に近接して位置する。平成10年度と平成11年度に姫路市教育委員会により、調査が行われている[(2)]。この結果、古墳時代後期の流路、平安時代後半の木組井戸、江戸時代の姫路城外堀と並行する石組溝・畑跡などが検出されている。

北条遺跡　仮称　姫路駅周辺第4地点の南東側に近接して位置する。平成8年度に、南畝町遺跡・西延末遺跡同様、ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴い本発掘調査が実施されている。縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての微凹地、弥生時代後期・古墳時代前期・古墳時代後期の竪穴住居跡・奈良時代の掘立柱建物跡と畠・井戸などが明らかとなっている[(3)]。

八反町遺跡　西延末遺跡の西約300mに位置する。昭和55年度から昭和60年度にかけて水尾川河川改修に伴い本発掘調査が行われ、弥生時代前期を中心とした遺構・遺物が検出されている[(4)]。

堂田遺跡　西延末遺跡の南西約500mに位置する。昭和55年度に八反長遺跡と同様、水尾川河川改修に伴い本発掘調査が行われ、縄文時代晩期の良好な資料が旧河道内から出土している[(5)]。

手柄山北群集墳　西延末遺跡の南側、県道和久今宿線を挟んだ丘陵（手柄山）上にあった群集墳である。12基の円墳から構成されていたようであるが、現在は消滅している。

なお、この群集墳内には、手柄山北丘遺跡・手柄山北丘頂上古墳も周知されている。しかし、その実態は不明である。ただし、手柄山北丘頂上古墳については、西延末遺跡で出土している埴輪片との関連で注目される群集墳である。

小山遺跡　南畝町遺跡の南西約1㎞に位置する。昭和39年度に本発掘調査が行われ、弥生時代前期の竪穴住居跡などが検出されるとともに、弥生時代中期まで継続する複合遺跡であることが明らかとなっている[(6)]。

橋詰遺跡　南畝町遺跡の南西約500mに位置する。昭和35年度に本発掘調査が行われ、いわゆる庄内式併行期の土器が出土している[(7)]。特に、在地産庄内甕の出土が注目される。他に、縄文時代後期・弥生時代前期・弥生時代中期の土器が出土している。

1. **南畝町遺跡（020456）**
2. **西延末遺跡（020444）**
3. 千代田遺跡（020453）
4. 土山遺跡（020452）
5. 町田遺跡（020451）
6. 八反長遺跡（020446）
7. 林前遺跡（929449）
8. 法輪寺山遺跡（020448）
9. 堂田遺跡（020445）
10. 丁田遺跡（020447）
11. 手柄山北丘群集墳（020874～83）
    手柄山北丘頂上古墳（020443）
    手柄山北丘遺跡（020872）
12. 手柄山南丘遺跡（020884）
    手柄山南丘群集墳（020885～88）
13. 君田遺跡（020455）
14. 林淵遺跡（020454）
15. 橋詰遺跡（020441）
16. 黒表遺跡（020440）
17. 小山遺跡（020439）
18. 本町遺跡（020465）
19. 姫路城城下町跡（020169）
20. 仮称　姫路駅周辺第4地点（020464）
21. 仮称　姫路駅周辺第２地点（020461）
22. 豆腐町遺跡（020459）
23. 北条遺跡（仮称　姫路駅周辺第1地点）（020460）
24. 豊沢遺跡（020457）
25. 北条遺跡（020458）

第7図　主要周辺遺跡

〔註〕

(1) 岡田章一他『豆腐町遺跡Ⅰ－ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－』兵庫県教育委員会　2007

(2) 秋枝　芳・中川　猛「(仮称) 姫路駅周辺第4地点遺跡（第1次)」『ＴＳＵＢＯＨＯＲＩ　平成11年度（1999）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　2000

中川　猛「(仮称) 姫路駅周辺第4地点遺跡（第2次)」『ＴＳＵＢＯＨＯＲＩ　平成11年度（1999）姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　2000

(3) 山田清朝『北条遺跡－JR山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－』兵庫県教育委員会　2008

(4) 深井明比古他『堂田･八反長発掘調査報告書－水尾川河川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－』兵庫県教育委員会　1992

(5) 前掲（4）

(6) 上田哲也『播磨弥生式文化の研究　姫路･小山遺跡発掘調査報告書』東洋大学附属姫路高等学校　1964

(7) 浅田芳朗・今里幾次『播磨橋詰遺跡発掘調査略報』1960

第2章　調査の経緯

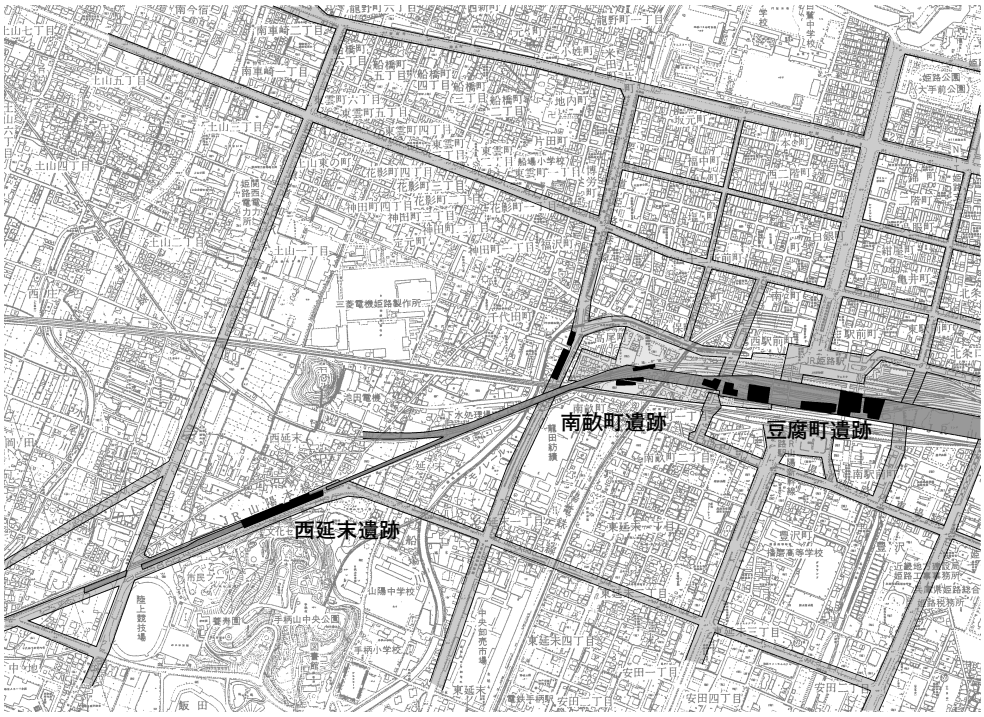
第1節　調査の起因

ＪＲ高架事業　今回の調査は、ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴うものである。この事業は、ＪＲ姫路駅およびその東側車両基地一帯を対象とした、ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業、姫路駅周辺土地区画整理事業、街並み・まちづくり総合支援事業、関連道路事業と平行して計画されているものである（第8図）。計画では、平成14年竣工の予定であったが、完成したのは平成21年度である。ただし、西延末遺跡周辺に関しては、工事は完了している。

発掘調査　これらの事業に伴う調査は、鉄道高架事業に伴う発掘調査を兵庫県教育委員会が、区画整理に伴う調査を姫路市教育委員会が、それぞれ分担して実施している。上記事業に伴い、兵庫県教育委員会は数次に及ぶ分布調査･確認調査を行い、東から、市之郷遺跡･北条遺跡･豆腐町遺跡・南畝町遺跡・西延末遺跡の5遺跡が本発掘調査の対象となった。

これらの遺跡の調査はすでに終了しており、市之郷遺跡[(1)]・豆腐町遺跡[(2)]の一部・北条遺跡[(3)]については、整理まで完了し、報告書が刊行されている。今回報告する南畝町遺跡と西延末遺跡は、4冊目の報告書となるものである。

また、姫路市教育委員会も、市之郷遺跡・北条遺跡・豆腐町遺跡の発掘調査を実施している。ただし、報告書は未刊行である。



調査地　高架事業区域

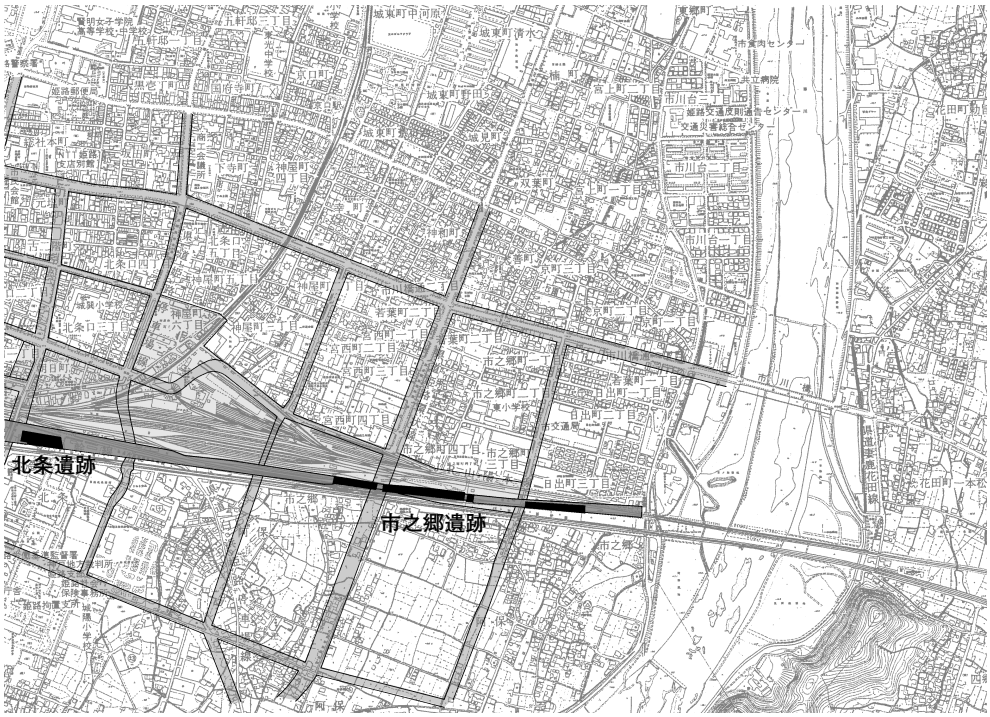
第8図　工事計画と発掘調査

〔註〕

(1) 山田清朝『市之郷遺跡－ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－』兵庫県教育委員会　2005

(2) 岡田章一他『豆腐町遺跡Ⅰ－ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－』兵庫県教育委員会　2007

(3) 山田清朝『北条遺跡－ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－』兵庫県教育委員会　2008



区画整理事業区域　　都市計画道路

第2節　確認調査

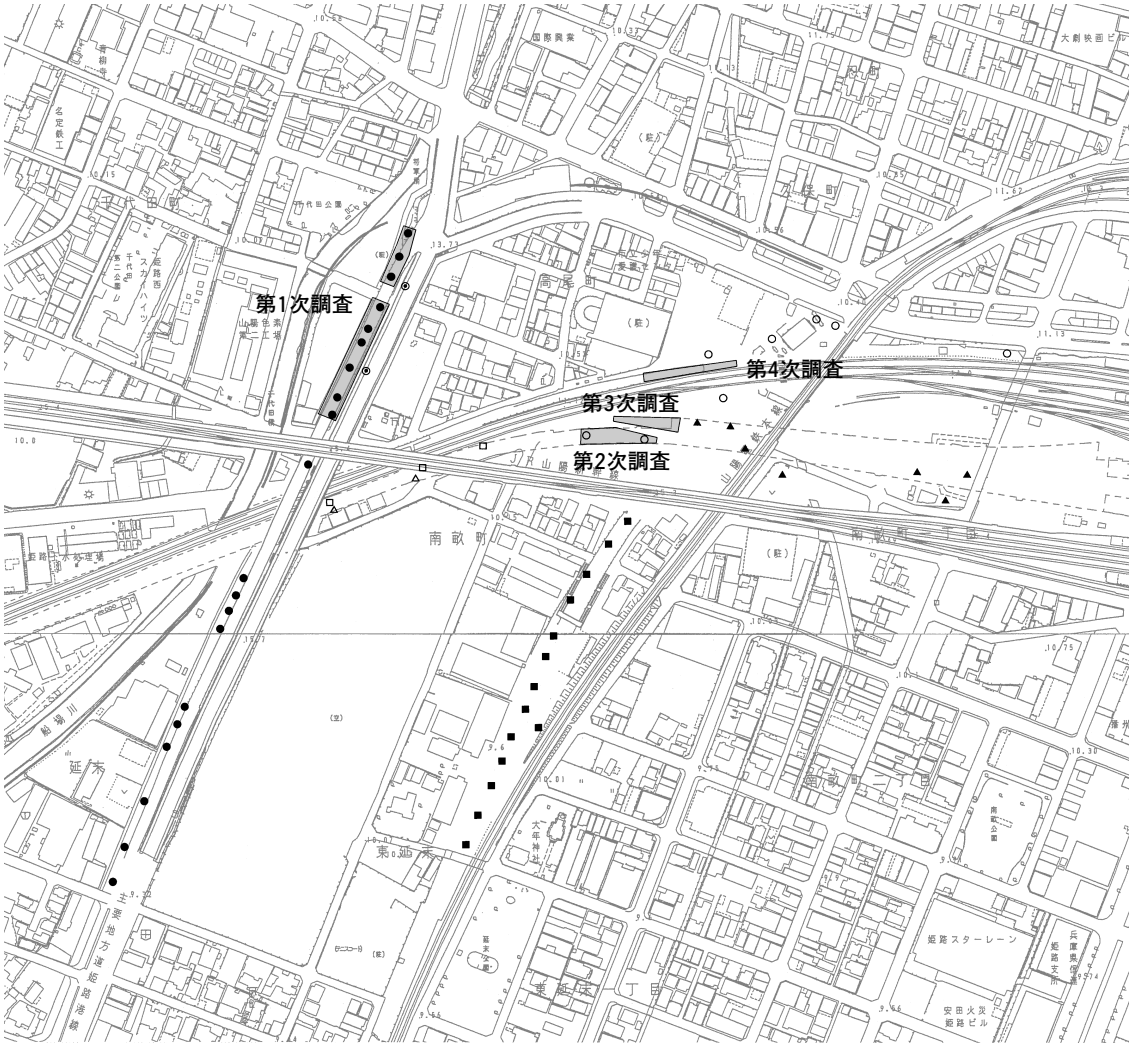
1．南畝町遺跡

はじめに

南畝町遺跡については、ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業が計画される以前においては周知されていなかった遺跡である。当遺跡の東側において、同事業に伴い豆腐町遺跡が明らかとなったことから、当地区においても確認調査を行うこととなったものである。

ところで、調査対象地は、ＪＲ山陽新幹線・ＪＲ山陽本線・ＪＲ姫新線・県道姫路港線等の主要交通が複雑に交差している。また、これらの隙間を埋めるように人家・路地が密集している。このため、確認調査は、調査が可能になった箇所から行わなければならない状況であった。加えて、路地・道路等調査が出来ない箇所も多く存在した。以上から、用地買収の進捗状況に合わせて、確認調査を進めていった。最終的には、7次に及ぶ結果となった（第9図）。

各確認調査の概要は以下の通りである。



● 第1次確認調査　■ 第3次確認調査　△ 第5次確認調査　◉ 第7次確認調査

▲ 第2次確認調査　○ 第4次確認調査　□ 第6次確認調査

第9図　南畝町遺跡確認調査位置図

第1次確認調査　遺跡調査番号：950235

調 査 地　姫路市南畝町

調査概要　2m×2mのグリッドを18箇所、2m×4mのグリッドを1箇所に設定して行った。調査の結果、№13～22で平安時代～中世の遺物包含層を、またその下層で弥生時代の旧河道を、それぞれ確認した。そして、この結果をもとに実施した本発掘調査が、第1次調査である。

調査期間　平成7年9月5日～9月7日

調 査 員　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　山上雅弘・服部　寛

第2次確認調査　遺跡調査番号：980242

調 査 地　姫路市南畝町

調査概要　2m×2mのグリッドを7箇所に設定して行った。調査の結果、№4･5で奈良時代の遺物包含層を、№7で弥生時代中期の包含層を、それぞれ確認した。しかし、明確な遺構が確認できなかったことから、本発掘調査の対象とはしなかった。

調査期間　平成11年3月4日～3月5日

調 査 員　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　多賀茂治

第3次確認調査　遺跡調査番号：990157

調 査 地　姫路市南畝町他

調査概要　調査対象地の大半は君田遺跡の範囲内にあたる。2m×2mのグリッドを14箇所に設定して行った。調査の結果、№6～13で弥生時代中期の遺構・遺物を確認した。

調査期間　平成11年5月26日・28日・6月16日

調 査 員　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　水口富夫・松岡千寿

第4次確認調査　遺跡調査番号：990247

調 査 地　姫路市南畝町他

調査概要　2m×2mのグリッドを8箇所に設定して行った。調査の結果、№2･4で遺物包含層を確認し、南畝町遺跡の東端が明らかとなった。そして、この結果をもとに実施した本発掘調査が、第2次調査である。

調査期間　平成11年11月8日～11月10日

調 査 員　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　多賀茂治

第5次確認調査　遺跡調査番号：990318

調 査 地　姫路市南畝町他

調査概要　2m×2mのグリッドを2箇所に設定して行った。調査の結果、№2で遺物包含層を確認した。

調査期間　平成12年3月1日～3月2日

調 査 員　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　多賀茂治

第6次確認調査　遺跡調査番号：2000296

調 査 地　姫路市南畝町字大将軍660他

調査概要　2m×2mのグリッドを3箇所に設定して行った。調査の結果、埋蔵文化財の包蔵は確認されなかった。

調査期間　平成12年9月27日

調 査 員　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　中川　渉

第7次確認調査　遺跡調査番号：2003099

調 査 地　姫路市南畝町

調査概要　街路船場川線施設に伴う確認調査である。調査は、2m×2mのグリッドを2箇所に設定して行った。調査の結果、埋蔵文化財の包蔵は確認されなかった。

調査期間　平成15年7月8日

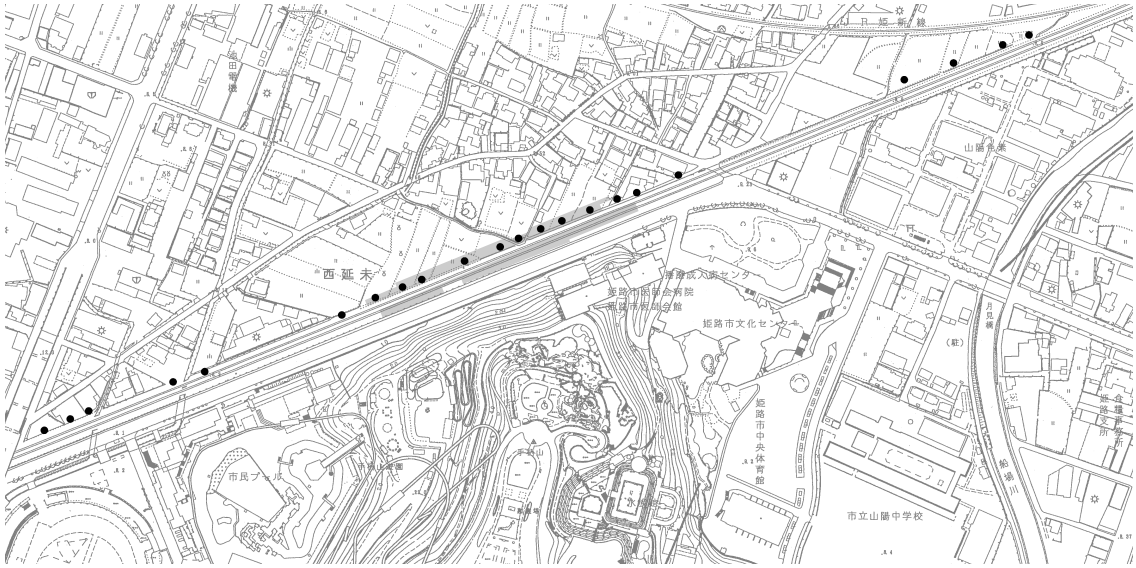
調 査 員　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　甲斐昭光

2. 西延末遺跡

はじめに　当遺跡は、仮称　西延末散布地（県遺跡番号：020444）として周知されていた遺跡である。ＪＲの高架事業が計画され、今回の調査が行われるまでは、その実態が全く不明であった遺跡である。

ところで、西延末遺跡については、本来の調査対象地は現鉄道敷地内であるが、現状では調査ができないため、仮線設置部分において確認調査を実施した（第10図）。結果として2次に分けて調査を実施した。

各確認調査の概要は以下の通りである。



第10図　西延末遺跡確認調査位置図

第1次確認調査　遺跡調査番号：950383

調 査 地　姫路市西延末他

調査概要　調査は、2m×2mのグリッドを2箇所に、2m×3mのグリッドを17箇所に設定して行った。調査の結果、№12の竪穴住居跡の確認をはじめとして、№10・№11・№14で遺構を確認した。

調査期間　平成8年2月9日～3月14日

調 査 員　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　山田清朝・矢野治己

第2次確認調査　遺跡調査番号：990181

調 査 地　姫路市延末他

調査概要　ＪＲ山陽本線とＪＲ姫新線の分岐箇所より西側の鉄道高架予定地の確認調査である。

調査は、2m×2mのグリッドを4箇所に設定して行った。調査の結果、埋蔵文化財の包蔵は確認されなかった。以上から、第1次確認調査で確認した西延末遺跡の範囲が、東側へは拡がらないことが明らかとなった。

調査期間　平成11年6月14日

調 査 員　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　水口富夫

第3節　本発掘調査

1．はじめに

南畝町遺跡・西延末遺跡とも、前節における確認調査の結果に基づき、本発掘調査を実施した。各遺跡の調査とも工事工程に合わせて実施したため、数次にわたる調査となっている。以下、各遺跡の調査概要を報告する。

2．南畝町遺跡

はじめに　調査は4次にわたって行われている（第11図）。各調査の概要・調査体制等は以下のとおりである。

第1次調査　遺跡調査番号：990202

調 査 地　姫路市高尾町他

調査期間　平成11年8月17日～10月29日

調査概要　都市計画道路県道姫路港線拡幅に伴い実施した。調査面積は1159㎡である。重機と人力で調査を進めていった。最後に、平成11年10月20日にヘリコプターによる空中写真撮影を実施し、この成果をもとに図化を行い、調査成果の記録に努めた。

調査体制　調　査　員　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　西口和彦・水口富夫・松岡千寿
調査補助員　岸真理子・山本陽子・中谷悟史
室内作業員　覚野郁子

第2次調査　遺跡調査番号：2000282

調 査 地　姫路市南畝町字堂ノ元580－11・12・40・41・45

調査期間　平成12年5月22日～8月11日

調査概要　ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴い実施した。調査面積は380㎡である。調査は重機と人力により進めていった。調査成果については、7月12日にヘリコプターによる写真撮影を行い、これをもとに図化を行った。

調査体制　調　査　員　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　中川　渉・松岡千寿
調査補助員　田中　騰・岸真理子・玉越綾子・中谷悟史
室内作業員　覚野郁子・竹本千夏

第3次調査　遺跡調査番号：2002068

調 査 地　姫路市高尾町

調査期間　平成14年7月12日～8月9日

調査概要　ＪＲ山陽本線連続立体交差事業に伴う、鉄道高架予定地の調査である。調査面積は259㎡である。調査は重機と人力により進めていった。調査成果については、8月1日にクレーンによる写真撮影を行い、これをもとに図化を行った。また、8月17日には、小型ヘリコプターによる空中写真撮影を行った。

調査体制　調　査　員　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　小川良太・仁尾一人

調査補助員　松井利可子

室内作業員　森崎由紀子

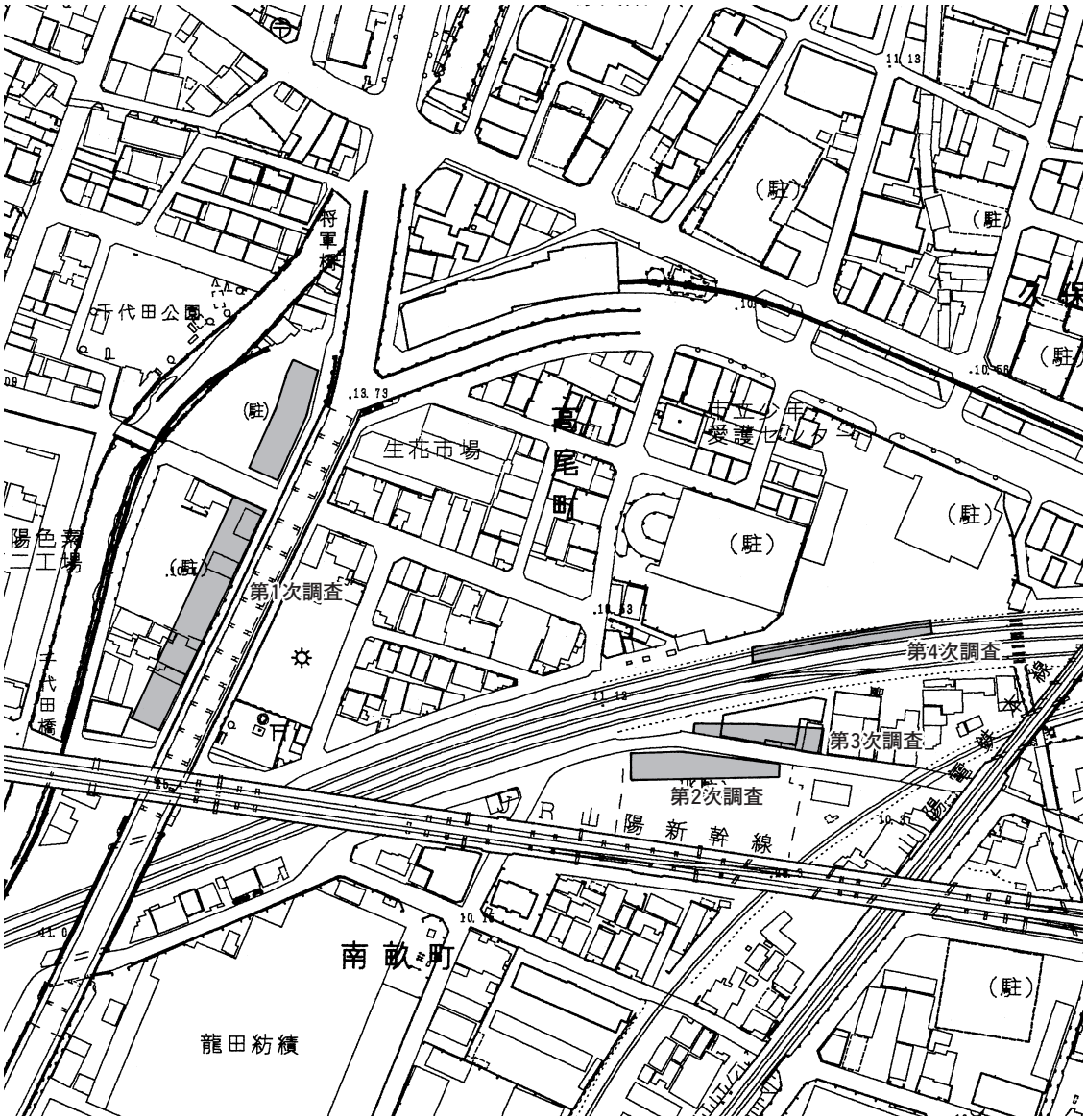
第4次調査　遺跡調査番号：2003157

調 査 地　姫路市高尾町

調査期間　平成15年9月16日～9月26日

調査概要　ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴い実施した。調査面積は276㎡である。

調査体制　調　査　員　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　仁尾一人



第11図　南畝町遺跡調査位置図

3. 西延末遺跡

はじめに　調査は3次にわたって行われている（第13図）。各調査の概要・調査体制等は以下のとおりである。

第1次調査　遺跡調査番号：990165

調 査 地　姫路市西延末字山崎240－2他

調査期間　平成11年7月5日～7月15日

調査概要　ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に付随する用水路新設工事に伴い実施した。調査は重機と人力により進め（第12図）、調査成果については、調査員の手により図化が図られた。調査面積は271㎡である。

第12図　住居跡検出作業

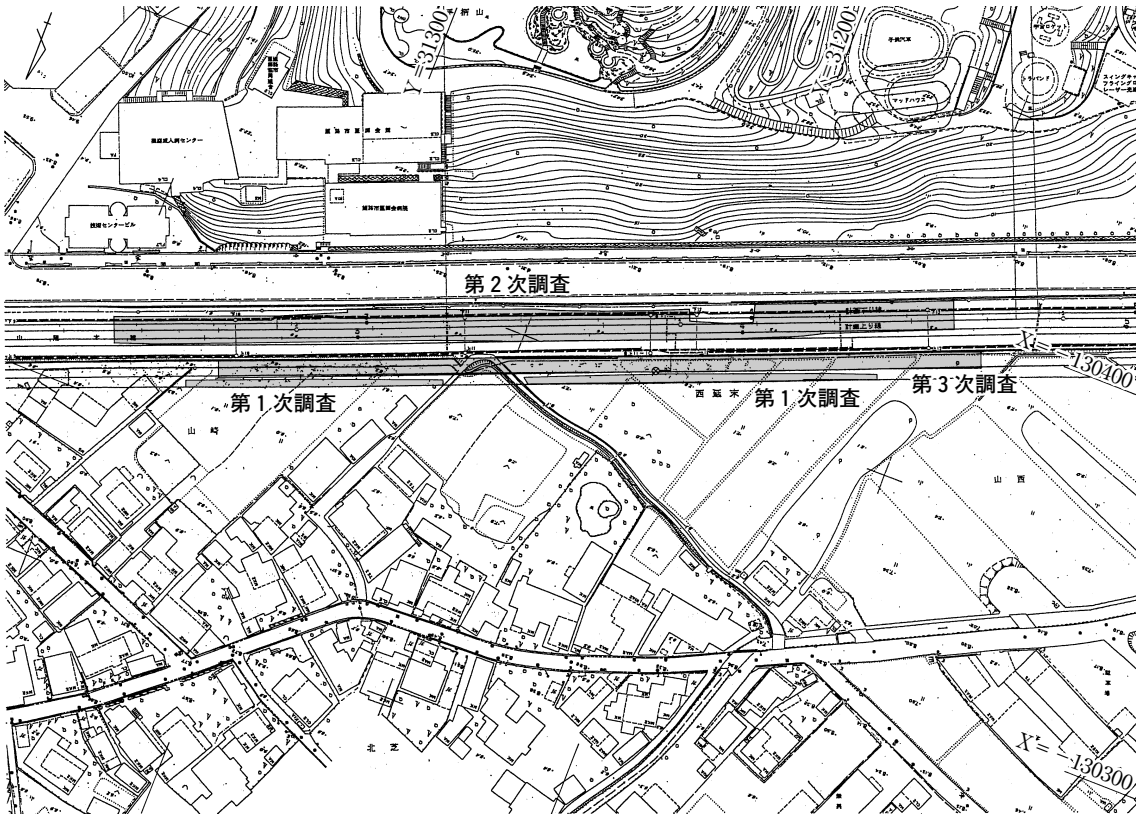
調査体制　調　査　員　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　甲斐昭光・川村慎也・田中秀明

第2次調査　遺跡調査番号：2000294

調 査 地　姫路市西延末字山崎240－2

調査期間　平成12年10月17日～平成13年3月16日

調査概要　ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴い実施した。調査は重機と人力により進め、調査成果については、平成13年2月15日にヘリコプターによる空中写真撮影を行い、図化を実施した。調査面積は1690㎡である。



第13図　西延末遺跡調査位置図

調査体制　調　査　員　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　中川　渉・松岡千寿
調査補助員　中谷悟史・岸真理子・玉越綾子
室内作業員　覚野郁子・竹本（山内）千夏

第3次調査　遺跡調査番号：2007066

調 査 地　姫路市西延末

調査期間　平成19年6月18日～9月6日

調査概要　ＪＲ山陽本線高架に伴う都市計画道路建設に伴い実施した。調査は重機と人力により進め、調査成果については、ヘリコプターによる空中写真撮影を行い、図化を実施した。

また、調査終了前の8月25日に、地元住民を対象とした遺跡見学会を開催した。参加者は36名である。また、8月7日には、県立須磨友が丘高等学校生による総合学習の一環として体験発掘が行われた。

第14図　遺跡見学会

調査面積は1000㎡である。

調査体制　調　査　員　兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部　山田清朝
調査補助員　森崎由紀子・魚住明佳
室内作業員　覚野郁子

第4節　整理作業

はじめに　整理作業は、平成20年度から21年度の2箇年で兵庫県立考古博物館にて実施した。各年度の整理作業の概要・体制等は以下の通りである。なお、土器の水洗については、一部現場事務所にて発掘調査と平行して行い、他については兵庫県立考古博物館魚住分館にて実施している。

平成20年度

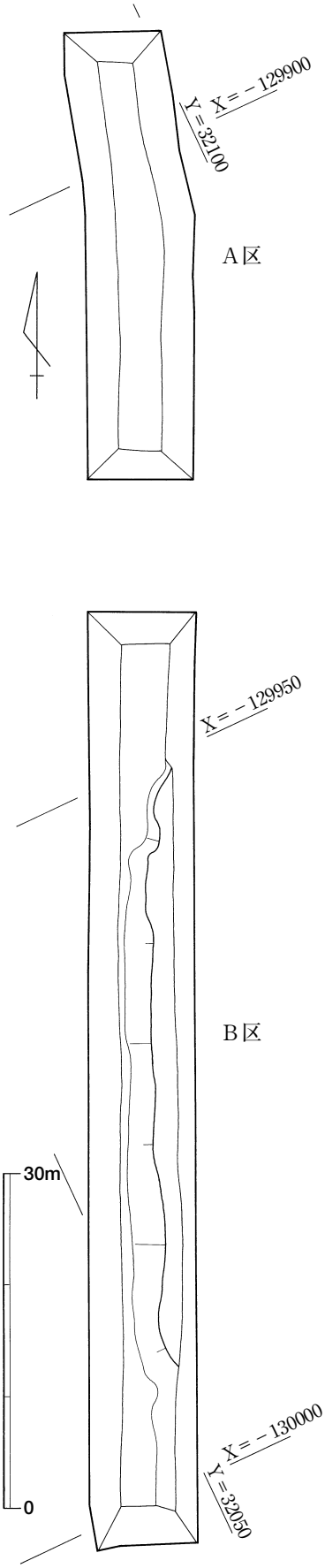
整理概要　土器の接合・実測・復元・写真撮影を行った。また、石器についても、実測・写真撮影を行った。さらに、パレオ・ラボにサヌカイトの産地同定と石器の石材鑑定を依頼し、報告を得た。その結果については、第4章にまとめてある。

整理体制　整理保存班　篠宮　正
調　査　班　山田清朝
嘱　託　員　尾鷲都美子・佐伯純子・佐々木誓子

平成21年度

整理概要　土器の実測・復元・写真撮影、遺構図の整図・トレースを実施した。併せて、原稿の執筆を行った。

整理体制　整理保存班　菱田淳子
調　査　班　山田清朝
嘱　託　員　森本貴子・尾鷲都美子・佐々木誓子



第15図　第1次調査平面図

第3章　調査の成果

第1節　南畝町遺跡の調査

1．調査の概要

本遺跡に関わる本発掘調査は4次におよび、5地区で行われている（第11図）。本節では、調査次ごとにその成果を報告していくことにする。

2．第1次調査

はじめに　調査区はＡ区とＢ区の2地区からなる（第15図）。両調査区とも、旧船場川の一部と考えられる旧河道内にあたり、顕著な遺構を検出することはできなかった（第15図）。両地区とも、現地表面から1～1.5ｍは昭和時代以降の盛土層であった（第16図）。

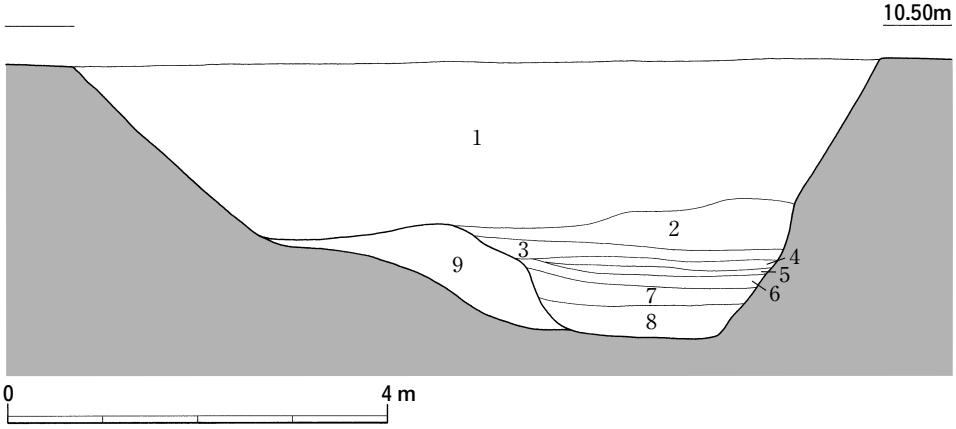
Ａ区　当地区では、盛土層以下は旧河道を埋没させる洪水層が幾層か認められたに過ぎない。ただし、当地区からは土器がほとんど出土していないため、その時期等の詳細については明らかにすることはできない。

Ｂ区　基本的にはＡ区と同様、旧船場川が埋没する様子を観察することができた。ただし、当区では、その埋没過程における再掘削が行われている状況を観察することができた。これが9層上側のラインである。つまり、洪水に起因して9層が堆積後、再掘削が行われ、その後数度の洪水により8層から2層が堆積している。

3層と4層・5層と6層はそれぞれ同時に堆積後、その上層（3層・5層）が土壌化したものと考えられる。また、7層についても洪水に起因する堆積の可能性が考えられる。また8層については湿地性の堆積と考えられ、再掘削段階での滞留状況を反映したものと考えられる。以上から、少なくとも3度の洪水による堆積により埋没したものと考えられる。

さらに、2層についても、3層と4層と同時に堆積し、その後土壌化した3層の上層を耕作し、2層が形成されたものと考えられる。

出土土器　全てＡ区から出土している。弥生時代・古墳時代・中近世の土器・土製品・石製品が出



1．盛土　2．旧耕作土　3．褐灰色極細砂（土壌層）　4．灰白色細砂（洪水砂）　5．褐灰色極細砂～シルト（土壌層）　6．灰白色細砂（洪水砂）　7．褐灰色極細砂～細砂　8．灰色極細砂～シルト　9．褐灰色砂礫

第16図　Ｂ区南壁

土している（第17図～第24図）。全て旧河道からの出土で、遺構に伴う遺物は皆無である。

弥生時代　中期と後期の土器が出土している。

中期　甕と鉢が出土している。

甕は1と2の2個体が出土している。1は、底部と体部以上の破片を図上で復元したものである。口縁部は如意形をなすが、端部は摘み上げられていない。体部は内外面ともハケ調整後、下半を中心に縦方向のヘラミガキにより仕上げられている。2はほぼ完存する個体で、体部外面が縦方向のハケ調整、内面は下半がヘラナデ調整により仕上げられている。口縁部は、ヨコナデ調整により仕上げられ、端部は上方につまみ上げられている。

鉢は、3と5の2個体が出土している。いずれもタイプを異にする。3は、コップ形をなす鉢で、その剥離痕から把手付の鉢と判断される。外面はハケ調整、内面は指オサエにより仕上げられている。全体的に粗い仕上げである。5は、大型の鉢で、内外面ともハケ調整後、ヘラミガキにより仕上げられている。

後期　蓋・壺・甕・鉢・高坏が出土している。

蓋　6の1個体が出土している。外面は天井部がヘラミガキにより仕上げられ、つまみは指オサエにより仕上げられている。内面はナデ調整により仕上げられている。類例が少ないため、時期的位置付けが困難である。

壺　広口壺・短頸壺・複合口縁壺・直口壺が出土している。

広口壺は7の1個体である。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる土器である。体部外面にはナデ調整後、径6㎜～8㎜の円形浮文が貼り付けられている。口縁端部には横ナデ調整後、体部と同規模の円形浮文が貼付けられている。また、口縁部内面には径3.5㎜～4㎜の穿孔（上→下）が焼成前に施されている。2孔で1対をなし、2対施されている。

短頸壺は、8の1個体が出土している。完形に復元された小型の壺である。内外面とも磨滅が著しく、詳細な調整の観察は困難である。

複合口縁壺は2点（9･10）出土している。9は、内傾する直線的な頸部に複合口縁が取り付けられている。頸部内面は横方向の、外面は縦方向のハケ調整により仕上げられている。口縁部上半外面には4条を1単位とする櫛描直線文が施されているが、粗い施文である。口縁部内面はハケ調整により仕上げられている。

10は、直立する頸部に複合口縁が取り付けられている。口縁部は頸部に対して水平方向に屈曲し、さらに斜外方に引き延ばされている。頸部から口縁部にかけての内面はハケ調整により仕上げられている。頸部外面は縦方向のハケ調整により、口縁部外面はヨコナデ調整により仕上げられている。その後、口縁部外面は強いヨコナデにより沈線状をなし、2個1セットとなす円形浮文が4箇所に貼り付けられている。

直口壺は11の1個体である。完形に復元できる個体で、底部は突出した平底をなす。底部内面には箆先の当りが認められる。全体的に磨滅が著しく、調整の詳細な観察は困難である。

甕　Ｖ様式系甕が3点（12～14）出土している。12と13は、体部から頸部にかけて叩き成形により仕上げられ、口縁部内外面がヨコナデ調整により仕上げられている。12の体部内面は、磨滅のため調整を観察できない。13の体部内面は、横方向の板ナデ調整により仕上げられ

ている。底部はわずかに平底の痕跡をとどめる。14は、外面を縦方向のハケ調整後ナデ調整が加えられている。底部は指オサエにより尖り底をなす。

鉢　6点（4･15～19）出土している。4は、大型の鉢で、口径に対して器高が低い点が特徴である。内面はハケ調整後、ナデ調整により仕上げられている。外面は、叩き成形後、上部はハケ調整、下半部は横方向の粗いヘラ削りにより仕上げられている。15と16は形態的に同タイプに分類されるものである。2個体とも外面はナデ調整により仕上げられているが、15の内面はハケ調整、16の内面はナデ調整により仕上げられている。15の底部外面には、わずかに叩き痕が認められる。17は、その剥離痕から台付鉢と考えられるものである。体部内面は縦方向のヘラナデにより、外面は粗いヘラミガキにより仕上げられている。

18は、体部から口縁部にかけて残存し、体部上半には把手が貼り付けられている。把手は完存するものではなく、一部は剥離痕が観察されるのみである。この剥離痕と合わせて、半環状をなしていたものと復元でき、指オサエにより貼り付けられている。体部から頸部にかけての外面はハケ調整により、体部内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。口縁部は、内外面ともヨコナデ調整により仕上げられ、口縁端部は斜下方に引きのばされ、明確な端面を有する。端面には2条の凹線が施されている。

19も18と同様の把手付鉢で、半環状の把手が貼り付けられている。体部内面は横方向のヘラミガキ、外面は中位が横方向の、上半が縦方向のハケ調整により仕上げられている。

高坏　有稜高坏が3点(20～22)出土している。20は、坏底部は水平をなし、深い坏形をなす。脚部には径1.15㎝～1.70㎝の透穴が3箇所に穿たれている。21は、ほぼ完形に復元できる個体であるが、坏部と脚部の接合部内面を欠く。20とは異なり、坏底部が斜方向に立ち上がる。脚部には円形の透かし穴が2箇所に認められ、その位置関係から3箇所に穿たれていたものと考えられる。脚部外面は縦方向のヘラミガキにより仕上げられているが、坏部の調整は磨滅のため観察できない。22は、坏口縁部が大きく外反しながら立ち上がる。坏部内外面はハケ調整後、ナデ調整が施されている。脚部には透穴の痕跡が4箇所認められる。

古墳時代　土師器と須恵器が出土している。

土師器　小型丸底壺と甕が出土している。

丸底壺　10点（23～32）出土している。23～31は完形に復元できる個体である。外面の調整は、ハケ調整を基本とする。ただし、24の体部外面下半は弱いヘラ削りにより仕上げられている。また、29は体部全体が指オサエとナデ調整により仕上げられている。体部内面は指ナデ調整を基本とするが、24と26はハケ調整、29は粗いヘラナデ調整により仕上げられている。また、32の内面は粗いヘラ削りが施されている。

甕　3点（33～35）出土している。33と34は同タイプに分類されるものである。体部内面はヘラ削り、外面はハケ調整により仕上げられている。口縁部内面はハケ調整、外面はヨコナデ調整により仕上げられている。口縁端部は肥厚せず、丸く納められている。全体的に長胴傾向にある。

35は、33・34とは異なり、口縁部が著しく短く、短頸壺に近い形態をなす。体部から口縁部内外面はハケ調整により仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。

須恵器　杯身・杯蓋・高坏蓋・高杯・提瓶・壺・甕の各器種が出土している。

杯身　17点（36～39・44・53～61・65～67）出土している。これらの杯身は、ＴＫ47型式・ＭＴ15型式・ＴＫ209型式・杯Ｇの4タイプに分類できる。

ＴＫ47型式は、36～39の4個体である。このなかで、39については底部のヘラ削りが2/3に及び、より古式の特徴が認められる。

ＭＴ15型式は、44の1個体である。体部とたちあがりの変換部に受け部が認められない点が特徴である。底部のヘラ削りは、全体の1/2に及んでいる。また、立ち上がり端部は丸く納められている。

ＴＫ209型式は、53～61・65・66の11個体である。53は、形態的にはＴＫ10型式に近いが、底部のヘラ削りがわずかであることから、ＴＫ209型式に分類したものである。54・58・59の底部は回転ヘラ削りが施されている。55・56・60・61は、回転ヘラ削り後、ナデ調整が加えられている。57は、ヘラ切り後、ナデ調整が加えられている。また、59と61の立ち上がりはわずかで、より新しい傾向を示している。

65と66は、口径に対して深い椀形をなすもので、底部は回転ヘラ切り後ナデ調整が加えられている。

杯Ｇは、67の1個体である。全体的にコップ形をなし、底部外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。口縁部は回転ナデ調整によりわずかに内傾する。底部にヘラ記号が認められる。

杯蓋　11点（40・41・47～52・62～64）出土している。40と41はＴＫ47型式に位置付けられるもので、口縁端部がわずかに内傾する端面を有する。

49は、ＴＫ10型式に位置付けられるもので、口縁端部はわずかに内傾する端面を有し、沈線状をなす。ヘラ削りは天井部の2/3に及ぶ。63はＴＫ43型式に位置付けられるもので、ヘラ削りが天井部の2/3に及んでいる。

47・48・50～52・62・64は、ＴＫ209型式に位置付けられる。52は、天井部の1/3にヘラ削りが施されている。47と64の天井部はヘラ切り後未調整である。48と51は、天井部2/3にヘラ削りが施されている。また、天井部にヘラ描が認められるが、多方向に施されている（写真図版10）。50の天井部は回転ヘラ削り後ナデ調整が加えられている。62の天井部は、回転ヘラ切り後ナデ調整が加えられている。

高坏蓋　42・45・46の3点出土している。42は、ＴＫ47型式もしくはＭＴ15型式に位置付けられるもので、口縁端部は内傾する端面を有する。ヘラ削りは天井部の2/3に及ぶ。

45は、形態的に、他に例を見ないタイプである。天井部に灰被りが認められたことから、蓋と判断したものである。口径15.6㎝と大型で、器高も6.5㎝に及ぶ。口縁部中央に2条の沈線が施され、この沈線の上側にキザミ目が施されている。つまみは完存しないが、三方に長方形状の透かしが穿たれている。初期須恵器に位置付けられるものである。

46は、天井部中央に釦状のつまみがつく。天井部と口縁部の境は緩やかな沈線をなし、口縁端部は丸くおさめられている。また、天井部は直線的で、天井部のヘラ削りは2/3に及ぶ。ＴＫ43型式に位置付けられるものと考えられる。

高杯　43・68～70の4点出土している。43は、わずかに脚部の一部が残存する。残存する脚部に

長方形透かしの一部が3箇所に認められる。杯底部のヘラ削りは2/3に及び、たちあがり端部は丸くおさめられている。以上の特徴から、ＭＴ15型式からＴＫ10型式に位置付けられる。

68は、長脚2段透かしを有する高杯である。杯部は外面中央に沈線が施されている。ＴＫ10型式に位置付けられるものである。69は、ＴＫ209型式に位置付けられるもので、短脚に椀形の杯部が付く。70は、短い脚部に杯部が付くタイプで、脚部には透かしは認められない。杯部はＴＫ217型式タイプの特徴を有するものである。

提瓶　71と72の2点出土している。71は、口縁部から体部上半にかけて残存する。肩部の耳は退化が顕著で、釦状をなす。72は、底部を欠くが、ほぼ完形に復元できる個体である。肩部の耳は退化傾向にあり、鍵形をなす。体部外面全面にカキメが施されている。ＴＫ43に位置付けられる。

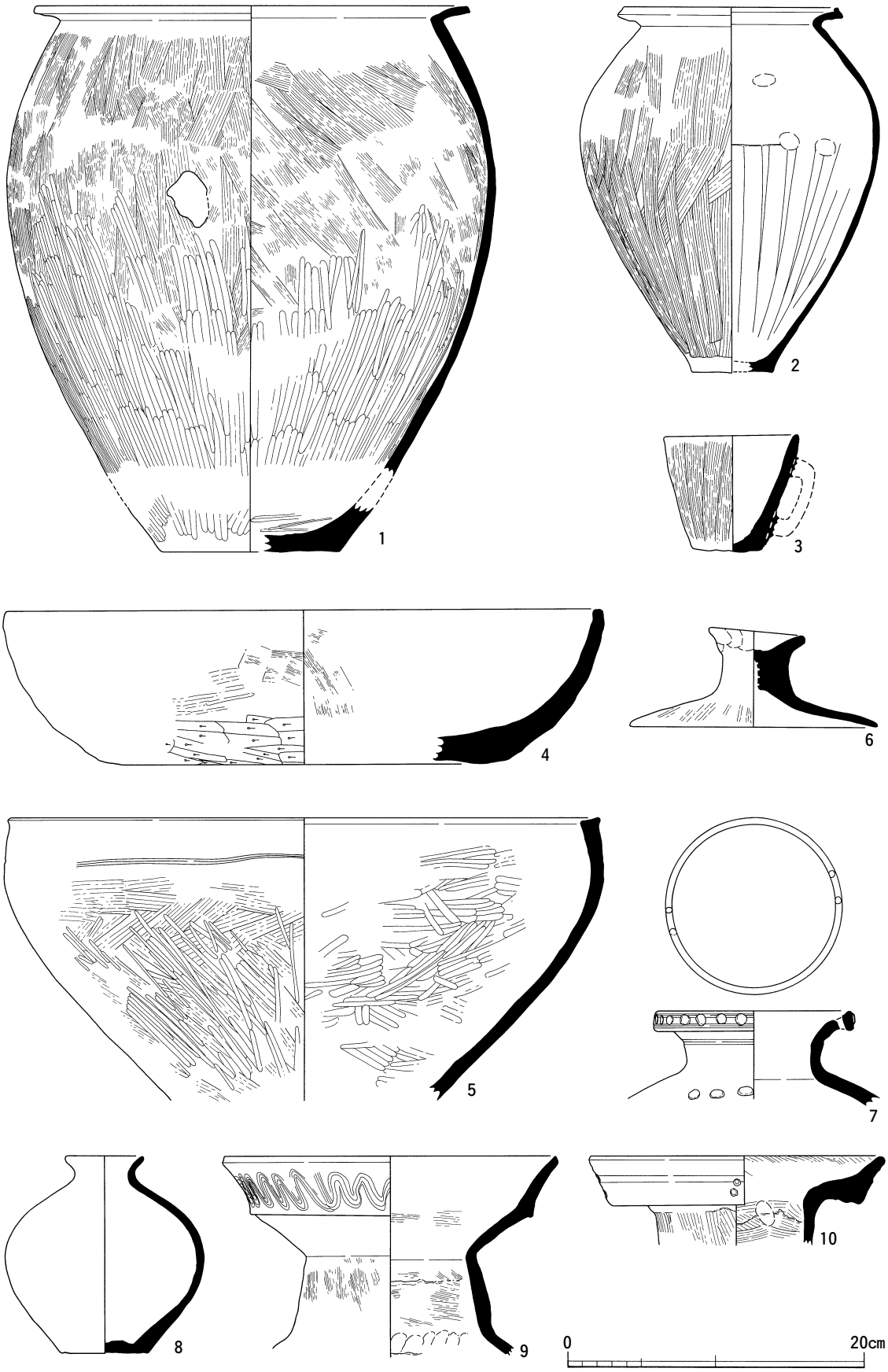
横瓶　82の1点出土している。ほぼ完形に復元できる個体で、体部中位側部に充填痕が認められる（写真図版14）。充填痕は、径5.9㎝の円盤を充填したもので、内面には当具痕が認められない。

壺　73・75・76の3点出土している。73は小型の短頸壺である。体部外面下半は静止ヘラ削りにより仕上げられている。体部上半から口縁部にかけての内外面は回転ナデ調整により仕上げられている。内面全面に漆の付着が認められる。また、外面にはヘラによる線刻が施されている。75は、体部下面の剥離痕から、台付壺に分類されるものである。体部上半外面にはヘラ描の刻み目が施され、その上側には2条のヘラ描沈線が、下側には1条のヘラ描沈線が施されている。76も短頸壺に分類されるタイプで、外面は一部を除きカキメが施されている。口縁端部は内傾する端面を有する。

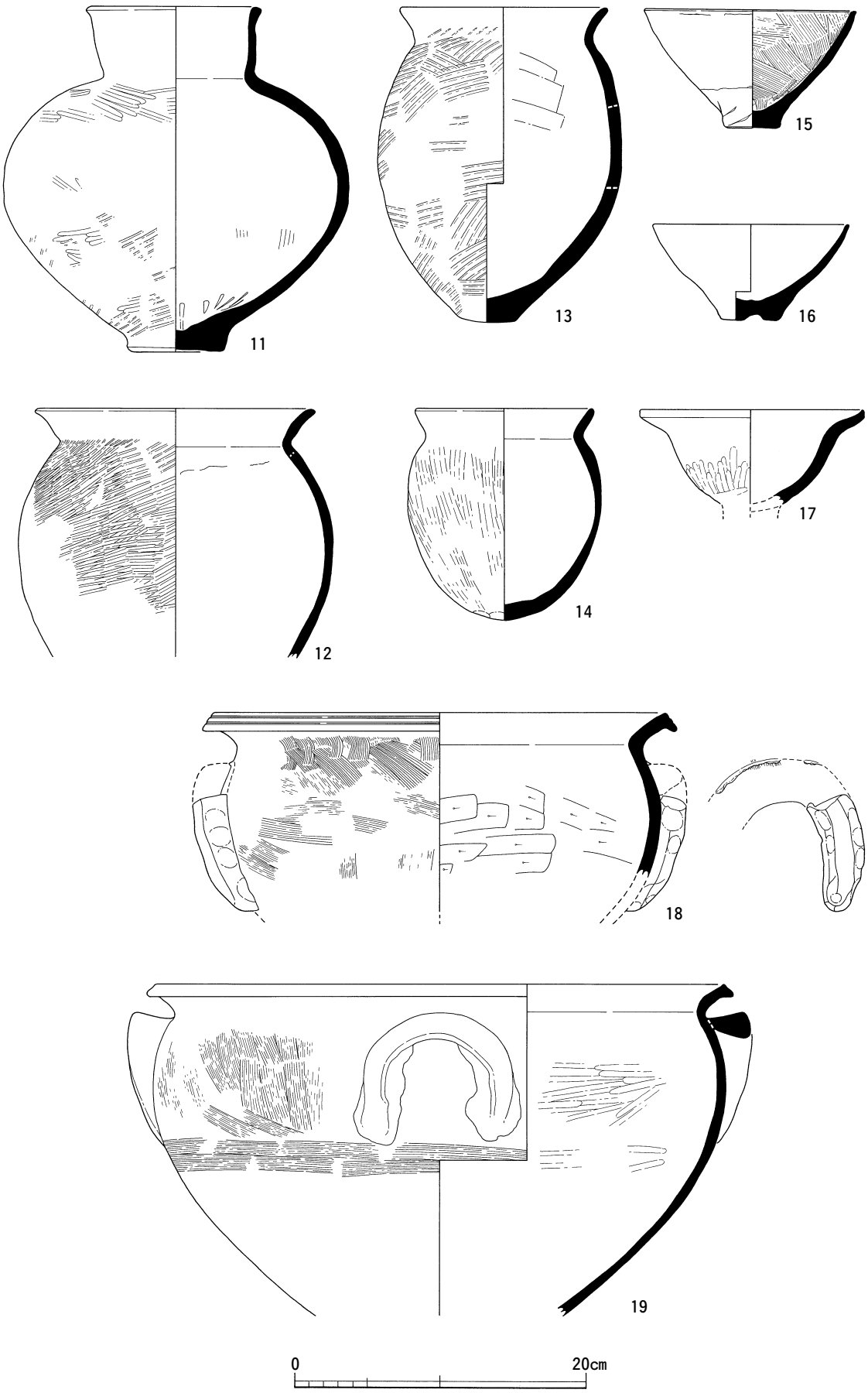
甕　74の1点出土している。体部を中心に残存し、体部中位にヘラ描沈線に挟まれて櫛描波状文が施されている。その後、この部位に径1.3㎝の穿孔が認められる。頸部にも櫛描波状文が施されている。底部外面は不定方向のヘラナデ調整により仕上げられている。体部の規模から判断して、ＴＫ23型式に位置付けられる。

甕　77～81・83の6点出土している。79は、口縁部が受口状をなすタイプで、体部外面は平行叩きにより整形されている。77と81は同タイプの甕で、体部外面は平行叩き後カキメが施されている。80は、口縁部の一部がわずかに残存する小片で、口縁部はほぼ直立する。また、口縁端部は内傾する平坦面を有する。口縁部外面には2条の沈線が施され、体部外面は平行叩きにより整形されている。78と83は同タイプに分類されるものである。体部は、叩き成形後、横方向のカキメが施されている。

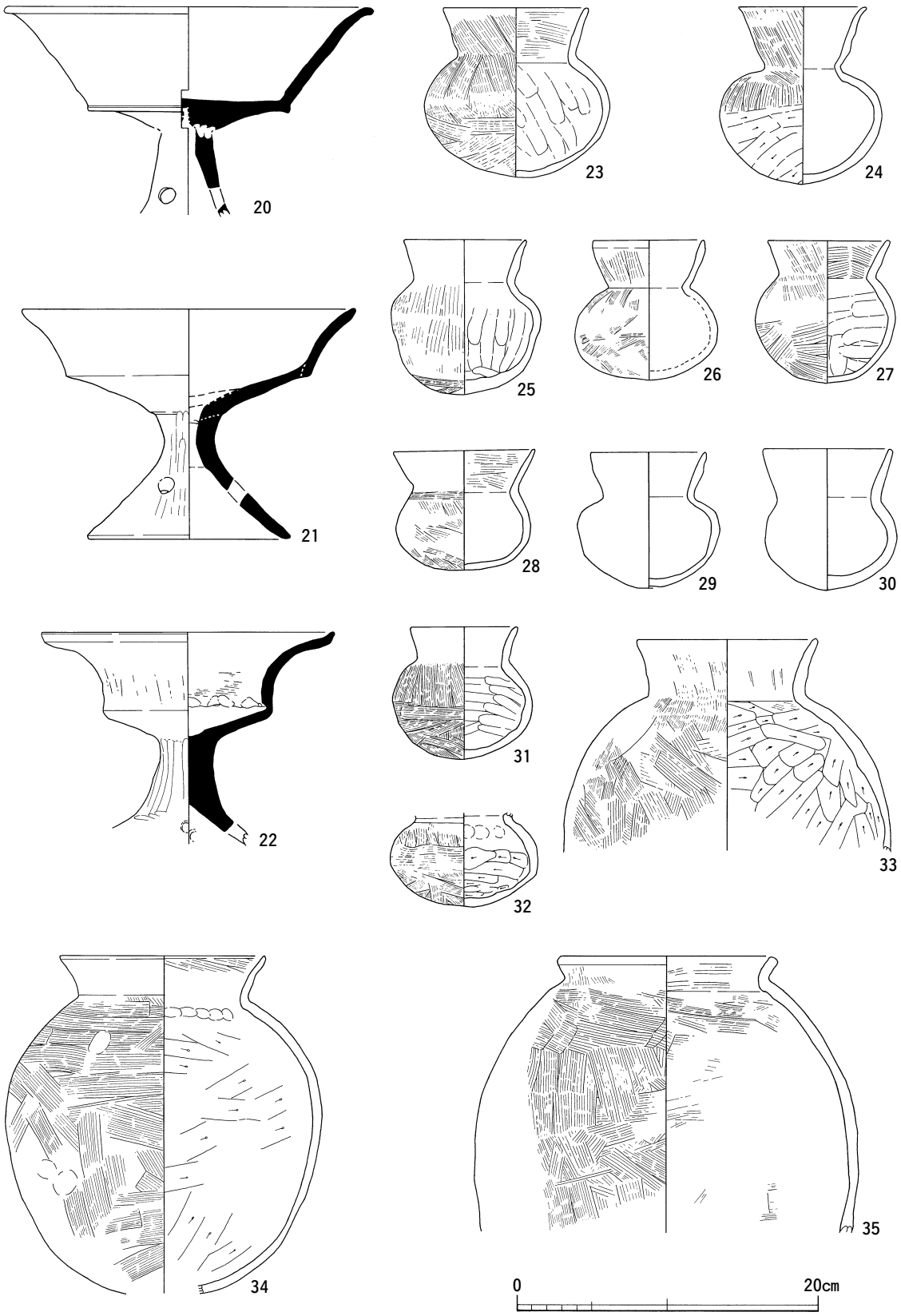
中近世　青磁碗と備前焼が出土している。青磁碗は85の1個体である。龍泉窯系の青磁碗で、内面見込みに草花文の一部が認められる。高台内側は露胎している。備前焼は84の擂鉢1個体である。内面に7本を単位とする卸し目がわずかに残存する。



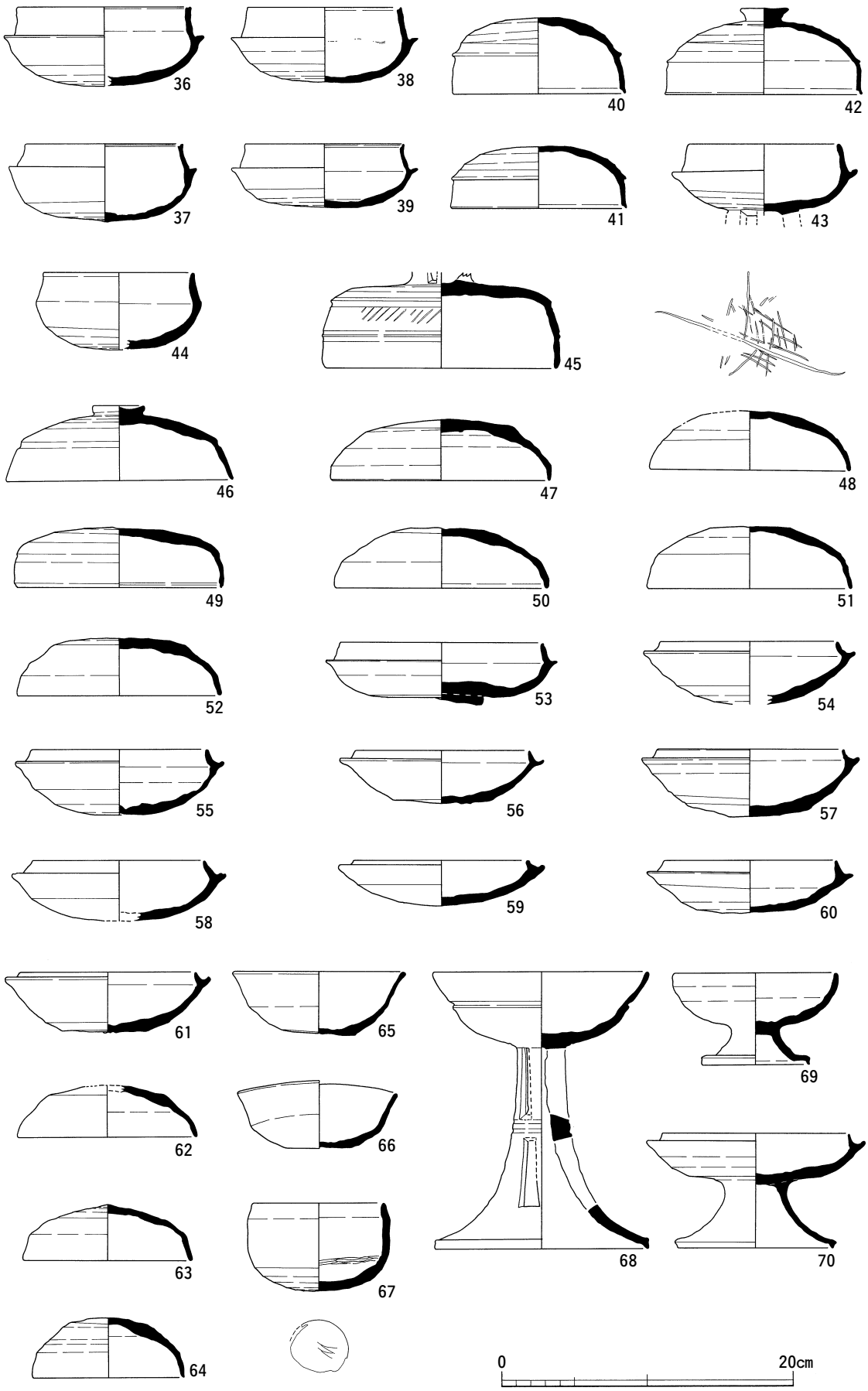
第17図　第1次調査出土土器(1)



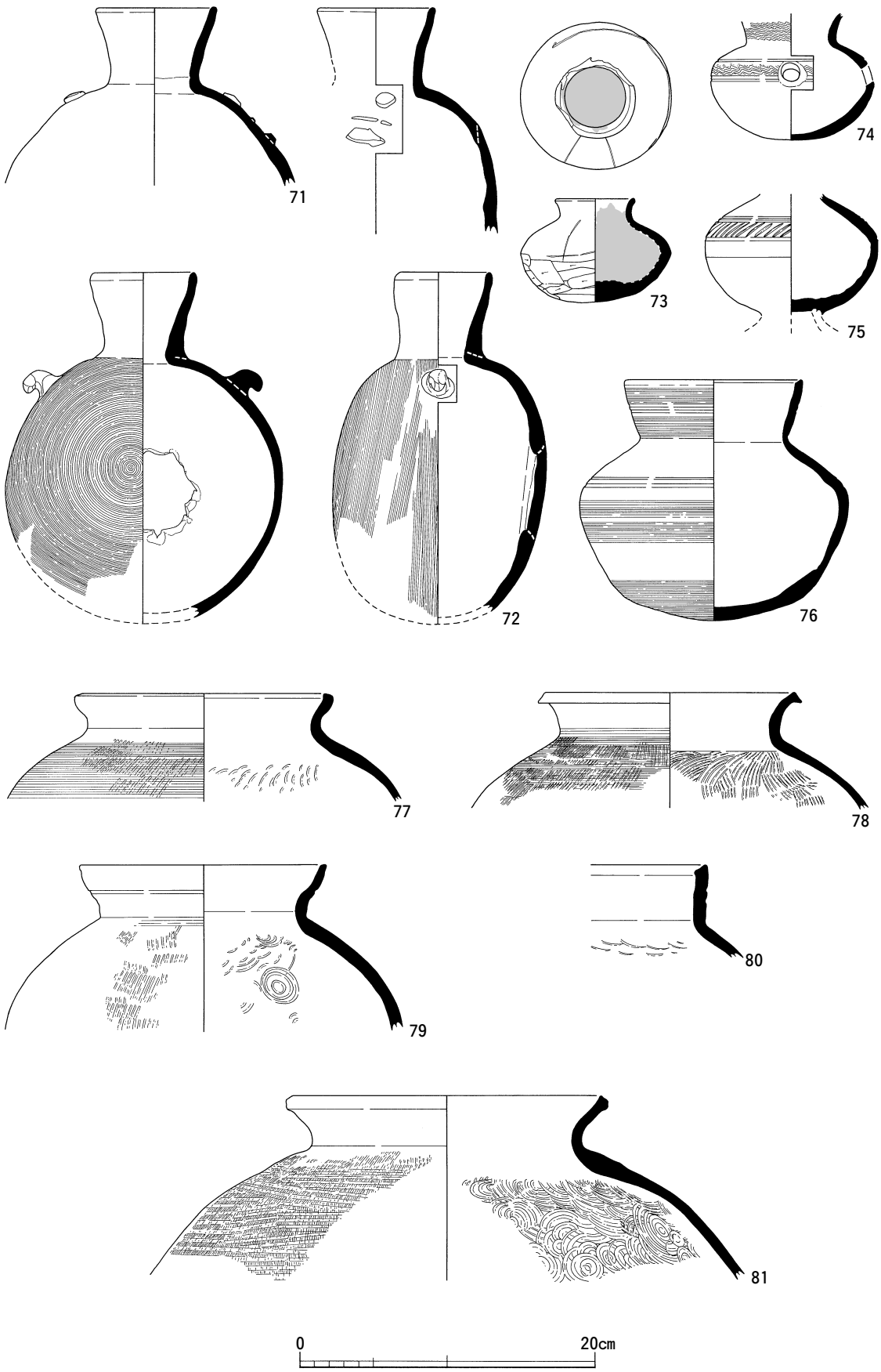
第18図　第1次調査出土土器(2)



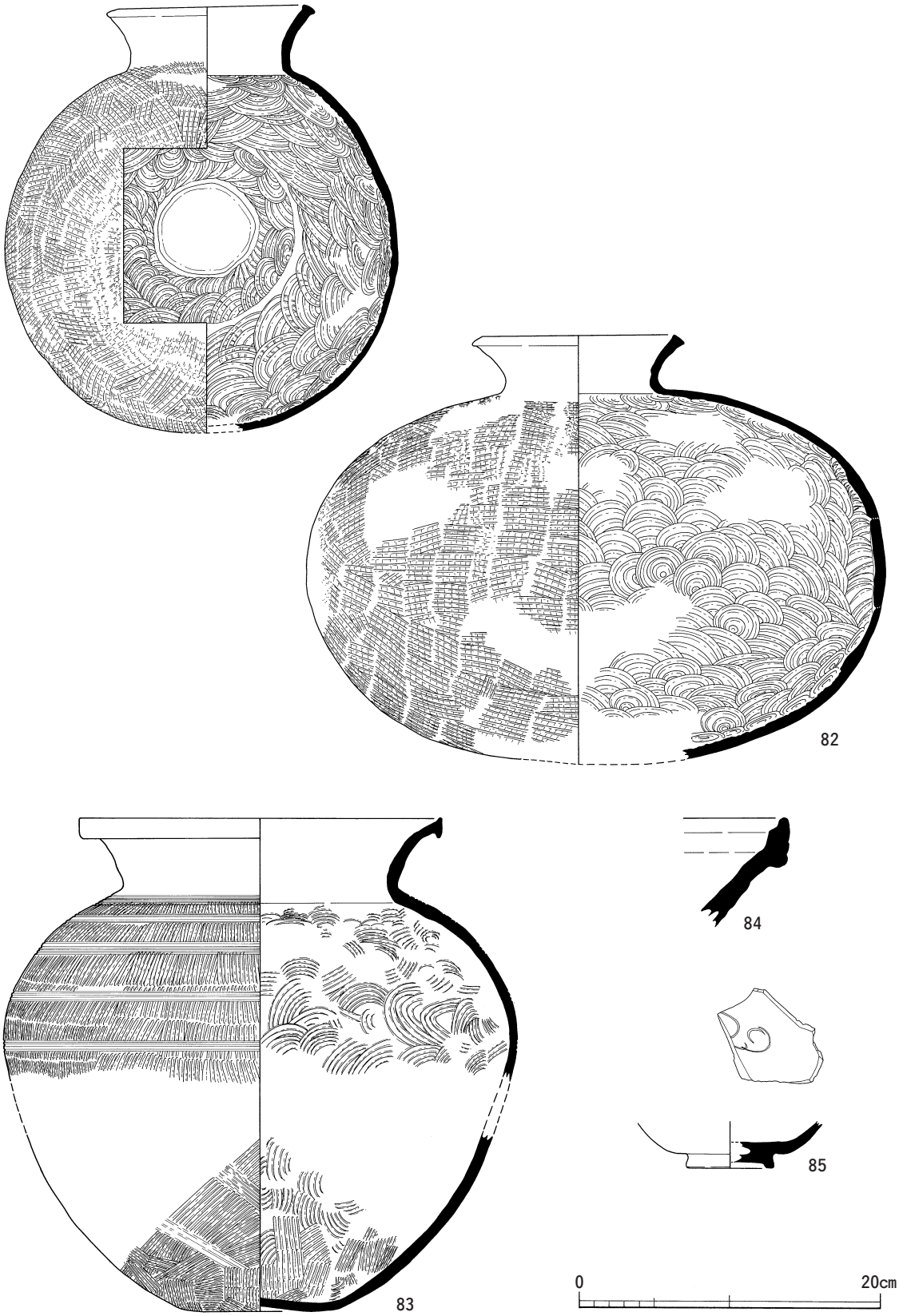
第19図　第1次調査出土土器(3)



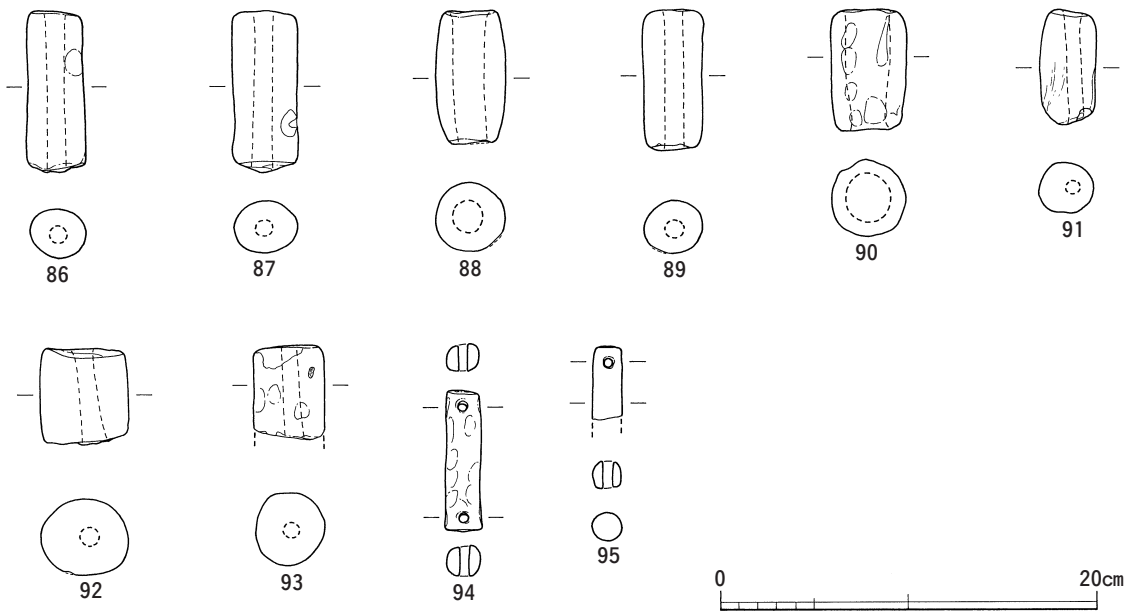
第20図　第1次調査出土土器(4)



第21図　第1次調査出土土器(5)



第22図　第1次調査出土土器(6)



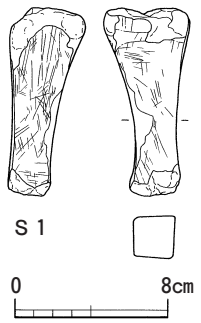
第23図　第1次調査出土土製品

第1表　出土土錘一覧表

No.	長さ（cm）	最大径（cm）	孔径（cm）	重量（g）	残存	備考	挿図	図版
86	8.50	2.60～3.00	0.90～1.10	76.00	ほぼ完存		23	14
87	8.50	3.45～2.75	0.90～1.10	93.00	ほぼ完存		23	14
88	7.10	3.61～3.70	1.60	78.50	一部欠		23	15
89	7.45	3.20～2.80	1.00	72.00	完存		23	15
90	6.40	4.05～3.95	1.75～2.60	81.50	完存		23	15
91	6.10	2.70×2.95	0.70～0.80	44.60	ほぼ完存		23	15
92	5.15	4.65×4.00	1.00～1.35	111.00	完存		23	15
93	5.00	3.83～3.68	0.83	81.00	1/2前後穴		23	15
94	7.44	1.60～1.85	0.53～0.63	28.40	完存	両端に紐穴	23	15
95	3.90	1.60×1.50	0.53	11.40	1/2	一端に紐穴		

土製品　土錘が10点（86～95）出土している。各土錘の規模等は第1表の通りである。

石製品　砥石が1点（S1）が出土している（第24図）。S1は、完存するものではないが、2面が使用されている。全長9.92cmを測り、中央部における断面は2.20×2.25cmの方形をなす。重量は150.2gである。



第24図　出土砥石

3．第2次調査

(1) 基本層序と遺構の検出

はじめに

調査区西側1/3は大きく撹乱を受け、土層を観察できない（第25図）。そこで、これより東側部分を中心に報告する。

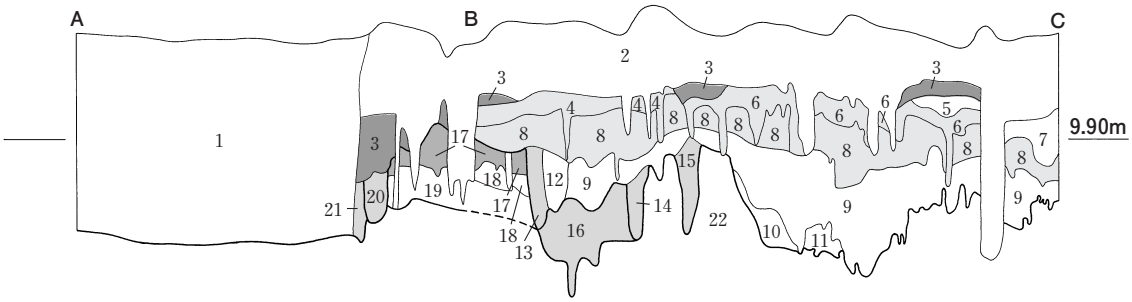
基本土層

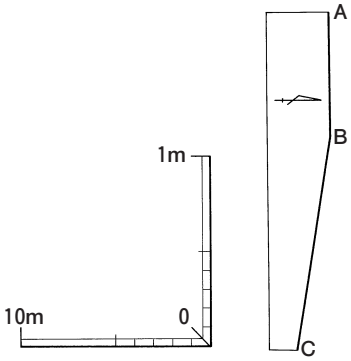
上から、盛土層（第2層）・旧耕作土（第3層）・水田土壌層（第4層・第6層・第8層）までは、共通して認められる。水田土壌層については、その層相から判断して、中世以降の水田と考えられる。水田土壌→床土層を繰り返した結果と考えられる。

第8層以下は、ＳＤ03を境に大きく異なる。まず、ＳＤ03の西側は、第8層の下に土壌化した第17層と第19層が認められる。第17層は、第18層と第19層が土壌化した層と考えられる。第18層については洪水に起因する堆積層である。

ＳＤ03の東側については、ＳＤ03およびその下層のＳＤ05が、先の第17層～第19層を切るように掘削されている。そして、これらの溝が埋没した後、第9層～第11層が堆積している。3層とも洪水に起因する層であるが、第9層と第10層は堆積後、顕著に土壌化している。

基盤層（第22層）は、細砂～粗砂からなり、調査区全域に共通して認められる。





1. 撹乱
2. 盛土
3. 旧耕作土
4. にぶい黄褐色シルト質極細砂（土壌層）
5. 暗オリーブ褐色シルト質極細砂（土壌層）
6. オリーブ褐色極細砂（土壌層）
7. 小礫～中礫（洪水層）
8. 黒褐色シルト質極細砂（土壌層）
9. 黒褐色シルト質極細砂～極粗砂（土壌層）
10. 黒褐色シルト質極細砂～極粗砂（土壌層）
11. 黒色シルト質細砂～極細砂
12. 黒褐色シルト質極細砂～粗砂
13. ＳＤ03
14. ＳＤ02
15. ＳＤ01
16. ＳＤ05
17. オリーブ褐色シルト質極細砂（土壌層）
18. 褐色細砂～極粗砂
19. にぶい黄褐色シルト質極細砂
20. オリーブ褐色シルト質極細砂
21. ＳＤ04
22. にぶい黄褐色中砂～極粗砂（基盤層）

第25図　第2次調査基本土層図

遺構の検出　ＳＤ03の東側については、基盤層上面で、ＳＤ03より西側は第17層上面で、遺構を検出している。遺構検出面はこの1面のみである。

(2) 調査の成果

柱穴･土坑･溝を検出している(第26図)。

Ⅰ：柱穴

20穴以上検出している。これらの柱穴から建物を復元することは困難である。ここでは、土器が出土した柱穴（Ｐ01～Ｐ21）を中心に報告する。

Ｐ01

検出状況　調査区中央部で検出した(第26図)。Ｐ02の南東側に位置する。南側の大半が撹乱を受けている。ＳＤ05と切り合い関係にあり、ＳＤ05を切っている。

出土遺物　弥生時代前期の壺が1点 (96) 出土している(第32図)。外面は縦方向のハケ調整後、3条の突帯が貼り付けられている。突帯頂部にはキザミ目が施されている。

時期　出土土器から判断して、弥生時代前期末と考えられる。

Ｐ02

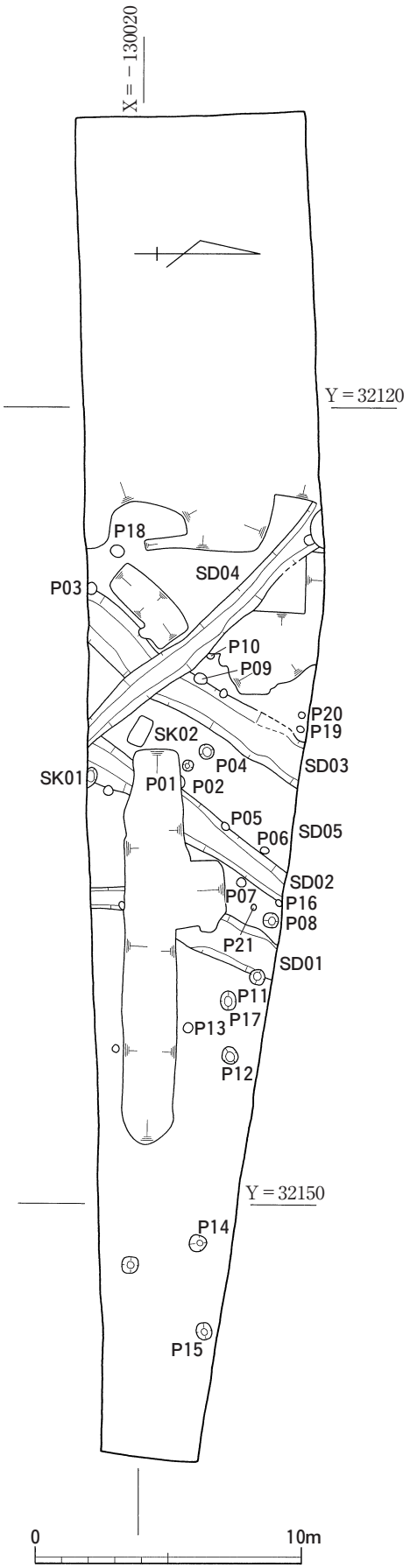
検出状況　調査区中央部で検出した(第26図)。Ｐ01の北西側、Ｐ04の南東側に位置する。ＳＤ05と切り合い関係にあり、ＳＤ05を切っている。

出土遺物　弥生時代後期の甕と高坏が出土している。甕はＶ様式系の甕である。いずれも小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期と考えられる。

Ｐ03

検出状況　調査区中央南西部で検出した(第26図)。Ｐ18の南東側に位置する。ＳＤ03と切り



第26図　第2次調査平面図

合い関係にあり、ＳＤ03を切っている。

出土遺物　弥生時代後期の甕が出土している。外面に叩きが認められ、Ｖ様式系の甕である。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期と考えられる。

Ｐ04

検出状況　調査区中央部で検出した（第26図）。Ｐ02の北西側、ＳＤ03の東側に位置する。ＳＤ05と切り合い関係にあり、ＳＤ05を切っている。

出土遺物　弥生時代中期の壺・甕・ミニチュア土器が出土している（第32図）。

壺は広口壺の口縁部片（98）が出土している。内外面とも横ナデ調整により仕上げられ、端部を下方に拡張させている。内面は、扇状文が施され、その後外側に櫛描波状文が施され、そこに円形浮文（径7㎜）が貼り付けられている。外端面には2段のキザミ目が施され、その中間に円形浮文（径7㎜）が貼り付けられている。円形浮文は2個1対をなす。また、キザミ目の下方には櫛描波状文が施されている。

ミニチュア土器（97）は、残存高が2.8㎝である。甕は体部と底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。

Ｐ05

検出状況　調査区中央部で検出した（第26図）。Ｐ01の北東側、Ｐ06の南西側に位置する。ＳＤ02と切り合い関係にあり、ＳＤ02を切っている。

出土遺物　弥生土器の小片が出土しているが、小片のため器種の特定も困難である。ただし、胎土は前期から中期初頭の特徴を示している。

時期　出土土器から判断して、弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

Ｐ06

検出状況　調査区中央部で検出した（第26図）。Ｐ05の北東側、Ｐ07の北西側に位置する。ＳＤ02の西側肩部に隣接し、ＳＤ05と切り合い関係にあり、ＳＤ05を切っている。

出土遺物　土器の小片が出土しているが、小片のため器種の特定も困難である。ただし、胎土は古墳時代前期の特徴が認められる。

時期　出土土器から判断して、古墳時代前期と考えられる。

Ｐ07

検出状況　調査区中央部で検出した（第26図）。Ｐ06の南東側、Ｐ21の南西側に位置する。

出土遺物　須恵器の杯Ｂ底部と甕体部および土師器の小片が出土している。ただし、土師器は小片のため、器種の特定も困難である。

時期　出土土器から判断して奈良時代と考えられる。

Ｐ08

検出状況　調査区中央北東部で検出した（第26図）。Ｐ16の東側、Ｐ21の北東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

出土遺物　弥生時代前期の壺と器種の特定が困難な小片が出土している。壺は底部を中心に残存し、胎土は前期の特徴を示している。小片は、胎土の特徴から中期と考えられる。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。

Ｐ09

検出状況　調査区中央部で検出した（第26図）。ＳＤ03とＳＤ04が交差する地点の北側に位置する。ＳＤ03と切り合い関係にあり、ＳＤ03を切っている。

出土遺物　弥生時代中期の器種の特定が困難な小片と、古墳時代後期の須恵器片が出土している。

時期　出土土器から判断して、古墳時代後期と考えられる。

Ｐ10

検出状況　調査区中央部で検出した（第26図）。Ｐ09の南西側に位置する。ＳＤ03と切り合い関係にあり、ＳＤ03を切っている。また、一部、後世の撹乱を受けている。

出土遺物　弥生時代後期の甕が出土している。外面に叩きが認められ、Ｖ様式系の甕である。小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期と考えられる。

Ｐ11

検出状況　調査区中央北東部で検出した（第26図）。Ｐ17の北西側に位置する。ＳＤ01と切り合い関係にあり、ＳＤ01を切っている。

出土遺物　弥生時代中期の壺の底部片が出土している。小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。

Ｐ12

検出状況　調査区東半部で検出した（第26図）。Ｐ13の北東側、Ｐ17の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

出土遺物　弥生時代後期の甕が出土している。外面に叩きが認められ、Ｖ様式系の甕である。小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期と考えられる。

Ｐ13

検出状況　調査区東半部で検出した（第26図）。Ｐ12の南西側に位置する。

出土遺物　弥生時代の土器片が出土している。小片のため器種の特定および図化はできなかった。土器の胎土は、弥生中期の特徴を示している。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。

P14

検出状況　調査区東部で検出した（第26図）。P15の西側に位置する。

出土遺物　弥生時代中期の壺の底部片（99）が出土している（第32図）。広口壺の底部片と考えられ、胎土は中期の特徴を示している。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。

P15

検出状況　調査区東部で検出した（第26図）。P14の東側に位置する。

出土遺物　弥生時代の土器片が出土している。小片のため器種の特定および図化はできなかった。土器の胎土は、弥生中期の特徴を示している。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。

P16

検出状況　調査区中央部北側で検出した（第26図）。P08の西側に位置する。SD02と切り合い関係にあり、SD02を切っている。

出土遺物　須恵器の甕の体部片と土師器の小片が出土している。須恵器の胎土は陶邑産の特徴を示している。土師器は、小片のため器種の特定は困難である。いずれも小片のため図化はできなかった。

時期　出土土器から判断して、古墳時代後期から奈良時代と考えられる。

P17

検出状況　調査区中央部東側で検出した（第26図）。P11の南東側に位置する。

出土遺物　弥生時代中期の甕の体部片が出土している。外面には煤の付着が認められる。ただし、小片のため器種の特定および図化はできなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。

P18

検出状況　調査区中央部南西側で検出した（第26図）。P03の北西側に位置する。

出土遺物　弥生時代の土器片が出土している。小片のため器種の特定および図化はできなかった。土器の胎土は、弥生時代後期の特徴を示している。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期と考えられる。

P19

検出状況　調査区中央部北西側で検出した（第26図）。P20の東側に位置する。

出土遺物　須恵器と土師器の小片が出土している。いずれも小片のため、器種の特定および図化はできなかった。

時期　出土土器から判断して、古墳時代後期から奈良時代と考えられる。

Ｐ20

検出状況　調査区中央部北西側で検出した（第26図）。Ｐ19の西側に位置する。

出土遺物　須恵器と土師器の小片が出土している。いずれも小片のため、器種の特定および図化はできなかった。

時期　出土土器から判断して、古墳時代後期から奈良時代と考えられる。

Ｐ21

検出状況　調査区中央部で検出した（第26図）。Ｐ07の北東側、Ｐ08の南西側に位置する。

出土遺物　弥生時代中期の甕の体部片が出土している。ただし、小片のため器種の特定および図化はできなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。

Ⅱ：土坑

2基（ＳＫ01・ＳＫ02）検出した（第26図）。

ＳＫ01

検出状況　調査区中央部南側で検出した（第26図）。ＳＤ02の南端部に位置する。ＳＤ02と切り合い関係にあり、ＳＤ02を切っている。ただし、一部は調査区外に拡がっており、検出できたのは全体の約2/3に限られる。

形状・規模　平面形は楕円形と考えられる。主軸方向で80㎝を測る。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは34㎝である。

埋没状況　1層からなる。

出土遺物　須恵器の甕の体部片と土師器の小片が出土している。土師器は、小片のため器種の特定は困難である。いずれも小片のため図化はできなかった。

時期　出土土器から判断して、古墳時代後期から奈良時代と考えられる。

ＳＫ02

検出状況　調査区中央部南側で検出した（第26図）。ＳＤ02とＳＤ04が切り合う箇所の北側に位置する。ＳＤ05と切り合い関係にあり、ＳＤ05を切っている。このため、完存する。

形状・規模　平面形は長方形をなす。主軸方向で1.14m、その直交方向で60㎝を測る。横断面は箱形をなし、最深部における検出面からの深さは16㎝である。

埋没状況　1層からなる。

出土遺物　壺の底部片（100）が出土している（第32図）。丸底化の傾向が認められるが、わずかに平底形態をとどめている。内外面とも縦方向のヘラミガキにより仕上げられている。鉢の可能性も考えられる。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期と考えられる。

Ⅲ：溝

5条（ＳＤ01～ＳＤ05）検出した（第26図）。

ＳＤ01

検出状況　調査区中央部で検出した（第26図）。ＳＤ02の東側に位置する。南北方向にわずかに直線的にのびる溝で、両端とも調査区外にのびている。

形状・規模　検出した長さは7.50ｍである。検出面における幅は、1.00～1.60ｍを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは7～30㎝である。底部の標高は、北端が9.81ｍ、南端が9.57ｍと、南側に傾斜している。

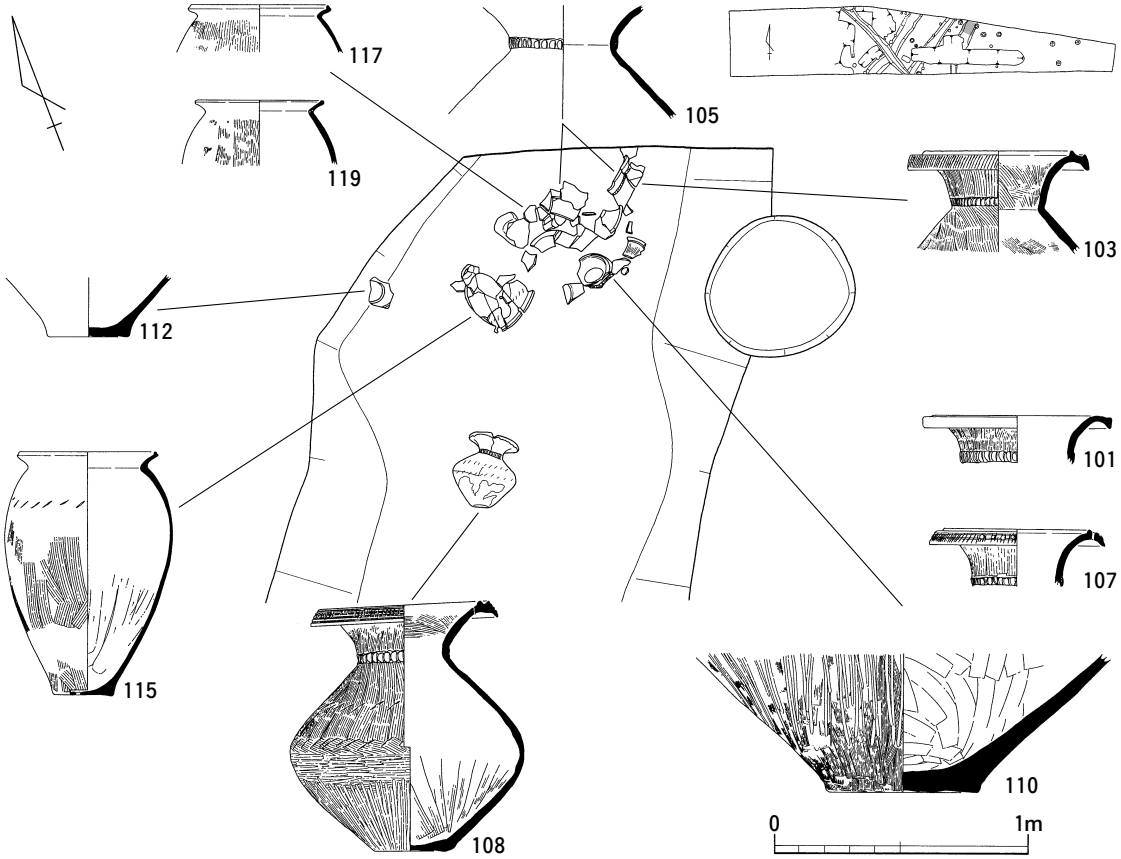
出土遺物　土器と石器が出土している。

土器　壺・甕・高坏・鉢が出土している（第32図～第34図）。特に北端部で集中して出土している（第27図）。

壺　広口壺の口縁部を中心とした個体（103～108）と底部片（109～112）が出土している。

口縁部片は、口縁端部をわずかに拡張するタイプ（101・102）と口縁部内端面に突帯を貼り付けるタイプ（103・104・106～108）に分類できる。前者は、口縁部に対する装飾性が乏しい特徴が認められ、わずかに102の外端面にキザミ目が施されている。頸部はいずれも指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。

後者のタイプについては、突帯が1条からなるもの（103･104）と2条からなるもの（106～108）が認められる。103と104の突帯頂部にはキザミ目が施されている。また、口縁部外



第27図　ＳＤ01土器出土状況

端面にはキザミ目が施されている。さらに、104の突帯の外側には2穴が1対をなす径2㎜の紐穴が穿たれている。体部上半にもキザミ目が2段にわたって施されている。

突帯が2条の106～108についても、基本的な装飾法は1条突帯と同じである。ただし、106と107の口縁部外端面にはキザミ目の上に円形浮文（106の径9㎜・107の径6㎜）が貼り付けられている。108は完存する個体で、2条の突帯の内側には2穴を1対とする径1.5㎜の紐穴が5箇所に穿たれている。また、頸部に指頭圧痕文突帯が貼り付けられるとともに、体部にも上半と中位にキザミ目がそれぞれ1段ずつ施されている。

底部片は109～112の4個体出土している。磨滅の顕著な112を除いては、外面はヘラミガキを中心に仕上げられている。内面はハケ調整が基本で、111にはハケ調整後、ヘラミガキが加えられている。

甕　113～125の13個体が出土している。121の大型の甕を除いて、基本的に同タイプに分類できるものである。完形に復元された115をみると、体部外面はハケ調整、内面は縦方向のヘラ削りを基本とし、内面上半はヘラ削り後ナデ調整により仕上げられている。最後に、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。また、118と120の体部上半部内面は、ハケ調整により仕上げられている。他に、122～125の外面下半には縦方向のヘラミガキが施されている。なお、115の肩部外面にはノ字状のキザミ目が認められるが、他の個体には認められない。

高坏　126と127の2個体が出土している。

126は、水平口縁形高坏の口縁部と考えられ、その端部がわずかに残存する。端部は斜め下方に拡張され、外端面を有する。外端面には3条の凹線が施され、これに斜交するキザミ目が施され、さらに径4.5㎜～5.0㎜の円形浮文が縦列に3個貼り付けられている。また、外面は横方向のヘラミガキにより仕上げられている。

127は、脚柱部のみ残存する。上部に2条の断面三角形の突帯が貼り付けられている。外面は縦方向のハケ調整、内面はナデ調整により仕上げられている。

鉢　128の1個体が出土している。体部下端の剥離痕から、把手付鉢と考えられる。口縁部は内側に大きく屈曲させ、横ナデ調整により仕上げられている。また、屈曲部下外面に4条の凹線が施されている。体部内外面はナデ調整により仕上げられている。

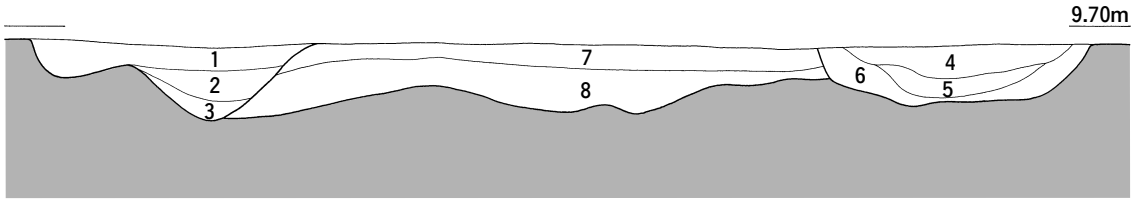
石器　サヌカイト製打製石鏃が1点（Ｓ2）出土している（第30図）。凸基式の石鏃で、完存する。全長3.4㎝、基部幅1.8㎝、厚さ4.5㎜を測る。また、重さは2.7ｇである。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。

ＳＤ02

検出状況　調査区中央部で検出した（第26図）。ＳＤ01とＳＤ03の間に位置し、両溝とほぼ平行する。北東－南西方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区外にのびている。また、ＳＤ04と切り合い関係にあり、ＳＤ04に切られている。また、当溝を掘削した段階でＳＤ05が検出されている（第28図）。

形状・規模　検出した長さは9.50ｍである。検出面における幅は、1.20～1.45ｍを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは28㎝である。底部の標高は、北東端が9.50



1．暗褐色粗砂混じりシルト～極細砂（ＳＤ03）
2．暗褐色シルト～極細砂（ＳＤ03）
3．にぶい黄褐色極細砂～細砂（ＳＤ03）
4．暗褐色細砂～粗砂（ＳＤ02）
5．暗褐色粗砂混じり細砂～極細砂（ＳＤ02）
6．にぶい黄褐色シルト混じり中砂～粗砂（ＳＤ02）
7．暗褐色粗砂混じり細砂～極細砂（ＳＤ05）
8．にぶい黄褐色細砂～粗砂（ＳＤ05）

0　2m

第28図　ＳＤ02・ＳＤ03断面

m、南西端が9.43mと、南西側にわずかに傾斜している。

埋没状況　3層からなる（第28図）。最下層の第6層が堆積後、再掘削され、その後第4層と第5層が堆積している。

出土遺物　弥生時代中期の壺・甕・高坏・脚部が出土している（第34図）。

壺　広口壺・直口壺・底部片が出土している。

広口壺は口縁部片と体部片が出土している。口縁部片は、129～131の3個体出土している。口縁部を斜め下方に拡張させ装飾を施すタイプ（129・130）と、端部を拡張させず装飾を施さないタイプ（131）が認められる。前者の、129の外端面には6条の凹線文が施され、その上に棒状浮文と円形浮文（径1.5㎝）が貼り付けられている。また、内端面には櫛描波状文が施され、その後突帯が貼り付けられている。さらに、頸部には凹線が認められる。130も口縁部の形態は129と同じで、外端面には5条の凹線文が施され、その後径1㎝の円形浮文が貼り付けられている。また、頸部には凹線文が認められる。

後者の131は、口縁部を外方に巻き込ませ、端部は玉縁状をなす。頸部外面は縦方向のハケ調整により仕上げられ、装飾は施されていない。

体部片は、132と133の2個体である。132は、頸部から肩部にかけての小片で、縦方向のハケ調整後、上から櫛描直線文･櫛描波状文が施されている。133は肩部の小片で、外面にハケ調整後、櫛描直線文と櫛描波状文のセットが3セット認められる。

直口壺は134の1個体が出土している。口縁部の小片で、外面に断面台形をなす3条の突帯が貼り付けられている。

底部は、140の1個体で、内面は指オサエ、外面はヘラミガキにより仕上げられている。

甕　口縁部が如意形を呈する甕が出土している。口縁部は135と136の2点出土しているが、前者は端部を丸く納め、後者は外端面を有する。137～139・141～143は底部片である。

高坏　144の1個体が出土している。外面はナデ調整により仕上げられ、4条の凹線文が施されている。内面は横方向のヘラミガキにより仕上げられている。

脚部　145の1個体が出土している。脚部のみ残存し、体部とは円盤充填により接合されている。脚部内外面は横ナデ調整、体部内面はハケ調整により仕上げられている。

時期　出土土器から判断して、弥生中期Ⅱ～Ⅲと考えられる。

ＳＤ03

検出状況　調査区中央部で検出した（第26図）。ＳＤ02の西側に位置し、ＳＤ02とほぼ平行する。北東－南西方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区外にのびている。また、ＳＤ04と切り合い関係にあり、ＳＤ04に切られている。また、当溝を掘削した段階でＳＤ05が検出されている（第28図）。

形状・規模　検出した長さは10.30ｍである。検出面における幅は、1.50ｍを測る。2段に掘り込まれており、その横断面は上側が逆台形、下側がＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは37㎝である。底部の標高は、北東端が9.42ｍ、南西端が9.44ｍと、ほぼ一定している。

埋没状況　3層からなる（第28図）。3層とも洪水に起因する堆積で、堆積後に土壌化している。

出土遺物　弥生時代中期と後期の土器が出土している（第34図・第35図）。

中期　壺・甕・高坏が出土している。

壺　広口壺（146）と短頸壺（148）が出土している。広口壺の146は口縁部のみ残存する。端部を上下に拡張させ、外端面には5条の凹線文が施された後、その上に棒状浮文が貼り付けられている。口縁部内端面には櫛描波状文が施されている。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

短頸壺の148は、口縁部がく字形に短く屈曲するもので、甕に分類される可能性も考えられる。頸部には指頭圧痕文突帯が貼り付けられ、口縁部外端面にはキザミ目が施されている。また、口縁部内端面は横方向のヘラミガキが施されている。

この他、底部片（150）が出土している。外面は縦方向のヘラミガキにより仕上げられている。

甕　149・151・152の3個体が出土している。いずれも底部片で、その形態と調整技法から甕に分類した。149と151の内面は縦方向のヘラ削り、外面はヘラミガキにより仕上げられている。152の内面はナデ調整により仕上げられ、底部中央部には径8.5㎜の穿孔が焼成前に施されている。

高坏　147の1個体が出土している。外面には5条の凹線文が施されている。磨滅が顕著なため、具体的な調整は観察できない。

後期　甕と鉢が出土している。

甕　153・154・156・157の4個体が出土している。いずれもＶ式系甕の底部片である。157を除いては平底形態をなすが、157は丸底化の傾向が顕著で、わずかに平底形態を残す。また、153の内面は弱いヘラ削りが施されている。外面は、叩き成形後、部分的に縦方向のハケ調整により仕上げられている。

鉢　155の1個体が出土している。尖り底の底部中央に径9㎜の穿孔が施されたもので、一部では甑に分類されるものである。内外面とも板ナデ調整により仕上げられている。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期には掘削され、弥生時代後期に埋没したものと考えられる。

ＳＤ04

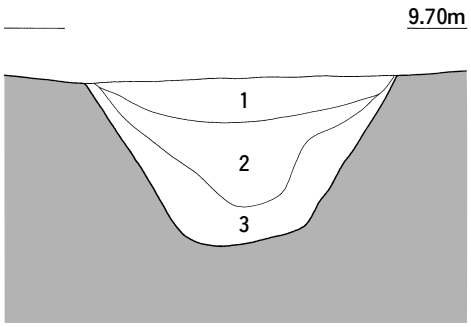
検出状況　調査区中央部で検出した（第26図）。北西－南東方向に直線的にのびる溝で、両端とも調

査区外にのびている。ＳＤ02～ＳＤ05と切り合い関係にあり、上記遺構を切っている。

形状・規模　検出した長さは12.0mである。検出面における幅は、82cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは44cmである。底部の標高は、北西端が9.56m、南東端が9.48mと、南東側にわずかに傾斜している。

埋没状況　3層からなる（第29図）。第3層が洪水により堆積後、再掘削され、その後第2層と第1層が人為的に埋められている。最上層から、須恵器の甕（161）が出土している。

出土遺物　第1層と第2層を中心に、弥生土器と古墳時代の須恵器が出土している。



1．暗褐色細砂～中砂
2．黒褐色中砂混じりシルト～極細砂
3．暗褐色細砂～粗砂

第29図　ＳＤ04断面

弥生土器　壺・甕・高坏が出土している（第35図）。

壺は158の1個体が出土している。広口壺の口縁部で、端部を下方に拡張させている。外端面には櫛描波状文が施され、内面は横方向のヘラミガキにより仕上げられている。

甕は159の1個体が出土している。Ｖ様式系甕の底部で、尖り底化の傾向が見られる。外面はヘラナデ、内面はナデ調整により仕上げられている。

高坏は160の1個体が出土している。脚部下半を中心に残存し、内面は横方向のヘラ削り、外面は横ナデ調整により仕上げられている。また、端部外面には三角刺突文が、その上に3条の櫛描直線文が施されている。三角刺突文は、貫通していない。

須恵器　甕が1個体（161）出土している（第35図）。底部を除いて完形に復元できる個体で、外面は平行叩き成形後、カキメが施されている。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期に掘削され、最終的に古墳時代後期に埋没したと考えられる。

ＳＤ05

検出状況　調査区中央部で検出した（第26図）。ＳＤ02とＳＤ03を検出後明らかとなった遺構で、平面的にＳＤ02・ＳＤ03と重複する。このため、当溝の肩部は両溝に切られている。この他、ＳＤ04にも切られている。北東－南西方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区外にのびている。

形状・規模　検出した長さは9.50mである。溝の幅を検出することはできなかったが、第28図における断面観察から、4～5mと推定される。横断面は逆台形もしくは皿形をなし、最深部における検出面からの深さは35cmである。底部の標高は、9.35mである。

埋没状況　2層からなる（第28図）。

出土遺物　弥生時代中期の壺・甕・高坏・他が出土している（第35図・第36図）。

壺　広口壺・短頸壺・底部片が出土している。広口壺は、163と164の2個体が出土している。

163は、口縁端部を斜め下方に拡張させ、端面には4条の凹線文が施されている。また、頸部外面にも2条の凹線文が施されている。頸部内面は横方向のヘラミガキ、体部内面はナデにより仕上げられている。また、肩部外面には把手の剥離痕が認められる。164は、斜方向に直線的にのび、口縁端部を外下方に折り返す。装飾は施されず、外面はハケ、内面は横方向のヘラ削りもしくはヘラナデにより、仕上げられている。

短頸壺は162の1個体である。形態的には甕に類似するが、口径に対して頸径が小さいため、壺に分類した。体部内面はハケ調整、口縁部内面は横ナデ調整により仕上げられている。

底部片は165の1個体で、広口壺の底部と考えられる。

甕　如意形を呈する口縁部片が2点（166・167）出土している。2点とも同タイプに分類できるもので、法量的に大型である。体部内外面はハケ調整、口縁部内外面は横ナデ調整により、仕上げられている。口縁端部は明確な外端面を有する。

この他、底部片が8個体（168～175）出土しているが、形態･調整技法の特徴から、甕の底部と考えられる。171～175については、小型甕の底部と考えられる。

高坏　脚部片が1点（176）出土している。外面は縦方向のヘラミガキにより仕上げられ、脚柱部には長方形の透かし（3箇所）が焼成前に穿たれている。また、長方形透かしの下側には2条の櫛描直線文が、その下側には三角刺突文が施されている。

他　半裁竹管による山形文と直線文・ヘラ描沈線・櫛描直線文と櫛描波状文が施された小片が出土している。前2者については、胎土の特徴と合わせて、前期から中期初頭に位置付けられるものである。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期前半と考えられる。

Ⅳ：その他

包含層から、多くの土器が出土している。なかでも、土器溜りとして一括性の高い一群がある。これを中心に報告する。

出土遺物　一括性の高い土器溜り出土土器と、他の土器とにわけて報告する。

土器溜り出土　弥生時代中期の壺・甕・高坏・他が出土している（第36図・第37図）。

壺　広口壺・水差し形壺・細頸壺・底部が出土している。

広口壺は、177～179の3個体が出土している。177は、外面をハケ調整、内面をナデ調整･横ナデ調整により仕上げられ、口縁端部を斜下方に拡張させている。外端面に4条の凹線を施し、斜方向のキザミ目が施されている。その後、3本を単位とした棒状浮文が貼り付けられている。計8セットあったものと復元される。また、棒状浮文の上にもキザミ目が施されている。口縁部内端面には2条の突帯が認められ、頂部にはキザミ目が施されている。この他、頸部外面には2条の断面三角形の突帯が貼り付けられ、肩部には櫛描波状文が施されている。

178も口縁端部を斜下方に拡張させ、外端面には3条の凹線文を施し、その上にキザミ目が施されている。その後、径4.5㎜の円形浮文が3個縦列状に貼り付けられている。外面はハケ調整、内面は横方向のヘラミガキにより仕上げられている。

179は、口縁端部をわずかに上方につまみあげ、突帯状をなし、頂部にキザミ目が施されている。また、この突帯状の内側にも1条の突帯が認められ、同じく頂部にキザミ目が施されている。頸部外面にも断面三角形の突帯が1条貼り付けられている。

水差形壺は180の1個体が出土している。肩部に把手の剥離痕が認められ、この箇所の口縁部が抉られていることから、水差しと判断したものである。外面はヘラミガキ、内面はハケ調整により仕上げられた後、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。

細頸壺は、181の1個体である。口縁端部外面にはキザミ目が施されている。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整により仕上げられている。

底部は182の1個体が出土している。外面はヘラミガキにより仕上げられている。

甕　183～190の8個体が出土している。いずれも同タイプに分類されるものである。法量的には大型の183と小型の184～190に分類することができる。体部内面は下半を中心に縦方向ヘラ削り、上半がハケ調整により仕上げられている。

ただし、189ではヘラ削りは認められず、内面全体がハケ調整により仕上げられている。また、底部中央部には径1.7㎝の穿孔が焼成前に施されている。この他、188の底部中央部にも径4㎜の穿孔が焼成前に施されている。

鉢　191～194の4個体が出土している。いずれもタイプを異にする。

191は、直口鉢で、比較的大型の鉢である。内端部を水平方向につまみだし、上端面を形成する。内面はハケ調整後縦方向のヘラ削り、外面はハケ調整により仕上げられている。底部外面はヘラナデ調整により仕上げられている。

192は、形態的には甕と類似するが、口径に対して器高が低いため、鉢に分類した。体部は、内外面ともハケ調整により仕上げられ、外面下半には縦方向のヘラミガキが暗文状に施されている。内面のハケ調整は、横方向→縦方向の順に施されている。

193は、台付鉢である。装飾性が豊かで、口縁部外面には、上から2条の凹線文、櫛先状の刺突文、5本からなる櫛描直線文、櫛状工具による斜格子文、4本からなる櫛描直線文が施されている。さらに、櫛描直線文の上には径9㎜の円形浮文が貼り付けられている。この他、口縁部と体部の境には2条となる突帯が貼り付けられ、下側突帯の頂部にはキザミ目が施されている。さらに、この突帯に直交するように棒状浮文が貼り付けられている。なお、体部外面は縦方向のヘラミガキにより仕上げられている。

194は、椀形の鉢である。内外面ともハケ調整により仕上げられ、内面下半は縦方向のヘラ削りが加えられている。

高坏　195～198の4個体が出土している。坏部が残存するのは195の1個体のみで、他は脚部のみ残存する。

195は、木器形高坏の坏部で、体部外面は横方向のヘラ削りの後、縦方向のヘラミガキにより仕上げられている。内面はナデ調整により仕上げられ、口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

脚部は、装飾が施される196と、外面がヘラミガキにより仕上げられる197･198に分類できる。196は、上から、沈線文・斜格子文・沈線文・三角刺突文・1条のヘラ描沈線、が施されている。沈線文は螺旋状をなし、上側は4周、下側は5周施されている。いずれも、先

端が鋭利な工具により施されている。斜格子文は左上り→右上りの順に施されている。三角刺突文は貫通していない。

包含層出土土器　土器と石器が出土している。

土器　弥生土器・古墳時代・奈良時代・中世の土器が出土している。

弥生土器　弥生時代中期と後期の土器が出土している（第37図～第39図）。

中期　壺・甕・高坏・鉢が出土している。

壺　199～201の3個体が出土している。199と200は広口壺の口縁部で、口縁端部を斜め下方に拡張させ、外端面に凹線を施し、その後棒状浮文が貼り付けられている。凹線文は、199が5条、200が4条施されている。

201は水差形土器の一部と考えられる。体部外面はハケ調整後ヘラミガキ、内面はハケ調整により仕上げられている。台部内面は横方向のヘラ削りが、外面は縦方向のヘラミガキが施されている。

甕　202～206の5個体が出土している。202を除いては、底部を中心とした個体である。いずれも外面はヘラミガキにより仕上げられている。

鉢　207と210の2個体が出土している。207は、口径に対して器高が低い浅鉢タイプで、口縁端部が外方に折り返されている。内外面ともハケ調整により仕上げられ、外面は最後にヘラミガキにより仕上げられている。210は、台付鉢の口縁部片である。口縁部は内面斜上方に折り返され、屈曲部外面は突帯状をなす。口縁端部外面に2条、体部上半外面に5条の凹線文が施されている。体部は内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。

高坏　208と209の2個体が出土している。いずれも脚部片で外面は縦方向のヘラミガキにより仕上げられている。さらに、208は、上から、4条のヘラ描沈線、5条のヘラ描沈線、斜格子文、1条のヘラ描沈線が施されている。上記の施文後、三角形の透かしが穿たれている。透かしは、焼成前に3箇所に施されている。

中期　壺・甕・甑が出土している。

壺　211と220の2個体が出土している。広口壺の底部を中心とした個体で、内面はハケ調整、外面はヘラミガキにより仕上げられている。底部はわずかに平底形態をとどめている。

220は小型の壺で、内外面とも手づくねにより仕上げられている。

甕　212～214の3個体が出土している。いずれもＶ様式系甕に分類されるものである。212は、内面が下半を縦方向、上半を横方向を主体としたヘラ削りにより、外面が叩き成形後部分的に縦方向のハケ調整により、仕上げられている。底部は平底ではあるが突出せず、叩き成形後ナデ調整により仕上げられている。214の底部はより尖り底化の傾向が顕著である。

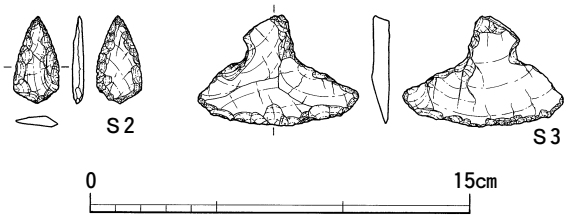
甑　215の1個体が出土している。山陰型甑の体部下半の小片で、半環状の把手が、器壁を貫通する形で貼り付けられている。内面はヘラ削り、外面はナデ調整により仕上げられ、外面には鋭利な工具による直線的な沈線が認められる。

古墳時代　土師器と須恵器が出土している。

土師器　甕・高坏・壺・器台が出土している。

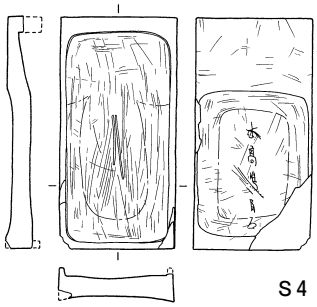
甕　216と217の2個体が出土している。いずれも布留式に分類されるもので、口縁部を中心に残存する。216は口縁端部がわずかに肥厚するが、217には認められない。217の体部外

面はハケ調整により、内面はナデと指オサエにより仕上げられた後、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。



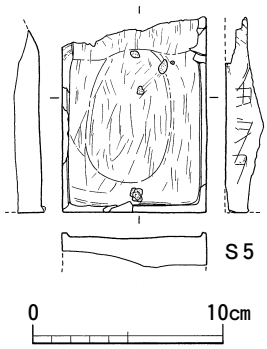
第30図　第2次調査出土石器(1)

高坏　218と219の2個体が出土している。いずれも有稜高坏に分類されるもので、杯部下半を中心に残存する。218は大型で、より古い傾向が認められる。外面はハケ調整により仕上げられている。219の外面は、下半部をハケ調整後ヘラミガキにより仕上げられている。また、内面にもヘラミガキの痕跡が認められる。



壺　小型丸底壺2個体（221・222）と肩部片（225）が出土している。小型丸底壺は、体部を中心に残存する。221は、外面がヘラナデ調整、内面が板ナデ調整により仕上げられている。222は、外面がハケ調整、内面がナデ調整により仕上げられている。

225は、全体の形状を復元することは困難であるが、外面には籠目状の圧痕が認められる。内面は指オサエとナデ調整により仕上げられている。



第31図　第2次調査出土石器(2)

器台　小型器台が2個体（223･224）出土している。小型丸底壺とセットとなるものと考えられ、脚部を中心に残存する。いずれも円形の透かしが3箇所に認められる。外面は、223が縦方向の、224が横方向のヘラミガキにより仕上げられている。

須恵器　杯身が出土している。杯身は226の1個体で、ＴＫ217型式に位置付けられる。

奈良時代　須恵器の壺（227）が出土している。壺Ａに分類されるものである。

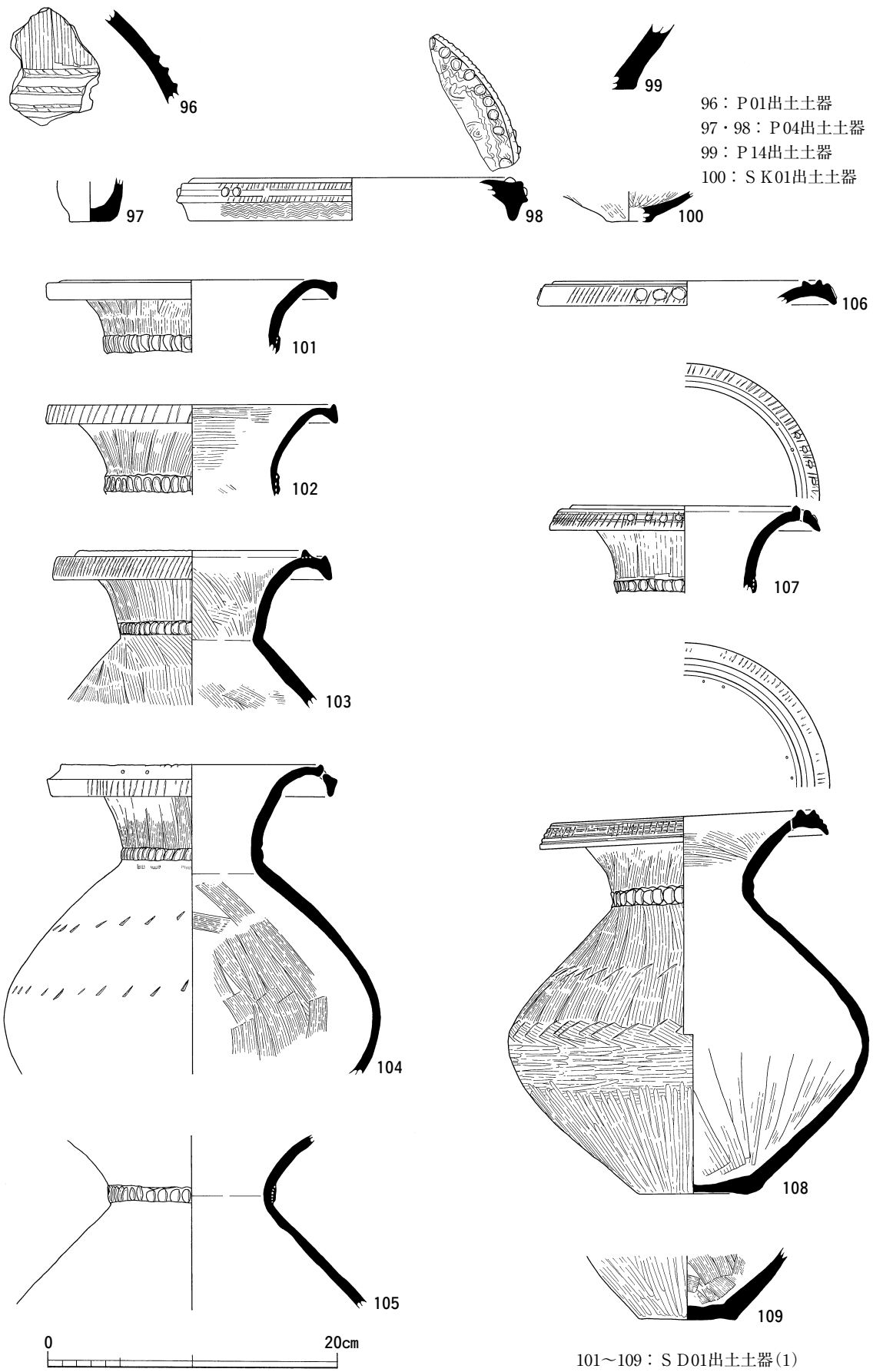
中世　須恵器の壺（228）と土師器の皿（229・230）が出土している。229は、手づくね成形により、口縁部を2段の横ナデ調整により仕上げられるもので、12世紀前半に位置付けられる。230も手づくね成形によるものである。

石器　石匙（Ｓ3）と石硯（Ｓ4・Ｓ5）が出土している（第30図・第31図）。

石匙　サヌカイト製で完存する。全長4.35㎝、幅6.35㎝、厚さ7㎜、重量14ｇを測る。

石硯　Ｓ4は、ほぼ完存するが、海部の縁を欠く。また、裏面の一部が剥離している。全長12.20㎝、幅6.10㎝、厚さ1.80㎝、重量183.8ｇを測る。また、海部の長さは3.20㎝、陸部の長さは7.90㎝である。裏面には「□高島□石」との印刻が認められる。

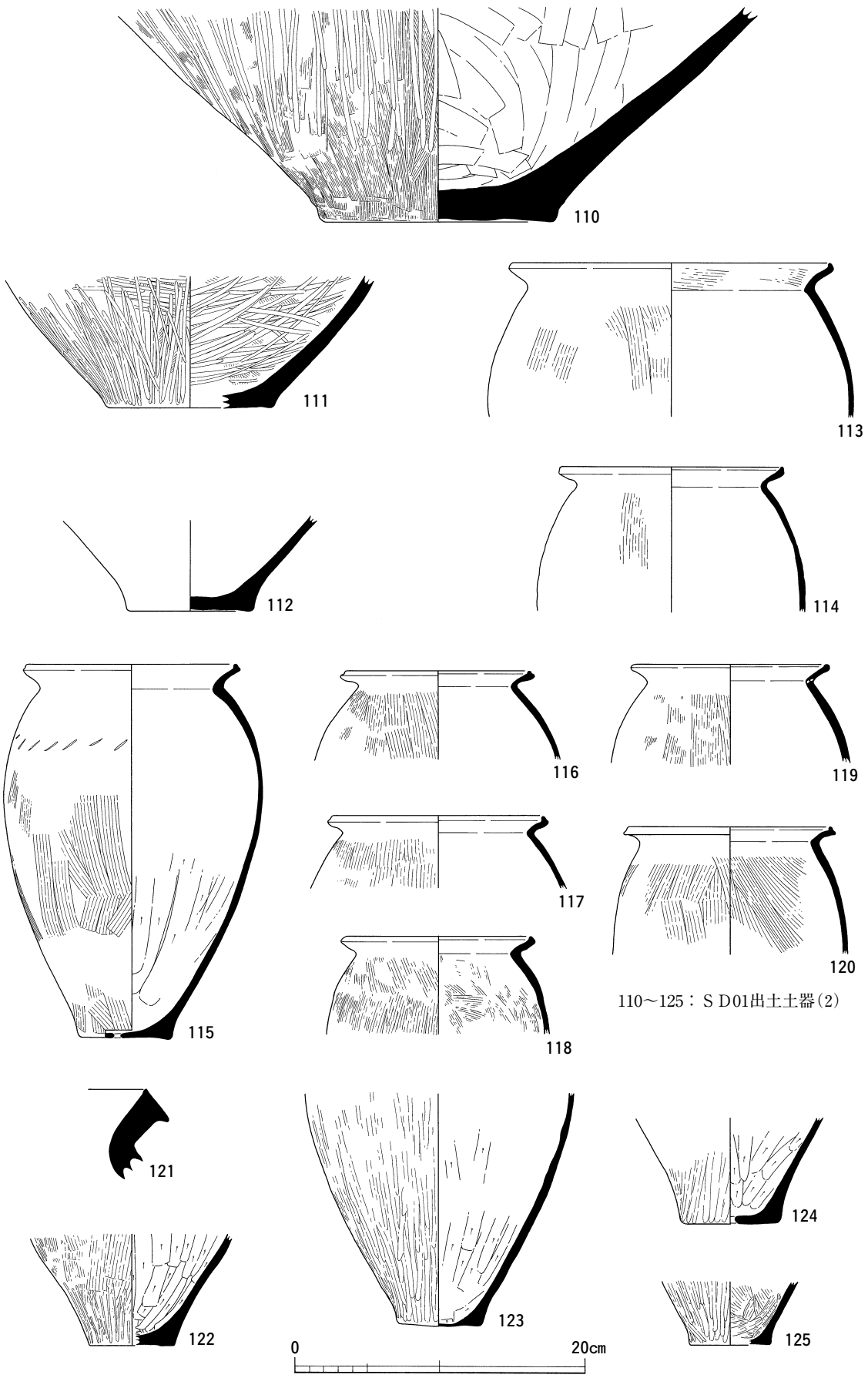
Ｓ5は、海部を欠き、全体の1/2が残存する。残存長は10.3㎝で、幅7.60㎝、厚さ2.0㎝、重量209.8ｇを測る。側面には刻印が認められるが、判読できない。



96：Ｐ01出土土器
97・98：Ｐ04出土土器
99：Ｐ14出土土器
100：ＳＫ01出土土器

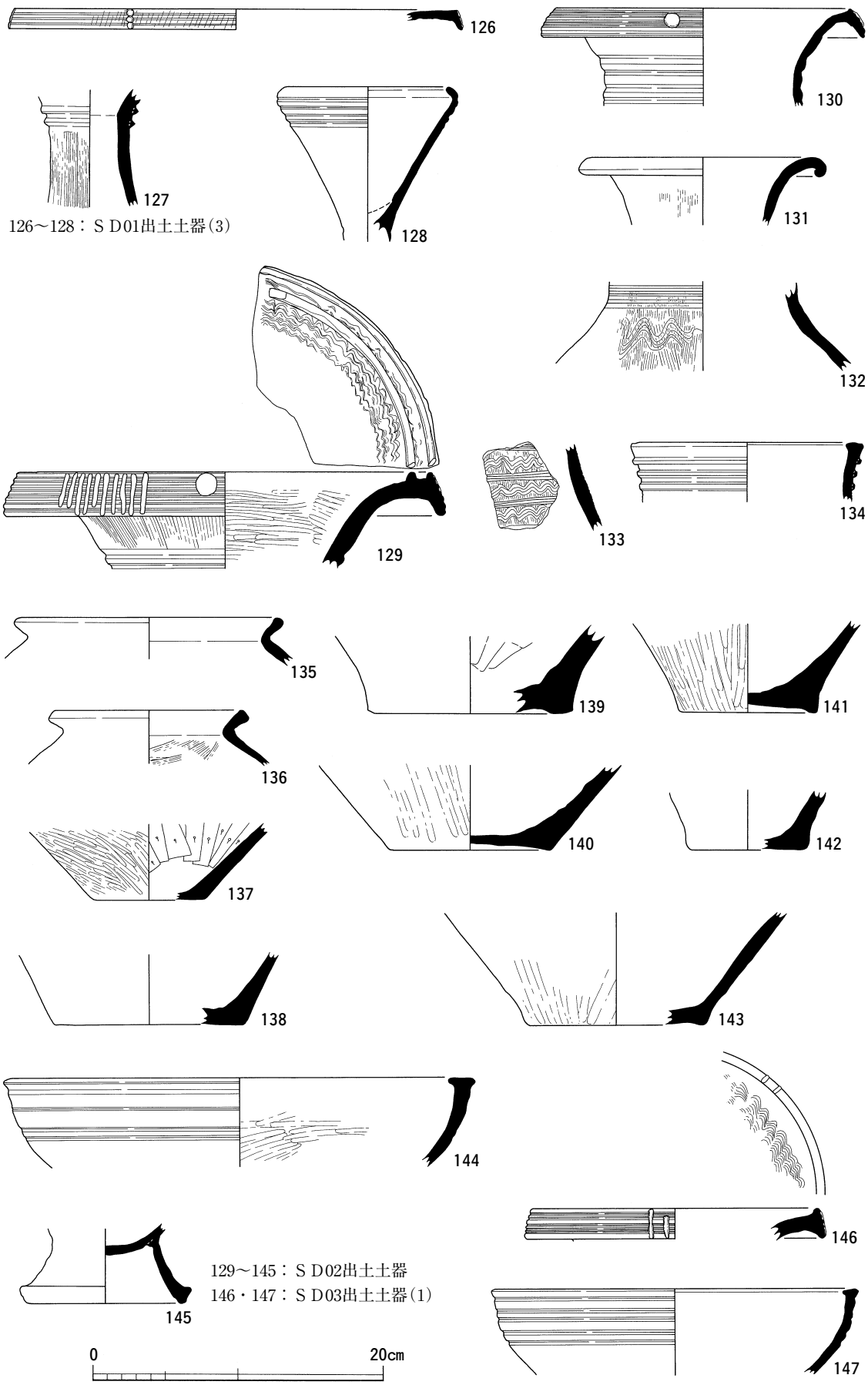
101～109：ＳＤ01出土土器(1)

第32図　第2次調査出土土器(1)

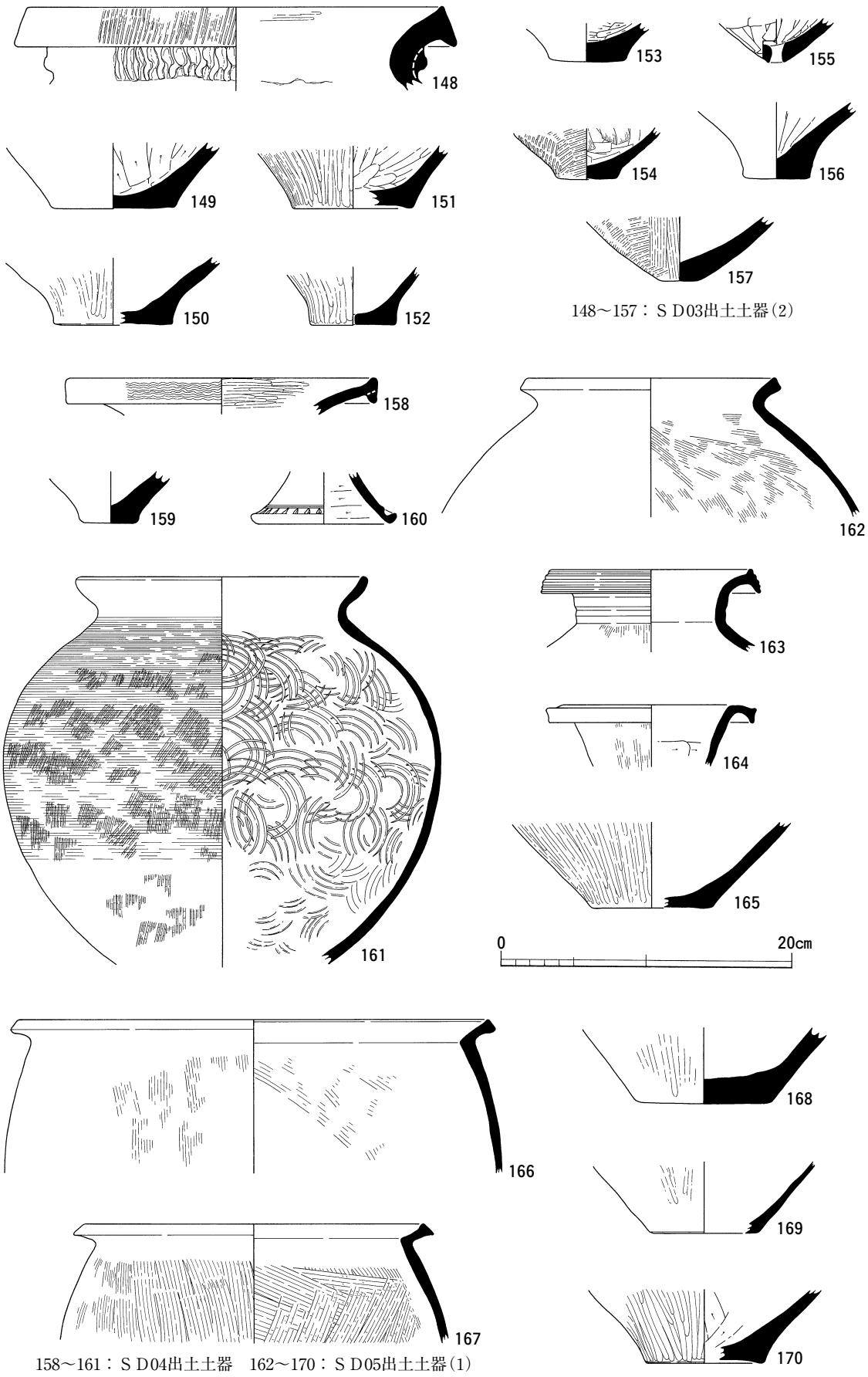


110～125：ＳＤ01出土土器(2)

第33図　第2次調査出土土器(2)



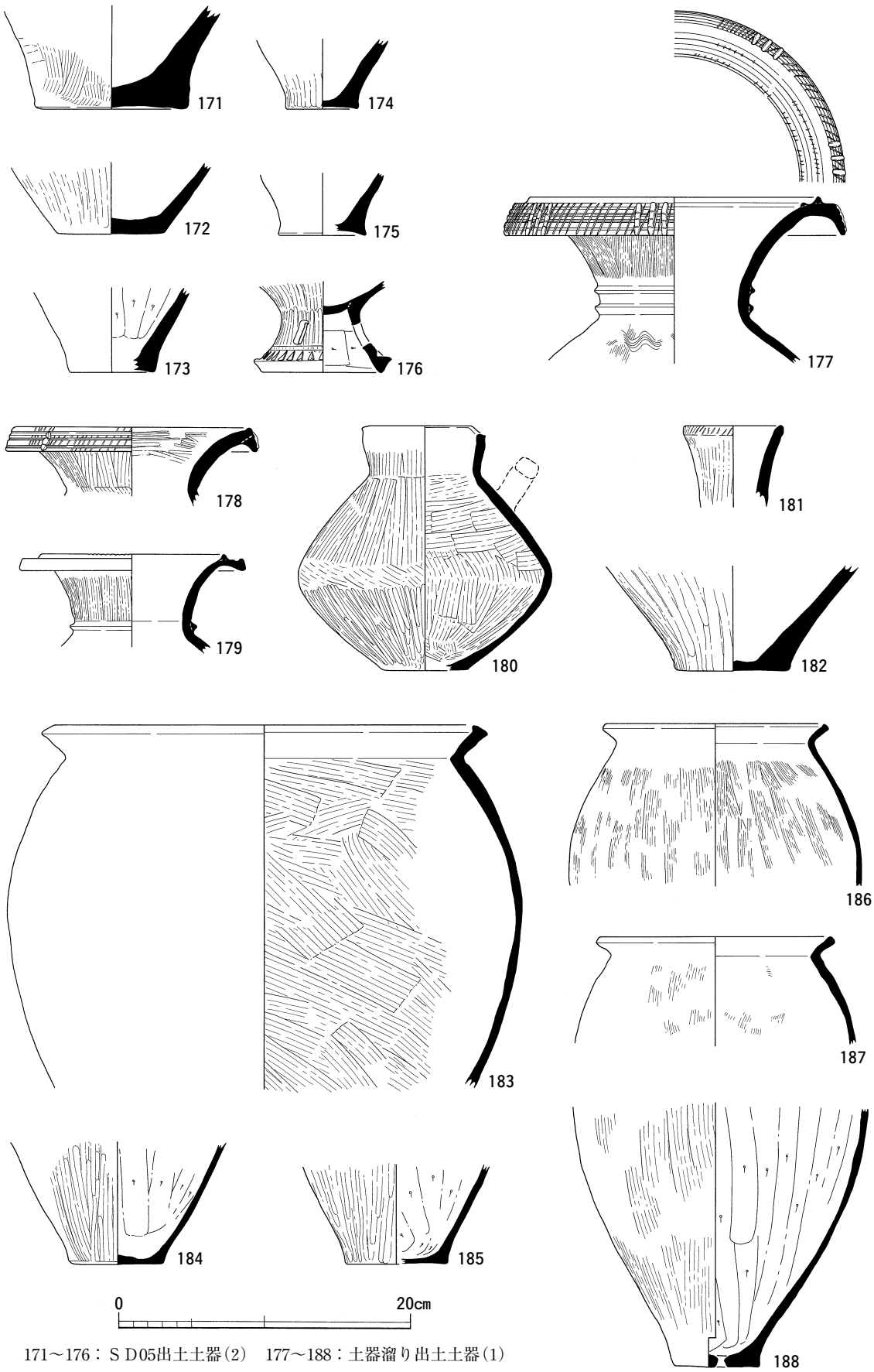
第34図　第2次調査出土土器(3)



148～157：ＳＤ03出土土器(2)

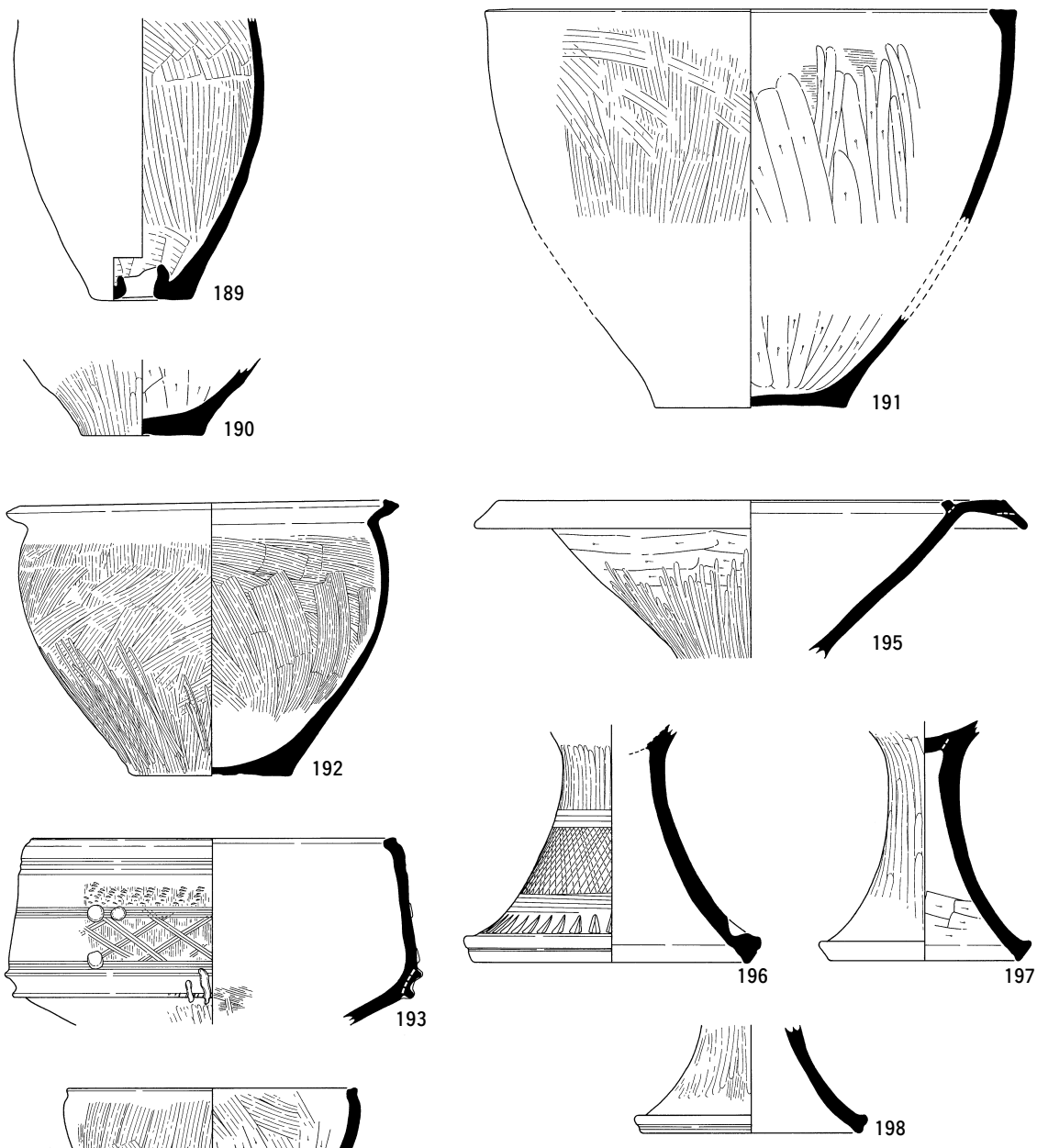
158～161：ＳＤ04出土土器　162～170：ＳＤ05出土土器(1)

第35図　第2次調査出土土器(4)

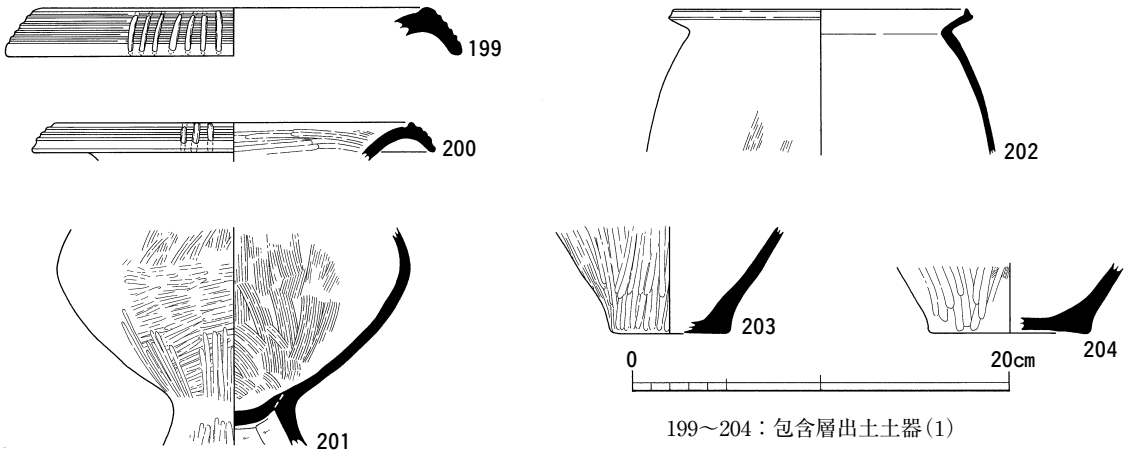


171～176：ＳＤ05出土土器(2)　177～188：土器溜り出土土器(1)

第36図　第2次調査出土土器(5)

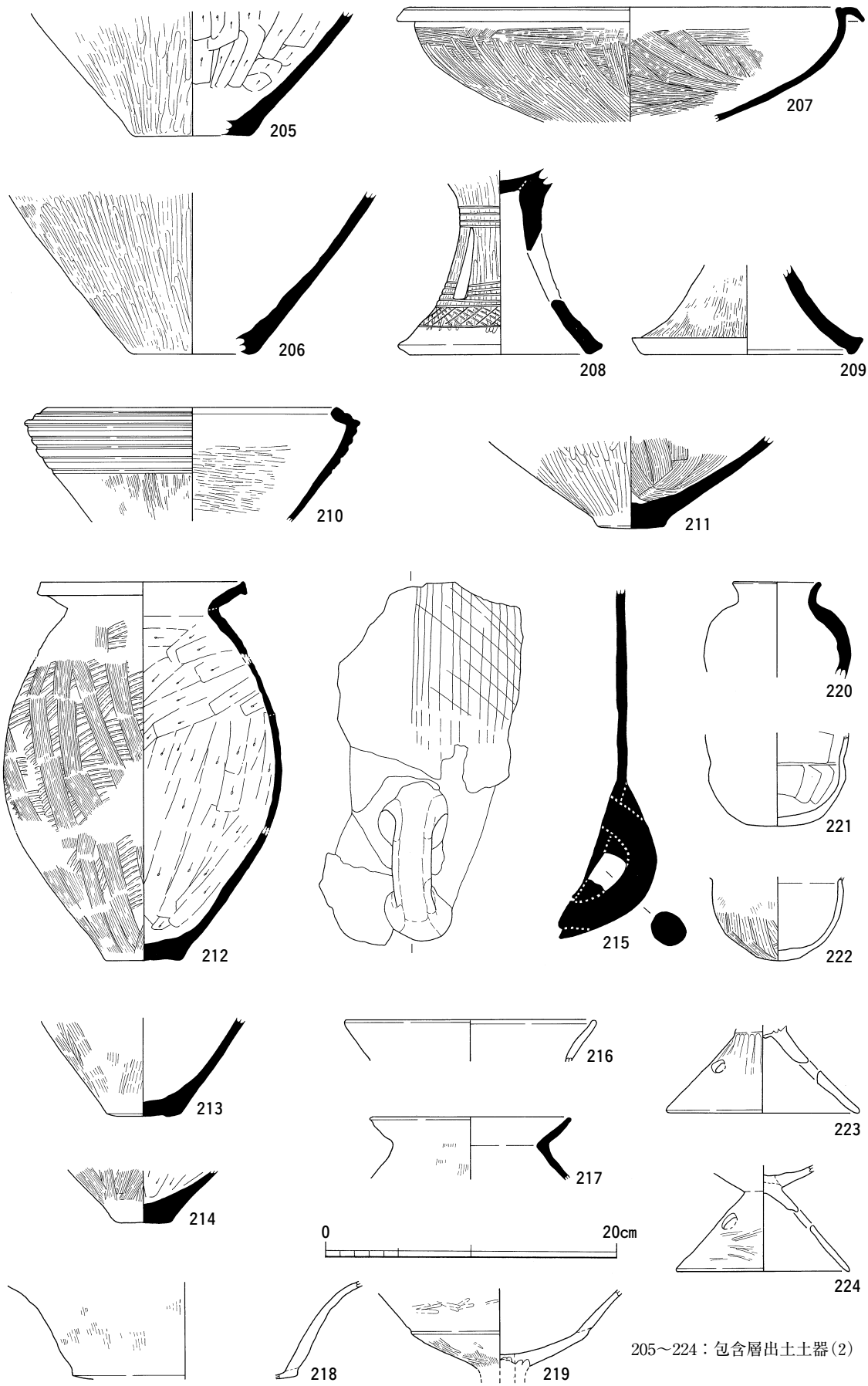


189～198：土器溜り出土土器(2)



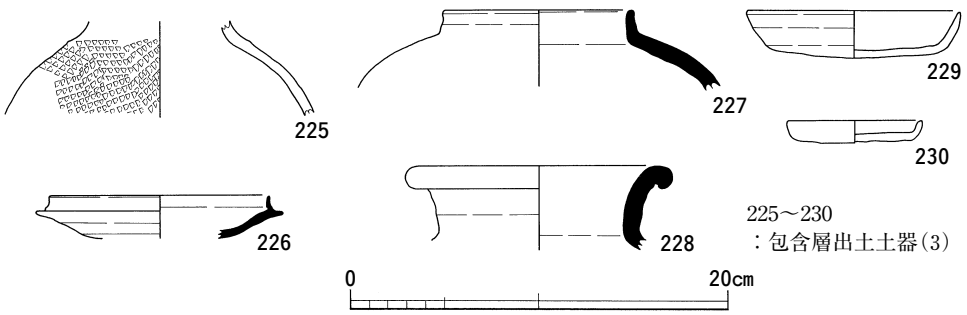
199～204：包含層出土土器(1)

第37図　第2次調査出土土器(6)



205～224：包含層出土土器(2)

第38図　第2次調査出土土器(7)



第39図　第2次調査出土土器(8)

4．第3次調査

(1) 基本層序と遺構の検出

調査地は、後世の撹乱を多く受け、またコンクリートの基礎が多く埋められており、基本的な土層を良好に観察することはできなかった。周囲の地表面から遺構検出面までの深さは約1mであるが、大半は盛土層であった。

遺構は、1面で検出している（第40図）。

(2) 調査の成果

1．概要

土坑・溝・井戸を検出している。これらの遺構は、調査区東半部に集中し、西半部については、後世の撹乱等が激しく、遺構は全く検出されていない。

2．土坑

ＳＫ01

検出状況　調査区東部で検出した（第40図）。ＳＫ02の東側、ＳＥ01の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形はほぼ円形を呈する。その規模は、90cm×92cmで、横断面は逆台形をなす。最深部における検出面からの深さは16cmである。

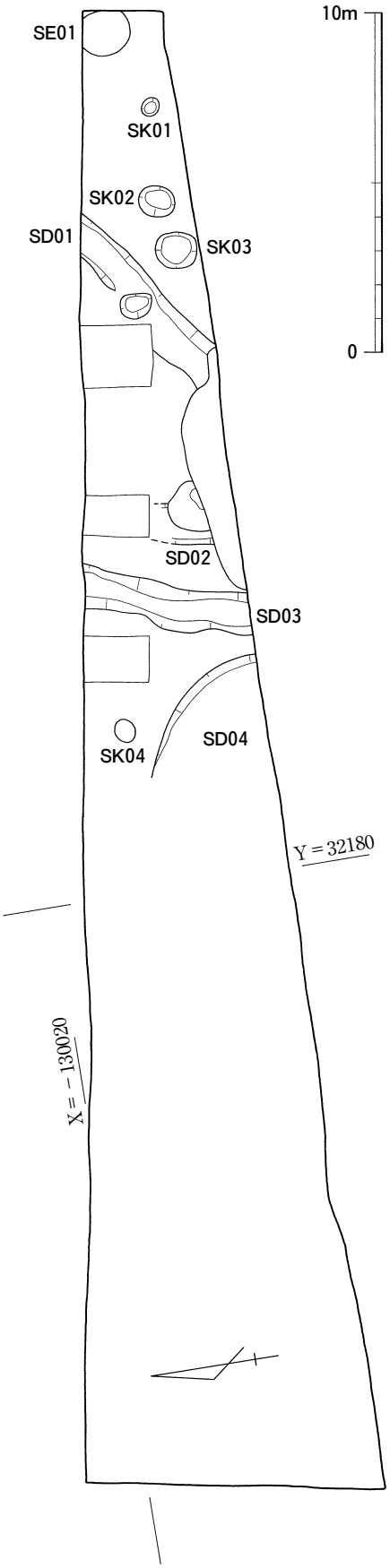
埋没状況　暗褐色極細砂～細砂1層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時期　出土土器から時期を判断することは困難であるが、埋土が他の土坑と類似することから、弥生時代中期を中心とした時期が考えられる。

ＳＫ02

検出状況　調査区東部で検出した（第40図）。ＳＫ03の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。



第40図　第3次調査平面図

形状・規模　平面形は楕円形を呈する。その規模は、主軸方向で90㎝、その直交方向で80㎝を測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは13㎝である。

埋没状況　黒褐色極細砂～細砂1層からなる。

出土遺物　弥生時代中期の壺と甕が出土している。壺は、口縁部片・体部片・底部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。甕は底部片（231）が出土している（第44図）。内面は、指オサエとナデ調整により仕上げられているが、外面は磨滅が著しく観察できない。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。

ＳＫ03

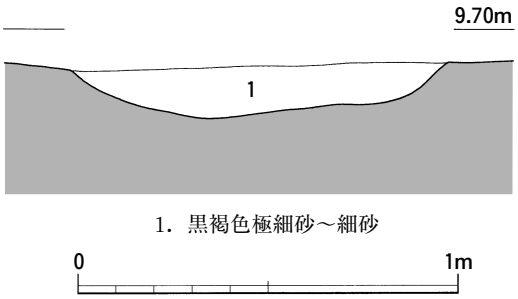
検出状況　調査区東部で検出した（第40図）。ＳＫ02の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形はほぼ円形を呈する。その規模は、85㎝×70㎝を測り、横断面は緩やかなＵ字形をなす。最深部における検出面からの深さは24㎝である。

埋没状況　黒褐色極細砂～細砂1層からなる（第41図）。

出土遺物　弥生時代中期の壺と甕が出土している。いずれも体部片で、小片のため図化は出来なかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。



第41図　第3次調査ＳＫ03断面

ＳＫ04

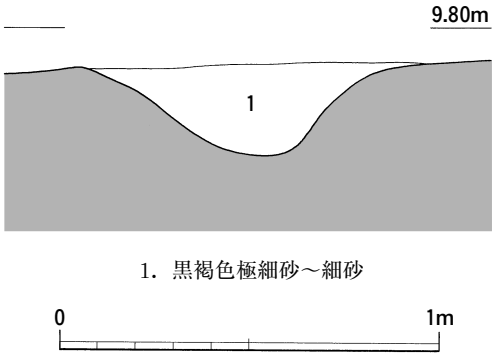
検出状況　調査区中央部で検出した（第40図）。ＳＤ03の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形はほぼ円形を呈する。その規模は、63㎝×53㎝を測り、横断面は逆台形をなす。最深部における検出面からの深さは20㎝である。

埋没状況　黒褐色極細砂～細砂1層からなる（第42図）。

出土遺物　弥生時代中期の壺と甕が出土している。いずれも体部片で、小片のため図化は出来なかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。



第42図　第3次調査ＳＫ04断面

3．溝

ＳＤ01

検出状況　調査区東部中央で検出した（第40図）。ＳＫ03の西側に位置する。時期を特定できない土坑に切られており、両端とも調査区外にのびている。

形状・規模　北東－南西方向に直線的にのびる溝で、検出した長さは5.30ｍである。横断面は逆台形をなし、検出面における幅1.10ｍ～1.30ｍを測り、最深部における検出面からの深さは28㎝である。

埋没状況　黒褐色極細砂～細砂1層からなる。

出土遺物　弥生土器と古墳時代の土器が出土している（第44図）。

弥生土器　弥生時代中期と後期の土器が出土している。

中期　壺・甕・鉢・高坏が出土している。

壺　無頸壺・底部片・体部片が出土している。無頸壺は233の1個体で、口縁部を中心に残存する。口縁部外面には上から扇状文・凹線文（3条）が施されている。凹線文上には径5㎜の穿孔が1穴認められる。底部片は237の1個体で、広口壺の底部と考えられる。内外面とも磨滅が著しく、調整は観察できない。

体部片の外面は、凹線文が施されている。

甕　底部片が2点（234･235）出土している。いずれも外面は縦方向のヘラミガキにより仕上げられている。内面は、234がヘラミガキ、235がヘラ削りにより仕上げられている。

鉢　232の1個体が出土している。口縁部は残存しないが、直口鉢に分類されるものと考えられる。外面はハケ調整、内面は指オサエの後ナデ調整により仕上げられている。

高坏　脚部（236）と坏部が出土している。坏部は、水平口縁形タイプの口縁部片と椀形タイプが出土している。後者は、口縁部が斜下方に折り返されて、外面に円形浮文が貼り付けられている。

脚部は、236と端部片が出土している。236は、外面をハケ調整、内面をヘラナデ調整により仕上げられ、最後に端部が横ナデ調整により仕上げられている。

後期　甕・高坏が出土している。

甕　238～242の5個体が出土している。いずれもＶ様式系甕に分類されるものである。体部は、外面が叩き整形により仕上げられている。内面は、239と240がヘラ削りにより仕上げられている。238の内面はハケ調整により仕上げられている。238～240の口縁端部はわずかにつまみあげるようなナデ調整が施されている。

高坏　坏部片（243）と脚部片（244）が出土している。243は、坏部が屈曲するタイプで、内外面ともハケ調整により仕上げられている。また、坏底部外面は縦方向のヘラ削りにより仕上げられている。庄内併行期に位置付けられるものと考えられる。244は、椀形高坏の脚部と考えられ、内外面ともハケ調整により仕上げられている。

鉢　245の1個体が出土している。底部中央には径4.5㎜の穿孔が施されている。外面は叩き成形、内面はナデ調整により仕上げられている。一部で、甑に分類されているものである。

古墳時代　須恵器の高杯と杯身が出土している。

高杯　246・247・249の3個体が出土している。246と247は同タイプに分類できるもので、ＭＴ

15型式に位置付けられるものである。脚部の透かしは特徴を異にし、246は三角形の透かしが3箇所に、247は長方形の透かしが4箇所に穿たれている。

249は、円形の透かしが穿たれた脚部片で、246･247より新しく位置付けられる。透かしの規模は径1.1cmを測り、2方に穿たれたものと推定される。

杯身　248の1個体が出土している。時期的に249に対応するもので、底部外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期には掘削され、7世紀初頭には埋没したものと考えられる。

ＳＤ02

検出状況　調査区中央部で検出した(第40図)。ＳＤ03の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、両端とも後世の撹乱を受けている。

形状・規模　南北方向に直線的にのびる溝で、検出した長さは1.20ｍである。横断面は逆台形をなし、検出面における幅1.20ｍを測り、最深部における検出面からの深さは13cmである。

埋没状況　暗褐色極細砂1層からなる。

出土遺物　弥生時代中期の壺・甕・高坏と石器が出土している（第44図・45図)。

壺　広口壺の口縁部片・頸部片・底部片、短頸壺・長頸壺が出土している。

広口壺の口縁部片は、252と257の2個体が出土している。252の口縁端部は、横ナデ調整により外方に巻き込むように仕上げられ、玉縁状を呈する。外面はハケ調整、内面は横方向のヘラミガキにより仕上げられている。257は、大型の広口壺の口縁部片である。外面をハケ調整後、内外面が横ナデ調整により仕上げられている。

頸部片は251と258の2点が出土している。251は肩部付近の小片で、外面はハケ調整後、8本一単位の櫛描波状文が2単位施されている。内面は指オサエにより仕上げられている。258は、内外面ともハケ調整後、頸部に指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。

体部片は、255の1点が出土している。外面は、ハケ調整後、上から櫛描直線文・櫛描波状文･櫛描直線文･列点文の順に施文されている。列点文は、ヘラ先によるものである。内面は、ヘラ削り後ナデ調整により仕上げられている。

他に、底部片は253と256の2点が出土している。内外面ともヘラミガキ（256）もしくはヘラナデ調整（253）により仕上げられている。

短頸壺は、250の1個体で、口縁部から肩部にかけて残存する。肩部外面には、上から8本を一単位とする櫛描文が、櫛描直線文・櫛描波状文・櫛描直線文・櫛描波状文の順に施されている。内面はハケ調整、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。

長頸壺は、頸部片が出土しており、外面に断面三角形の突帯が4条貼り付けられている。

甕　中期初頭と中期後半の甕が出土している。

中期初頭の甕は、如意形を呈する口縁部片･底部片が出土している。口縁部片は、254の1個体で、外面には、上から櫛描直線文・櫛描波状文・櫛描直線文が施されている。胎土・形態の特徴から、Ⅱ様式に位置付けられるものである。

中期後半の甕は、4個体（259～262）出土している。いずれも同タイプの甕である。259

の底部中央部には、径1.2cmの穿孔が認められる。底部片は、外面がヘラミガキによる以外は、磨滅のため調整を観察することはできない。

高坏　脚部と坏部が出土している。坏部は、水平口縁タイプと鉢型の口縁部片が出土している。前者の口縁部外面には2条の凹線が施されている。後者は、口縁部が斜下方に折り返されている。いずれも小片のため図化できなかった。

脚部は263～265の3個体が出土している。いずれも脚端部を中心に残存し、脚端面は横ナデ調整により仕上げられている。263の外面は、上から2条のヘラ描沈線・キザミ目が施されている。キザミ目は、三角刺突文に近いもので、工具により三角形状に刻まれている。264と265は、外面にヘラ描沈線が施されている。264は5条、265は3条施されている。また、内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられている。

石器　石皿が1点（Ｓ9）出土している（第43図）。砂岩の川原石を利用したもので、完存する。長さ19.7cm、幅14.95cm、厚さ4.3cm、重さ227ｇを測る。1面のみ利用されている。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期前半～中葉と考えられる。

ＳＤ03

検出状況　調査区中央部で検出した（第40図）。ＳＤ02の西側、ＳＤ04の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、両端とも調査区外へのびている。

形状・規模　南北方向に直線的にのびる溝で、検出した長さは4.80ｍである。横断面は逆台形をなし、検出面における幅1.10ｍを測り、最深部における検出面からの深さは25cmである。

埋没状況　黒色細砂1層からなる。

出土遺物　弥生時代中期の壺・甕・高坏が出土している（第45図～第50図）。

壺　広口壺・受口壺・短頸壺・直口壺・水差壺・細頸壺・底部が出土している。

広口壺　266～289の24個体が出土している。口縁部の形態・装飾により、①口縁端部をわずかに拡張させ、装飾性の弱いタイプ、②口縁部を下方に屈曲させ、端部を上方にわずかに拡張させるタイプ、③口縁端部を上下方向に拡張させ、口縁部に対して直交する端面を有するタイプ、④口縁端部を上方にわずかに拡張させるタイプ、⑤口縁端部を下方にわずかに拡張させるタイプ、⑥口縁端部を下方に大きく拡張させるタイプ、⑦口縁部を大きく外方に折り返すタイプ、⑧口縁部内面に1条もしくは2条の突帯が貼り付けられ、口縁内端部も突帯状をなすタイプ、⑨口縁部内面に1条もしくは2条の突帯が貼り付けられるが、口縁部内端部は突帯状をなさないタイプ、に分類できる。

①は、端面に装飾を施さないもの（266）とキザミ目を施すもの（267～269）に細分できる。267と268は端面にキザミ目が施されているが、269は上端部に施されている。また、267の頸部には指頭圧痕文突帯が施されている。いずれも外面は縦方向のハケ調整により仕上げられている。

②は、270の1個体で、外端面にはヘラ描の斜格子文を施し、その上に円形浮文が貼り付けられている。頸部内面は横方向、外面は縦方向のハケ調整により仕上げられている。

③は、271と273の2個体が出土している。装飾性は弱く、273の外端面に5条の凹線文が施されているのみで、271の口縁端部は無紋である。ただし、271の頸部には指頭圧痕文突帯

が貼付けられている。

④は、272の1個体である。外端面に2条の凹線→キザミ目の順に施され、その上に3個をセットとする径8㎜の円形浮文が貼り付けられている。円形浮文は、6セットあったものと復元される。さらに、口縁部内端にも3個をセットとする円形浮文が貼り付けられている。その位置は外端面の位置とほぼ対応するものである。頸部内面は横方向のヘラミガキにより仕上げられている。

⑤は、274の1個体である。外端面には凹線文→キザミ目→円形浮文の貼り付け、の順に施文がなされている。円形浮文は、径7～9㎜で、3個をセットとする。頸部は内外面ともハケ調整により仕上げられている。

⑥は、275と277の2個体である。⑤同様、外端面には凹線文→キザミ目→円形浮文の貼り付け、の順に施文がなされている。さらに、275の肩部外面には櫛描波状文がわずかに残存する。頸部内面は横方向のヘラミガキが施されている。

⑦は276の1個体である。口縁部頂部には3個をセットとした径7㎜の円形浮文が貼り付けられている。また、内端面にはキザミ目が施されている。

⑧は、278～281の4個体である。278と281は1条の、279と280は2条の突帯を有し、前者は口縁端部を突帯状に拡張させている。281を除いては突帯頂部にキザミ目が施されている。さらに、279の突帯間には径2.5㎜の紐穴が2個をセットとし、6セットあったものと復元される。この他、278の口縁部外端面にはキザミ目→円形浮文の貼り付け、279と280の外端面には凹線→キザミ目→棒状浮文の貼り付け、281の外端面には凹線文→棒状浮文の貼り付け、の装飾が認められる。279の棒状浮文は3本をセットとし、6セットと復元される。280の棒状浮文は、外端面から内面におよぶもので、2本をセットとし3セット残存する。

⑨は、284～287の4個体である。284と285は2条の、286と287は1条の突帯が貼り付けられている。285を除いては、突帯頂部にキザミ目が施されている。この他、284の口縁部には3本をセットとする棒状浮文と円形浮文が交互に貼り付けられている。円形浮文3個が縦列をなし、2列で1セットをなしている。また、突帯間には径2㎜の紐穴が穿たれているが、規則性は認められない。285は凹線文→キザミ目→円形浮文、286は凹線文→キザミ目→棒状浮文、の装飾が施されている。

287は、口縁部の形態が他と異なり、端部が下方に折り返されている。突帯頂部にはキザミ目が施され、端部にもキザミ目が施されている。頸部には断面三角形の突帯が3条貼り付けられている。

この他、広口壺の頸部片と体部片が出土している。頸部片（282）の外面には、指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。

体部片は283・288・289・302の4個体を図化した。283上から櫛描直線文・櫛描波状文・櫛描直線文・櫛描波状文・櫛描直線文・櫛描斜格子文・円形浮文・キザミ目が施されている。この他、288は、貝殻列点文が2段にわたって施されている。289は、体部上半と中位に竹管文帯が認められ、その間と下側にキザミ目が施されている。内外面ともハケ調整を基本とし、部分的にヘラミガキが加えられている。302は、上から、櫛描直線文・櫛描波状文・櫛描波状文の順に施文されている。

受口壺　290～293・297の5個体が出土している。口縁部に対して直交し、水平な端面を有し、頸部まで残存しない293を除いては頸部に指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。また、290と292の口縁部外面には、凹線文が施されている。この他、291の外面には櫛描による斜格子文が施され、その上下にキザミ目が加えられている。

297は、他と異なり小型で、内外面ともハケ調整により仕上げられている。

短頸壺　294と299の2個体が出土している。内面はハケ調整、外面は指オサエとナデ調整により仕上げられている。299は、口縁部に2条の断面三角形の突帯が貼り付けられ、突帯頂部にはキザミ目が施されている。また、突帯間および突帯の下側には櫛描直線文が施されている。

直口壺　295・296・298の3個体が出土している。口縁部に装飾が加えられるタイプと加えられないタイプが認められる。前者は、295・296・298の3個体で、外面に断面三角形の突帯が貼り付けられ、突帯頂部にはキザミ目が施されている。さらに、295の内面には鋸歯文が、298の口縁端部には斜格子状のキザミ目が施されている。

水差壺　300の1個体が出土している。口縁部の1個所が抉れ、内外面ともハケ調整により仕上げられている。

細頸壺　303の1個体が出土している。頸部の基部を中心に残存する。断面三角形の突帯が2条貼り付けられ、外面はハケ調整、内面は縦方向の指ナデ調整により仕上げられている。

底　部　305～308の4個体が出土している。多くは広口壺の底部と考えられる。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整（305）もしくはハケ調整（306～308）により、仕上げられている。

甕　如意形を呈する口縁部片と底部が出土している。口縁部は、大型（309～312）と小型（313･314）の2タイプが認められる。調整を観察できる個体は、内外面ともハケ調整により仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。また、312の体部中位には1帯のキザミ目が施されている。

底部片も、口縁部片同様、大型（315～317）と小型（318～322）に分類できる。大型の底部片は、外面はヘラミガキ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。いずれも縦方向に施されている。また、315の外面は、ハケ調整後ヘラミガキが施されている。この他、小型の底部片の320～322の中央部には穿孔が認められる。その規模は、320が1.25㎝、321が9㎜、322が1.2㎝である。321と322は焼成後に穿孔が行われている。

鉢　301・336～338・342の5個体が出土している。301は、台付鉢の体部片と考えられる。体部の小片であるが、突帯が水平方向に1条、それに直交するように3条の突帯が貼り付けられている。また、突帯頂部にはキザミ目が施されている。336と342は、鉢の底部と考えられる。336は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。337は、直口鉢の口縁部として報告するが、細頸壺の口縁部の可能性も考えられる。338も直口鉢の底部片と考えられる。内面は強い指ナデ、外面はハケ調整により仕上げられている。

高坏　坏部と脚部が出土している。

坏　部　坏部は、水平口縁タイプ（326・327・330・331）と椀形タイプの口縁部片（323～325）が出土している。

水平口縁高坏は、326・327・330・331の4個体が出土している。326は、全体的にナデ調

整により仕上げられているが、坏部外面は縦方向のヘラミガキが施されている。327の口縁端部外面には、4条の凹線が施され、その後キザミ目が加えられている。331は、口縁部外面の横ナデ調整を除いて、内面は横方向、外面は縦方向のヘラミガキが施されている。

椀形高坏は、内外面とも横方向のヘラミガキにより仕上げられている。323は装飾性が認められないが、324の口縁部外面には3条の凹線が認められる。また、325の口縁部外面には櫛描波状文が、口縁部上端面には5条の凹線が施されている。さらに凹線文の上には5本をセットとした棒状浮文が貼り付けられている。

脚　部　328・329・332～335の6個体が出土している。装飾性が豊なものと、認められないものの2タイプが認められる。前者は328・329・335の3個体である。328の外面には長方形の透かしの一部が2箇所に残存する。透かしの間には縦方向にヘラ描沈線が施され、ヘラ描沈線を軸に綾杉状にキザミ目が施されている。329は、下半部に2条のヘラ描沈線が施され、その下側にヘラ描による鋸歯文が施されている。335は、7条のヘラ描沈線と三角刺突文が施されている。

後者は、332～334の3個体である。332は内外面ともヘラ削りにより仕上げられ、その後外面にはハケ調整が加えられている。

脚部　339～341の3個体が出土している。339は、大型高坏の脚部と考えられ、2箇所に円形の透かしが認められる。内面はハケ調整により仕上げられている。340も、台付鉢の脚部と考えられ、外面はハケ、内面はナデ調整により仕上げられている。341は台付鉢の台部と考えられる。台部には雨垂状の抉りが7箇所に施されている。貫通はしていない。体部外面には縦方向のヘラミガキが認められる。

時期　出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。

ＳＤ04

検出状況　調査区中央部で検出した（第40図）。ＳＤ03の西側、ＳＫ04の南側に位置する。東側の肩部を検出したのみで、これに対応する肩部は未検出である。溝状遺構というより、落ち込みに近い状況である。南側は調査区外へのびている。

形状・規模　上記の検出状況から、規模等を明確にすることは出来ない。

埋没状況　黒褐色細砂1層からなる。

出土遺物　弥生時代後期の壺と、後期の甕・小型器台が出土している（第50図）。

壺　広口壺の口縁部（343）が出土している。口縁部を大きく外方に巻き返し、その頂部には断面三角形の突帯が1条貼り付けられている。その頂部にはキザミ目が施されている。また、巻き返された口縁部内端部にもキザミ目が施されている。頸部には断面三角形の突帯が2条貼り付けられている。ただし、1条は剥離痕のみである。外面はハケ調整、内面は横ナデ調整により、仕上げられている。

鉢　344の1個体が出土している。台付鉢の体部から台部にかけて残存する。球形の体部に低脚が付くもので、体部内面はハケ調整、脚部内面はナデ調整、外面は横ナデ調整により仕上げられている。

甕　Ｖ様式系甕と庄内式甕（345）が出土している。前者は、叩き目が施された体部片が出土

している。345は、体部内面をヘラ削り、外面を細筋の叩き成形後、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。在地産の甕である。

小形器台　346の1点出土している。脚部のみの残存で、径8㎜の円形透かしが穿たれている。

時期　出土土器から判断して、庄内併行期を中心とした時期と考えられる。

包含層

はじめに　包含層からは、多くの土器が出土している。これらの土器になかには、南畝町遺跡を検討する上で、良好な資料と考えられるものが多く出土している。本項では、これらの土器を中心に報告する。土器としては、弥生土器と古墳時代・中世以降の土器が出土している。また、わずかではあるが、石器が出土している。以下、時代ごと・種別ごとに報告する。

弥生土器　甕・鉢・壺・高坏が出土している（第50図・第51図）。

甕　Ⅱ様式の甕と中期の甕が出土している。前者は、347の1個体である。口縁部は如意形を呈し、横ナデ調整により仕上げられている。口縁端部にはキザミ目が施されている。体部は、内外面ともハケ調整により仕上げられ、外面には上から、櫛描直線文（8条）・櫛描波状文（7条）・櫛描直線文（6条）・櫛描波状文（7条残存）が施されている。

後者は、348と349の2個体が出土している。348の口縁端部は内側に折り返されている。349の外面には、わずかにヘラミガキの痕跡を確認することができる。

鉢　350・355・361・362の4個体が出土している。350は、台付鉢の体部下端がわずかに残存する。3条の断面三角形の突帯が貼り付けられ、突帯頂部にはキザミ目が施されている。3条の突帯の上下には、ヘラ描きによる綾杉状の施文が認められる。355は、直口鉢の上半部が残存する。口縁部外面には、強い横ナデ調整により2条の凹線状をなし、その凹線間にキザミ目が施されている。

361と362は、大型の鉢である。口縁端部に断面方形の突帯が貼り付けられている。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

壺　351～354・356の5個体が出土している。351は、外面に上側に3条のヘラ描沈線、下側に8条のヘラ描沈線が施されている。胎土・施文等の特徴から、弥生時代前期に位置付けられるものである。352は、無頸壺である。口縁部外面に2条の断面蒲鉾形の突帯が貼り付けられ、頂部にキザミ目が施されている。2条の突帯下には、櫛描直線文・櫛描波状文・櫛描直線文が施されている。また、体部中位は横方向のヘラミガキ、体部上半は縦方向のハケ調整により仕上げられている。内面はナデ調整により仕上げられている。353は、受口壺の口縁部である。下半はハケ調整、上半は横ナデ調整により仕上げられている。354は、広口壺の口縁部である。口縁端部は明確な端面を有し、その上下端にキザミ目が施されている。356は、底部を中心とした個体である。

高坏　357～360の4個体が出土している。いずれも脚部片である。357は、接合部付近に2条の断面三角形の突帯が貼り付けられている。外面はハケ調整、内面はヘラ削りにより仕上げられている。358と359は、内面がヘラ削り、外面がヘラミガキにより仕上げられている。360は、外面にヘラ描による鋸歯文とその上側に2条のヘラ描沈線が施されている。内面はヘラ削りにより仕上げられている。

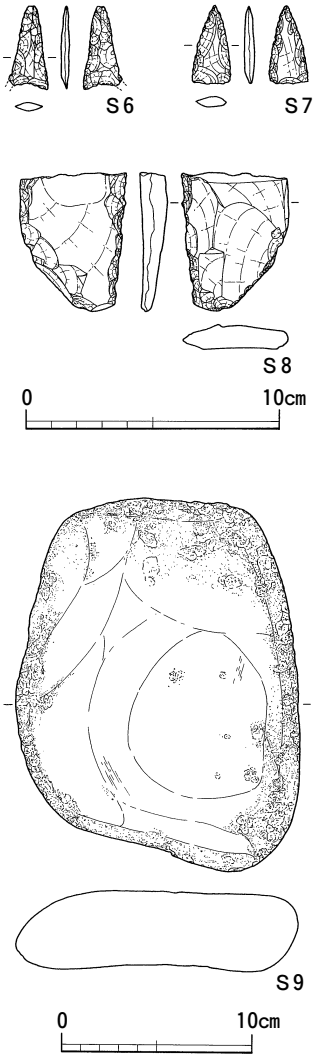
古墳時代　須恵器の高杯が2個体（366・367）・杯（364）・甕（369）出土している。高杯の366は、口縁端部まで残存しないが、杯部外面の2/3以上にヘラ削りが及んでいることからＴＫ47型式を中心とした時期が想定される。367はＴＫ217型式と考えられる。杯の364は、口縁端部の特徴から、ＭＴ47型式と考えられる。369は、体部片であるが、窯着が認められる（写真図版37）。

中世　土師器の羽釜（363）と須恵器の椀（365）が出土している。羽釜は、体部外面が叩き成形、内面がハケ調整により仕上げられ、鍔を貼り付け後、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。須恵器椀は、底部を中心に残存し、平高台をなす。回転糸切りにより切り離されている。

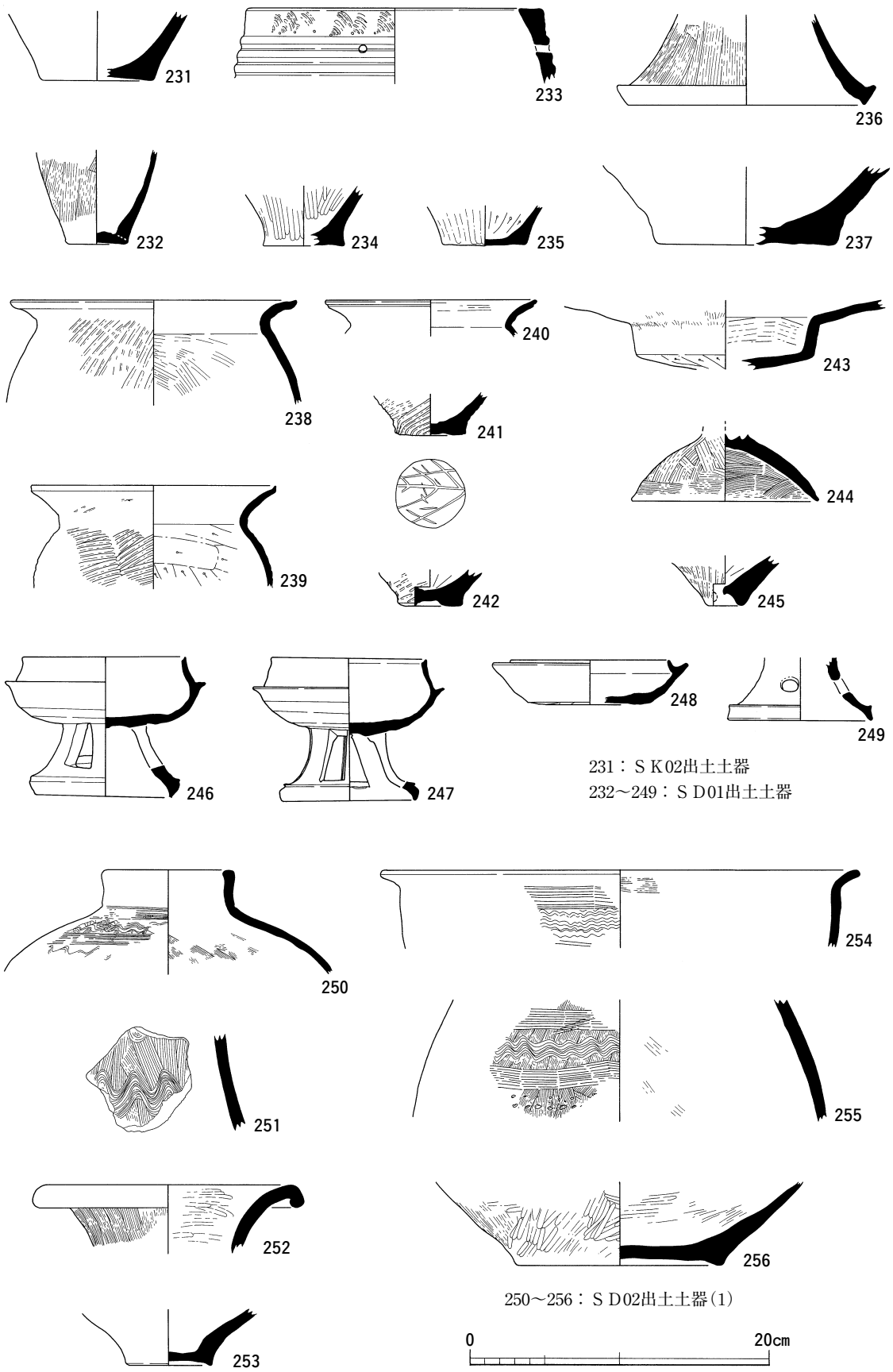
石器　サヌイカイト製の石包丁と石鏃が出土している（第43図）。

石包丁　Ｓ8の打製石包丁1点が出土している。約1/2弱残存する。残存長5.51㎝を測り、幅は4.21㎝、厚さは1.10㎝、重さは26.8ｇである。

石　鏃　2点（Ｓ6・Ｓ7）出土している。2点とも凹基式に分類されるものである。Ｓ6は、基部の一部を欠く以外完存する。全長3.30㎝、幅1.55㎝、厚さ3.5㎜を測り、重さは1.5ｇである。Ｓ7は完存し、長さ3.10㎝、幅1.50㎝、厚さ4㎜、重さ1.6ｇを測る。



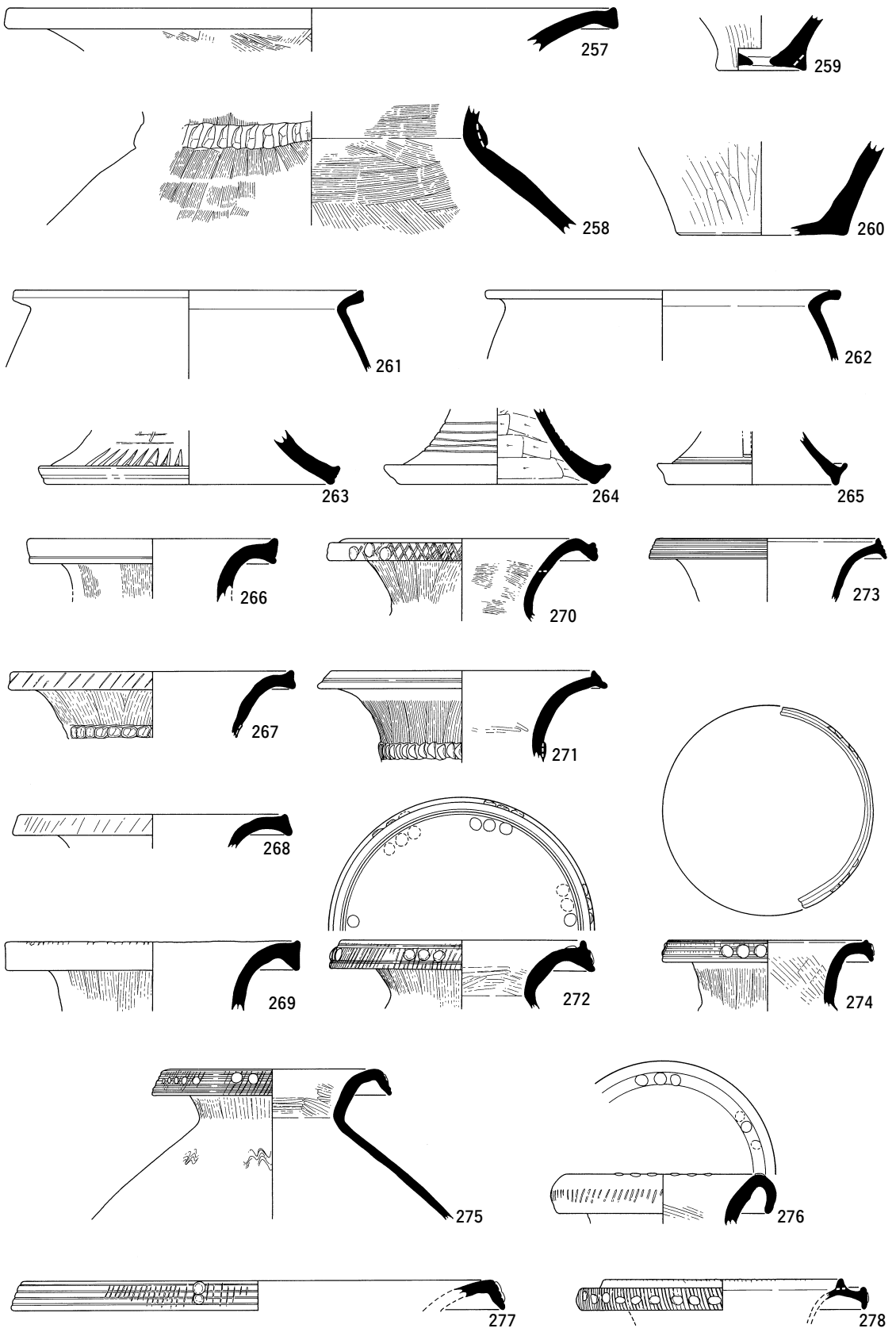
第43図　第3次調査出土石器



231：ＳＫ02出土土器
232～249：ＳＤ01出土土器

250～256：ＳＤ02出土土器(1)

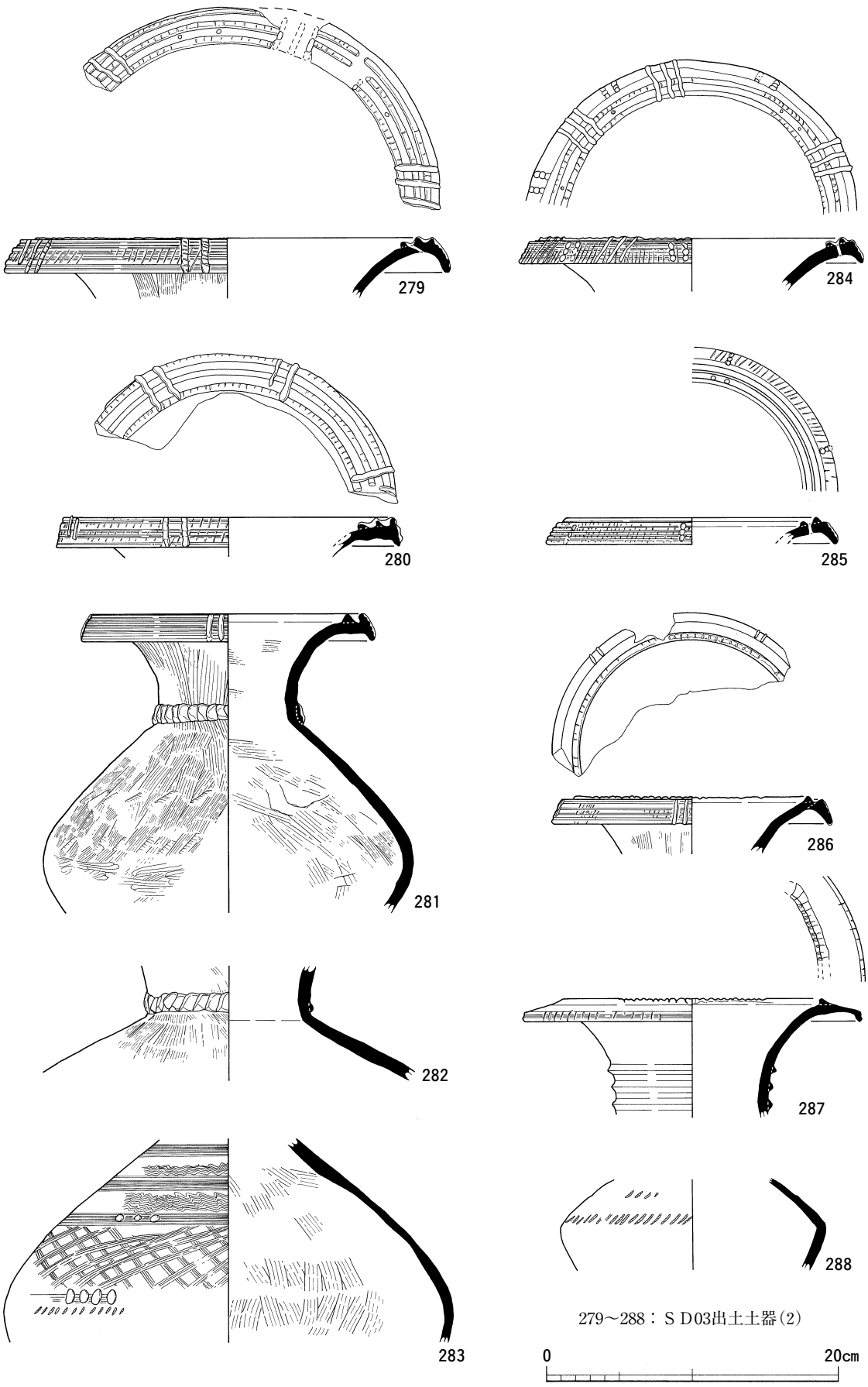
第44図　第3次調査出土土器(1)



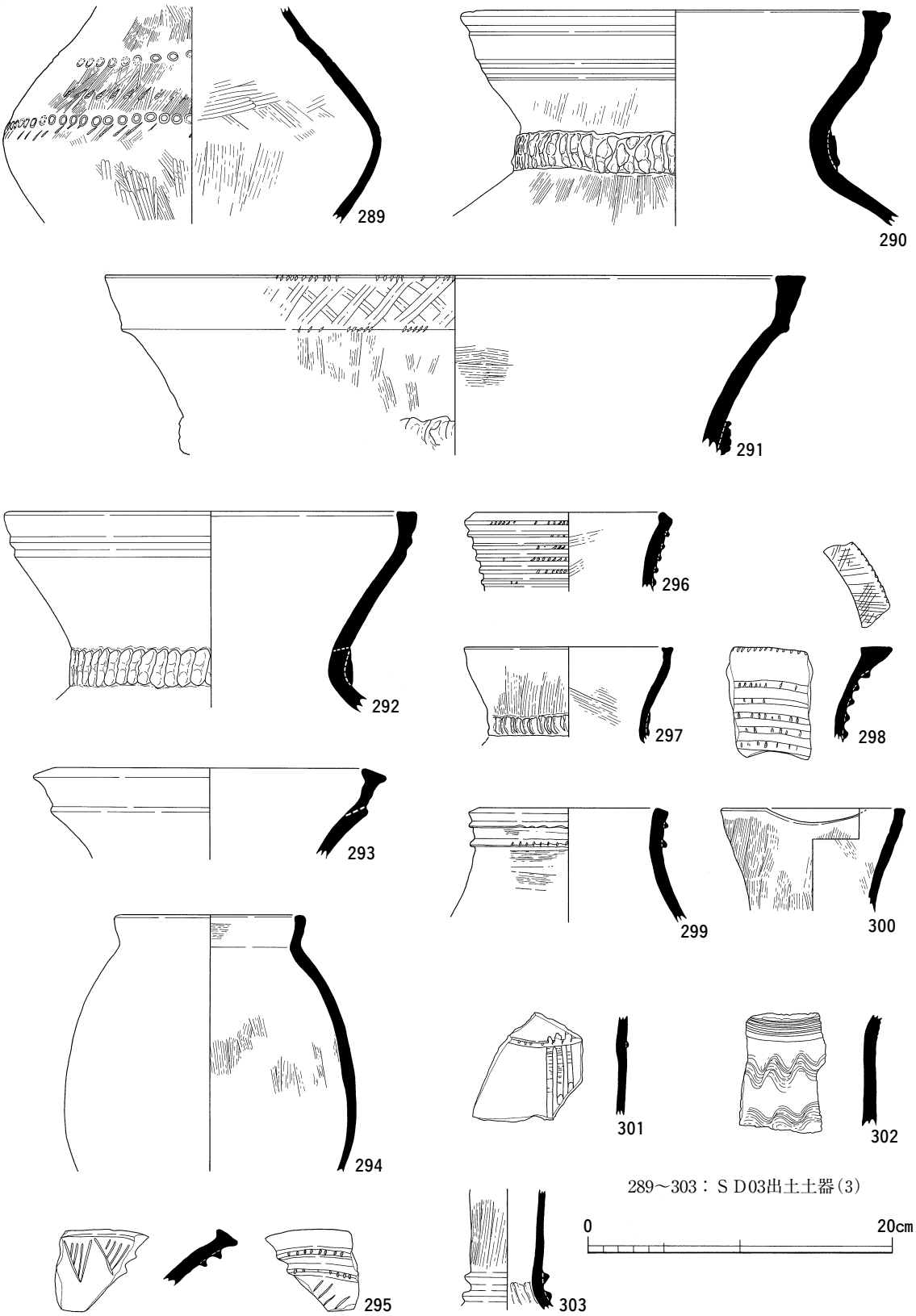
257～265：ＳＤ02出土土器(2)　266～278：ＳＤ03出土土器(1)

0　20cm

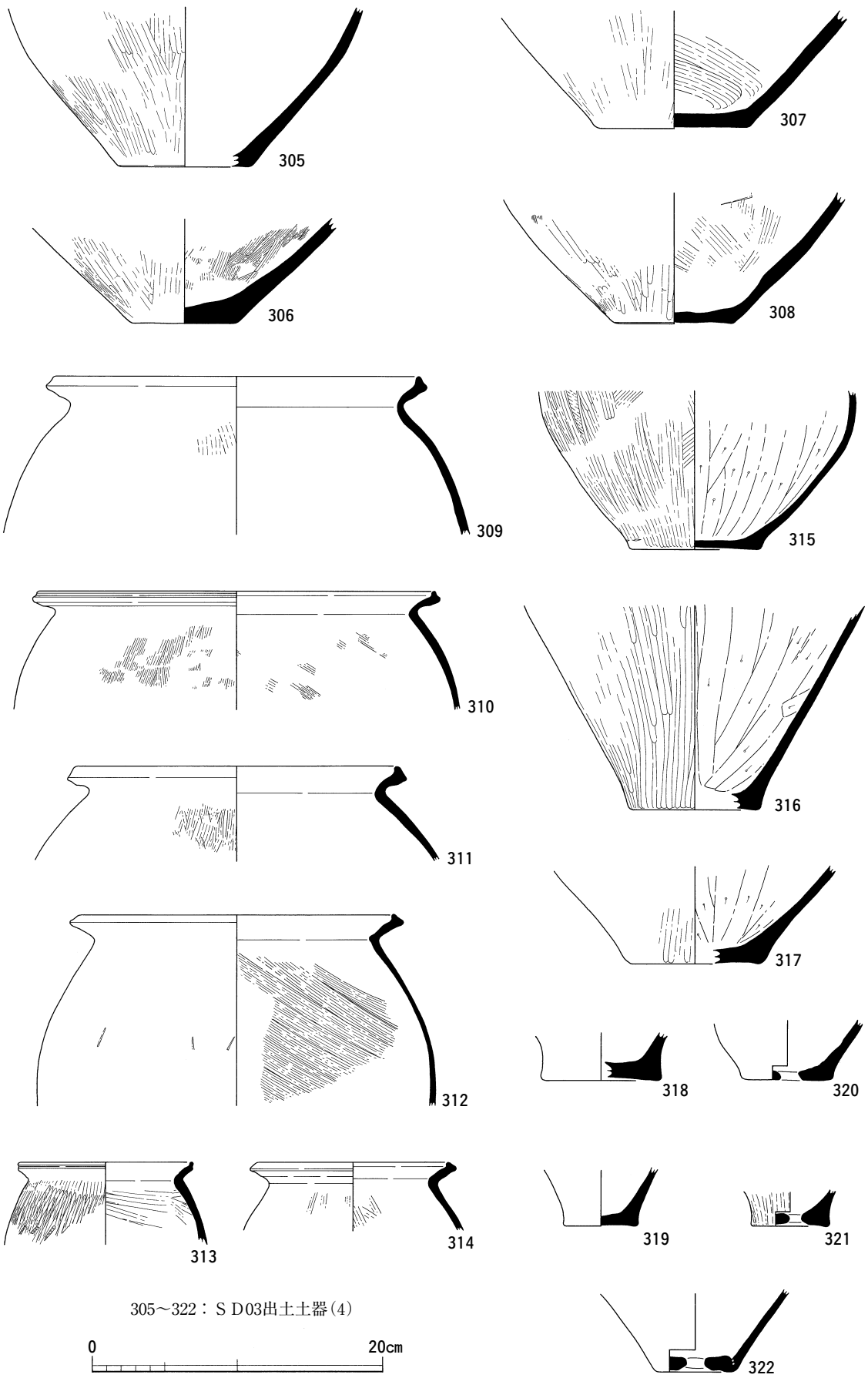
第45図　第3次調査出土土器(2)



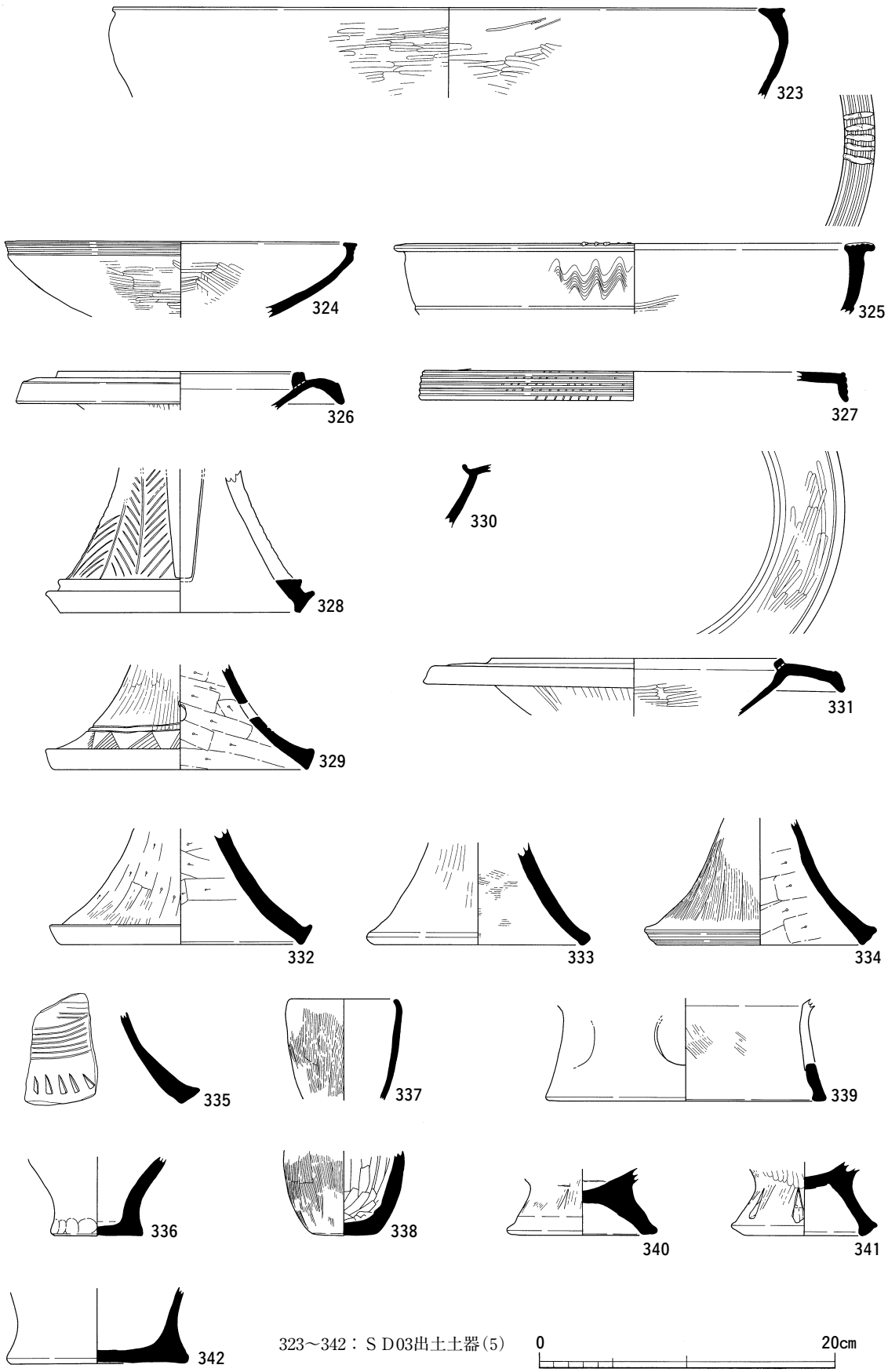
第46図　第3次調査出土土器(3)



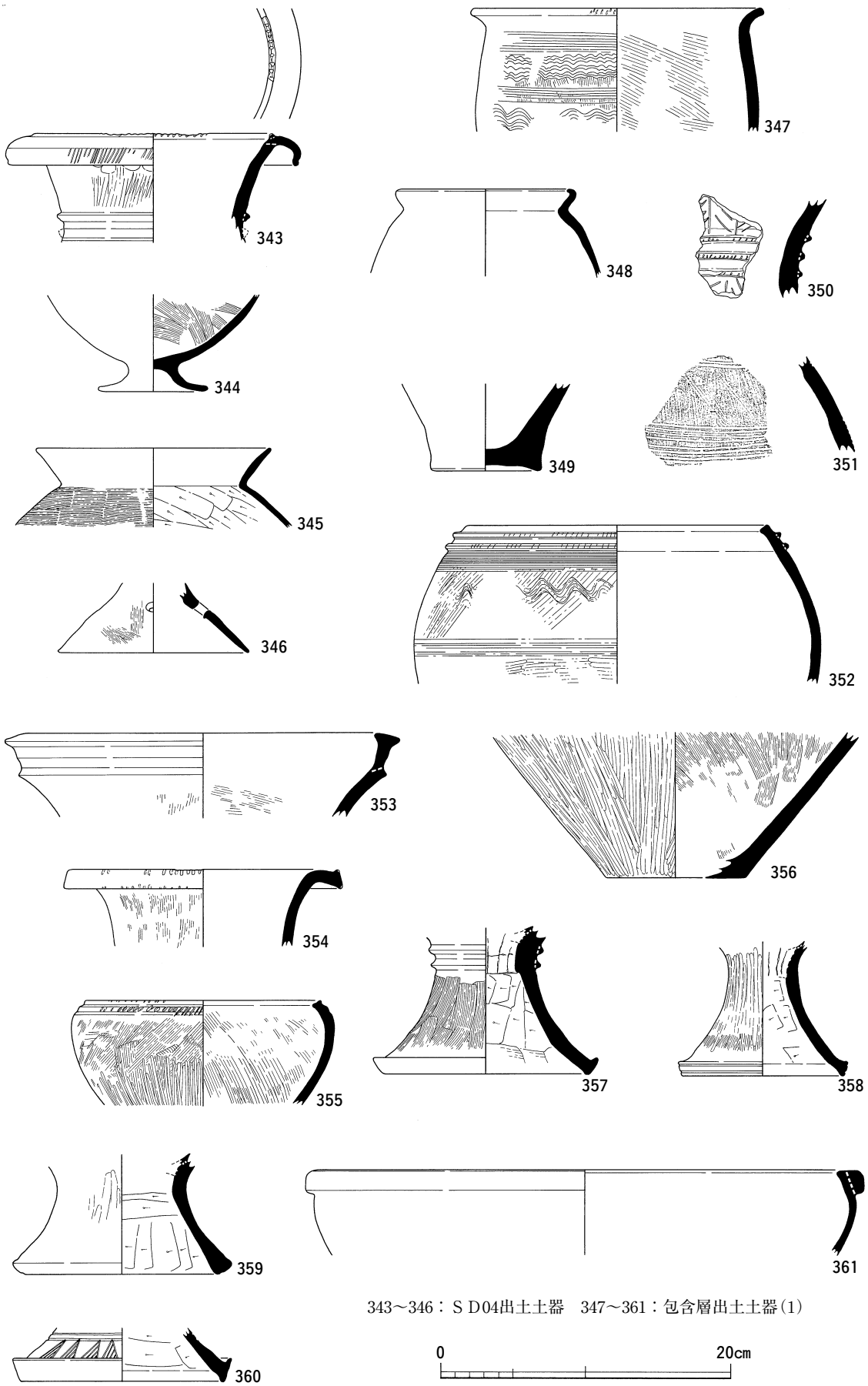
第47図　第3次調査出土土器(4)



第48図　第3次調査出土土器(5)

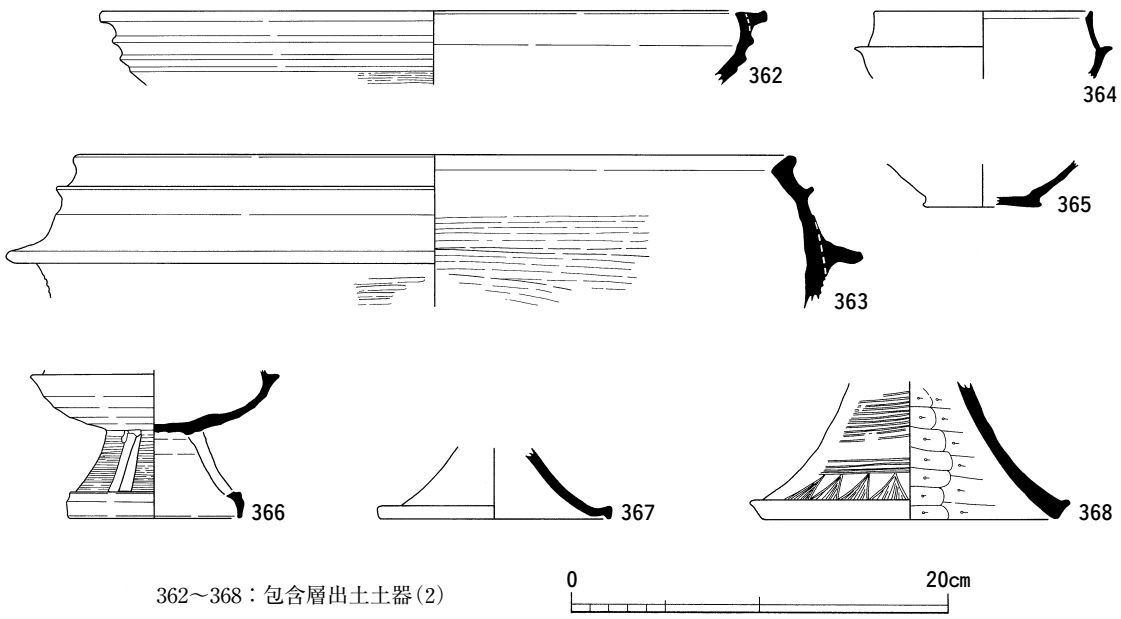


第49図　第3次調査出土土器(6)



343～346：ＳＤ04出土土器　347～361：包含層出土土器(1)

第50図　第3次調査出土土器(7)



362～368：包含層出土土器(2)

第51図　第3次調査出土土器(8)

5．第4次調査

(1) 基本層序と遺構の検出

基本層序　上から、盛土層・水田土壌層・土壌層・基盤層の層序が認められる（第52図）。盛土層（第1層）は、鉄道施設のために整地された層を主体とするものである。水田土壌層は、第2層・第4層が該当する。おそらく、中世以降の水田土壌層と考えられる。土壌層は、第9層が該当する。いわゆる遺物包含層で、弥生時代中期の土器が多く包含されるとともに、顕著に土壌化している。基盤層は、第11層・第12層が該当する。砂を主体とする洪水起源の層である。第12層堆積後、その窪みを埋めるように第11層が堆積している。

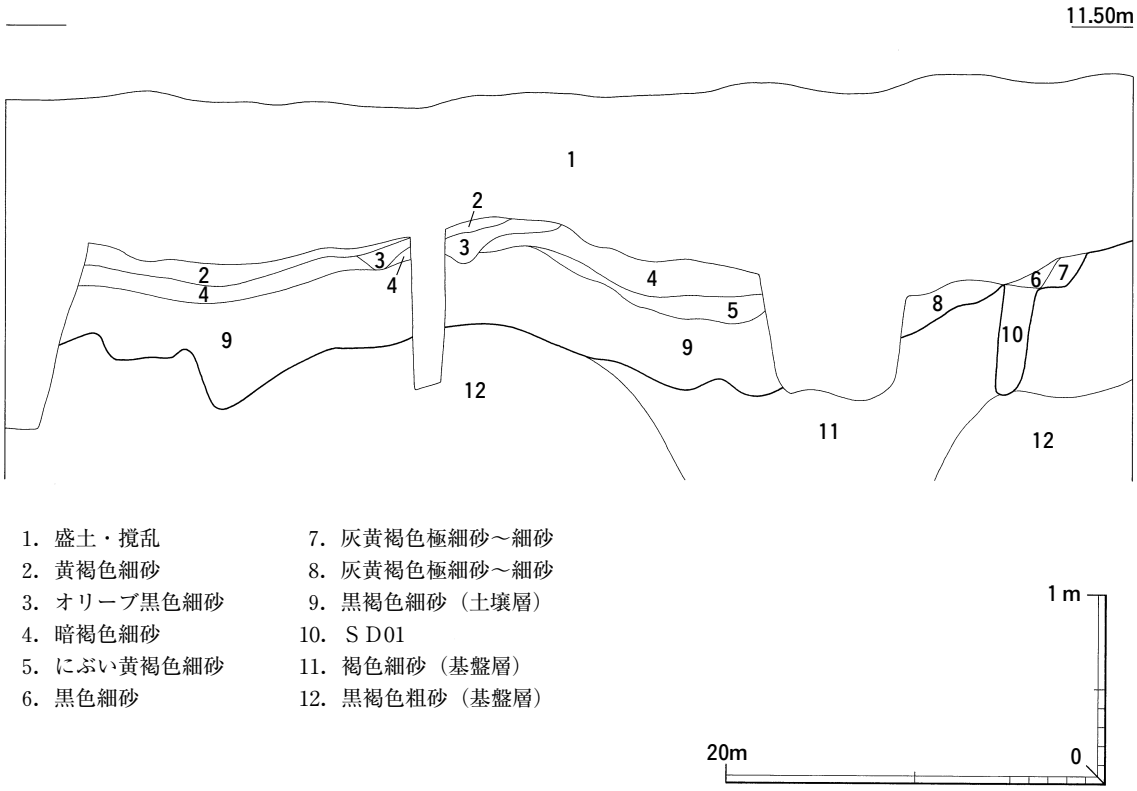
遺構の検出　遺構は、1面で検出した。検出面は基盤層（第11層･第12層）上面が該当する。西側ほどその標高が低くなる傾向が認められる。その標高は、東端部で9.37m、西端で8.20mである。

(2) 調査の成果

概要　調査区内の多くは近代以降の撹乱を受け、さらに鉄道施設に伴うコンクリートの基礎が埋められていた。この結果、包含層から多くの土器が出土したが、検出した遺構は溝1条（ＳＤ01）に限られる。包含層から弥生時代の土器が多量に出土しているにも関わらず、当該期の遺構は検出されなかった。

ＳＤ01　調査区東端部に位置し、北側は調査区外へのび、南端は調査区内で収束している。検出した長さは、2mである。溝内から出土した土器から判断して、近世に位置付けられる。

包含層出土土器　包含層から多量の土器が出土している。ここで、これらの土器について報告する。弥生



1．盛土・撹乱
2．黄褐色細砂
3．オリーブ黒色細砂
4．暗褐色細砂
5．にぶい黄褐色細砂
6．黒色細砂
7．灰黄褐色極細砂～細砂
8．灰黄褐色極細砂～細砂
9．黒褐色細砂（土壌層）
10．ＳＤ01
11．褐色細砂（基盤層）
12．黒褐色粗砂（基盤層）

第52図　第4次調査基本土層図

土器が大半で、わずかに須恵器も出土している。弥生土器は、中期と後期の土器が出土している（第54図・第55図）。

弥生中期

壺・甕・高坏・鉢の各器種が出土している。

壺

広口壺・短頸壺・水差・底部・体部片が出土している。

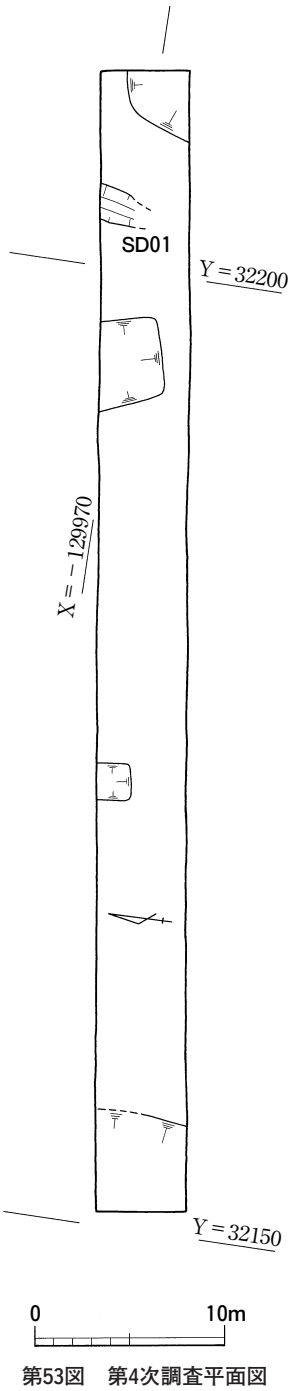
広口壺は、370の1個体が出土している。口縁部内面に1条の断面蒲鉾形の突帯が貼り付けられている。この突帯の内側には径2㎜の紐穴が2穴穿たれている。また、頸部外面にも同様の突帯が1条貼り付けられている。口縁部外端面にはキザミ目が施されている。内外面ともナデ調整を基本とし、体部外面はハケ調整により仕上げられている。

短頸壺は371の1個体が出土している。口縁端部を上下に拡張させ、凹線文が4条施されている。その後、キザミ目が施されている。

水差は372の1個体が出土している。口縁部の1箇所が片口状をなすことから、水差と判断したものである。口縁端部の横ナデ調整を除いては、ナデ調整により仕上げられている。

底部は、373と374の2個体が出土している。いずれも外面はヘラミガキにより仕上げられている。

体部片は375の1個体で、広口壺の体部上半と考えられる。頸部外面には2条の断面三角形の突帯が貼り付けられ、その上に棒状浮文が貼り付けられている。体部には、上から、12条の櫛描直線文・12条の櫛描波状文・櫛描直線文・櫛描格子文が施されている。



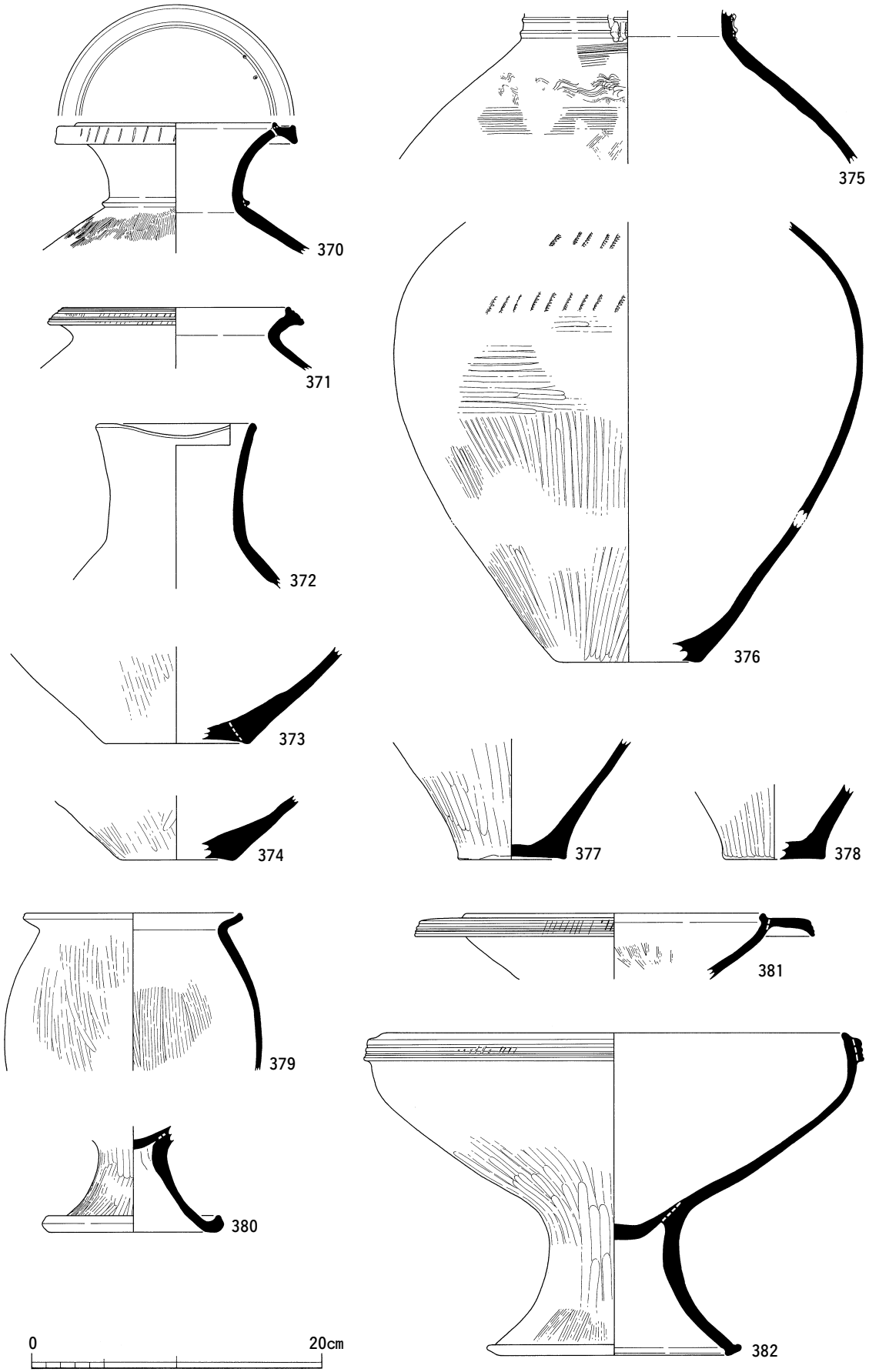
第53図　第4次調査平面図

甕

376～379の4個体が出土している。基本的に同タイプの甕である。口縁部は379の1個体で、如意形をなす。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整により仕上げられている。他の3個体も外面はヘラミガキにより仕上げられ、内面はナデ調整により仕上げられている。また、379は、ナデ調整の前にヘラ削りが施されている。この他、376の外面上半には列点文が2段にわたって施されている。

高坏

380～383の4個体が出土している。380は、脚部を中心に残存し、外面はヘラミガキ、内面はナデ調整により仕上げられている。坏部内面もナデ調整により仕上げられている。381は、水平口縁タイプの坏部で、体部内面はハケ調整、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。382は、大型の高坏で、図上で完形に復元することができた。口縁端部外面に粘土を帯状に貼り付け、3条の凹線文を施すとともに、キザミ目が加えられている。脚部から坏部にかけての外面は縦方向のヘラミガキにより仕上げられている。他は、ナデ調整により仕上げられている。



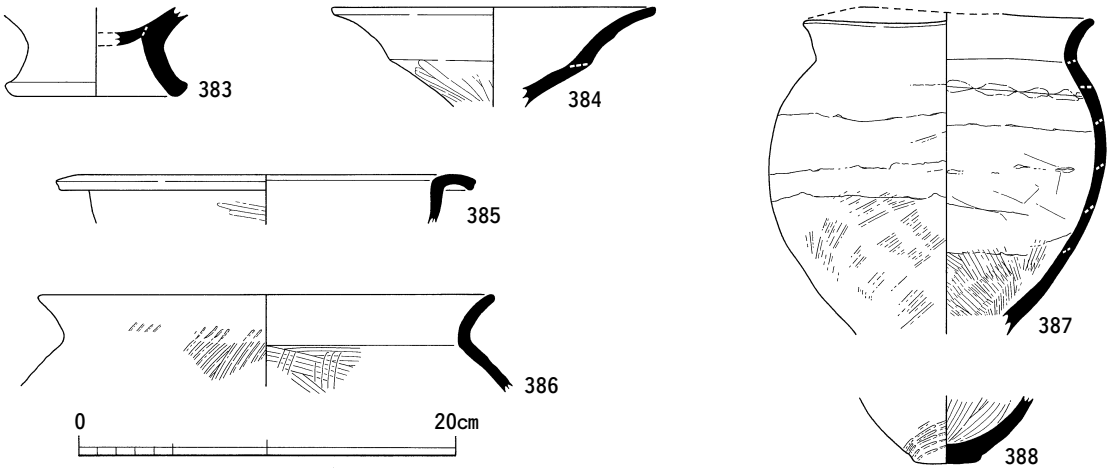
第54図　第4次調査出土土器(1)

鉢　385の1個体が出土している。口縁部を中心に残存し、体部外面は横方向のヘラミガキにより仕上げられている。体部内面はヘラナデ、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。

弥生後期　甕と高坏が出土している。

高坏　384の1個体が出土している。有稜高坏の坏部を中心に残存する。体部外面がヘラミガキによる以外は、ナデもしくは横ナデ調整により仕上げられている。

甕　386～388の3個体が出土している。いずれもⅤ様式系甕に分類されるもので、体部外面は叩き成形により仕上げられている。内面はハケもしくはナデ調整により仕上げられている。388の底部片は、丸底化の傾向が認められる。



第55図　第4次調査出土土器(2)

第2表　南畝町遺跡出土土器観察表(1)

No.	種　別	器　種	調査次数	遺構名	法量(cm)				残存状況	色　　調	焼成
					口径	器高	最大径	底径			
1	弥生	甕	第1次調査	旧河道	28.8	36.85	32.8	11.8	口縁部1/8 底部1/2	灰白～褐灰	
2	弥生	甕	第1次調査	旧河道	14.3	24.5	20.1	5.5	ほぼ完存	褐灰～灰黄褐	
3	弥生	鉢	第1次調査	旧河道	8.75	7.85		4.6	5/6	にぶい黄橙～暗灰	
4	弥生	鉢	第1次調査	旧河道	39.8	10.35		27.5	口縁部1/6 体部1/4	灰白	
5	弥生	鉢	第1次調査	旧河道	39.6	19	40		口縁部～ 体部1/5	灰白～灰黄	
6	弥生	蓋	第1次調査	旧河道	16.2	6.4			3/4	にぶい黄橙～灰白	
7	弥生	壺	第1次調査	旧河道	12.9	5.85			口縁部2/3	灰褐～にぶい黄褐	
8	弥生	壺	第1次調査	旧河道	5	13.3	13.25	5.8	口縁部1/4 体部516	浅黄橙～灰白	
9	弥生	壺	第1次調査	旧河道	22.2	13.4			口縁部1/4 頸部完存	浅黄橙	
10	弥生	壺	第1次調査	旧河道	14.4	5.9			口縁部2/3	にぶい黄橙～灰黄	
11	弥生	壺	第1次調査	旧河道	11.15	23.6	23.55	6.65	口縁部2/3 底部完存	灰白	
12	弥生	甕	第1次調査	旧河道	18.4	17	21.5		口縁部1/5 体部1/2	にぶい橙	
13	弥生	甕	第1次調査	旧河道	13.9	21.4	16.7	3.95	口縁部1/2 体部5/6	浅黄橙～褐灰	
14	弥生	甕	第1次調査	旧河道	10.85	14.5		13.2	3/4	灰白～明褐	
15	弥生	鉢	第1次調査	旧河道	14.4	8.15		3.85	口縁部3/4	灰黄～にぶい黄橙	
16	弥生	鉢	第1次調査	旧河道	13.2	6.6		4.05	口縁部1/5 底部完存	灰白	
17	弥生	鉢	第1次調査	旧河道	15.1	6.5			口縁部完存	にぶい黄橙～褐灰	
18	弥生	鉢	第1次調査	旧河道	30.1	11.2			口縁部1/3	にぶい黄橙～淡黄	
19	弥生	鉢	第1次調査	旧河道	38.65	22.5	39		1/3	浅黄橙～にぶい橙	
20	弥生	高坏	第1次調査	旧河道	23.7	13.85			坏部1/2	浅黄橙	
21	弥生	高坏	第1次調査	旧河道	21.8	15.2		13.3	坏部4/5 脚部1/3	灰黄～淡黄	
22	弥生	高坏	第1次調査	旧河道	19.1	14.1			坏部1/2弱	にぶい黄橙	
23	土師器	小型 丸底壺	第1次調査	旧河道	9.4	11.25	12.2		頸部1/2 体部完存	灰白～黄灰	
24	土師器	小型 丸底壺	第1次調査	旧河道	8.35	11.7	10.7		ほぼ完存	淡黄～橙	
25	土師器	小型 丸底壺	第1次調査	旧河道	8	13	9.9		口縁部3/4 体部2/3	浅黄橙～灰黄	
26	土師器	小型 丸底壺	第1次調査	旧河道	7.2	9.3	9.4		口縁部1/4	にぶい黄橙～灰黄褐	
27	土師器	小型 丸底壺	第1次調査	旧河道	7.75	9.4	8.2		口縁部1/5 体部～底部完存	浅黄橙～にぶい橙	
28	土師器	小型 丸底壺	第1次調査	旧河道	9.1	7.95	8.9		口縁部3/5 体部3/4	にぶい橙～浅黄橙	

胎　土	調　整	備　考	挿図	図版
1㎜以下の石英・長石・チャート多く含む	外面：体部ハケ→下半ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→下半ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		17	4
精良	外面：体部ハケ→口頸部横ナデ。 内面：体部上半ナデ→口縁部横ナデ。		17	4
5㎜以下の石英・チャート・長石含む	外面：底部ナデ。体部～口縁部ハケ→口縁部指オサエ。 内面：底部～体部指オサエ→口縁部指オサエ。		17	4
1㎜以下の長石・チャート・石英多く含む	外面：底部～体部下半ヘラ削り。体部上半叩き成形→ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		17	4
1㎜以下のクサリレキ・チャート・石英多く含む	外面：体部ハケ→ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		17	4
1㎜以下のチャート・石英・長石含む	外面：体部～口縁部ヘラミガキ。つまみ部指オサエ。 内面：体部～口縁部ナデ。		17	4
3㎜以下の雲母・角閃石・石英・長石多く含む	外面：体部～頸部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→頸部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		17	4
1㎜以下の石英・チャート・長石多く含む	外面：体部下端指オサエ・ナデ・口縁部指オサエ。 内面：体部磨滅。口縁部指オサエ。		17	5
1～3㎜大の砂粒多量に含む	外面：頸部ハケ→口縁部ナデ→波状文。 内面：頸部ハケ→口縁部下半ハケ・上半ナデ。		17	5
1～2㎜大の砂粒多く含む	外面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：口頸部ハケ→口縁部横ナデ。		17	
1㎜以下の石英・チャート多量に含む	外面：体部叩き整形→体部上半ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部下半ハケ・体部上半ヘラ削り→口縁部横ナデ。		18	5
1㎜大の砂粒多量に含む	外面：体部～頸部叩き成形→口縁部横ナデ。 内面：不明。	口縁部外面煤付着	18	5
3㎜以下のチャート・石英・長石多く含む	外面：体部～口縁部叩き整形→口縁部横ナデ。 内面：体部板ナデ→口縁部横ナデ。		18	5
1㎜以下の石英・チャート・長石含む	外面：底部指オサエ→体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：底部～体部指オサエ・板ナデ→口縁部横ナデ。		18	5
3㎜大の石英・長石・チャート多く含む	外面：底部～口縁部ナデ。 内面：底部～口縁部ハケ。		18	6
1㎜以下の砂粒多く含む	外面：底部～口縁部指オサエ・ナデ。 内面：底部～口縁部指オサエ・ナデ。		18	6
1.5㎜以下の長石・石英・チャート多く含む	外面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラナデ→口縁部横ナデ。		18	6
1～3㎜大の砂粒多く含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部中位ヘラ削り→口縁部横ナデ。		18	6
1㎜以下のチャート・長石・石英・クサリレキ多く含む	外面：体部上半ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部上半ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		18	6
1㎜以下のチャート・長石・クサリレキ多量に含む	外面：坏底部～体部横ナデ。 内面：磨滅。		19	6
2.5㎜以下の砂粒多く含む	外面：脚部ヘラミガキ→坏部上半ヘラミガキ。 内面：不明。	脚部に透穴3穴(径1.4㎝)	19	6
1㎜以下の石英・長石・チャート多く含む	外面：脚部ヘラミガキ。坏部横ナデ。 内面：脚部ナデ。坏底部ナデ→坏上半部ハケ→口縁部ナデ→横ナデ。		19	
1.5㎜以下の長石・石英・チャート含む	外面：底部～口縁部ハケ→底部・体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面：体部指ナデ→口縁部ハケ→横ナデ。		19	7
1.5㎜以下の石英・チャート・長石含む	外面：体部～口縁部ハケ→下半ヘラ削り・口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		19	7
2.5㎜以下のチャート・クサリレキ含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部指ナデ→口縁部横ナデ。		19	7
1㎜大の砂粒多く含む	外面：ハケ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		19	7
6㎜以下の石英・チャート多く含む	外面：体部～口縁部ハケ。 内面：体部ヘラ削り→口縁部ハケ→口縁部横ナデ。		19	7
1㎜以下の石英・チャート・長石・雲母含む	外面：体部ハケ→口縁部ナデ。 内面：体部ヘラナデ→口縁部ハケ→ナデ。		19	7

第3表　南畝町遺跡出土土器観察表(2)

No.	種　別	器　種	調査次数	遺構名	法量(cm)				残存状況	色　　調	焼成
					口径	器高	最大径	底径			
29	土師器	小型丸底壺	第1次調査	旧河道	7.4	9			1/3	灰白～橙	
30	土師器	小型丸底壺	第1次調査	旧河道	8.3	9.35	8.65		完存	にぶい黄橙～浅黄橙	
31	土師器	小型丸底壺	第1次調査	旧河道	6.95	8.8	9.2		口縁部2/3 体部完存	灰黄褐～黄橙	
32	土師器	小型丸底壺	第1次調査	旧河道		6.2	9.8			にぶい黄橙	
33	土師器	甕	第1次調査	旧河道	11.6	14.1	21.5		口縁部1/4 体部1/8	灰白～灰黄	
34	土師器	甕	第1次調査	旧河道	13.4	22.3	20.9		口縁部～体部ほぼ完存	浅黄橙～灰白	
35	土師器	甕	第1次調査	旧河道	13.6	18.3	25.3		口縁部1/12 体部1/6	にぶい黄橙～灰白	
36	須恵器	杯身	第1次調査	旧河道	11.7	5.4			1/2弱	灰白	良好
37	須恵器	杯身	第1次調査	旧河道	10.6	5.3			口縁部2/3	灰白	良好
38	須恵器	杯身	第1次調査	旧河道	10.4	5.1			口縁部2/3	灰	良好
39	須恵器	杯身	第1次調査	旧河道	10.7	4.4			口縁部1/2	灰	良好
40	須恵器	杯蓋	第1次調査	旧河道	11.6	5.2			3/4	灰～灰白	やや不良
41	須恵器	杯蓋	第1次調査	旧河道	11.9	4.2			完存	灰～灰白	良好
42	須恵器	高杯蓋	第1次調査	旧河道	13.3	5.9			口縁部1/4弱 体部2/3	灰白	
43	須恵器	高杯	第1次調査	旧河道	10.1	4.9			口縁部1/3	灰～にぶい赤褐	普通
44	須恵器	杯身	第1次調査	旧河道	10.1	5.3			1/2	灰白	良好
45	須恵器	高杯蓋	第1次調査	旧河道	15.6	6.5			口縁部わずか 天井部1/2	灰白～明青灰	良好
46	須恵器	高杯蓋	第1次調査	旧河道	15.4	5.1			口縁部若干 天井部1/4	灰白	普通
47	須恵器	杯蓋	第1次調査	旧河道	14.7	4.2			口縁部3/4 天井部完存	灰白～灰	不良
48	須恵器	杯蓋	第1次調査	旧河道	13.55	4.05			4/5	灰白	
49	須恵器	杯蓋	第1次調査	旧河道	13.8	4.1			口縁部3/4	灰	良好
50	須恵器	杯蓋	第1次調査	旧河道	14.3	4.1			口縁部1/2	灰白	良好
51	須恵器	杯蓋	第1次調査	旧河道	13.8	4.25			1/2	灰	
52	須恵器	杯蓋	第1次調査	旧河道	13.7	3.9			1/2弱	灰白	普通
53	須恵器	杯身	第1次調査	旧河道	13.8	3.7			口縁部1/2	明紫灰～灰	普通
54	須恵器	杯身	第1次調査	旧河道	12	4.4			1/2	灰白	普通
55	須恵器	杯身	第1次調査	旧河道	11.9	4.45			1/2	灰～灰白	普通
56	須恵器	杯身	第1次調査	旧河道	11.75	3.7			1/2強	灰白	普通

胎　土	調　整	備　考	挿図	図版
1㎜以下の石英・チャート・長石含む	外面：体部指オサエ→ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部下半ヘラナデ→体部上半指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		19	8
1㎜以下の石英・チャート・長石多く含む	外面：底部～口縁部磨滅。 内面：体部指ナデ→口縁部磨滅。		19	8
1.5㎜以下の砂粒含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部指ナデ→口縁部横ナデ。		19	8
3㎜以下の砂粒多く含む	外面：体部ハケ。 内面：底部～体部下半ナデ→ヘラ削り・体部上半指オサエ・ナデ。		19	8
5㎜以下のチャート・長石含む	外面：体部～口縁部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラ削り→口縁部横ナデ。		19	
砂粒含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラ削り→口縁部ハケ→横ナデ。		19	8
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→横ナデ→口縁部横ナデ。		19	
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：底部回転ヘラ切り→口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。		20	8
1～2㎜大の砂粒多く含む	外面：回転ナデ→底部回転ヘラ削り。 内面：回転ナデ。		20	8
2㎜以下の砂粒をわずかに含む	外面：回転ナデ→底部回転ヘラ削り。 内面：回転ナデ。		20	9
2.5㎜以下の砂粒多く含む	外面：回転ナデ→底部回転ヘラ削り。 内面：回転ナデ。		20	9
2㎜以下の長石・チャート含む	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		20	9
3㎜以下の砂粒含む	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部横ナデ部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		20	9
1.5㎜以下の長石多く含む	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		20	9
1㎜以下の砂粒多く含む	外面：杯部回転ナデ→杯部下半回転ヘラ削り。 内面：杯部回転ナデ。	3箇所に方形透かし	20	9
1.5㎜以下の砂粒多く含む	外面：回転ナデ→底部回転ヘラ削り。 内面：回転ナデ→底部仕上げナデ。		20	9
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ→天井部仕上げナデ。	韓式土器	20	9
1～2㎜大の砂粒多く含む	外面：回転ナデ→天井部回転ヘラ削り→つまみ回転ナデ。 内面：回転ナデ。	つまみ径3.6㎝	20	
5㎜以下の砂粒多く含む	外面：天井部ヘラ切り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		20	9
3㎜以下の石英・長石含む	外面：天井部ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		20	10
1㎜大の砂粒多く含む	外面：回転ナデ→天井部回転ヘラ削り。 内面：回転ナデ。		20	9
1㎜大の砂粒多く含む	外面：回転ナデ→天井部回転ヘラ削り→ナデ。 内面：回転ナデ。		20	10
4㎜以下の長石・石英含む	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		20	10
1～3㎜大の砂粒多く含む	外面：回転ナデ→天井部回転ヘラ削り。 内面：回転ナデ→天井部仕上げナデ。		20	
1㎜大の砂粒多く含む	外面：回転ナデ→底部回転ヘラ削り。 内面：回転ナデ。	重ね焼痕あり	20	
5㎜以下のチャート含む	外面：底部回転ヘラ切り→口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		20	
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：底部回転ヘラ切り→口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		20	10
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：底部回転ヘラ切り→口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。		20	10

第4表　南畝町遺跡出土土器観察表(3)

No.	種　別	器　種	調査次数	遺構名	法量(cm)				残存状況	色　　調	焼成
					口径	器高	最大径	底径			
57	須恵器	杯身	第1次調査	旧河道	12.6	4.6			2/3	灰白	
58	須恵器	杯身	第1次調査	旧河道	11.6	4.1			1/3	灰～灰白	
59	須恵器	杯身	第1次調査	旧河道	11.7	3.1			1/2	灰白～青灰	普通
60	須恵器	杯身	第1次調査	旧河道	11.65	3.65			口縁部3/4	青灰～明青灰	良好
61	須恵器	杯身	第1次調査	旧河道	10.9	4.15			口縁部1/6 底部完存	灰～明緑灰	
62	須恵器	杯蓋	第1次調査	旧河道	12	3.55			口縁部1/3	灰白	普通
63	須恵器	杯蓋	第1次調査	旧河道	11.4	3.8			口縁部3/4	灰	普通
64	須恵器	杯蓋	第1次調査	旧河道	10.2	4.1			口縁部～体部2/3 天井部完存	灰白	やや 不良
65	須恵器	杯身	第1次調査	旧河道	11.4	4.4			口縁部2/3	灰白	普通
66	須恵器	杯身	第1次調査	旧河道	10.65	4.6			口縁部2/3	灰白	普通
67	須恵器	杯身	第1次調査	旧河道	8.8	6			口縁部～体部 2/5	赤褐～青灰	良好
68	須恵器	高杯	第1次調査	旧河道	14.55	18.9		14.45	1/2	灰白	
69	須恵器	高杯	第1次調査	旧河道	11	6.25		7.2	杯部2/3 脚部1/4	灰～灰白	普通
70	須恵器	高杯	第1次調査	旧河道	12.65	7.85		10.5	ほぼ完存	灰～灰白	
71	須恵器	提瓶	第1次調査	旧河道	7.85	15.2			口縁部1/2 体部1/4	灰白	
72	須恵器	提瓶	第1次調査	旧河道	6.7	23.4	18.7		体部9/10	灰～灰白	良好
73	須恵器	壺	第1次調査	旧河道	5.1	7	10.1		口縁部1/2	灰白	良好
74	須恵器	はそう	第1次調査	旧河道		8.55	10.95		体部完存	灰～暗灰	良好
75	須恵器	壺	第1次調査	旧河道		8.15	11.6		体部3/5	灰～灰白	
76	須恵器	壺	第1次調査	旧河道	11.9	16.3	18.1		口縁部1/3 体部3/4	灰白	やや 不良
77	須恵器	甕	第1次調査	旧河道	16.4	7.3			口縁部1/3	灰白	普通
78	須恵器	甕	第1次調査	旧河道	16.8	7.8			口縁部1/2	灰～灰白	良好
79	須恵器	甕	第1次調査	旧河道	16.4	11.3			口縁部1/8	灰黄～褐灰	良好
80	須恵器	甕	第1次調査	旧河道		6.3			口縁部1/6	灰～灰白	普通
81	須恵器	甕	第1次調査	旧河道	20.9	12.5			口縁部1/8	灰白	良好
82	須恵器	横瓶	第1次調査	旧河道	12.6	28.1	38.25		3/4	灰	普通
83	須恵器	甕	第1次調査	旧河道	23.9	32.7	34		口縁部1/2	灰	
84	備前焼	擂鉢	第1次調査	旧河道		7.2			口縁部1/10	赤褐～にぶい 赤褐	普通

胎　土	調　整	備　考	挿図	図版
2㎜以下の長石含む	外面：底部ヘラ切り後ナデ→口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		20	10
5㎜以下の長石・チャート含む	外面：底部ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		20	10
5㎜以下の石英・長石含む	外面：底部ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。		20	10
1㎜以下のチャートわずかに含む	外面：底部回転ヘラ切り→口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。		20	11
1㎜以下の石英・長石多く含む	外面：底部ヘラ切り→体部ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		20	11
1㎜以下の砂粒多く含む	外面：天井部回転ヘラ切り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ→天井部仕上げナデ。		20	11
1㎜大の砂粒多く含む	外面：回転ナデ→天井部回転ヘラ削り。 内面：回転ナデ→天井部仕上げナデ。		20	11
1.5㎜以下の長石・チャート含む	外面：天井部ヘラ切り→口縁部回転ナデ。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。		20	11
1㎜以下の砂粒多く含む	外面：底部回転ヘラ切り→口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。		20	11
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：底部回転ヘラ切り→口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ→底部仕上げナデ。		20	11
3㎜以下の砂粒多く含む	外面：回転ナデ→底部回転ヘラ削り。 内面：回転ナデ→体部ヘラナデ。	ヘラ記号あり	20	11
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：口縁部～脚部回転ナデ。 内面：口縁部～脚部回転ナデ。		20	12
1㎜以下の砂粒多く含む	外面：脚部～杯部回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。杯部回転ナデ→杯底部仕上げナデ。		20	12
1㎜以下の長石・石英含む	外面：脚部～口縁部回転ナデ調。 内面：脚部回転ナデ。杯部回転ナデ。		20	12
1㎜以下の砂粒多く含む	外面：体部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：体部回転ナデ→口縁部回転ナデ。		21	12
1～3㎜大の砂粒多く含む	外面：体部回転ヘラ削り→カキメ→口頸部回転ナデ。 内面：回転ナデ。		21	12
3㎜大の砂粒多く含む	外面：底部ナデ・体部下半ヘラ削り→ナデ・体部上半～口縁部回転ナデ。 内面：口縁部回転ナデ。	外面にヘラ描沈線	21	13
1㎜以下の石英・長石含む	外面：底部～頸部ヘラナデ。 内面：回転ナデ。		21	13
1㎜以下のチャート・長石含む	外面：体部下半回転ヘラ削り→体部上半回転ナデ。 内面：体部回転ナデ。		21	13
1～2㎜大の砂粒多く含む	外面：回転ナデ→カキメ。 内面：回転ナデ→底部仕上げナデ。		21	13
1㎜以下の砂粒多く含む	外面：体部平行叩き→カキメ→口頸部回転ナデ。 内面：体部当具痕→口頸部回転ナデ。		21	13
4㎜以下の長石含む	外面：体部叩き成形→カキメ→口縁部回転ナデ。 内面：体部当具痕→口縁部回転ナデ。		21	13
砂粒多く含む	外面：体部平行叩き→口頸部回転ナデ。 内面：体部当具痕→口頸部回転ナデ。		21	
1㎜以下の砂粒多く含む	外面：体部平行叩き→口縁部回転ナデ。 内面：体部当具痕→口縁部回転ナデ。		21	13
砂粒多く含む	外面：体部平行叩き→カキメ→口頸部回転ナデ。 内面：体部当具痕→口頸部回転ナデ。		21	
1㎜以下の長石・石英含む	外面：体部叩き成形→口頸部回転ナデ。 内面：体部当具痕→口頸部回転ナデ。		22	14
2.5㎜以下の石英含む	外面：体部ハケ→カキメ→口縁部回転ナデ。 内面：体部当具痕→口縁部回転ナデ。		22	14
1㎜以下の砂粒多く含む	外面：回転ナデ。 内面：回転ナデ→卸し目。		22	

第5表　南畝町遺跡出土土器観察表(4)

No.	種　別	器　種	調査次数	遺構名	法量(cm)				残存状況	色　　調	焼成
					口径	器高	最大径	底径			
85	青磁	碗	第1次調査	旧河道		3.1		5.4	底部1/3	灰オリーブ～灰白	良好
96	弥生	壺	第2次調査	P01		5.8			体部わずか	暗灰～橙	
97	弥生	ミニチュア	第2次調査	P04		2.8			底部完存	黄灰	
98	弥生	壺	第2次調査	P04	21.6	2.9			口縁部1/6	浅黄橙～橙	
99	弥生	壺	第2次調査	P14		4.4			底部わずか	にぶい黄橙～橙	
100	弥生	壺	第2次調査	SK02		2.05		3.05	底部1/3		
101	弥生	壺	第2次調査	SD01	20	5.1			口頸部1/3	浅黄橙～にぶい黄橙	
102	弥生	壺	第2次調査	SD01	19.4	6.2			口縁部1/4	淡橙～浅黄橙	
103	弥生	壺	第2次調査	SD01	15.4	10.8			口縁部1/3	灰黄褐～にぶい橙	
104	弥生	壺	第2次調査	SD01	17.6	21.3	35.8		口縁部1/2 体部1/4	橙～浅黄橙	
105	弥生	壺	第2次調査	SD01		12			頸部1/2	浅黄橙	
106	弥生	壺	第2次調査	SD01	18.4	1.7			口縁部1/8	橙	
107	弥生	壺	第2次調査	SD01	15.3	6.1			口縁部1/3 頸部完存	橙	
108	弥生	壺	第2次調査	SD01	17.9	26.5	24.8	7.5	ほぼ完存	浅黄橙～にぶい橙	
109	弥生	壺	第2次調査	SD01		4.35		6.5	底部1/2強	にぶい黄橙～浅黄橙	
110	弥生	壺	第2次調査	SD01		14.7		15.6	底部2/3	にぶい橙～灰白	
111	弥生	壺	第2次調査	SD01		9		11	底部1/4	にぶい黄橙～にぶい橙	
112	弥生	壺	第2次調査	SD01		6.7		8.7	底部1/2	浅黄橙	
113	弥生	甕	第2次調査	SD01	21.6	10.6	25		口縁部1/4弱	浅黄橙～にぶい黄橙	
114	弥生	甕	第2次調査	SD01	15.3	10			口縁部1/3	にぶい黄橙～灰黄褐	
115	弥生	甕	第2次調査	SD01	14.3	25.45	17.3	6.1	口縁部7/8 底部ほぼ完存	黄橙～にぶい橙	
116	弥生	甕	第2次調査	SD01	12.5	6.1			口縁部1/8	橙	
117	弥生	甕	第2次調査	SD01	14.3	5			口縁部1/4	橙	
118	弥生	甕	第2次調査	SD01	12.7	6.7			口縁部2/3	浅黄橙～にぶい橙	
119	弥生	甕	第2次調査	SD01	13.4	6.7			口縁部1/12 頸部1/6	にぶい橙～橙	
120	弥生	甕	第2次調査	SD01	13.8	8.75	16.1		口縁部1/4弱	橙～褐灰	
121	弥生	甕	第2次調査	SD01		4.95			口縁部わずか	浅黄橙	
122	弥生	甕	第2次調査	SD01		7.7		5.8	底部1/4	浅黄橙～にぶい褐	

胎　土	調　整	備　考	挿図	図版
密	外面：高台削り出し。	底部外面露胎	22	
5㎜以下のチャート・長石含む	外面：体部ハケ。 内面：体部ハケ。		32	
1.5㎜以下の長石含む	外面：底部ナデ。体部指オサエ。 内面：底部～体部指ナデ。		32	
1.5㎜以下の石英・長石含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ→施文。		32	
3㎜以下の石英・長石含む	外面：底部～体部ヘラナデ。 内面：体部ナデ。		32	
1㎜以下の石英・チャート・長石含む	外面：底部ナデ→体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ヘラミガキ。		32	
1.5㎜以下のチャート・長石・クサリレキ多く含む	外面：頸部～口縁部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：磨滅。		32	
1㎜以下の石英・クサリレキやや多く含む	外面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。口縁端部キザミ目。 内面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。	頸径11.6㎝	32	20
0.5㎜大の石英・クサリレキわずかに含む	外面：体部～口縁部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→ナデ→口縁部ハ→横ナデ。		32	20
4㎜以下の長石・石英・チャート多く含む	外面：体部磨滅。頸部～口縁部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→ナデ→頸部ナデ→口縁部横ナデ。		32	20
2㎜以下の長石・石英わずかに含む	外面：頸部横ナデ。 内面：体部指オサエ→頸部横ナデ。		32	
1㎜以下の石英わずかに含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。		32	
1㎜以下のチャート・長石・石英わずかに含む	外面：口頸部ハケ→頸部突帯貼り付け。 内面：口頸部横ナデ→口縁部凹線。		32	20
1㎜以下のチャート・長石・石英多く含む	外面：体部～口縁部ハケ→下半ヘラミガキ・口縁部横ナデ。 内面：体部下半ハケ。頸部指オサエ・ナデ。口縁部ハケ→横ナデ。		32	20
1㎜大の石英・長石含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部ナデ→体部ハケ。		32	
1.5㎜以下の長石・チャート・石英多く含む	外面：底部指オサエ・ナデ。体部ハケ→ヘラミガキ。 内面：底部～体部板ナデ。		33	
1㎜以下のチャート・長石・石英わずかに含む	外面：体部ハケ→ヘラミガキ。 内面：ハケ→ヘラミガキ。		33	
1.5㎜以下のクサリレキ・長石多く含む	外面：底部～体部磨滅。 内面：底部～体部磨滅。		33	
1㎜以下の雲母・石英・チャート含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部指オサエ・ナデ→口縁部ハケ→横ナデ。	頸径19.7㎝	33	
1㎜以下の石英・チャート多く含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。	頸径13㎝	33	
2㎜以下の長石・チャートやや多く含む	外面：底部ナデ。体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：底部ナデ→体部下半ヘラ削り→体部上半ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。	穿孔径4.5㎜	33	20
0.5㎜大の石英・チャートわずかに含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。	頸径10.9㎝	33	
0.5㎜大のチャート・長石・石英やや多く含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		33	
3㎜以下の石英・チャート・長石わずかに含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		33	20
0.5㎜大の石英・長石・チャートわずかに含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：ハケ→口縁部横ナデ。	頸径11.4㎝	33	
石英・チャート含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	頸径12.3㎝	33	
1㎜以下のチャート・長石・石英多く含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。		33	
1㎜以下長石・チャート・石英やや多く含む	外面：底部ヘラ削り。体部ハケ→ヘラミガキ。 内面：底部～体部ヘラ削り。		33	

第6表　南畝町遺跡出土土器観察表(5)

No.	種　別	器　種	調査次数	遺構名	法量(cm)				残存状況	色　　調	焼成
					口径	器高	最大径	底径			
123	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ01		16	18.4	5.8	体部1/4 底部1/2	浅黄橙～にぶい黄橙	
124	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ01		5.25		6.6	底部完存	浅黄橙～橙	
125	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ01		4.3		5.5	底部1/4	にぶい黄橙	
126	弥生	高坏	第2次調査	ＳＤ01	30.2	1.4			口縁部1/8	浅黄橙	
127	弥生	高坏	第2次調査	ＳＤ01		8			脚柱部2/3	浅黄橙	
128	弥生	鉢	第2次調査	ＳＤ01	11.2	10.6			口縁部1/4	浅黄橙～にぶい橙	
129	弥生	壺	第2次調査	ＳＤ02	25.6	6.6			口縁部1/8	にぶい黄橙	
130	弥生	壺	第2次調査	ＳＤ02	10.1	6.7			口縁部1/8	にぶい黄橙～浅黄橙	
131	弥生	壺	第2次調査	ＳＤ02	15.2	4.7			口縁部完存	にぶい黄橙	
132	弥生	壺	第2次調査	ＳＤ02		6.1			体部わずか	にぶい黄橙	
133	弥生	壺	第2次調査	ＳＤ02		6			体部わずか	にぶい橙	
134	弥生	壺	第2次調査	ＳＤ02	14.7	4.1			口縁部1/12	にぶい黄橙～にぶい橙	
135	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ02	17.4	2.8			口縁部1/6	浅黄橙	
136	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ02	11.7	3.6			口縁部1/4弱	黄橙～にぶい黄	
137	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ02		5.2		7.3	底部1/3	にぶい黄橙～浅黄橙	
138	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ02		4.8		12.9	底部1/4	橙～にぶい黄橙	
139	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ02		5.3		14	底部1/4	黄灰～にぶい黄橙	
140	弥生	壺	第2次調査	ＳＤ02		5.8		11	底部1/2	浅黄橙	
141	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ02		6.1		9	底部完存	橙～にぶい黄橙	
142	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ02		4.1		7.5	底部1/3	にぶい黄橙	
143	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ02		7.7		11.8	底部1/4	にぶい黄橙～暗灰黄	
144	弥生	高坏	第2次調査	ＳＤ02	31	6.1			口縁部1/8	にぶい黄褐～にぶい橙	
145	弥生	脚部	第2次調査	ＳＤ02		5.1		10.3	脚部3/4	にぶい黄橙～にぶい橙	
146	弥生	壺	第2次調査	ＳＤ03	19.4	2.2			口縁部1/5	にぶい橙～灰黄褐	
147	弥生	高坏	第2次調査	ＳＤ03	24.6	5.9			口縁部1/10	にぶい黄橙～明黄褐	
148	弥生	壺	第2次調査	ＳＤ03	28.2	5.7			口縁部1/12	にぶい黄橙～浅黄橙	
149	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ03		4.5		8.2	底部3/4	にぶい橙	
150	弥生	壺	第2次調査	ＳＤ03		4.6		8	底部1/4	にぶい黄橙～橙	

胎　土	調　整	備　考	挿図	図版
1mm以下のチャート・石英多く含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：体部ヘラ削り。	外面煤付着	33	
1mm以下の石英・長石・チャート・クサリレキ・雲母多く含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：体部ヘラ削り。	底部穿孔（径6mm）	33	
0.5mm大の砂粒わずかに含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ハケ→ナデ。		33	
2mm以下の石英・チャートわずかに含む	外面：口縁部ヘラミガキ。端部横ナデ。 内面：磨滅。		34	
1mm以下の石英・クサリレキ・チャート多く含む	外面：ハケ→横ナデ。 内面：ナデ。		34	21
1mm大の石英・長石・チャート含む	外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		34	
2mm以下の石英・チャート含む	外面：頸部～口縁部ハケ→頸部凹線。口縁端部凹線。 内面：頸部～口縁部ヘラミガキ→突帯貼付け→櫛描波状文。		34	21
1mm以下の長石含む	外面：口頸部横ナデ→頸部凹線。 内面：口頸部ハケ→口縁部凹線。		34	
1.5mm以下の砂粒多く含む	外面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：磨滅。		34	21
1mm以下の砂粒わずかに含む	外面：体部ハケ→櫛描波状文・櫛描直線文。 内面：体部指オサエ・ナデ。		34	
3mm以下の石英・チャートわずかに含む	外面：ハケ→櫛描直線文・櫛描波状文。 内面：板ナデ。		34	21
1mm以下の石英・チャート・雲母わずかに含む	外面：口縁部横ナデ→突帯貼り付け。 内面：口縁部横ナデ。		34	
2mm以下のクサリレキ・石英含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		34	
1mm大の石英・長石・チャート含む	外面：体部磨滅。口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部ハケ→横ナデ。		34	
1mm以下の石英・チャート・長石含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：体部ヘラ削り。		34	
1mm大の石英・長石・チャート含む	外面：底部～体部ナデ。 内面：底部板ナデ。		34	
4mm以下の長石・石英含む	外面：底部ナデ。体部ヘラナデ。 内面：底部～体部ハケ。		34	
2mm以下の砂粒わずかに含む	外面：底部指オサエ→ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部指オサエ。		34	
3mm以下の長石・石英含む	外面：底部指オサエ→ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部指オサエ→ナデ。		34	
1.5mm以下の石英・チャート・クサリレキわずかに含む	外面：底部磨滅。体部ナデ。 内面：磨滅。		34	
2mm以下の石英・長石含む	外面：底部指オサエ→ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：剥離。		34	
1mm大の石英・チャート・長石多く含む	外面：体部～口縁部ナデ→口縁部凹線。 内面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		34	
5mm以下の石英・長石多く含む	外面：脚部ハケ→横ナデ。 内面：脚部横ナデ。体部ナデ。		34	
0.5mm以下の長石・チャートやや多く含む	外面：口縁部横ナデ→端部凹線→棒状浮文。 内面：口縁部横ナデ→櫛描波状文。		34	
1.5mm以下のチャート・石英わずかに含む	外面：体部磨滅。口縁部凹線。 内面：体部～口縁部磨滅。		34	
3mm以下の石英・チャートやや多く含む	外面：口頸部ナデ→頸部突帯貼り付け。 内面：頸部横ナデ→口縁部ヘラミガキ。		35	
1.5mm大のチャート・長石・石英多く含む	外面：磨滅。 内面：底部～体部ヘラ削り。		35	
2mm以下の長石・石英・チャートわずかに含む	外面：底部ナデ。体部ナデ→ヘラミガキ。 内面：磨滅。		35	

第7表　南畝町遺跡出土土器観察表(6)

No.	種　別	器　種	調査次数	遺構名	法量(cm)				残存状況	色　　調	焼成
					口径	器高	最大径	底径			
151	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ03		4.3		8.1	底部1/2	灰黄～にぶい黄橙	
152	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ03		4		5.8	底部1/2	にぶい黄橙	
153	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ03		2.7		5.1	底部ほぼ完存	灰～にぶい橙	
154	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ03		3.5		4.1	底部1/2	黄灰～にぶい黄褐	
155	弥生	鉢	第2次調査	ＳＤ03		3		1	底部完存	浅黄橙～灰白	
156	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ03		5.3		4.6	底部完存	にぶい黄橙	
157	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ03		4.5		2.6	底部1/3	にぶい黄橙～褐灰	
158	弥生	壺	第2次調査	ＳＤ04	20.8	2.5			口縁部1/8	にぶい黄橙～灰黄褐	
159	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ04		3.6		3.3	底部完存	にぶい黄橙	
160	弥生	高坏	第2次調査	ＳＤ04		3.5		9	底部1/6	にぶい橙	
161	須恵器	甕	第2次調査	ＳＤ04	19.4	26.6	30		口縁部1/3 体部1/3	灰白	
162	弥生	壺	第2次調査	ＳＤ05	16.8	9.5			口縁部1/8	浅黄橙	
163	弥生	壺	第2次調査	ＳＤ05	13.6	5.7			口縁部1/3	にぶい橙～橙	
164	弥生	壺	第2次調査	ＳＤ05	12.1	4.2			口縁部1/12	にぶい橙	
165	弥生	壺	第2次調査	ＳＤ05		5.9		8.4	底部1/3	橙	
166	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ05	32	10.5	34		口縁部1/10	にぶい黄橙	
167	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ05	23	8.2			口縁部1/4	橙	
168	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ05		5.25		8.9	底部ほぼ完存		
169	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ05		4.9		7.4	底部わずか		
170	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ05		5.5		7.8	底部1/3		
171	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ05		7.05		10.4	底部ほぼ完存	浅黄橙～褐灰	
172	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ05		4.9		7	底部3/4	灰黄～浅黄	
173	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ05		5.8		5.8	底部1/3	暗灰～にぶい橙	
174	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ05		4.8		4.8	底部1/3	にぶい黄橙	
175	弥生	甕	第2次調査	ＳＤ05		4.25		5.8	底部1/3		
176	弥生	高坏	第2次調査	ＳＤ05		6.2		8.2	脚部1/2	灰黄～褐灰	
177	弥生	壺	第2次調査	包含層 (土器溜り)	19.6	11.4			口縁部1/2 頸部3/4	にぶい黄橙～にぶい橙	
178	弥生	壺	第2次調査	包含層 (土器溜り)	15.8	4.65			口縁部1/4	にぶい橙～灰褐	

胎　土	調　整	備　考	挿図	図版
1㎜大の石英わずかに含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ヘラミガキ。		35	
1㎜以下のチャート・クサリレキわずかに含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部指オサエ→底部～体部ナデ。	底部穿孔（径8.5㎜）	35	
1㎜大の石英・長石わずかに含む	外面：底部ナデ。体部指オサエ→ナデ。 内面：底部～体部ヘラ削り。		35	
1.5㎜以下のチャート・長石わずかに含む	外面：底部ナデ。体部叩き整形。 内面：底部～体部ハケ。		35	
1㎜大の石英・チャート含む	外面：底部～体部板ナデ。 内面：底部～体部板ナデ。	穿孔径9.0㎜	35	
1㎜以下のチャートわずかに含む	外面：底部～体部ナデ。 内面：底部～体部板ナデ。		35	
1.5㎜以下のチャート・石英わずかに含む	外面：底部～体部叩き整形→ハケ。 内面：底部～体部ナデ。		35	
1㎜以下の長石・チャートわずかに含む	外面：頸部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：口縁部ヘラミガキ。		35	
1.5㎜以下の長石・チャート含む	外面：底部ナデ。体部ヘラナデ。 内面：底部～体部ナデ。		35	
1㎜以下の石英・長石・チャート・クサリレキやや多く含む	外面：脚部横ナデ。 内面：脚部ヘラ削り。		35	21
0.5㎜大のチャート・石英わずかに含む	外面：体部叩き整形→カキメ→口縁部横ナデ。 内面：体部当具痕→口縁部横ナデ。		35	21
1.5㎜以下のクサリレキ・チャートやや多く含む	外面：体部磨滅。口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	頸径15.5㎝	35	
1㎜以下のチャート・雲母わずかに含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→頸部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。	頸径10.2㎝	35	22
1㎜以下のチャート・長石わずかに含む	外面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：頸部ヘラ削り→口縁部ヘラナデ→横ナデ。		35	
2㎜以下のチャート・長石やや多く含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部磨滅。		35	
0.5㎜大の長石・石英、2㎜大のチャートわずかに含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	頸径30.4㎝	35	
0.5㎜大のチャート・長石わずかに含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	頸径21.6㎝	35	
1㎜以下の長石多く含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部指ナデ→体部ナデ。		35	
0.5㎜以下の砂粒含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：体部指オサエ・ナデ。		35	
1㎜以下のチャート・石英含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ヘラ削り。		35	
2㎜以下の石英・長石・チャート含む	外面：底部ナデ。体部ハケ。 内面：底部指オサエ・ナデ→体部横ナデ。		36	
1㎜以下の石英・チャートわずかに含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部指オサエ・ナデ→体部ナデ。		36	
1.5㎜以下のチャート・長石やや多く含む	外面：底部ナデ。体部ヘラナデ→体部下端横ナデ。 内面：底部指ナデ→体部ヘラ削り。		36	
1.5㎜以下の長石・チャート・石英わずかに含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：体部ヘラ削り→底部～体部ナデ。		36	
1㎜以下の長石含む	外面：底部～体部指オサエ。体部磨滅。 内面：底部～体部磨滅。		36	
1㎜以下のチャート・石英含む	外面：脚端部横ナデ。脚部～体部ヘラミガキ。 内面：脚部ヘラ削り。	脚部径5.3㎝	36	22
0.5㎜大の石英・チャートわずかに含む	外面：体部～頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		36	22
2㎜以下のチャート・長石含む	外面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：頸部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		36	

第8表　南畝町遺跡出土土器観察表(7)

No.	種　別	器　種	調査次数	遺構名	法量(cm)				残存状況	色　　調	焼成
					口径	器高	最大径	底径			
179	弥生	壺	第2次調査	包含層(土器溜り)	12.3	6.3			口頸部4/5	橙～浅黄橙	
180	弥生	壺	第2次調査	包含層(土器溜り)	8.4	16.7	17.3	6	口縁部3/4 体部～底部1/2	橙～にぶい橙	
181	弥生	壺	第2次調査	包含層(土器溜り)	6.6	5.55			口縁部1/5	浅黄橙～灰黄	
182	弥生	壺	第2次調査	包含層(土器溜り)		7.15		7.6	底部完存	浅黄橙～暗灰黄	
183	弥生	甕	第2次調査	包含層(土器溜り)	28.4	24.8	35.2		口縁部1/8	にぶい橙～にぶい黄橙	
184	弥生	甕	第2次調査	包含層(土器溜り)		8.4		6	底部ほぼ完存	にぶい橙～褐灰	
185	弥生	甕	第2次調査	包含層(土器溜り)		6.8		6.8	底部1/2	にぶい黄橙～にぶい褐	
186	弥生	甕	第2次調査	包含層(土器溜り)	15	11.1	20		口縁部1/4	黄灰～浅黄橙	
187	弥生	甕	第2次調査	包含層(土器溜り)	15.8	7.4			口縁部1/4	浅黄橙	
188	弥生	甕	第2次調査	包含層(土器溜り)		17.7		5.7	底部完存	灰黄褐～にぶい黄橙	
189	弥生	甕	第2次調査	包含層(土器溜り)		16.2	14.3	5.7	体部2/3 底部完存	にぶい橙	
190	弥生	甕	第2次調査	包含層(土器溜り)		4.4		7	底部完存	灰黄～黄褐	
191	弥生	鉢	第2次調査	包含層(土器溜り)	30.6	12.4		11	口縁部1/5 底部完存	にぶい橙～浅黄橙	
192	弥生	鉢	第2次調査	包含層(土器溜り)	21	15.9	21.1	8.8	口縁部1/4 底部完存	にぶい黄橙～にぶい赤褐	
193	弥生	鉢	第2次調査	包含層(土器溜り)	20.8	10.7	24		口縁部1/10	にぶい橙	
194	弥生	鉢	第2次調査	包含層(土器溜り)	16.4	5.6	17		口縁部1/6	灰黄褐～暗灰黄	
195	弥生	高坏	第2次調査	包含層(土器溜り)	29.2	9.1			口縁部1/16	橙	
196	弥生	高坏	第2次調査	包含層(土器溜り)		13.7		15.9	脚端部3/4	にぶい黄橙～灰褐	
197	弥生	高坏	第2次調査	包含層(土器溜り)		13.8		10.7	脚部1/3	浅黄橙～にぶい橙	
198	弥生	高坏	第2次調査	包含層(土器溜り)		6.2		12.6	脚端部1/2	褐灰～にぶい黄橙	
199	弥生	壺	第2次調査	包含層	20.2	2.5			口縁部1/6	浅黄橙～にぶい黄橙	
200	弥生	壺	第2次調査	包含層	18.8	2.1			口縁部1/6	灰白～にぶい黄橙	
201	弥生	壺	第2次調査	包含層		11.5	18.6		体部1/6	にぶい黄橙	
202	弥生	甕	第2次調査	包含層	15.4	7.7			口縁部1/4	浅黄橙～にぶい橙	
203	弥生	甕	第2次調査	包含層		5.7		6.2	底部1/4	にぶい黄橙～褐灰	
204	弥生	甕	第2次調査	包含層		3.75		8.1	底部1/2	灰白～浅黄橙	
205	弥生	甕	第2次調査	包含層		8.5		8	底部1/3	にぶい黄橙～浅黄橙	
206	弥生	甕	第2次調査	包含層		11.1		8	底部1/2	にぶい黄橙	

胎　土	調　整	備　考	挿図	図版
1㎜以下の石英・長石・チャート含む	外面：体部磨滅。頸部ハケ→口縁部ハケ→横ナデ。 内面：体部～頸部ナデ→口縁部横ナデ。		36	22
0.5㎜大の石英・長石わずかに含む	外面：体部～頸部ハケ→体部ヘラミガキ・口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		36	22
1.5㎜大の石粒含む	外面：頸部～口縁部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：頸部ナデ→口縁部横ナデ。		36	
4㎜以下の石英・長石・チャートやや多く含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部剥離。		36	
1㎜以下の長石・チャートやや多く含む	外面：体部磨滅。口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	外面煤付着	36	
2㎜以下の石英・長石・チャート含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部指ナデ→体部ヘラ削り。		36	
1.5㎜以下のクサリレキ・チャート含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ヘラ削り。		36	
0.5㎜大のチャート多く含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		36	
1㎜以下の砂粒多く含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		36	
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：体部ハケ。底部ナデ。 内面：底部～体部ヘラ削り。	外面煤付着・穿孔径4㎜	36	22
2㎜大のチャート・長石、1㎜以下のクサリレキわずかに含む	外面：底部～体部指オサエ。 内面：底部～体部ハケ。	穿孔径1.7㎝	37	23
3㎜以下のチャート・石英多く含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ヘラ削り。		37	
1㎜大のチャート・長石・クサリレキやや多く含む	外面：底部ヘラナデ。体部下半ヘラナデ。体部上半ハケ→口縁部横ナデ。 内面：底部～体部下半指ナデ→ヘラ削り。体部上半ハケ→ヘラ削り→口縁部横ナデ。	図上復元	37	
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：体部ハケ→下半部ヘラミガキ。口縁部横ナデ。 内面：底部～体部ハケ→底部ナデ・口縁部横ナデ。		37	23
0.5㎜大の石英・チャート含む	外面：底部ヘラミガキ。体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：底部ハケ→体部ナデ→口縁部横ナデ。		37	23
2㎜以下の石英・チャート含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→ヘラ削り→口縁部横ナデ。		37	23
0.5㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：坏部ヘラ削り→ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：坏部ナデ→口縁部横ナデ。		37	
0.5㎜大の長石・チャート含む	外面：脚部ヘラミガキ→脚端部横ナデ。 内面：脚部ヘラナデ→脚端部横ナデ。		37	23
2.5㎜以下の長石・チャート含む	外面：脚部ヘラミガキ→脚端部横ナデ。 内面：坏部ヘラミガキ。脚部ヘラ削り→脚端部ヘラ削り。		37	24
1㎜以下のチャート・クサリレキわずかに含む	外面：脚部ハケ→ヘラミガキ→脚端部横ナデ。 内面：脚部ナデ→脚端部横ナデ。		37	
0.5㎜以下の長石・チャート含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部ナデ。		37	
0.5㎜以下のチャート・石英・長石含む	外面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：口縁部ヘラミガキ。		37	
1㎜以下の石粒多く含む	外面：体部ハケ→下半部～脚部ヘラミガキ→接合部横ナデ。 内面：体部ハケ。脚部ヘラ削り。		37	
0.5㎜以下のチャート・石英・クサリレキ含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部磨滅。口縁部横ナデ。	頸径13.85㎝	37	
1㎜以下の石英・長石・チャートやや多く含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：体部ヘラナデ。	外面煤付着	37	
0.5㎜以下の長石・石英含む	外面：底部ヘラナデ。体部ハケ→ヘラミガキ。 内面：底部指オサエ・ナデ→体部ヘラ削り。		37	
2㎜以下の石英・チャートわずかに含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ヘラ削り→底部ナデ。		38	
1㎜以下のチャート・石英わずかに含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：体部磨滅。		38	

第9表　南畝町遺跡出土土器観察表(8)

No.	種　別	器　種	調査次数	遺構名	法量(cm)				残存状況	色　　調	焼成
					口径	器高	最大径	底径			
207	弥生	鉢	第2次調査	包含層	30	7.9			口縁部1/6	にぶい橙	
208	弥生	高坏	第2次調査	包含層		12.6		12.4	脚部1/4	浅黄橙	
209	弥生	高坏	第2次調査	包含層		6.1		14.2	脚部1/4	橙～灰褐	
210	弥生	鉢	第2次調査	包含層	19.7	7.8			口縁部1/8	にぶい橙	
211	弥生	壺	第2次調査	包含層		6.3		4.6	底部1/3	明褐灰～にぶい黄橙	
212	弥生	甕	第2次調査	包含層	13.7	25.9	19	5.2	口縁部1/6 底部ほぼ完存	にぶい黄橙～にぶい橙	
213	弥生	甕	第2次調査	包含層		6.7		5	底部2/3	にぶい黄橙～にぶい橙	
214	弥生	甕	第2次調査	包含層		3.6		3.7	底部1/4	橙～褐灰	
215	弥生	甑	第2次調査	包含層		24.9			体部わずか	浅黄橙～黄褐	
216	土師器	甕	第2次調査	包含層	17	2.9			口縁部1/8	にぶい橙	
217	土師器	甕	第2次調査	包含層	13.5	4.3			口縁部1/4	浅黄橙	
218	土師器	高坏	第2次調査	包含層		6.7			坏部1/4	浅黄橙～灰黄褐	
219	土師器	高坏	第2次調査	包含層		5.4			坏部4/5	橙～にぶい橙	
220	土師器	壺	第2次調査	包含層	5.75	6.5	10		体部1/5		
221	土師器	小型丸底壺	第2次調査	包含層		6.4	9.4		体部1/4 底部完存	にぶい橙	
222	土師器	小型丸底壺	第2次調査	包含層		5.8	8.9		体部3/4	暗灰黄～暗黄灰	
223	土師器	器台	第2次調査	包含層		6		13	脚部3/4	橙	
224	土師器	器台	第2次調査	包含層		7.3		11.8	脚部3/4	橙	
225	土師器	壺	第2次調査	包含層		5			体部1/9	浅黄橙	
226	須恵器	杯	第2次調査	包含層	11.5	2.25			体部1/9	黄灰～灰白	
227	須恵器	壺	第2次調査	包含層	9.8	4			口縁部1/4		普通
228	須恵器	壺	第2次調査	包含層	12.4	4.4			口縁部1/5		
229	土師器	皿	第2次調査	包含層	11.2	2.5		8.5	口縁部1/3 底部1/2	にぶい黄橙～にぶい橙	
230	土師器	皿	第2次調査	包含層	7	1.15		6	1/2	橙	
231	弥生	甕	第3次調査	ＳＫ02		4.6		7.2	底部1/5	浅黄橙～にぶい黄橙	
232	弥生	鉢	第3次調査	ＳＤ01		6.25		3.6	底部2/3	灰白～橙	
233	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ01	16.7	5			口縁部1/6	灰白～黄灰	
234	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ01		3.95		5.3	底部1/4	にぶい黄橙～浅黄橙	

胎　土	調　整	備　考	挿図	図版
0.5㎜大の石英・チャートわずかに含む	外面：体部ハケ→ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		38	
1.5㎜以下の長石・チャート多く含む	外面：脚部ヘラミガキ→脚端部横ナデ→ヘラ描き。 内面：脚部上半ナデ→脚部下半ナデ。	脚径5.6㎝	38	24
1㎜以下のチャート・長石・雲母わずかに含む	外面：脚部ヘラミガキ。 内面：脚部ヨコナデ。		38	
1㎜大のチャートわずかに含む	外面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ→凹線文。 内面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		38	
1㎜以下の石英･長石含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ハケ。		38	
3㎜以下のチャート・石英・長石含む	外面：底部叩き整形→ナデ。体部叩き整形→ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラ削り→口縁部横ナデ。	外面煤付着	38	
2㎜以下の砂粒含む	外面：底部ナデ・指オサエ。体部ハケ。 内面：底部～体部磨滅。		38	
2㎜以下の石英・長石・チャート含む	外面：底部ナデ。体部ハケ→ナデ。 内面：体部ヘラ削り。		38	
1㎜以下のチャート・石英・長石非常に多く含む	外面：体部ナデ。 内面：体部ヘラ削り。		38	24
0.5～1㎜大のチャートわずかに含む	外面：口縁部ハケ→横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。	外面煤付着	38	
0.5㎜大のチャート・石英・雲母わずかに含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		38	
2㎜以下の長石･チャートやや多く含む	外面：坏部ハケ→横ナデ。 内面：坏部横ナデ。		38	
0.5㎜以下のクサリレキ・石英・チャート含む	外面：坏部下半ハケ→ヘラミガキ。坏部上半ヘラミガキ。 内面：坏部磨滅。		38	
1㎜以下のチャート･石英含む	外面：体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部指ナデ→口縁部横ナデ。	頸径5.25㎝	38	25
0.5㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。		38	
1㎜以下の長石･チャートやや多く含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		38	
0.5㎜以下の長石わずかに含む	外面：脚部ヘラミガキ。 内面：脚部横ナデ。	脚部径3.5㎝・穿孔径1.0㎝	38	
1㎜大のチャート･長石わずかに含む	外面：脚部ヘラミガキ→受部ナデ。 内面：脚部ナデ。受部ナデ。		38	25
1㎜以下の石英・チャート・長石やや多く含む	外面：体部叩き整形→頸部横ナデ。 内面：体部指オサエ・ナデ。		39	25
2㎜以下の砂粒含む	外面：底部～口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		39	
2㎜大の長石含む	外面：体部～口縁部回転ナデ。 内面：体部～口縁部回転ナデ。	頸径10.3㎝	39	
2㎜以下の砂粒含む	外面：頸部～口縁部回転ナデ。 内面：口頸部回転ナデ。		39	
チャート・石英わずかに含む	外面：底部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：底部ナデ→口縁部横ナデ。		39	
0.5㎜大のチャートわずかに含む	外面：底部指オサエ・ナデ→口縁部横ナデ。 内面：底部ナデ→口縁部横ナデ。		39	
1.5㎜以下の石英・長石・チャート多く含む	外面：体部磨滅。 内面：底部～体部指オサエ・ナデ。		44	
1㎜以下の石英･長石多量に含む	外面：底部ナデ。体部ハケ。 内面：底部～体部指オサエ→ナデ。		44	
1㎜以下の石英含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。		44	
1㎜以下の石英･雲母含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部ナデ→体部ヘラミガキ。		44	

第10表　南畝町遺跡出土土器観察表(9)

No.	種　別	器　種	調査次数	遺構名	法量(cm)				残存状況	色　　調	焼成
					口径	器高	最大径	底径			
235	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ01		2.6		5.55	底部1/3	橙～にぶい橙	
236	弥生	高坏	第3次調査	ＳＤ01		6		15.6	脚部1/4弱	橙～黄灰	
237	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ01		5.2		11.8	底部1/4	浅黄橙	
238	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ01	18.8	6.95			口縁部1/15	浅黄橙	
239	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ01	16.15	6.85			1/7	浅黄橙～にぶい橙	
240	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ01	13.8	2.4			口縁部1/4弱	にぶい黄橙～灰黄褐	
241	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ01		2.6		4.2	底部完存	灰黄褐～にぶい黄褐	
242	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ01		2.45		4.3	底部完存	浅黄橙～にぶい橙	
243	弥生	高坏	第3次調査	ＳＤ01		4.6			坏部5/8	橙	
244	弥生	高坏	第3次調査	ＳＤ01		4.5		12.3	脚部1/4	浅黄橙～にぶい橙	
245	弥生	鉢	第3次調査	ＳＤ01		3.35		2.2	底部3/4	にぶい橙～灰黄	
246	須恵器	高杯	第3次調査	ＳＤ01	10.75	9.3		9	ほぼ完存	灰～灰白	やや不良
247	須恵器	高杯	第3次調査	ＳＤ01	10.15	9.5		8.8	杯部ほぼ完存	灰～灰白	良好
248	須恵器	杯身	第3次調査	ＳＤ01	10.4	2.95		8.2	1/4	灰～灰白	良好
249	須恵器	高杯	第3次調査	ＳＤ01		4.2		9.4	脚部1/2	灰	良好
250	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ02	8	6.95			口縁部1/8	灰白～灰	
251	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ02		6.5			体部わずか	にぶい黄橙～にぶい橙	
252	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ02	16.1	4.55			口縁部1/6	明黄褐～橙	
253	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ02		3.7		5.45	底部完存	暗灰黄～にぶい黄橙	
254	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ02	31	5.15			口縁部わずか	橙	
255	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ02		8.05	27.4		体部わずか	にぶい黄橙～にぶい黄褐	
256	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ02		5.55		13.4	底部1/3	にぶい黄橙～淡黄	
257	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ02	40.4	2.85			口縁部1/8	橙～暗灰	
258	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ02		7.6			頸部～体部1/7	橙～灰黄褐	
259	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ02		3.68		5.8	底部ほぼ完存	にぶい黄橙	
260	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ02		6.25		10.8	底部1/4	にぶい黄橙～灰黄	
261	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ02	23.05	5.4			口縁部1/8	褐灰～にぶい黄橙	
262	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ02	23.3	4.7			口縁部1/8	浅黄橙～にぶい黄橙	

胎　土	調　整	備　考	挿図	図版
1㎜以下の石英・長石含む	外面：底部指オサエ・ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ヘラ削り。		44	
1㎜大の砂粒含む	外面：脚部ハケ→脚端部横ナデ。 内面：脚部ヘラナデ→脚端部横ナデ。		44	
1㎜以下のクサリレキ・チャート多く含む	外面：体部磨滅。 内面：底部～体部磨滅。		44	
3㎜以下の石英・チャート多く含む	外面：体部～頸部叩き成形→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。		44	
1㎜以下の石英・チャート・長石多く含む	外面：体部叩き成形→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラ削り→口縁部横ナデ。		44	
1㎜以下の石英・チャート・雲母含む	外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラ削り→口縁部ハケ→横ナデ。		44	
2㎜以下の石英・長石含む	外面：体部叩き成形。 内面：底部～体部ナデ。	底部に葉脈痕	44	
1㎜以下の石英・チャート・長石多く含む	外面：体部叩き成形。 内面：底部～体部ナデ。	底部に葉脈痕	44	
2.5㎜以下の石英・長石・チャート含む	外面：坏底部ヘラ削り→坏部ハケ。 内面：坏部ハケ。		44	
1㎜以下のチャート・石英含む	外面：脚部ハケ→脚端部横ナデ。 内面：脚部ハケ→脚端部横ナデ。		44	
1㎜以下の長石含む	外面：体部叩き成形→底部横ナデ。 内面：底部～体部ナデ。	底部穿孔（径4.5㎜）	44	
1㎜以下の長石・石英含む	外面：脚部～口縁部回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。杯部回転ナデ。		44	32
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：脚部回転ナデ。坏部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：脚部～口縁部回転ナデ。		44	32
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：底部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ。		44	
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：脚部回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。		44	
1㎜以下の石英・チャート多く含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		44	
2㎜以下の長石・チャート含む	外面：体部ハケ。 内面：体部指オサエ。		44	
1㎜以下の砂粒含む	外面：口頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：口頸部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		44	
2.5㎜以下の石英・長石・チャート含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ヘラナデ。		44	
1㎜以下の石英・チャート多く含む	外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		44	32
2㎜以下の石英・長石・チャート含む	外面：体部ナデ→施文。 内面：体部ナデ。		44	32
1㎜以下のチャート含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ヘラミガキ。		44	
2㎜以下のチャート・長石多量に含む	外面：口縁部ハケ→横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。		45	
2㎜以下のチャート・クサリレキ多く含む	外面：体部～頸部ハケ。 内面：体部～頸部ハケ。		45	
3㎜以下の石英・長石・チャート含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部指オサエ→ナデ。	底部穿孔（1.2㎝）	45	
3㎜以下の石英・長石・チャート含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部指オサエ→ナデ。		45	
1㎜以下の石英・長石含む	外面：体部磨滅。口縁部横ナデ。 内面：体部～口縁部磨滅。		45	
2㎜以下の石英・長石・チャート多く含む	外面：体部～口縁部磨滅。 内面：体部～口縁部磨滅。		45	

第11表　南畝町遺跡出土土器観察表(10)

No.	種　別	器　種	調査次数	遺構名	法量(cm)				残存状況	色　　調	焼成
					口径	器高	最大径	底径			
263	弥生	高坏	第3次調査	ＳＤ02		3.6		18.6	脚部1/7	にぶい橙～橙	
264	弥生	高坏	第3次調査	ＳＤ02		5.5		13	脚部1/5	にぶい橙	
265	弥生	高坏	第3次調査	ＳＤ02		3.5		11.1	脚部1/4	褐灰～にぶい黄橙	
266	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	16.4	4			口縁部1/4	にぶい黄橙～灰黄褐	
267	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	18.55	4.4			口縁部1/3	浅黄橙～灰白	
268	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	17.6	2.25			口縁部1/4弱	淡橙～灰白	
269	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	19.1	4.6			口縁部1/4弱	灰白～にぶい橙	
270	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	15.3	5.5			口縁部1/7	にぶい黄橙～橙	
271	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	17.5	6.1			口縁部1/3	浅黄橙～にぶい黄橙	
272	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	16	4.55			口縁部1/2強	灰白～黄灰	
273	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	14.7	4.25			口縁部1/7	にぶい黄橙～褐灰	
274	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	13.2	4.7	14		口縁部1/2弱	灰白～浅黄橙	
275	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	13.6	10			口縁部1/4	浅黄橙	
276	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	12.8	3.8			口縁部1/4	浅黄橙～明赤褐	
277	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	31.2	2			口縁部1/8	橙	
278	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	15.7	2			口縁部1/3	浅黄橙～橙	
279	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	26	5.11			口縁部1/3	橙～にぶい橙	
280	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	22.2	2.8			口縁部1/2弱	浅黄橙～橙	
281	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	18.4	20.4	25.3		口縁部1/2 体部1/8	にぶい橙～にぶい黄橙	
282	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03		7.75			頸部1/4	浅黄橙～淡赤橙	
283	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03		13.85	30.6		体部1/4	浅黄橙～灰黄褐	
284	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	20.4	3.7			口縁部1/2弱	浅黄橙～橙	
285	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	17	1.8			口縁部1/4	浅黄橙	
286	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	15.8	3.9			口縁部1/3	にぶい橙～灰白	
287	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	17.5	8.1			口縁部1/7	浅黄橙～黄灰	
288	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03		6.15	18		体部わずか	灰黄～灰白	
289	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03		14.25	24.6		体部1/4	にぶい黄橙～灰黄褐	
290	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	27.8	24.1			口縁部1/8	浅黄橙	

胎　土	調　整	備　考	挿図	図版
3㎜以下の石英・長石・チャート多く含む	外面：脚部横ナデ。 内面：脚部横ナデ。		45	32
1㎜以下のチャート・長石・石英多く含む	外面：脚部ナデ→脚端部横ナデ。 内面：脚部ヘラ削り。		45	
1.5㎜以下の長石・石英・雲母・チャート含む	外面：脚部横ナデ。 内面：脚部ヘラナデ。		45	
2㎜以下の長石含む	外面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：頸部ナデ→口縁部横ナデ。		45	
3㎜以下のチャート・長石・石英含む	外面：口頸部ハケ。 内面：口頸部磨滅。		45	
1㎜以下の砂粒多く含む	外面：磨滅。 内面：磨滅。		45	
1㎜以下のチャート・石英多量に含む	外面：口頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：頸部ナデ→口縁部横ナデ。		45	
1㎜以下の長石・チャート・雲母含む	外面：口頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。		45	
1㎜大の雲母・チャート多く含む	外面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：頸部指オサエ・ナデ。口縁部磨滅。		45	32
1㎜以下の長石含む	外面：頸部～口縁部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：頸部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		45	32
2㎜以下の石英・チャート多く含む	外面：口頸部横ナデ。 内面：口頸部横ナデ。		45	
1㎜以下のクサリレキ含む	外面：口頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。		45	
1～2.5㎜大のチャート多く含む	外面：体部磨滅。頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部指ナデ・ナデ→口縁部横ナデ。		45	
3㎜以下の長石・チャート含む	外面：口頸部横ナデ。 内面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。		45	
1㎜以下のチャート・石英わずかに含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。		45	
1㎜大の石英含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。		45	
2㎜以下の石英・長石・チャート多く含む	外面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：口頸部横ナデ。		46	33
1.5㎜以下の石英・長石・チャート多く含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。		46	33
2㎜以下のチャート多量に含む	外面：体部ハケ→体部中位ヘラミガキ。頸部～口縁ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部～頸部ハケ→頸部ナデ→口縁部横ナデ。		46	33
3㎜以下の石英・チャート多く含む	外面：体部～頸部ハケ→突帯貼り付け。 内面：体部～頸部磨滅。		46	
0.5㎜以下のチャート・長石・石英多く含む	外面：体部磨滅。 内面：体部ハケ。		46	33
2㎜以下の雲母・チャート・長石・石英やや多く含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。		46	33
0.5㎜大の石英・長石・チャートやや多く含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。	穿孔径1.5～2㎜	46	
1㎜以下の石英・チャート多量に含む	外面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：口頸部横ナデ。		46	
3㎜以下の石英・チャート含む	外面：頸部～口縁部横ナデ。 内面：頸部ナデ→口縁部横ナデ。		46	
0.5㎜以下の石英・長石含む	外面：体部ナデ。 内面：体部下半ハケ・体部上半ナデ。		46	
1㎜以下のチャート含む	外面：体部下半ヘラミガキ→体部上半ハケ。 内面：体部下半ハケ→体部上半ヘラミガキ。		47	33
1㎜以下のチャートやや多く含む	外面：体部ハケ→頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ。口縁部横ナデ。		47	

第12表　南畝町遺跡出土土器観察表(11)

No.	種　別	器　種	調査次数	遺構名	法量(cm)				残存状況	色　　調	焼成
					口径	器高	最大径	底径			
291	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	45.7	11.75			口縁部1/3弱	黄橙～橙	
292	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	26.6	13.2			口縁部1/4	浅黄橙	
293	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	20.1	5.9			口縁部1/6	浅黄橙	
294	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	11.6	16.8	19		口縁部1/4弱 体部1/4	にぶい橙～浅黄橙	
295	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03		3.7			口縁部わずか	浅黄橙～橙	
296	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	12.3	5.15			口縁部1/8	にぶい橙～にぶい黄橙	
297	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	13.4	4.85			口縁部1/8	橙～浅黄橙	
298	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03		6.3			口縁部わずか	にぶい黄褐～浅黄橙	
299	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03	11.7	7.45			口縁部1/9	浅黄橙～浅黄	
300	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03		10.8	6.7		口縁部1/4強	にぶい橙	
301	弥生	鉢	第3次調査	ＳＤ03		7.2			体部わずか	橙	
302	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03					体部わずか	にぶい黄橙～灰	
303	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03		7.85			脚柱部完存	橙～灰白	
305	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ03		11		9.1	底部1/3弱	浅黄橙～にぶい黄橙	
306	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03		7.25		7.1	底部2/3弱	にぶい黄橙	
307	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03		8.05		10.5	底部完存	橙～にぶい褐	
308	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ03		9		8.3	底部ほぼ完存	灰黄褐～にぶい黄橙	
309	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ03	24.75	10.9			口縁部1/6	橙～にぶい橙	
310	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ03	27.1	8.2			口縁部1/6	にぶい黄橙～灰黄褐	
311	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ03	21.8	6.55			口縁部1/4 体部若干	にぶい黄橙～褐灰	
312	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ03	21.4	13.15	27.2		口縁部～体部1/4	浅黄橙～にぶい橙	
313	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ03	11.8	5.7	13.8		口縁部1/4弱	灰黄褐～にぶい橙	
314	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ03	13	4.7			口縁部1/6	浅黄橙～にぶい黄橙	
315	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ03		10.9	21.65	8.9	底部～体部1/2	橙～にぶい橙	
316	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ03		14.05		9	底部1/3	にぶい橙～灰黄褐	
317	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ03		6.7		8.7	底部1/4	にぶい橙～にぶい黄橙	
318	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ03		3.3		8	底部1/2	灰黄褐～浅黄橙	
319	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ03		3.9		5.1	底部1/2強	にぶい黄橙	

胎　土	調　整	備　考	挿図	図版
1㎜以下の石英･チャート多量に含む	外面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：口頸部磨滅。		47	34
1.5㎜以下の長石・チャート含む	外面：体部～口縁部磨滅。 内面：体部～口縁部磨滅。		47	34
2㎜以下のチャート含む	外面：頸部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：頸部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。		47	
2㎜以下の石英･チャート多く含む	外面：体部指オサエ・ナデ→横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部ハケ。		47	34
1㎜大のチャート多く含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。		47	
1㎜大の石英含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部ハケ→ナデ。		47	
1㎜以下の長石･チャート含む	外面：口頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。		47	
2.5㎜以下のチャート・石英多く含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部ナデ。		47	
1㎜以下の砂粒含む	外面：頸部～口縁部横ナデ→施文。 内面：口縁部横ナデ。		47	
1㎜以下の石英･長石含む	外面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。		47	
1㎜以下のチャート･石英わずかに含む	外面：体部ナデ。 内面：体部ハケ→ナデ。		47	34
1㎜以下の長石含む	外面：体部ハケ→ナデ→櫛描文。 内面：体部ハケ→ナデ。		47	
1㎜以下の砂粒多量に含む	外面：下部横ナデ→上部ハケ。 内面：指ナデ。		47	
2㎜以下のチャート・石英・長石多く含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：体部ナデ。		48	
5㎜以下の石英・長石・チャート多く含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部ナデ→体部ハケ。		48	
0.5～1㎜大のチャート・石英・長石含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部指オサエ→ナデ→体部ハケ。		48	
1㎜以下のチャート･石英多量に含む	外面：底部ナデ。体部ハケ→ヘラミガキ。 内面：底部指ナデ→体部ハケ→ナデ。		48	
0.5㎜石英・チャート含む	外面：体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部指オサエ→ナデ→口縁部横ナデ。		48	
2㎜以下の石英・長石・チャート多く含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		48	
2㎜以下の石英･チャート多量に含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部磨滅。口縁部横ナデ。		48	
1.5㎜以下の長石・石英・チャート多く含む	外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	頸径19.4㎝	48	
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		48	34
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		48	
1㎜以下の石英・長石・チャート含む	外面：底部ナデ。体部ハケ→ヘラミガキ。 内面：底部～体部ヘラ削り。		48	
0.5～1㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ヘラ削り。		48	
1㎜以下の石英・長石・チャート含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ヘラ削り。		48	
1㎜以下の石英・長石・チャート含む	外面：底部～体部指オサエ→ナデ。 内面：底部～体部指オサエ→ナデ。		48	
2㎜以下のチャート含む	外面：底部～体部ナデ。 内面：底部～体部指オサエ・ナデ。		48	

第13表　南畝町遺跡出土土器観察表(12)

No.	種　別	器　種	調査次数	遺構名	法量(cm)				残存状況	色　　調	焼成
					口径	器高	最大径	底径			
320	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ03		4.15		6.2	底部完存	橙～浅黄橙	
321	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ03		2.4		5.2	底部1/2	にぶい黄橙～灰	
322	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ03		5.4		5.3	底部1/4	橙～にぶい黄橙	
323	弥生	高坏	第3次調査	ＳＤ03	45.2	6.05			口縁部わずか	にぶい黄橙～にぶい褐	
324	弥生	高坏	第3次調査	ＳＤ03	22.1	5.1			口縁部1/12	浅黄橙～淡黄	
325	弥生	高坏	第3次調査	ＳＤ03	30.7	4.85			口縁部1/12	にぶい橙～線黄橙	
326	弥生	高坏	第3次調査	ＳＤ03	16.3	2.55			口縁部1/3	灰褐～にぶい橙	
327	弥生	高坏	第3次調査	ＳＤ03	28.1	2			口縁部1/9	橙～褐灰	
328	弥生	高坏	第3次調査	ＳＤ03		9.7		16.1	脚部1/4	橙	
329	弥生	高坏	第3次調査	ＳＤ03		7.05		16.9	脚部1/8	にぶい黄橙	
330	弥生	高坏	第3次調査	ＳＤ03		4.25			口縁部わずか	黒褐～にぶい橙	
331	弥生	高坏	第3次調査	ＳＤ03	19.25	3.85			口縁部1/2強	橙～黄灰	
332	弥生	高坏	第3次調査	ＳＤ03		7.8		16	脚部1/7	橙	
333	弥生	高坏	第3次調査	ＳＤ03		6.9		14	底部2/9	にぶい黄橙	
334	弥生	高坏	第3次調査	ＳＤ03		9.5		13.9	脚部1/4弱	赤橙～黄灰	
335	弥生	高坏	第3次調査	ＳＤ03		6.1			脚端部わずか	赤橙～浅黄橙	
336	弥生	鉢	第3次調査	ＳＤ03		5.3		6.2	底部1/2	にぶい黄褐～にぶい黄橙	
337	弥生	鉢	第3次調査	ＳＤ03	6.95	6.75			口縁部1/4	橙～灰白	
338	弥生	鉢	第3次調査	ＳＤ03		5.65		4.1	体部～底部1/2	にぶい褐黄～灰黄褐	
339	弥生	高坏	第3次調査	ＳＤ03		6.95		17.5	脚部1/5	浅黄橙	
340	弥生	脚部	第3次調査	ＳＤ03		4.5		10.1	脚部ほぼ完存	にぶい橙～浅黄橙	
341	弥生	脚部	第3次調査	ＳＤ03		4.95		9.8	脚部完存	にぶい黄橙	
342	弥生	鉢	第3次調査	ＳＤ03		5.1		12.2	底部1/2	灰黄～灰白	
343	弥生	壺	第3次調査	ＳＤ04	16.2	7.5			口縁部1/5	にぶい黄橙～浅黄橙	
344	弥生	鉢	第3次調査	ＳＤ04		5.65		7.5	台部1/2	黄橙～明黄褐	
345	弥生	甕	第3次調査	ＳＤ04	15.8	5.5			口縁部1/5	灰白～にぶい黄橙	
346	弥生	器台	第3次調査	ＳＤ04		4.75		12.8	脚部1/4	灰白～灰	
347	弥生	甕	第3次調査	包含層	19.6	13.5	19.4		口縁部わずか体部1/8	にぶい黄橙	

胎　土	調　整	備　考	挿図	図版
1㎜以下の石英･チャート含む	外面：底部～体部指オサエ・ナデ。 内面：底部ヘラナデ→体部指オサエ→指ナデ。	底部穿孔(1.25㎝)	48	
1㎜以下の石英･長石含む	外面：底部指ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部指オサエ。	穿孔径8～9㎜	48	
1.5㎜以下の石英・長石含む	外面：底部ナデ。体部板ナデ。 内面：底部指オサエ。	底部焼成前穿孔(1.2㎝)	48	
1㎜以下の長石・チャート・石英多く含む	外面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		49	
1㎜以下の石英･チャート多く含む	外面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		49	
1㎜以下の長石･チャート多く含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。		49	
1㎜以下の砂粒多く含む	外面：坏部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：坏部～口縁部横ナデ。		49	
0.5㎜大の長石・石英含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。		49	
2㎜以下の石英・長石・チャート含む	外面：脚部ナデ→脚端部横ナデ。 内面：脚部ナデ→脚端部横ナデ。		49	35
2㎜以下の石英･長石含む	外面：脚端部横ナデ。脚部ヘラミガキ。 内面：脚部ヘラ削り。		49	35
1㎜以下の石英含む	外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		49	
1㎜以下のチャート含む	外面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラミガキ→口縁部ヘラミガキ。		49	
2.5㎜以下の石英・チャート・長石多く含む	外面：脚部ヘラ削り→ハケ→脚端部横ナデ。 内面：脚部ヘラ削り→脚端部横ナデ。		49	
3㎜以下の石英･長石含む	外面：脚部ヘラミガキ→脚端部横ナデ。 内面：脚部ハケ→ナデ。		49	
2.5㎜以下の石英・長石・チャート含む	外面：脚部ハケ→脚端部横ナデ。 内面：脚部ヘラ削り。		49	
1㎜大の長石含む	外面：脚端部横ナデ。 内面：脚部ヘラ削り。		49	
2㎜以下のチャート・長石・クサリレキ・石英多く含む	外面：底部ナデ。体部指オサエ→ナデ。 内面：底部～体部ナデ。		49	
1㎜以下の石英・長石・チャート多く含む	外面：口縁部ハケ→ナデ。 内面：口縁部指オサエ→ヘラナデ。		49	
1.5㎜以下の長石・石英多く含む	外面：体部ハケ。 内面：体部指ナデ。		49	
1㎜以下のチャート･石英多量に含む	外面：脚部磨滅。 内面：脚部ハケ→ナデ。		49	
2㎜以下のチャート・長石・石英多く含む	外面：脚部ハケ→脚端部横ナデ。 内面：脚部磨滅。		49	35
1㎜以下の石英・長石・チャート多量に含む	外面：脚部ハケ→ナデ→脚端部横ナデ。 内面：脚部横ナデ。		49	35
1㎜以下の石英・チャート・長石多く含む	外面：体部磨滅。 内面：底部～体部磨滅。		49	
1㎜以下のチャート･石英多く含む	外面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：頸部～口縁部横ナデ。		50	
4㎜以下の石英・長石・チャート含む	外面：台部横ナデ。体部磨滅。 内面：台部ナデ。体部ハケ。		50	35
1㎜以下の石英・長石・チャート多く含む	外面：体部叩き成形→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラ削り→口縁部横ナデ。		50	
2㎜以下のチャート･長石含む	外面：脚部ハケ→ナデ。 内面：脚部磨滅。		50	
4㎜以下のチャート・石英・長石多く含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		50	35

第14表　南畝町遺跡出土土器観察表(13)

No.	種　別	器　種	調査次数	遺構名	法量(cm)				残存状況	色　　調	焼成
					口径	器高	最大径	底径			
348	弥生	甕	第3次調査	包含層	11.7	6.1			口縁部1/4	にぶい黄橙～浅黄橙	
349	弥生	甕	第3次調査	包含層		6		7	底部1/2	にぶい黄橙	
350	弥生	鉢	第3次調査	包含層		7.1			接合部わずか	にぶい橙	
351	弥生	壺	第3次調査	包含層		8.1			体部わずか	にぶい褐	
352	弥生	壺	第3次調査	包含層	20.4	10.85	27.8		口縁部1/4 体部1/10	にぶい黄橙～浅黄橙	
353	弥生	壺	第3次調査	包含層	26.9	5.8			口縁部1/6	浅黄橙	
354	弥生	壺	第3次調査	包含層	18.3	5.3			口縁部1/6	にぶい黄橙～灰黄褐	
355	弥生	鉢	第3次調査	包含層	16	7.2	18		口縁部1/6	橙	
356	弥生	壺	第3次調査	包含層		10		9.5	底部1/4	にぶい橙～橙	
357	弥生	高坏	第3次調査	包含層		8.1		14	脚端部1/2	にぶい橙～にぶい黄橙	
358	弥生	高坏	第3次調査	包含層		9.2		11	脚端部1/4	灰白～にぶい黄橙	
359	弥生	高坏	第3次調査	包含層		8.3		13.2	脚端部1/4	浅黄橙～にぶい橙	
360	弥生	高坏	第3次調査	包含層		3.7		14	脚端部1/8	にぶい橙～黒褐	
361	弥生	鉢	第3次調査	包含層	37.6	5.8			口縁部1/8	にぶい黄橙	
362	弥生	鉢	第3次調査	包含層	35	3.9			口縁部1/18	橙	
363	土師器	羽釜	第3次調査	包含層	37.5	8			口縁部1/12	橙	
364	須恵器	椀	第3次調査	包含層		2.2		5.8	底部1/4	黄灰～灰	
365	須恵器	高杯	第3次調査	包含層		7.85		8.9	脚部3/4	灰	良好
366	須恵器	高杯	第3次調査	包含層		3.7		12	脚部1/6	灰白	不良
368	弥生	高坏	確認調査	包含層		7.25		15.3	脚部1/5	橙	
369	須恵器	甕	第3次調査	包含層					体部わずか	灰	普通
370	弥生	壺	第4次調査	包含層	13.4	9			口縁部1/6	橙	
371	弥生	壺	第4次調査	包含層	15.2	4.2			口縁部1/4	橙	
372	弥生	壺	第4次調査	包含層	10.35	11.35			口縁部4/5	橙～にぶい橙	
373	弥生	壺	第4次調査	包含層		6.65		9.9	底部1/5	にぶい黄橙～橙	
374	弥生	壺	第4次調査	包含層		4.4		7.7	底部1/3	橙	
375	弥生	壺	第4次調査	包含層		10.6			体部1/4	橙～浅黄橙	
376	弥生	甕	第4次調査	包含層		31.1	32.2	10	底部1/3	橙～浅黄橙	

胎　土	調　整	備　考	挿図	図版
0.5㎜大の雲母・石英・チャートわずかに含む	外面：体部～口縁部ナデ→口縁端部横ナデ。 内面：体部指オサエ→口縁部横ナデ。		50	
2㎜以下のチャート・クサリレキわずかに含む	外面：底部ナデ・指オサエ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ナデ。		50	
1㎜以下の石英・長石わずかに含む	外面：横ナデ。 内面：ナデ。		50	35
4㎜以下の石英・チャート・長石多く含む	外面：体部ハケ。 内面：体部ナデ。		50	36
2㎜以下のチャート・石英わずかに含む	外面：体部ハケ→体部中位ヘラミガキ。口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		50	36
1㎜大のチャート・石英・クサリレキやや多く含む	外面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。		50	
0.5㎜以下のチャート・長石わずかに含む	外面：頸部～口縁部ハケ→口縁部指オサエ→横ナデ。 内面：頸部ナデ→口縁部横ナデ。		50	
1㎜以下のチャート・石英わずかに含む	外面：体部ハケ→中位以下ヘラミガキ・口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		50	36
1㎜以下の石英・長石多く含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部指オサエ→体部ハケ。		50	
1㎜以下の石英・チャート・長石やや多く含む	外面：脚部ハケ→脚端部横ナデ。 内面：脚部ヘラ→脚端部横ナデ。		50	36
1㎜以下の石英・チャートわずかに含む	外面：脚部ヘラミガキ→脚端部横ナデ。 内面：脚部ヘラ削り→脚端部横ナデ。		50	
3㎜以下の石英・チャート・長石わずかに含む	外面：脚部ヘラミガキ。脚端部横ナデ。 内面：脚部ヘラ削り。	脚部径8.8cm	50	
1㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：脚部横ナデ。 内面：脚部ヘラ削り→脚端部横ナデ。		50	36
1.5㎜以下のチャート・石英やや多く含む	外面：体部磨滅。口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ・指オサエ→口縁部横ナデ。		50	36
0.5㎜以下のチャートわずかに含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部～口縁部横ナデ。		51	
1㎜以下のクサリレキ・石英・長石わずかに含む	外面：体部叩き整形→鍔～口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	鍔下面煤付着	51	
微細な砂粒わずかに含む	外面：体部回転ナデ。 内面：底部～体部回転ナデ。	底部回転糸切り	51	
4㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：脚部回転ナデ→カキメ。杯部回転ヘラ削り→受部回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。杯部回転ナデ。		51	
1㎜大の長石・石英含む	外面：脚部回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。		51	
0.5～3㎜大の石英・長石含む	外面：脚部ナデ→脚端部横ナデ。 内面：脚部ヘラ削り。		51	36
3㎜以下の長石・石英含む	外面：体部叩き成形。 内面：体部同心円文。			37
2㎜以下の石英・長石・チャート含む	外面：体部ハケ→頸部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部～頸部ナデ→口縁部横ナデ。		54	39
1.5㎜以下の石英・チャート含む	外面：体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		54	
1㎜以下のチャート・長石多く含む	外面：頸部磨滅。口縁部横ナデ。 内面：体部指オサエ・ナデ。頸部ナデ→口縁部横ナデ。		54	39
3㎜以下のチャート・長石・石英・雲母含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：磨滅。		54	
2㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ナデ。		54	
1.5㎜以下のチャート・石英含む	外面：体部ハケ。 内面：体部磨滅。肩部指オサエ→頸部ナデ。		54	
2㎜以下の石英・チャート多く含む	外面：体部ヘラミガキ。 内面：体部ナデ。		54	

第15表　南畝町遺跡出土土器観察表(14)

No.	種　別	器　種	調査次数	遺構名	法量(cm)				残存状況	色　　調	焼成
					口径	器高	最大径	底径			
377	弥生	甕	第4次調査	包含層		8.3		7.1	底部1/2弱	にぶい黄橙～にぶい橙	
378	弥生	甕	第4次調査	包含層		5.1		6.8	底部1/2弱	灰白～にぶい褐	
379	弥生	甕	第4次調査	包含層	14.6	10.85	17.6		口縁部1/8 体部1/10	にぶい黄褐～にぶい褐	
380	弥生	高坏	第4次調査	包含層		7.3		11.4	脚部1/2弱	にぶい黄橙～にぶい橙	
381	弥生	高坏	第4次調査	包含層	20.4	4.5			口縁部1/5	にぶい黄橙	
382	弥生	高坏	第4次調査	包含層	31.5	22.1		15.5	1/4強	浅黄橙～橙	
383	弥生	高坏	第4次調査	包含層		4.7		8.5	脚部1/4	灰白～にぶい黄橙	
384	弥生	高坏	第4次調査	包含層	16.8	5.3			口縁部3/4	浅黄橙～橙	
385	弥生	鉢	第4次調査	包含層	19.5	2.6			口縁部1/6	淡赤橙～にぶい橙	
386	弥生	甕	第4次調査	包含層	23.7	4.8			口縁部1/5	にぶい橙～褐灰	
387	弥生	甕	第4次調査	包含層	15.1	17.3	17.7		口縁部3/4	灰黄褐～黄灰	
388	弥生	甕	第4次調査	包含層		3.6		3.35	底部完存	浅黄橙～灰白	

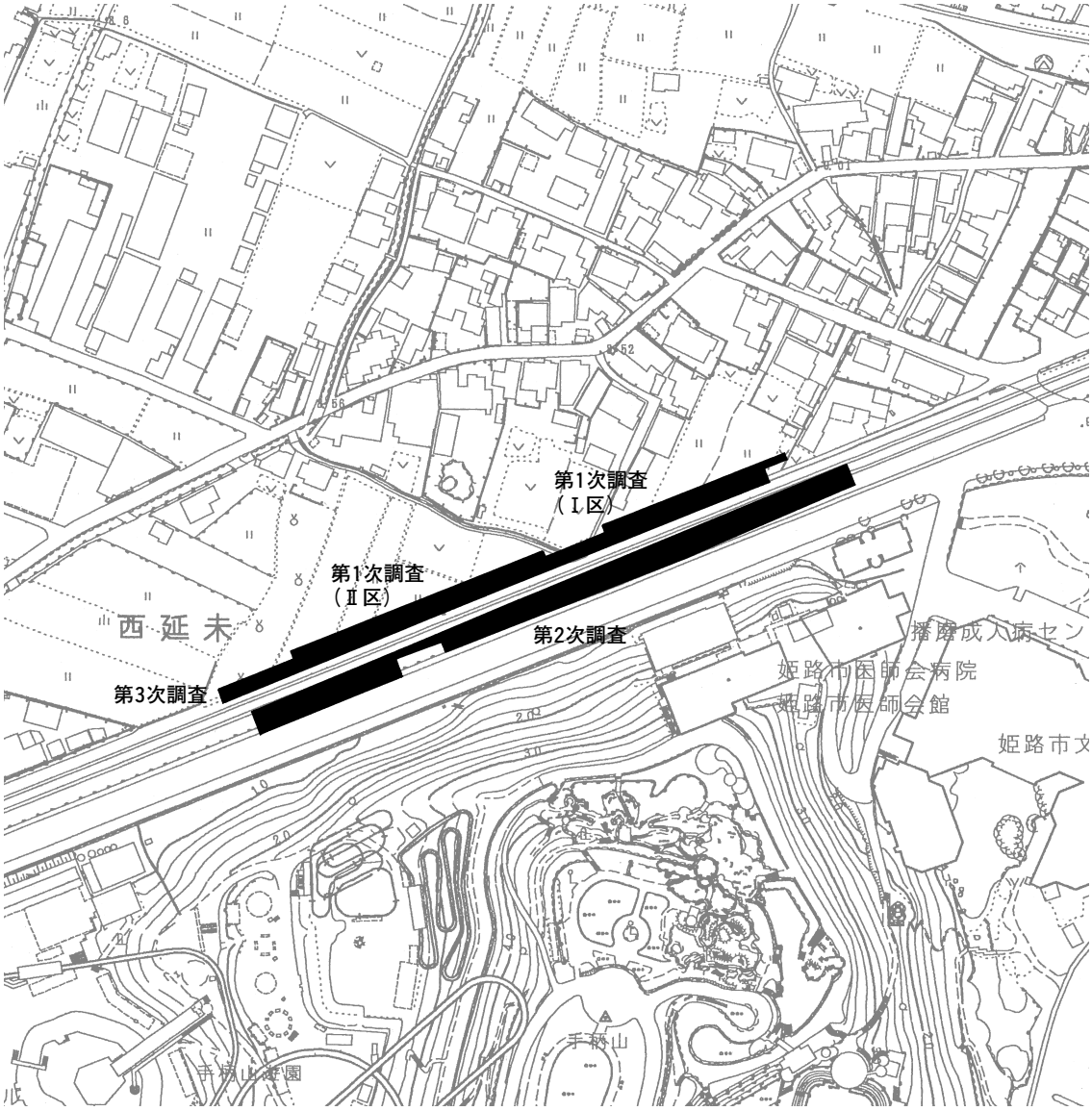
胎　土	調　整	備　考	挿図	図版
4㎜以下の石英・長石・チャート多く含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ヘラ削り→ナデ。		54	
1㎜以下の石英・チャート含む	外面：底部ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：底部～体部ヘラナデ。		54	
0.5㎜以下のチャート・雲母含む	外面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。	外面煤付着	54	
3㎜以下の石英・チャート・長石含む	外面：脚部ヘラミガキ→脚端部横ナデ。 内面：脚部指ナデ。体部ナデ。		54	39
1㎜以下の石英・チャート多量に含む	外面：体部磨滅。口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		54	
1.5㎜以下のチャート・石英含む	外面：脚部ハケ→ヘラミガキ→体部ヘラミガキ→口縁部ナデ→横ナデ。 内面：脚部横ナデ。体部ナデ→口縁部横ナデ。		54	39
3㎜以下のチャート・長石含む	外面：脚部ヘラナデ→脚端部横ナデ。 内面：脚部横ナデ。		55	
2㎜以下のチャート・石英多く含む	外面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部～口縁部ナデ。		55	39
0.5㎜大の石英・長石含む	外面：体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラナデ→口縁部横ナデ。		55	
1.5㎜以下のチャート・長石含む	外面：体部叩き成形→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→口縁部横ナデ。		55	
1㎜以下のチャート・石英含む	外面：体部叩き成形→ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ハケ→体部上半ヘラナデ→口縁部横ナデ。		55	39
1㎜以下のチャート・長石含む	外面：体部叩き成形→ナデ。 内面：底部～体部ヘラミガキ。		55	

第2節　西延末遺跡の調査

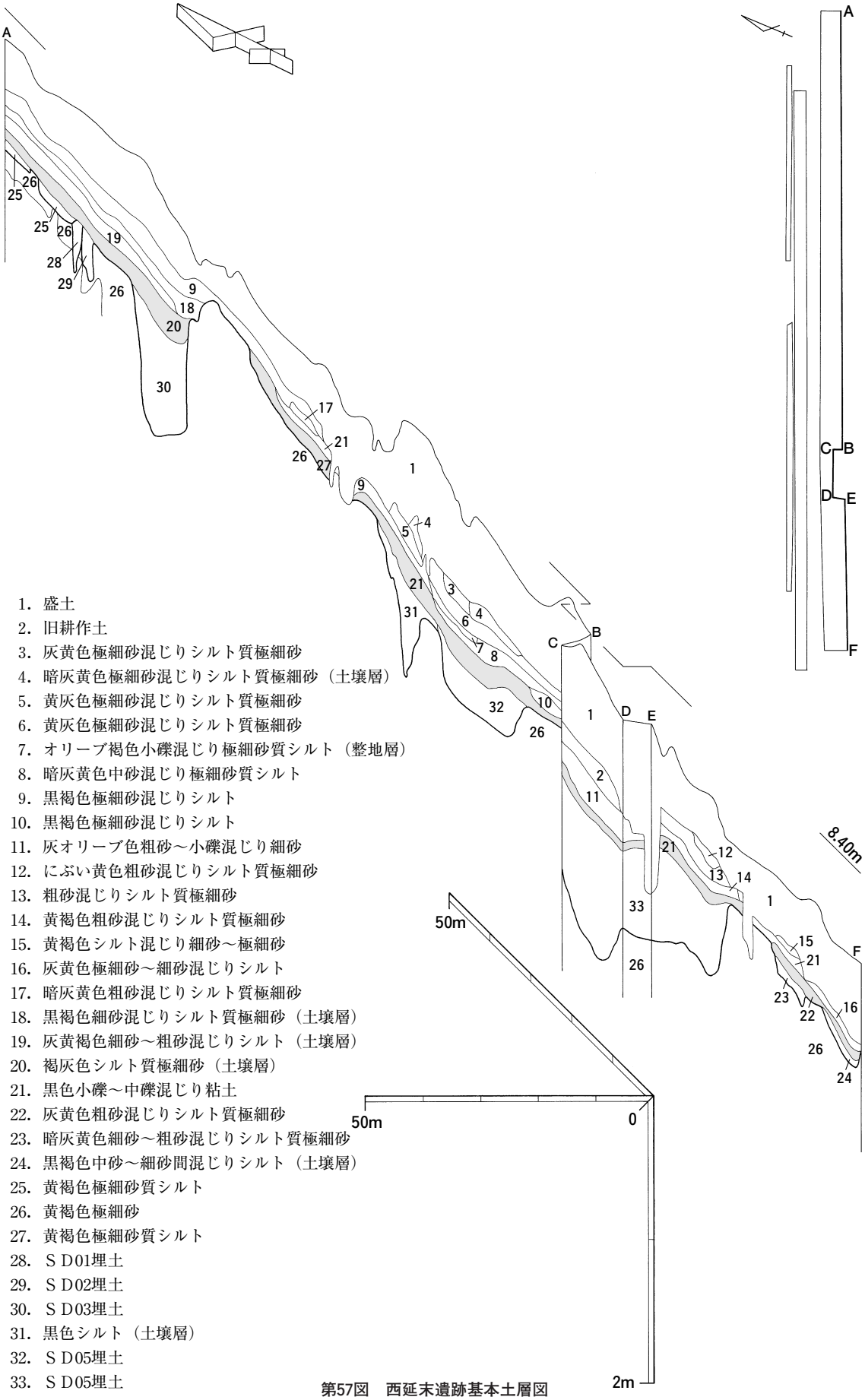
1．調査の概要

はじめに　調査は、先述したとおり（第2章第3節）、工事工程に合わせて実施した。この結果、3次（第1次調査～第3次調査）にわたって行われている（第56図）。ただし、これらの調査地は互いに隣接するものであり、検出した遺構の多くは隣接する調査地にまたがって検出されている。以上から、本遺跡の報告に関しては、調査次ごとではなく一括して報告していくことにする。このため、出土遺物に関しても、調査次に関係なく、遺構単位で報告していく。

調査位置　調査地は、手柄山の北側に位置する。第5図で復元した微地形図によると、北東－南西方向にのびる微高地の南東側縁辺部にあたる。



第56図　西延末遺跡調査位置図



1．盛土
2．旧耕作土
3．灰黄色極細砂混じりシルト質極細砂
4．暗灰黄色極細砂混じりシルト質極細砂（土壌層）
5．黄灰色極細砂混じりシルト質極細砂
6．黄灰色極細砂混じりシルト質極細砂
7．オリーブ褐色小礫混じり極細砂質シルト（整地層）
8．暗灰黄色中砂混じり極細砂質シルト
9．黒褐色極細砂混じりシルト
10．黒褐色極細砂混じりシルト
11．灰オリーブ色粗砂～小礫混じり細砂
12．にぶい黄色粗砂混じりシルト質極細砂
13．粗砂混じりシルト質極細砂
14．黄褐色粗砂混じりシルト質極細砂
15．黄褐色シルト混じり細砂～極細砂
16．灰黄色極細砂～細砂混じりシルト
17．暗灰黄色粗砂混じりシルト質極細砂
18．黒褐色細砂混じりシルト質極細砂（土壌層）
19．灰黄褐色細砂～粗砂混じりシルト（土壌層）
20．褐灰色シルト質極細砂（土壌層）
21．黒色小礫～中礫混じり粘土
22．灰黄色粗砂混じりシルト質極細砂
23．暗灰黄色細砂～粗砂混じりシルト質極細砂
24．黒褐色中砂～細砂間混じりシルト（土壌層）
25．黄褐色極細砂質シルト
26．黄褐色極細砂
27．黄褐色極細砂質シルト
28．ＳＤ01埋土
29．ＳＤ02埋土
30．ＳＤ03埋土
31．黒色シルト（土壌層）
32．ＳＤ05埋土
33．ＳＤ05埋土

第57図　西延末遺跡基本土層図

2. 調査の成果

(1) 基本層序と遺構の検出

基本層序

調査が3次に及ぶため、調査範囲が最も広い第1次調査南側断面をもとに報告する。3次の調査区ともたがいに隣接するため、基本土層に大きな違いは認められない。基本層序としては、上から、盛土層・耕作土層・床土層・土壌層・基盤層の層序が認められた（第57図）。

盛土層は、ＪＲ山陽本線下にあたる第1次調査区で顕著である。平均して60cmから80cmの厚さが認められた。耕作土層は、一部で認められるものの、多くは山陽本線建設により削平されていた。ただし、第2次・第3次調査では、全域で耕作土層が残存していた。

床土層は、堆積→耕作土→床土層が数次にわたって繰り返された層である。一部の層では、整地により形成されたものも認められた。シルト質極細砂を基本とする層で、顕著ではないが、土壌化が認められる。

土壌層は、いわゆる遺物包含層と称される層に相当するもので、ほぼ全域で認められた。基本的には、基盤層が土壌化した層である。10cmから20cmの厚みが認められた。

基盤層は、黄褐色極細砂を基本とするが、部分的に礫層が基盤となっている箇所も認められる。特に西端部で顕著である。

遺構の検出

遺構は、土壌層下面の1面で検出している。遺構面は平坦ではなく、東から西方向に低くなっている。その標高は、東端部で7.42m、西端部で7.20mである。

第58図　調査風景

(2) 調査の成果

竪穴住居跡・柱穴・墓・土坑・溝を検出している（第59図）。

Ⅰ：竪穴住居跡

ＳＨ01

検出状況　第1次調査Ⅱ区東端部で検出した（第59図）。検出できたのは全体の約1/4に限られ、第3次調査でも検出できなかった。また、他の遺構との切り合い関係は認められない。

なお、当住居跡は確認調査で明らかとなったものである。ところで、第1次調査区と第3次調査区は近接するものの、結果として面的に連続して調査することが出来なかった。そして、この調査できなかった区域の一部に確認調査のトレンチが及んでいる。そこで、確認調査の結果を第60図の南隅に実線と点線で復元している。

形状・規模　平面形は隅丸方形をなすものと考えられる（第60図）。ほぼ南北方向に主軸をとり、主軸方向で3.55m、その直交方向で5.25mと復元される。床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは20cmを測り、その標高は7.25mを測る。

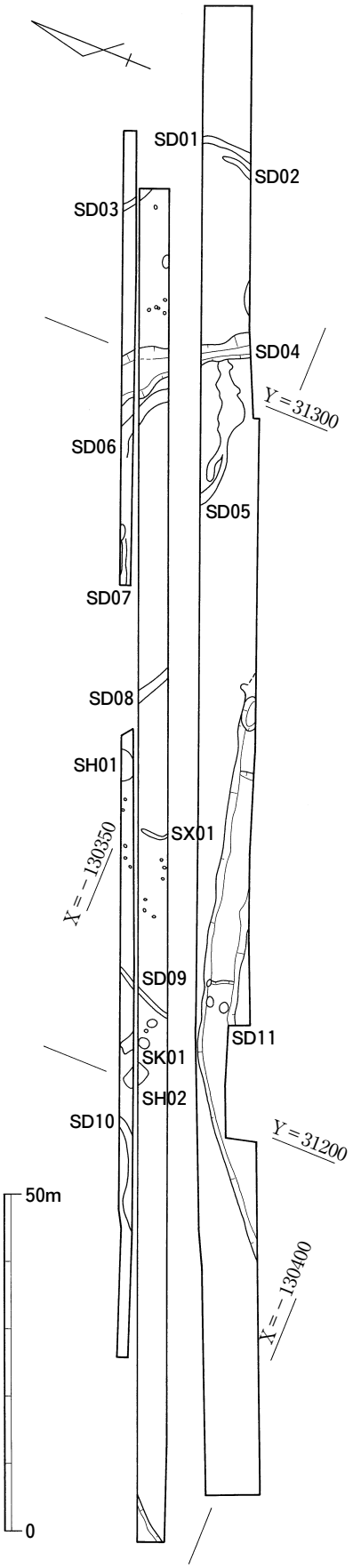
付属施設　主柱穴・周壁溝・土坑を検出している。

主柱穴　1穴検出している。平面形は36cm×43cmの楕円形を呈し、床面からの深さは26cmを測る。当柱穴の位置から判断して、本住居跡の主柱穴は、2本柱であった可能性が高い。

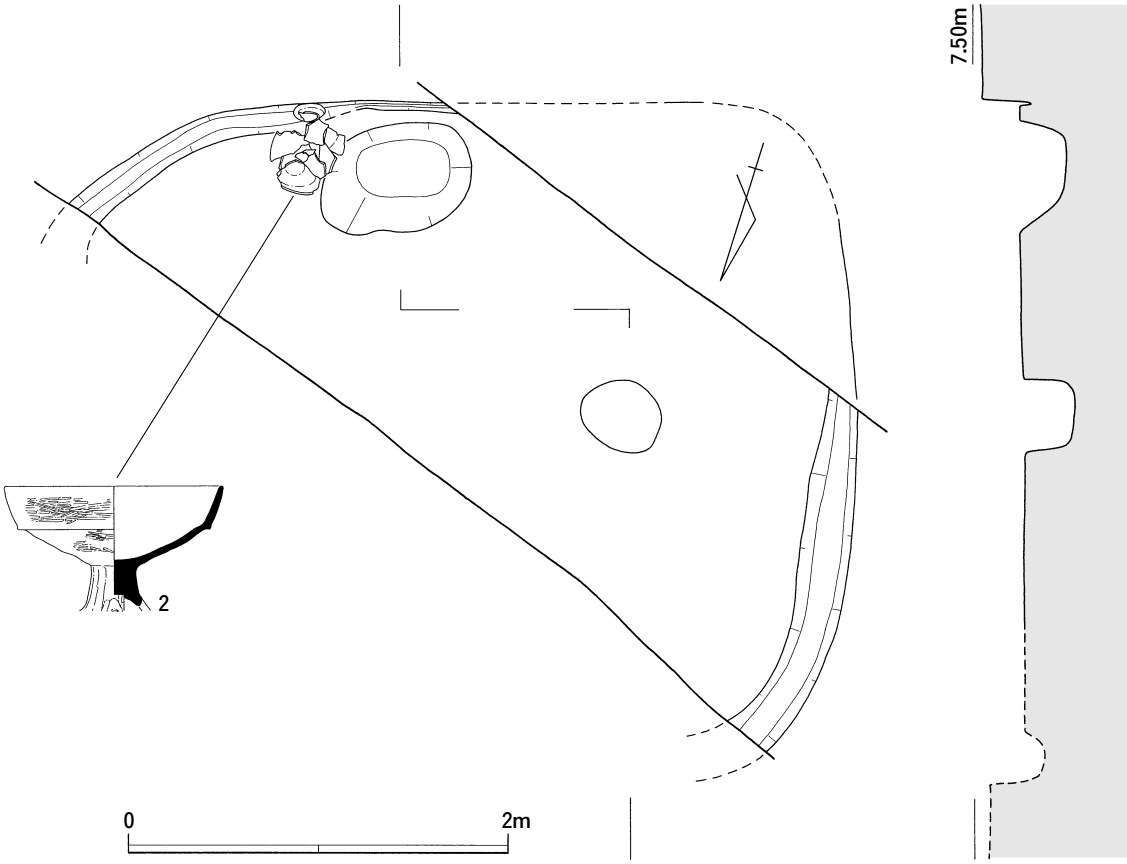
周壁溝　住居跡を検出した範囲では全周する。横断面はＶ字形からＵ字形をなし、床面における幅は5cm～26cm、床面からの深さ6cmを測る。

土　坑　住居跡南辺中央付近で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、その主軸方向は住居址の主軸とほぼ一致する。床面における規模は、主軸方向で78cm、その直交方向で57cmを測る。また、横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは23cmである。なお、土坑内からは土器等は出土していない。

出土遺物　土坑東側床面上で、高坏(2)など数個体分の土器が出土している（第74図）。この他、埋土中から



第59図　平面図



第60図　ＳＨ01

数点出土している。器種としては、壺と高坏が出土している。なお、土坑東側床面上から出土した土器のなかで図化できたのは、2の1点に限られる。

壺　1の直口壺1点が出土している。球形の体部に口縁部が斜方向に短く直線的にのびている。体部外面はヘラミガキ、口縁部外面は縦方向のハケ調整後ヨコナデ調整により仕上げられている。体部内面は、上半がナデ調整、口縁部がヨコナデ調整により仕上げられているが、体部中位は磨滅のため観察できない。

高坏　2と3の2個体を図化することができた。

2は、坏部を中心に残存する。脚部は上部のみ残存し、外面は縦方向のヘラ削りにより仕上げられている。また、円形の透かし穴の一部が残存し、その位置関係から4箇所にあったものと復元できる。坏部は、体部と口縁部の境外面が突帯状をなし、口縁部の器壁がより厚くなっている。体部・口縁部ともに外面は横方向のヘラミガキにより仕上げられている。内面の調整は磨滅のため観察できない。

3も坏部を中心に残存する小型の高坏である。坏部は、体部に対して口縁部がヨコナデ調整によりつくり出されている。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期初頭と考えられる。

ＳＨ02

検出状況　第1次調査と第3調査で検出した（第59図）。第1次調査では、土坑として調査を進めて行った。これに対して、第3次調査では住居址として調査を進めていった。その後、両調査の成果を図上で合成した結果、一つの遺構であると判断したものである。そして、第3次調査での認識に基づき、住居跡として報告する。

当住居跡は、図上ではほぼ全体の規模･形状を復元することができた。しかし、第1次調査と第3次調査の境界部については、結果として調査はできなかった。

形状・規模　平面形は隅丸方形をなす（第61図）。ほぼ南北方向に主軸をとり、主軸方向で2.62m、その直交方向で3.43mと復元され、両者を基準とした面積は8.98㎡である。床面はほぼ平坦で、検出面からの深さは23㎝を測り、その標高は7.26mを測る。

付属施設　主柱穴と周壁溝を検出している。

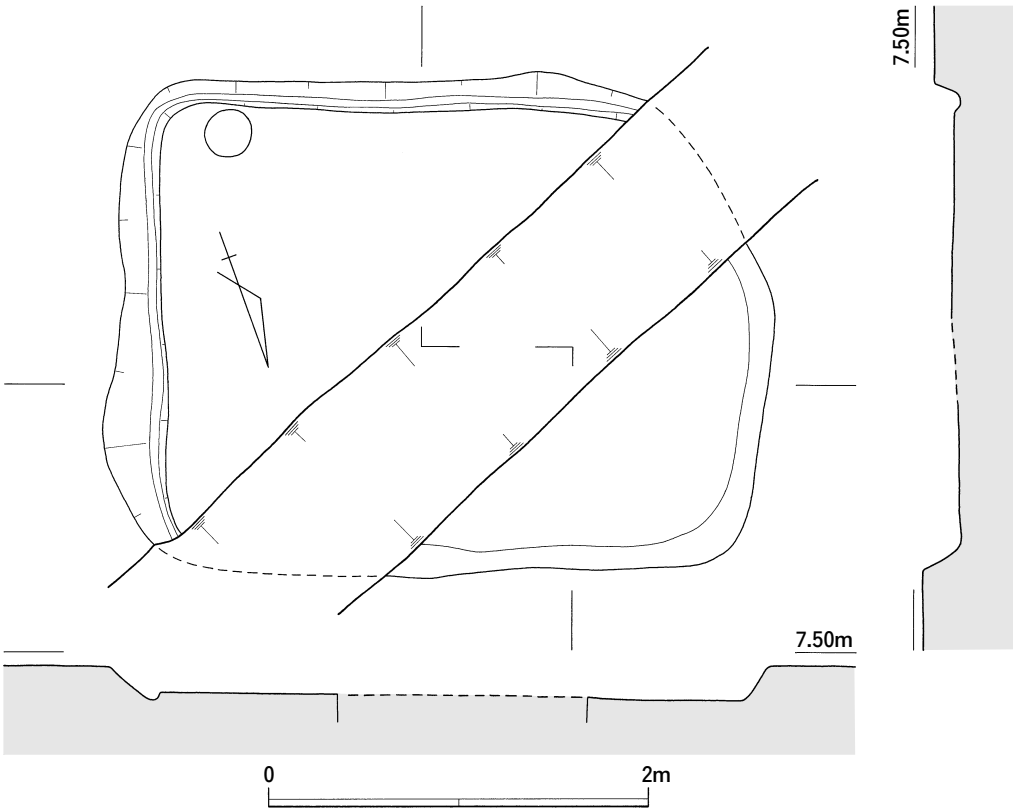
主柱穴　南隅で1穴検出している。平面形は径25㎝の円形をなし、床面からの深さは6㎝を測る。当柱穴の位置から判断して、本住居跡の主柱穴は、4本柱であった可能性が高い。

周壁溝　第3次調査で検出した範囲では全周する。第1次調査では検出できなかった。横断面はU字形をなし、床面における幅は5～10㎝、床面からの深さ3㎝を測る。

出土遺物　甕（4）・小型丸底壺（5）・椀（6・7）が出土している（第74図）。

甕　庄内式に分類されるもので、口縁端部はわずかに上方につまみあげられている。体部外面はハケ調整、内面はヘラ削りにより仕上げられ、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。胎土の特徴は、在地産の製品である。

この他、布留式甕の口縁部片が主柱穴内から出土している。



第61図　ＳＨ02

小型丸底壺　5の1個体が出土している。完形に近いものであるが、内外面とも磨滅が著しく、調整の観察は不可能である。この中で、底部外面はヘラナデ調整により仕上げられている。

椀　6と7の2個体が出土している。比較的小型の製品で、底部は丸底に近い形態をなす。体部内外面はナデ調整、口縁部内外面は横ナデ調整により、仕上げられている。

時期　出土土器から判断して、布留式初頭と考えられる。

Ⅱ：柱穴

約20穴検出したが、建物を復元することはできなかった。また、埋土中から時期の特定できる遺物が出土した柱穴も認められなかった。このため、上記の柱穴の時期を特定することは困難である。

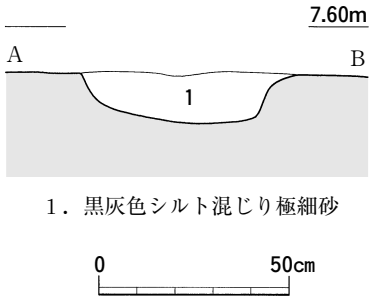
Ⅲ：墓

ＳＸ01

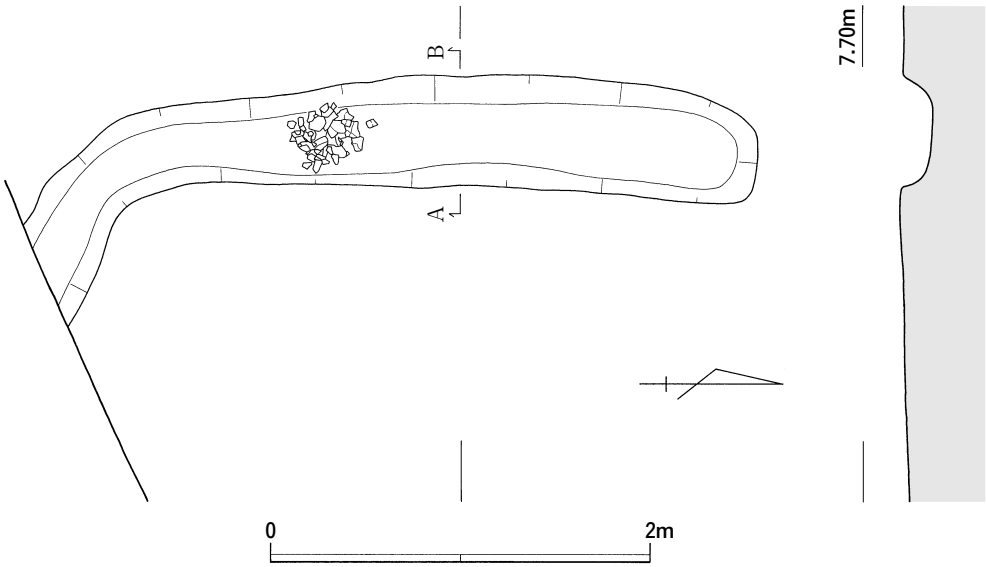
検出状況　第3次調査で検出した（第59図）。直線的にのびる溝の南端部が直角気味に屈曲している（第63図）。この形状、および溝内からの土器の出土状況から、方形周溝墓の可能性が高いものと判断し、ここに墓として報告する。このため、検出できたのは西辺の一部とコーナー部分に限られる。東辺については、削平を受けたものと考えている。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　全体の形状を復元することはできないが、ほぼ南北方向に主軸をとる。検出した西辺の長さは3.30ｍを測り、検出面における幅は43㎝～57㎝である（第63図）。南西隅の幅が狭くなる傾向が認められる。また、西辺東側のラインが西側に比べて直線的である。

横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは13㎝である。また、西側ほど溝底部からのた



第62図　ＳＸ01周溝断面



第63図　ＳＸ01

ち上がりが急な傾向が認められる。

埋没状況　黒灰色シルト混じり極細砂1層からなる（第62図）。礫を含む層で、人為的に埋められている。

出土遺物　弥生時代後期の壺と高坏が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。

Ⅳ：土坑

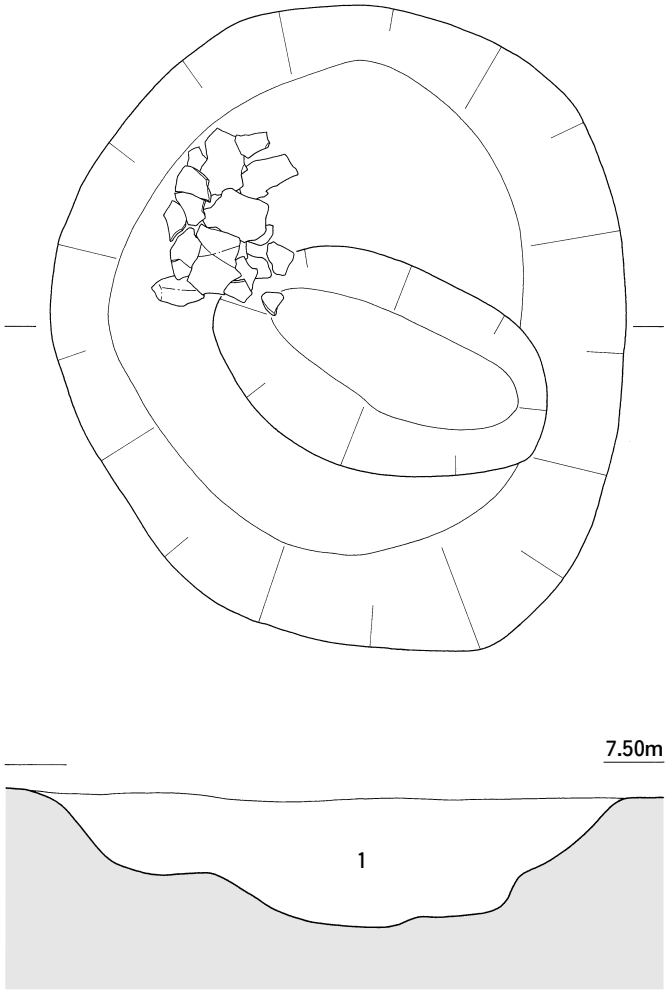
ＳＫ01

検出状況　第3次調査南部で検出した（第59図）。ＳＨ02の東側、ＳＤ09の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は円形に近い楕円形を呈する。主軸方向で1.70m、その直交方向で1.53mを測る。2段にわたり掘り込まれ、横断面は2段とも逆台形をなす。最深部における検出面からの深さは34cmである。

埋没状況　暗灰色細砂混じりシルト1層からなる（第64図）。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土坑底部北隅に土器片が集中して出土している。大型の壺と考えられるが、体部片のみで、1個体分としては不足するものである。



第64図　ＳＫ01

時期　出土土器から、弥生時代後期に位置付けられる。

Ｖ：溝

ＳＤ01

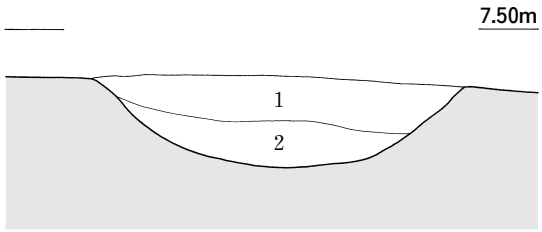
検出状況　第1次調査東部で検出した（第59図）。ＳＤ02の東側に位置する。わずかに南北方向に弧状をなす溝で、両端とも調査区外にのびている。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出した長さは7.70ｍである。検出面における幅は、90～98㎝を測る。横断面は緩やかな逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは25㎝である。

埋没状況　2層からなる（第65図）。両層に、炭片が含まれていた。自然堆積により埋没している。

出土遺物　弥生土器の細片が出土している。

時期　弥生時代に位置付けられる。



1．灰黄褐色極細砂混じりシルト
2．灰黄褐色粗砂混じりシルト

0　1m

第65図　ＳＤ01断面

ＳＤ02

検出状況　第1次調査東部で検出した（第59図）。ＳＤ01の西側に位置し、ＳＤ01とほぼ平行している。わずかに南北方向に弧状をなす溝で、北端は調査区内で収束し、南端は調査区外にのびている。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出した長さは5.00ｍである。検出面における幅は、80㎝を測る。横断面は緩やかなＶ字形をなし、最深部における検出面からの深さは14㎝である。

埋没状況　暗灰黄色細砂混じりシルト1層からなる。

出土遺物　弥生土器の甕底部1点（12）が出土している（第74図）。形態から中期の甕と考えられるが、内外面の調整は磨滅のため観察できない。

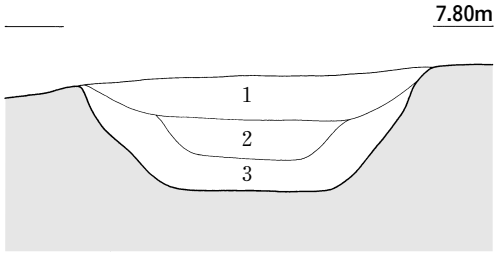
時期　出土土器から、弥生時代中期と考えられる。

ＳＤ03

検出状況　第1次調査北部と第3次調査北部で検出した（第59図）。ＳＤ01･ＳＤ02の西側に位置する。わずかに南北方向に弧状をなす溝で、両端とも調査区外にのびている。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出した長さは5.50ｍである。検出面における幅は、93㎝を測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは31㎝である。

埋没状況　3層からなる（第66図）。3層とも人為的に



1．褐灰色粗砂～小礫混じりシルト質細砂
2．オリーブ灰色細砂
3．暗灰黄色細砂

0　1m

第66図　ＳＤ03断面

埋められ、その後第1層が土壌化している。

出土遺物　時期を特定できる遺物は出土していない。

時期　上記の理由から、時期の特定は困難である。

ＳＤ04

検出状況　第1次～第3次調査の東部で検出した（第59図）。ＳＤ05･ＳＤ06の東側に位置し、ＳＤ06とはほぼ平行している。また、ＳＤ05とは切り合い関係にあり、ＳＤ05を切っている。ほぼ直線的な溝で、両端とも調査区外にのびている。

形状・規模　検出した長さは、第2次と第3次の未調査部分を含めて、20ｍである。検出面における幅は、3.10ｍ～5.70ｍを測る。横断面は緩やかな逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは45㎝～90㎝である。底部の標高は、南端部で6.90ｍ、北端部で6.80ｍを測り、北側へ傾斜している。

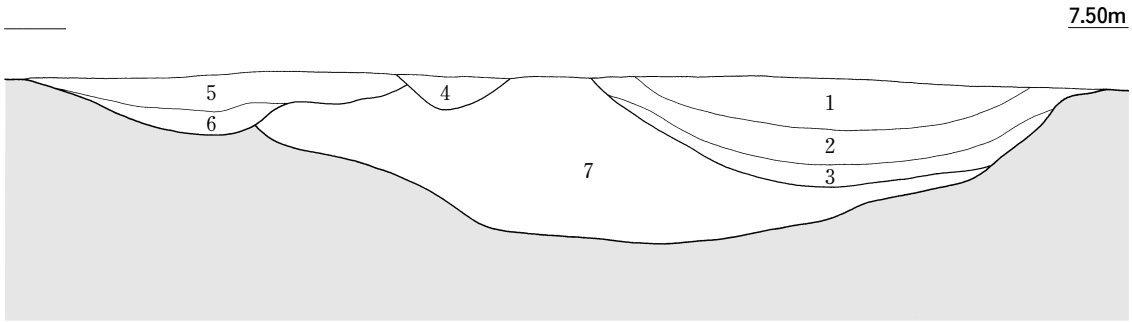
埋没状況　調査区により、その埋没状況が異なる。ここでは、最も良好に観察できた第3次調査の成果を報告する（第67図）。

当溝は、当初大規模な溝であったが、洪水堆積（第7層）による埋没後、3回の再掘削→埋没が認められる。一つは、第3層下面のラインまで掘削され、その後第1層～第3層が自然堆積により埋没し土壌化している。もう一つは、第6層下面のラインまで掘削され、第6層と第5層が埋没している。第6層は洪水に起因する埋没であるが、第5層については人為的に埋められたものである。第5層中には20～30㎝大の円礫が埋められていた。三つ目は、第4層下面のラインで、第4層が埋没している。この層も人為的に埋められた層で、当層の埋没をもって、当溝が完全に埋没している。

なお、前2者の前後関係については、調査では明らかにできなかった。

出土遺物　弥生土器と須恵器が出土している（第74図）。

弥生土器　鉢と甕が出土している。鉢は8の1個体が出土している。把手付きの鉢で、体部に半環状



1．暗灰色中細砂混じりシルト（土壌層）
2．黒灰色中砂混じりシルト（土壌層）
3．暗青灰色シルト混じり中細砂
4．黒褐色シルト混じり細砂～粗砂
5．暗灰色シルト混じり中細砂
6．暗灰色細砂混じりシルト（洪水堆積）
7．暗灰色シルト混じり暗青灰色細砂～粗砂（洪水堆積）

0　2m

第67図　ＳＤ04断面

の把手が縦方向に貼り付けられている。断面は扁平気味である。体部内外面は縦方向のヘラミガキにより仕上げられ、口縁部外面には6条の凹線文が施されている。

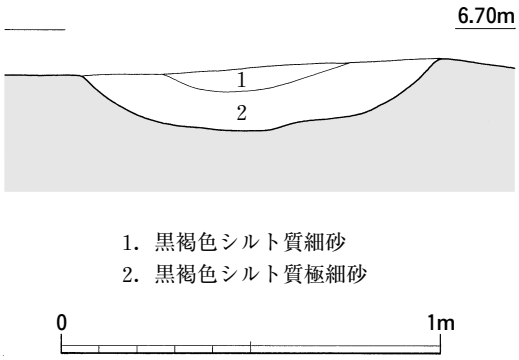
甕は9と11の2個体が出土している。9は、体部内面がヘラ削り後ナデ調整により、外面がハケ調整により仕上げられている。11はＶ様式系の甕で、底部外面も叩き成形後ハケ調整により仕上げられている。体部外面についても、叩き成形後、部分的にハケ調整が加えられている。

須恵器　10の壺1個体が出土している。端部を大きく巻き込み、玉縁状を呈する。

時期　出土土器から、弥生時代中期と考えられる。

ＳＤ05

検出状況　第2次調査の東部で検出した（第59図）。ＳＤ04の南西側に位置する。ＳＤ04と切り合い関係にあり、ＳＤ04に切られている。弧状をなす溝で、東側はＳＤ04と切り合い、西端部は2条に分岐し、一方は調査区外へ延び、他方は調査区内で収束している。ただし、第3次調査ではこの延長を検出することはできなかった。



第68図　ＳＤ05断面

形状・規模　検出した長さは21ｍである。検出面における幅は、一定せず、95㎝～3.80ｍを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは17㎝である。底部の標高は、東端部で7.00ｍ、西端部で7.50ｍを測り、西側へ傾斜している。

埋没状況　2層からなる（第68図）。両層とも堆積後、顕著に土壌化している。

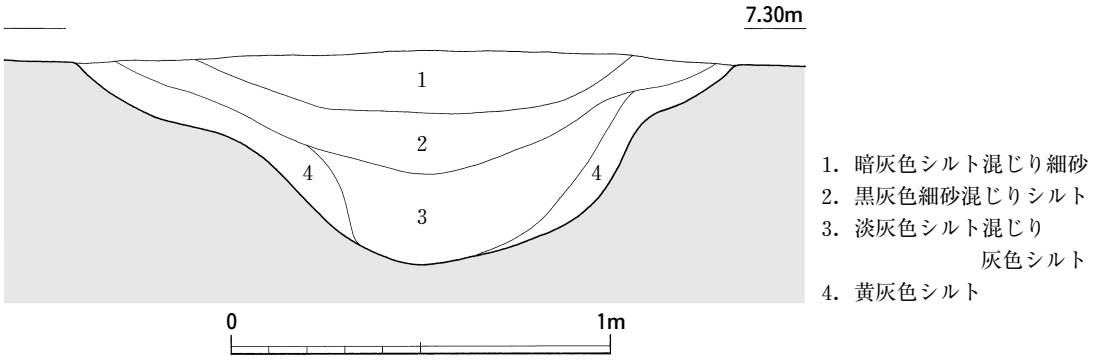
出土遺物　13の水差形土器が出土している（第74図）。脚部から肩部にかけて残存する。体部上半には把手が貼り付けられていた可能性が考えられる。脚部はナデ調整と指オサエにより仕上げられている。体部は、内面が指ナデ調整により、外面が縦方向のハケ調整により仕上げられている。その後、外面下半はヘラミガキにより仕上げられ、上半には頸部付近から櫛描直線文・櫛描波状文・櫛描直線文・櫛描波状文・櫛描直線文・列点文が施されている。櫛描文は9本～11本を単位とし、波状文の後直線文が施されている。

時期　出土土器から、弥生時代中期と考えられる。

ＳＤ06

検出状況　第1次調査と第3次調査で検出した。ＳＤ04の西側にあたり、ＳＤ04とほぼ平行する（第59図）。他の遺構との切り合い関係は認められない。弧状をなす溝で、北西側は調査区外へ延び、第3次調査区外へのびている。ただし、第2次調査ではこの延長を検出することはできなかった。

形状・規模　検出した長さは11.5ｍである。検出面における幅は、1.73ｍを測る。当溝は二段に掘り込まれ、その横断面は、上段が皿形、下段が逆台形をなす。最深部における検出面からの



第69図　ＳＤ06断面

深さは56㎝である。底部の標高は、西端部で7.02ｍ、南端部で6.71ｍを測り、南側へ傾斜している。

埋没状況　4層からなるが（第69図）、埋立て→再掘削が行われている。まず、全体を掘削後第4層をもって埋められている。その後第3層下端のラインまで再掘削が行われている。その後、再び第3層をもって埋められている。最後に、第1層と第2層が自然に堆積している。その後顕著に土壌化したのが第1層である。

出土遺物　甕が1個体（14）出土している（第74図）。弥生中期の特徴を示す甕で、体部外面に縦方向のヘラミガキがわずかに観察することができる。

時期　出土土器から、弥生時代中期と考えられる。

ＳＤ07

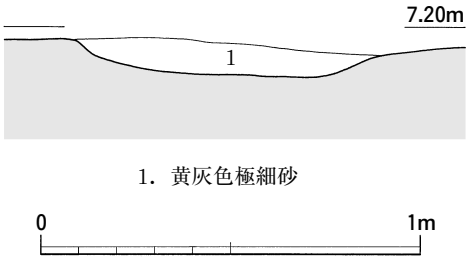
検出状況　第1次調査東区の西端部で検出した（第59図）。東西方向にほぼ直線的にのびる溝で、東側は調査区内で収束し、西側は調査区外へのびている。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出した長さは、6.50ｍである。検出面における幅は80㎝を測る。横断面は浅い逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは8㎝である。底部の標高は7.57ｍとほぼ一定している。

埋没状況　黄灰色極細砂1層からなる（第70図）。層相から判断して、自然に埋没したものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時期　上記の理由から、時期の特定は困難である。



第70図　ＳＤ07断面

ＳＤ08

検出状況　第3次調査で検出した（第59図）。調査区のほぼ中央部に位置し、北西－南東方向にほぼ直線的にのびる溝である。両端とも調査区外へのびているが、第2次調査では検出されなかった。また、他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出長は、5.50ｍを測る。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は1.20ｍ～1.50ｍを

測る。また、最深部における検出面からの深さは5～22㎝である。底部の標高は、北西端で7.32m、南東端で7.48mと南東側に傾斜している。

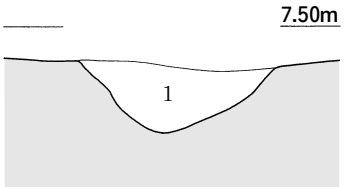
埋没状況　灰色シルト混じり細砂1層が堆積していた。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　近世の陶磁器が出土している（第74図）。このなかで図化できたのは15の備前焼の擂鉢1個体に限られる。内面の使用痕が顕著で、17世紀～18世紀に位置付けられるものである。

時期　出土土器から判断して、江戸時代と考えられる。

ＳＤ09

検出状況　第1次調査と第3次調査で検出した（第59図）。南北方向にほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区外へのびている。ただし、第2次調査ではこの延長部分は検出されていない。また、他の遺構との切り合い関係は認められない。



1. 黒褐色シルト混じり極細砂

第71図　ＳＤ09断面

形状・規模　検出長は、10.00mを測る。横断面はＶ字形に近く、検出面における幅は52㎝を測る。最深部における検出面からの深さは18㎝である。底部の標高は、両端で7.23mと一定している。

埋没状況　黒褐色シルト混じり極細砂1層が堆積していた（第71図）。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器片が出土している。

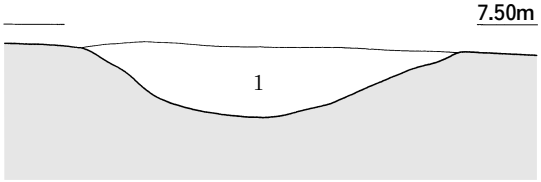
時期　出土土器から判断して、6世紀初頭と考えられる。

ＳＤ10

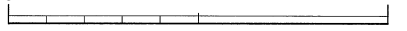
検出状況　第1次調査で検出した（第59図）。調査区南西部に位置する。南西－北東方向に蛇行気味にのびる溝で、両端とも調査区外へのびている。ただし、第3次調査ではこの延長部分は検出されていない。また、他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出長は、16.00mを測る。横断面は緩やかな逆台形をなし、検出面における幅は1.00mを測る。最深部における検出面からの深さは20㎝である。底部の標高は、7.24mである。

埋没状況　暗灰色中礫混じりシルト～極細砂1層からなる（第72図）。層相から、人為的に埋められたものと考えられる。



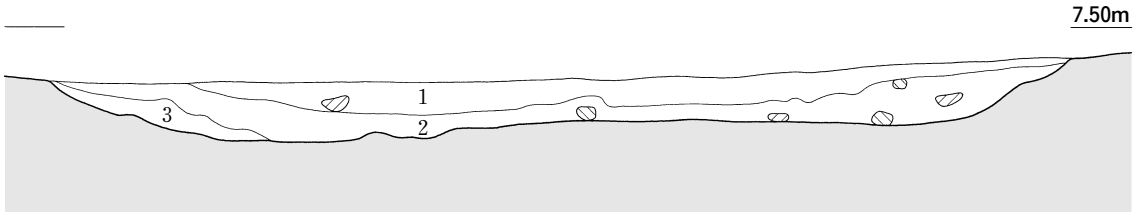
1. 暗灰色中礫混じりシルト～極細砂



第72図　ＳＤ10断面

出土遺物　須恵器の杯身1個体（16）が出土している（第74図）。底部の2/3にヘラ削りが施されている。口縁端部の特徴から、ＴＫ23型式に位置付けられる。

時期　古墳時代中期に位置付けられる。



1．黒褐色極細砂混じりシルト　　3．黒色細砂混じり粘土
2．黒灰色中礫混じり粘土

第73図　ＳＤ11断面

ＳＤ11

検出状況　第2次調査で検出した（第59図）。調査区西半部に位置する。弧状をなす溝で、両端とも調査区外へのびている。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出長は、70.00ｍを測る。横断面は緩やかな逆台形をなし、検出面における幅は5.35ｍを測る。最深部における検出面からの深さは21～30㎝である。底部の標高は、東端部で6.76ｍ、西端部で6.38ｍと西側へ傾斜している。

埋没状況　3層からなる（第73図）。3層とも湿地性の堆積層で、顕著に土壌化している。第2層を中心に中礫が少なからず含まれているが、流れ込みによるものと考えられる。

出土遺物　弥生土器と須恵器が出土している。層位的に、弥生土器は下層から、須恵器は上層から出土している。

弥生土器　壺・甕・鉢・高坏・器台の各器種が出土している（第75図・第76図）。

壺　広口太頸壺・広口壺・長頸壺・他が出土している。

広口太頸壺は17の1個体である。口縁部はく字形に屈曲し、端部を拡張し、明確な端面を有する。端面には2条の擬凹線が施されている。技法的特徴から、甕の可能性も考えられる。

広口壺は、直立する頸部から口縁部が短く外反するタイプで、18～20の3個体出土している。20は、内外面ともナデ調整により仕上げられ、口縁端部には3条の擬凹線が施されている。19は、口縁端部が口縁部に対して直交するナデ調整により、断面はコの字形をなす。さらに内端部を上方にわずかにつまみあげる横ナデ調整が施されている。18も、口縁端部は直交方向のナデ調整により断面コの字形をなすが、最後のわずかに上下方向にわずかにつまむような横ナデ調整が施されている。

長頸壺は21の1個体である。口縁部を中心に残存し、口縁部はわずかに外反し、端面を有する。端面は上下方向にわずかにつまみ出されている。頸部外面は、縦方向のハケ調整後同方向のヘラミガキが施されている。また内面は、横方向のハケ調整後、部分的にナデ調整が施されている。

直口壺は、31の1個体でほぼ完存する。底部は完全な丸底をなし、体部全体が球形をなす。口縁部は斜方向に直線的に伸び、端部はまるく収められている。体部内面は、下半を縦方向の、上半は横方向のヘラ削りが施されている。外面は全体的にハケ調整により仕上げられているが、頸部のみ横方向のナデが施されている。他より新しい傾向の土器である。

他に、体部下半のみ残存する22が出土している。底部は退化傾向にあるが、平底をなす。内面の仕上げは粗く、粘土紐の継目が顕著に観察される。

甕　3個体（23～25）図化することができた。いずれもＶ様式系甕に分類されるもので、外面は叩き成形により仕上げられている。25の底部は、ほぼ尖り底傾向にあるが、わずかに平底形態をなしている。24は、体部内外面とも最終的に縦方向の板ナデ調整が加えられている。また、底部は25同様、わずかに平底形態を留めている。なお、23と25については、胎土・色調等の特徴から、同一個体の可能性が高いものと考えている。

鉢　27の1個体を図化することができた。最大径27.7㎝におよぶ大型の鉢で、完形に復元することができた。底部は突出した平底をなすが、わずかに尖り底化の傾向が認められる。口縁部はく字形に屈曲し、端部はわずかに拡張され、2条の擬凹線が施されている。体部内外面にヘラミガキの痕跡をわずかに観察することができる。

高坏　4個体（26・28・29・33）図化することができた。26は、坏が皿形を呈するタイプである。口縁部を中心に残存し、内面はヘラ削り、外面はヘラミガキにより仕上げられている。端面は、外端部をつまむようなナデにより、凹線状をなす。

28は坏部が有稜形をなすタイプである。坏部下半の一部を除いてほぼ完形に復元できる個体である。脚部内面は、端部付近を中心にヘラ削り後ハケ調整により仕上げられている。外面はヘラミガキにより仕上げられている。また、脚部には円形の透かしが焼成前に3箇所穿たれている。坏部は、磨滅のため良好に観察できないが、内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。また、坏部と脚部の接合は接合法によっている。

29は有稜高坏に分類されるもので、口縁部を中心に残存する。口縁部外面には暗文状のヘラミガキが放射状に施されている。また、体部外面には横方向のヘラ削りが施されている。体部～口縁部にかけての内面についても、良好には観察できないが、ヘラミガキが施されたようである。

33は、坏部が直線的であるが、椀形に近いタイプで、坏部を中心に残存する。脚部は、いずれも縦方向の内面がヘラ削り、外面がヘラミガキにより仕上げられている。

器台　30の1個体を図化することができた。脚部･口縁部ともに大きく開くタイプで、完形に復元することができた。内面は横方向のヘラ削りにより仕上げられているが、その方向は、上半が右方向、下半が左方向である。外面は、磨滅のため調整を観察することはできない。また、筒部に円形の透かしが2段にわたり、それぞれ3箇所に施されている。口縁部は、端部を上下方向に拡張し、明確な端面を有する。

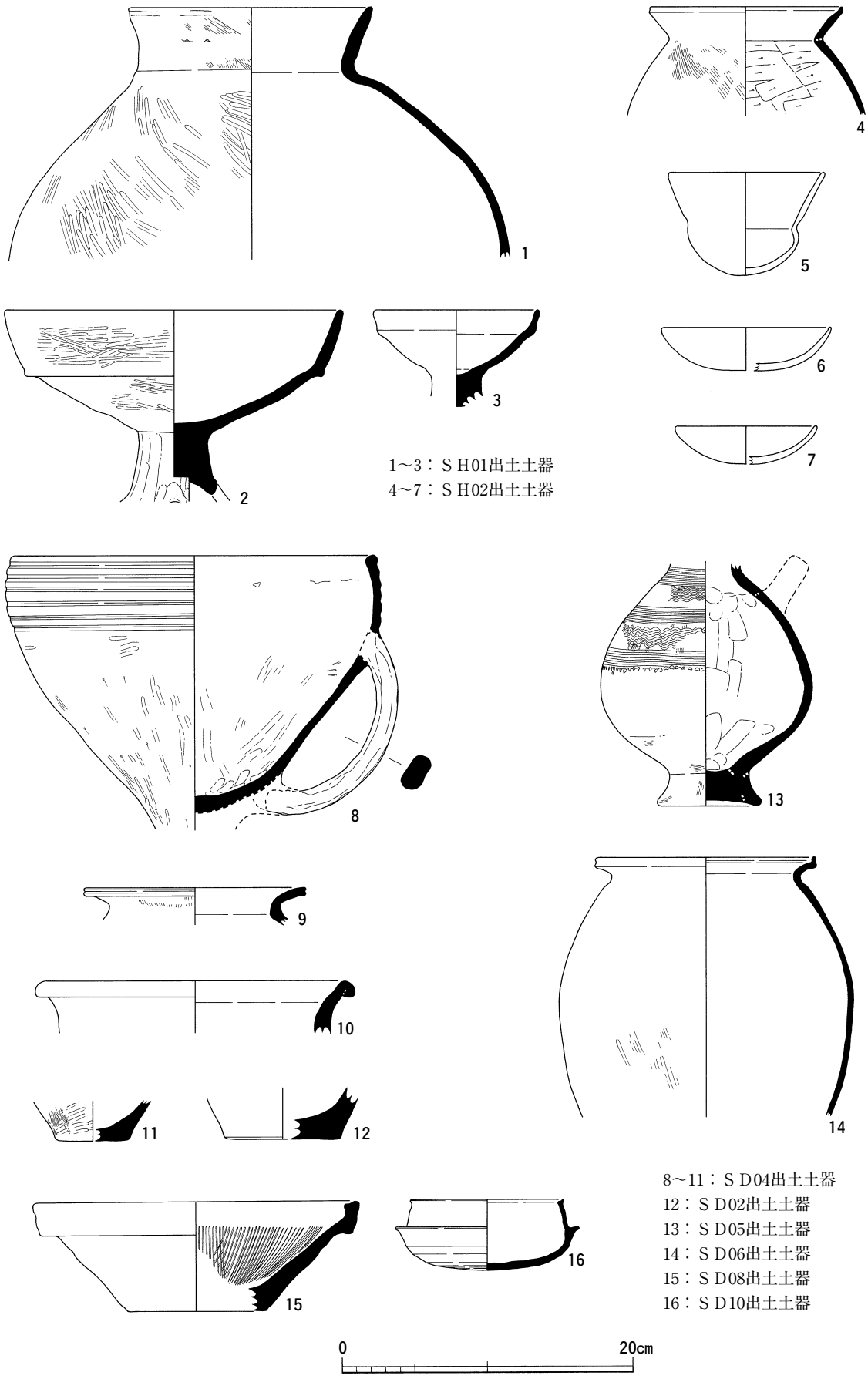
須恵器　杯蓋・把手・椀の各器種が出土している。

杯蓋は35と36の2個体である。36は天井部がヘラ切り後未調整で、口径が10.7㎝であることから、ＴＫ217型式に位置付けられる。35は天井部の2/3強にヘラ削りが施されており、ＴＫ10～ＴＫ43型式に位置付けられる。

把手は34の1点である。把手のみの残存である。把手断面は方形傾向にある。

椀は38の1個体で、底部を中心に残存している。底部は平底をなし、回転糸切りにより切り離されている。11世紀後半に位置付けられるものと考えられる。

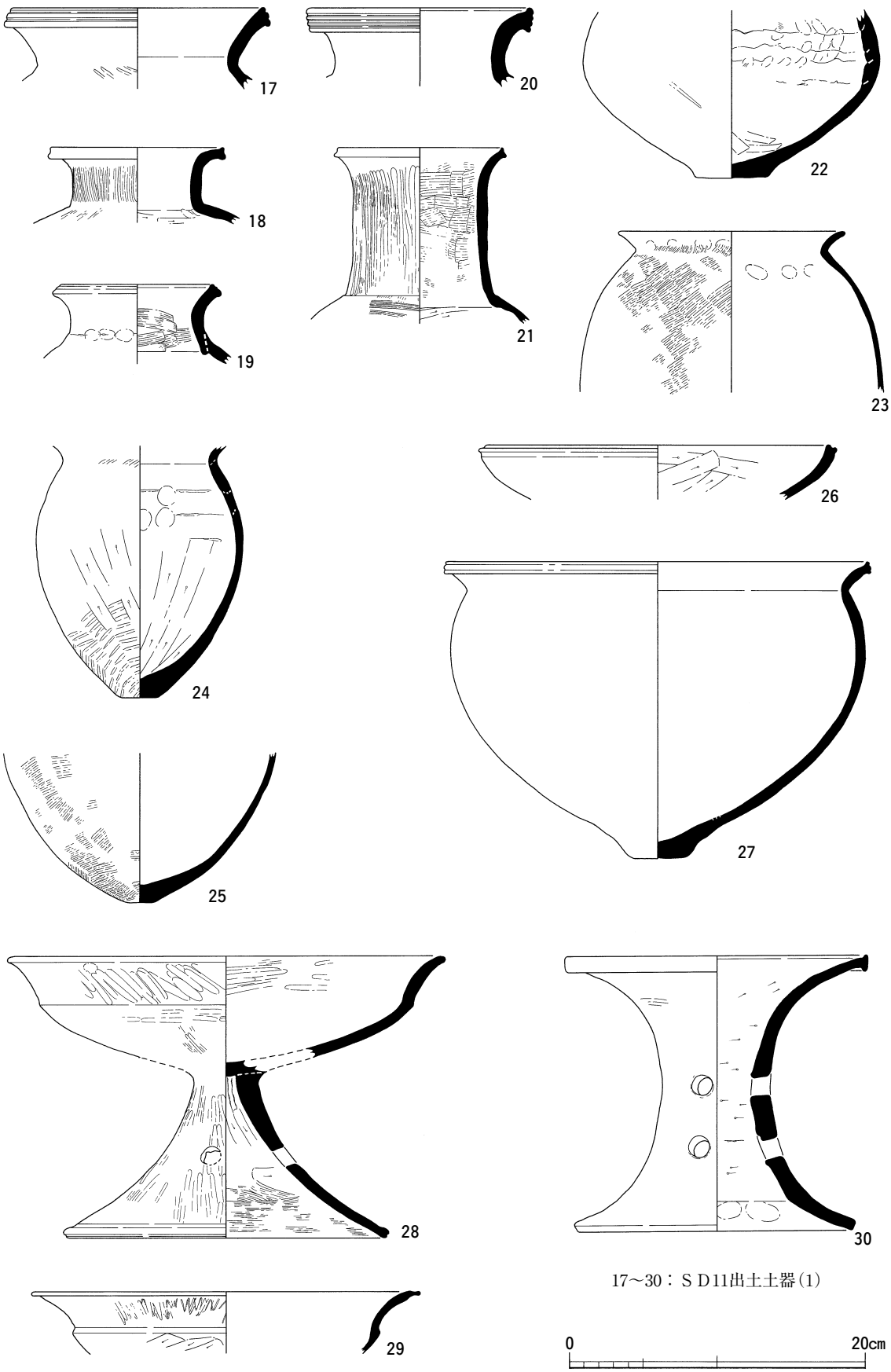
時期　出土土器から判断して、弥生時代後期には掘削され、古墳時代以降に徐々に埋没したものと考えられる。



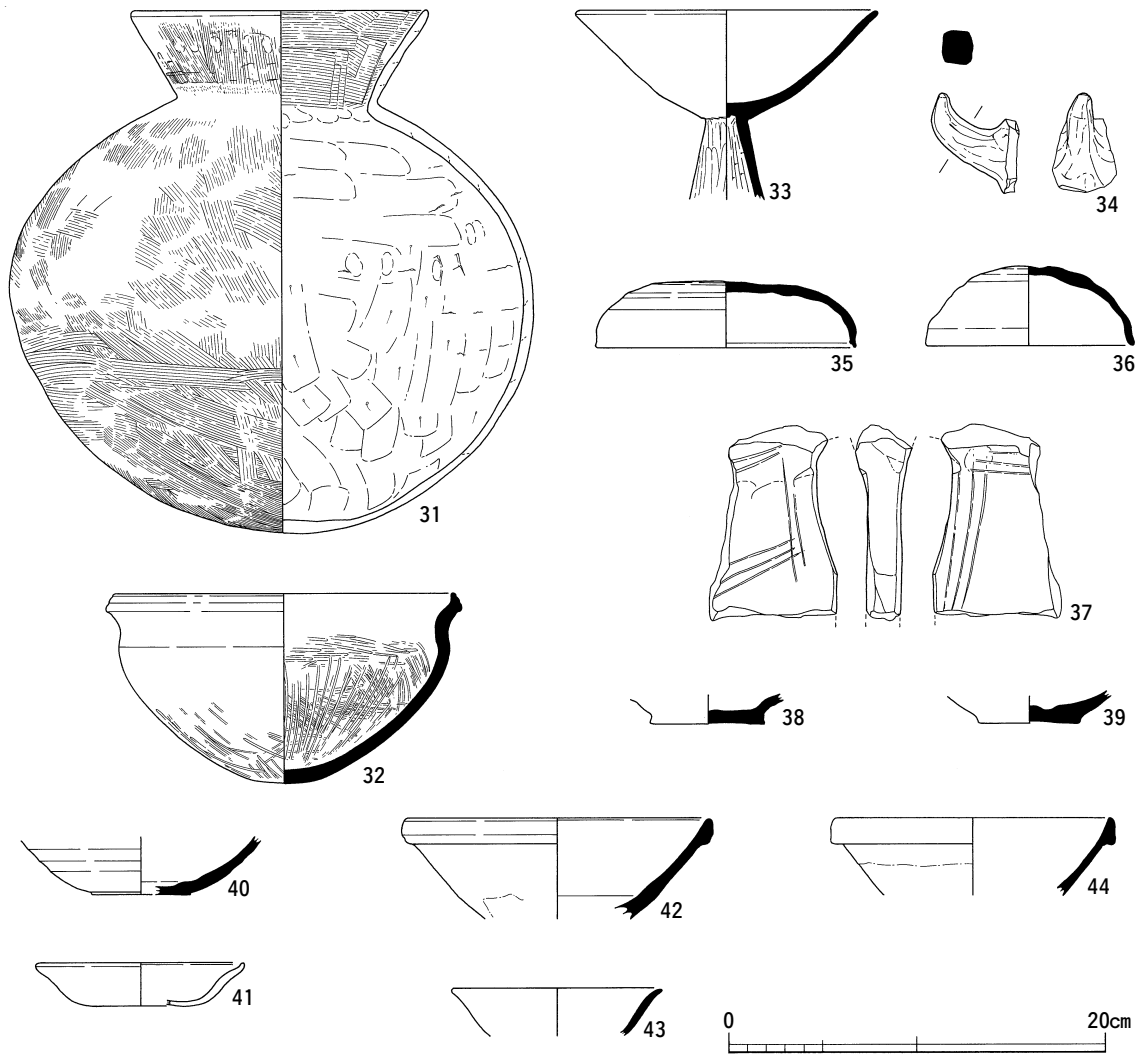
1～3：ＳＨ01出土土器
4～7：ＳＨ02出土土器

8～11：ＳＤ04出土土器
12：ＳＤ02出土土器
13：ＳＤ05出土土器
14：ＳＤ06出土土器
15：ＳＤ08出土土器
16：ＳＤ10出土土器

第74図　西延末遺跡出土土器(1)



第75図　西延末遺跡出土土器(2)



31・33～36・38：ＳＤ11出土土器(2)　32・37・39～44：包含層出土土器

第76図　西延末遺跡出土土器(3)

Ⅵ：包含層

出土遺物　形象埴輪（37）と中世土器が出土している。

須恵器　形象埴輪は、37の1点が出土している（第76図）。家形埴輪の一部で、外面にヘラ描が認められる。

中世土器　須恵器・土師器・白磁が出土している（第76図）。

須恵器　椀と捏鉢が出土している。椀は38～40の3点が出土している。いずれも底部を中心に残存する個体で、38と39は11世紀代の、40は12世紀代の特徴を示している。

土師器　41の皿が出土している。手づくねにより成形されている。口縁部は横ナデ調整により仕上げられている。

白　磁　3点（42～44）出土している。42と44はⅣ類に分類されるものである。

第16表　西延末遺跡出土土器観察表(1)

No.	種　別	器　種	調査次数	遺構名	法量(cm)				残存状況	色　　調	焼成
					口径	器高	最大径	底径			
1	弥生土器	壺	第1次	ＳＨ01	16.4	17.4			口縁部2/3 体部1/3	灰白～浅黄橙	
2	弥生土器	高坏	第1次	ＳＨ01	22.8	13.1			口縁部2/3	暗灰黄～にぶい黄橙	
3	弥生土器	高坏	第1次	ＳＨ01	11.2	6.6			口縁部1/3	灰白～浅黄橙	
4	弥生土器	甕	第3次	ＳＨ02	13.1	7.45			口縁部1/9	赤橙～黒褐	
5	土師器	小型 丸底壺	第3次	ＳＨ02	10.55	7.05			3/4	灰白	
6	土師器	椀	第3次	ＳＨ02	11.4	3			1/8	にぶい黄橙～灰黄	
7	土師器	椀	第3次	ＳＨ02	9.5	2.6			1/4	にぶい黄橙～灰白	
8	弥生土器	鉢	第2次	ＳＤ04	24.5	18.7	25.5		口縁部1/2	浅黄橙	
9	弥生土器	甕	第3次	ＳＤ04	14.9	2.6			口縁部1/9	灰白	
10	須恵器	壺	第2次	ＳＤ04	21.8	3.5			口縁部1/6弱	灰～青灰	良好
11	弥生土器	甕	第3次	ＳＤ04		2.7		5.0	底部1/5	灰白	
12	弥生土器	甕	第1次	ＳＤ02		3.5		7.9	底部1/3弱	褐灰～灰白	
13	弥生土器	壺	第2次	ＳＤ05		16.5	14.5	7	底部1/4･体部1/2	にぶい黄褐～黄灰	
14	弥生土器	甕	第1次	ＳＤ06	14.9	17.7	17.7		口縁部1/7 体部1/5	灰黄褐～にぶい黄橙	
15	備前焼	擂鉢	第3次	ＳＤ08	21.65	7.5		9.4	1/5弱	赤褐～にぶい赤褐	
16	須恵器	杯身	第1次	ＳＤ10	10.4	4.9			口縁部若干 底部1/2	灰白～灰	普通
17	弥生土器	壺	第2次	ＳＤ11	16.8	5.4			口頸部1/3	浅黄橙～にぶい橙	
18	弥生土器	壺	第2次	ＳＤ11	11.4	5.1			口縁部1/4 頸部1/4弱	にぶい黄橙～灰黄褐	
19	弥生土器	壺	第2次	ＳＤ11	10.2	5.3			口縁部1/4	灰黄	
20	弥生土器	壺	第2次	ＳＤ11	14.7	5.3			口縁部1/5	にぶい黄橙	
21	弥生土器	壺	第2次	ＳＤ11	11	11.8			口縁部1/2 頸部ほぼ完存	暗褐～灰黄	
22	弥生土器	壺	第2次	ＳＤ11		11.2	19.9	4.4	底部完存	にぶい黄橙～黒褐	
23	弥生土器	甕	第2次	ＳＤ11	15	10.8			口縁部～体部1/3	にぶい黄橙	
24	弥生土器	甕	第2次	ＳＤ11		11.9	13.9	2.5	体部2/3･底部完存	灰黄～灰白	
25	弥生土器	甕	第2次	ＳＤ11		10.1		1.6	底部完存・体部1/5強	にぶい黄橙～灰黄褐	
26	弥生土器	高坏	第2次	ＳＤ11	22.9	3.7			口縁部1/9	にぶい黄橙～灰黄	
27	弥生土器	鉢	第2次	ＳＤ11	28.2	20	27.7	4	口縁部～体部1/9・底部2/3	にぶい黄橙～浅黄橙	
28	弥生土器	高坏	第2次	ＳＤ11	28.6	18.9		21.4	口縁部1/8 脚底部1/4	灰黄	

胎　土	調　整	備　考	挿図	図版
1～3㎜大の砂粒多量に含む	外面：体部ヘラミガキ→口頸部ハケ→横ナデ。		74	51
3㎜以下の砂粒多量に含む	外面：脚部ヘラ削り→ナデ・坏部ヘラミガキ。 内面：坏部不明。		74	51
6㎜以下の砂粒含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。		74	51
1.5㎜以下の石英・長石含む	外面：体部ハケ→ナデ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラ削り→口縁部横ナデ。		74	
1㎜以下の石英･長石含む	外面：底部ヘラナデ。体部上半～口縁部磨滅。 内面：底部～口縁部磨滅。		74	51
0.5㎜大のチャート含む	外面：底部～体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：底部～口縁部ナデ→口縁部横ナデ。		74	
0.5㎜以下のチャート含む	外面：底部～体部ナデ→口縁部横ナデ。 内面：底部～体部ナデ→口縁部横ナデ。		74	
3.5㎜以下の砂粒含む	外面：体部ヘラ削り→ヘラミガキ→口縁部凹線。 内面：体部ヘラミガキ→口縁部ナデ。		74	51
3㎜以下の石英・チャート・クサリレキ含む	外面：頸部～口縁部ハケ→横ナデ。 内面：体部ヘラ削り→ナデ→口縁部ナデ。		74	
2㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：回転ナデ。 内面：回転ナデ。		74	51
0.5㎜大の石英・長石含む	外面：叩き→ハケ。 内面：ナデ。		74	
5.5㎜以下の砂粒を非常に多く含む	外面：磨滅のため不明。 内面：磨滅のため不明。		74	51
5㎜以下の砂粒非常に多く含む	外面：底部ナデ・体部ハケ→体部上半櫛描波状文・櫛描直線文。 内面：底部～体部ヘラ削り。		74	52
2㎜大の砂粒多量に含む	外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。		74	52
1.5㎜以下のチャート含む	外面：底部ナデ。体部～口縁部回転ナデ。 内面：底部～口縁部回転ナデ→卸し目。		74	
3㎜以下の砂粒含む	外面：回転ナデ→底部回転ヘラ削り。 内面：回転ナデ。		74	52
2㎜以下の砂粒多く含む	外面：体部叩き成形→口縁部横ナデ・口縁端部擬凹線。 内面：体部ナデ→口縁部横ナデ。		75	54
3㎜以下の砂粒多く含む	外面：体部ハケ→ナデ・頸部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラ削り→指ナデ・口頸部横ナデ。		75	52
2㎜以下の砂粒わずかに含む	外面：口頸部ナデ→口縁端部横ナデ・擬凹線。 内面：頸部ハケ→口縁部横ナデ。		75	54
2㎜以下の砂粒多く含む	外面：口頸部ヨコナデ→口縁端部擬凹線。 内面：頸部ナデ→口縁部横ナデ。		75	54
3.5㎜以下の砂粒非常に多く含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ→頸部ヘラミガキ。 内面：体部ヘラ削り→頸部ハケ→口縁部横ナデ。		75	52
3㎜以下の砂粒多く含む	外面：体部下半ナデ。 内面：体部下半ナデ・体部上半指オサエ。		75	52
1㎜大の砂粒多量に含む	外面：体部～頸部叩き成形。 内面：不明。	25と同一個体か	75	52
2㎜以下の砂粒多く含む	外面：底部～体部叩き成形→体部中位板ナデ・体部上半ナデ。 内面：体部下半ヘラナデ→体部上半指オサエ。		75	53
1㎜大の砂粒多量に含む	外面：叩き成形。 内面：不明。	23と同一個体か	75	53
4㎜以下の砂粒多く含む	外面：体部～口縁部ヘラミガキ→口縁端部凹線。 内面：体部～口縁部ヘラ削り。		75	54
2㎜以下の砂粒多く含む	外面：口縁端部擬凹線。 内面：体部ヘラミガキ。		75	53
1～2㎜大の砂粒多量に含む	外面：ヘラミガキ。 内面：脚部下半ハケ・坏部横ナデ→ヘラミガキ。		75	53

第17表　西延末遺跡出土土器観察表(2)

No.	種　別	器　種	調査次数	遺構名	法量(cm)				残存状況	色　　調	焼成
					口径	器高	最大径	底径			
29	弥生土器	高坏	第2次	ＳＤ11							
30	弥生土器	器台	第2次	ＳＤ11	20	18.5		18.2	口縁部1/4 底部1/7	にぶい黄橙	
31	弥生土器	壺	第2次	ＳＤ11	15.4	27.7	27.5		口縁部5/6	浅黄～灰黄	
32	弥生土器	鉢	第2次	包含層	17.8	10		3.7	口縁部1/4 体部1/3	橙～にぶい黄橙	
33	弥生土器	高坏	第2次	ＳＤ11	15.6	7.9			坏部若干 脚部1/2	灰黄	
34	須恵器	把手	第2次	ＳＤ11					把手完存	灰	良好
35	須恵器	杯蓋	第2次	ＳＤ11	13.6	3.5			口縁部1/4	灰	良好
36	須恵器	杯蓋	第2次	ＳＤ11	10.7	4.2			1/6	灰白	良好
37	埴輪	形象	第2次	包含層					小片	浅黄橙～橙	
38	須恵器	椀	第2次	ＳＤ11		1.6		5.8	底部完存	灰	良好
39	須恵器	椀	第3次	包含層		1.4		5.4	底部2/3	灰白	やや不良
40	須恵器	椀	第3次	包含層		3.0		5.2	底部1/3	灰白	やや不良
41	土師器	皿	確認調査	包含層	10.7	2.2			口縁部～底部 1/4	灰白	
42	白磁	碗	第3次	包含層	15.9	5.3			口縁部1/9	淡黄	
43	白磁	碗	第3次	包含層	10.9	2.5			口縁部1/5	灰黄	
44	白磁	碗	第3次	包含層	14.4	4.1			口縁部1/7	灰白	

胎　土	調　整	備　考	挿図	図版
			75	
7㎜以下の砂粒多く含む	外面：不明。 内面：脚端部指オサエ・筒部～口縁部ヘラ削り。	3方向の透かし2段	75	53
1.5㎜以下の砂粒多く含む	外面：底部～口縁部ハケ→頸部横ナデ。 内面：底部～体部ヘラ削り→口頸部ハケ。		76	53
1～3㎜大の砂粒多く含む	外面：底部～体部ヘラミガキ→口頸部横ナデ。 内面：底部～体部ヘラミガキ→口頸部横ナデ。		76	55
砂粒わずかに含む	外面：脚部ヘラミガキ・口縁部横ナデ。 内面：脚部ヘラ削り・体部ヘラミガキ→口縁部横ナデ。		76	54
1㎜以下の砂粒含む	外面：ナデ。		76	54
5㎜以下の砂粒含む	外面：天井部ヘラ切り→体部～口縁部回転ナデ。 内面：回転ナデ。	天井部未調整	76	54
1㎜以下の砂粒多く含む	外面：体部～口縁部回転ナデ・天井部ヘラ切り後未。 内面：天井部～口縁部回転ナデ。	ヘラ記号あり	76	54
4㎜以下の砂粒を非常に多く含む			76	55
1.5㎜以下の砂粒多く含む	外面：回転ナデ。 内面：回転ナデ。	底部回転糸切り	76	54
1㎜大の砂粒含む	外面：回転ナデ。 内面：回転ナデ。	底部回転糸切り	76	
2㎜大の長石・石英含む	外面：回転ナデ。 内面：回転ナデ。	底部回転糸切り	76	
1㎜以下の砂粒含む	外面：底部指オサエ→口縁部横ナデ。 内面：底部～体部ナデ。→口縁部横ナデ。		76	55
	外面：回転ヘラ削り。 内面：回転ナデ。		76	
	外面：回転ナデ。 内面：回転ナデ。		76	
	外面：回転ヘラ削り。 内面：回転ナデ。		76	

第4章　分析・鑑定

第1節　南畝町遺跡出土サヌカイトの産地推定

竹原弘展（パレオ・ラボ）

1. はじめに

兵庫県姫路市、船場川の東に所在する南畝町遺跡より出土したサヌカイト資料について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象資料は南畝町遺跡より出土したサヌカイト20点で、時期は弥生時代とみられる（第19表）。試料は風化層に覆われていたため、サンドブラストを用いて一部新鮮面を表出させ、測定箇所とした。

分析装置は、（株）セイコーインスツルメンツ社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA-2001Lを使用した。装置の仕様は、X線管はRhターゲット、X線検出器はSi（Li）半導体検出器である。測定条件は、測定時間300sec、照射径10㎜、電流1～63μA（デッドタイムが20%未満になるよう設定）、電圧50kV、試料室内雰囲気真空に設定した。

産地推定には、黒曜石産地推定法において用いられている蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法（例えば望月2004）を、分析対象をサヌカイトに置き換えて適用した。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム（K）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）とルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の合計7元素のX線強度（cps；count per second）について、以下に示す指標値を計算する。

1）.Rb分率=Rb強度×100/（Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度）
2）.Sr分率=Sr強度×100/（Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度）
3）.Mn強度×100/Fe強度
4）.log（Fe強度/K強度）

第18表　原石採取地と判別群名称

エリア	判別群	原石採取地（試料点数）
二上山	春日山	春日山みかん畑内（10）
讃岐	国分台1	自衛隊演習場付近（5）、神谷神社前（13）、高産霊神社谷（12）、国分台下みかん畑（5）、蓮光寺（10）
	国分台2	
	赤子谷･法印谷	赤子谷第1地点（5）、赤子谷第2地点（5）、法印谷（10）
	金山	北峰道路脇（10）、金山南麓（10）
	城山	城山南側（5）、城山北側（5）
	雄山･雌山	雄山（5）、雌山（5）
	双子山	双子山南嶺（10）

そしてこれらの指標値を用いた2つの判別図（横軸Rb分率－縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率－縦軸log（Fe強度/K強度）の判別図）を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定するものである。原石試料も、採取原石を割って新鮮な面を表出させた上で産地推定対象試料と同様の条件で測定した。第18表に各原石採取地とそれぞれの試料点数を示す。

3. 分析結果

第19表に測定値から算出された指標値、第77図・第78図に、サヌカイト原石の判別図と遺跡出土試料をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

判別図は、讃岐エリアの原石は雄山･雌山以外は非常に近接しており重複部分も多く、明確な区別は難しい。しかし、二上山エリアの原石と讃岐エリアの原石は明確にプロットされる位置が異なり、十分に区別可能である。

遺跡出土試料のうち、15点が金山の範囲、2点が金山と赤子谷・法印谷の重複域、2点が国分台1の範囲、1点が春日山の範囲にプロットされた。第19表に産地推定結果を示す。比較対象となる原石産地が少ないため、他の産地の可能性が無いとは言い切れないが、少なくとも判別図の一致しなかった産地のサヌカイトではないとはいえる。

4. 終わりに

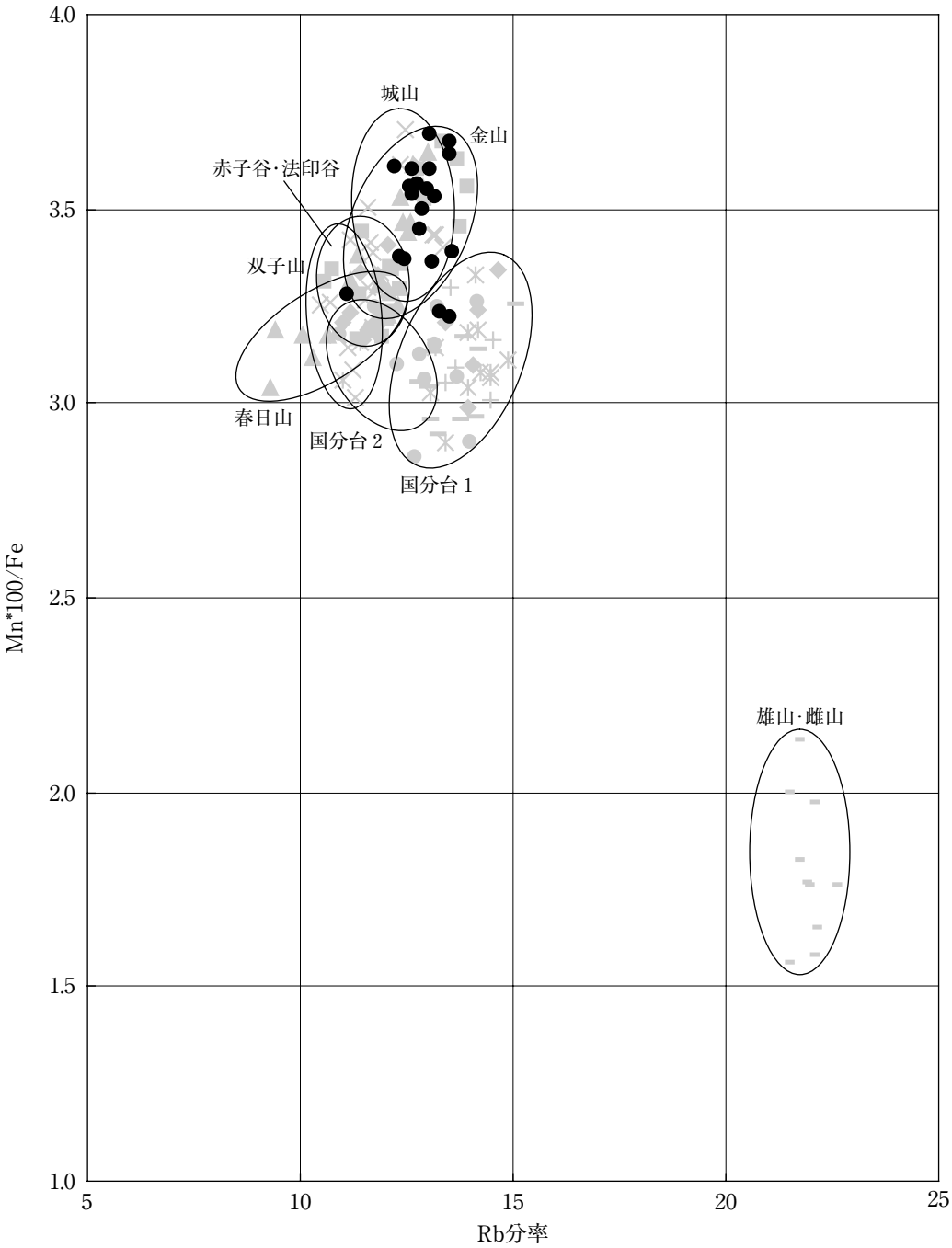
南畝町遺跡より出土したサヌカイトについて、蛍光X線分析を用いた判別図法による産地推定を行った結果、20点の資料のうち、分析№14のみが二上山産、その他は讃岐地方産の可能性が高いと推定された。

第19表　分析対象資料と産地推定結果

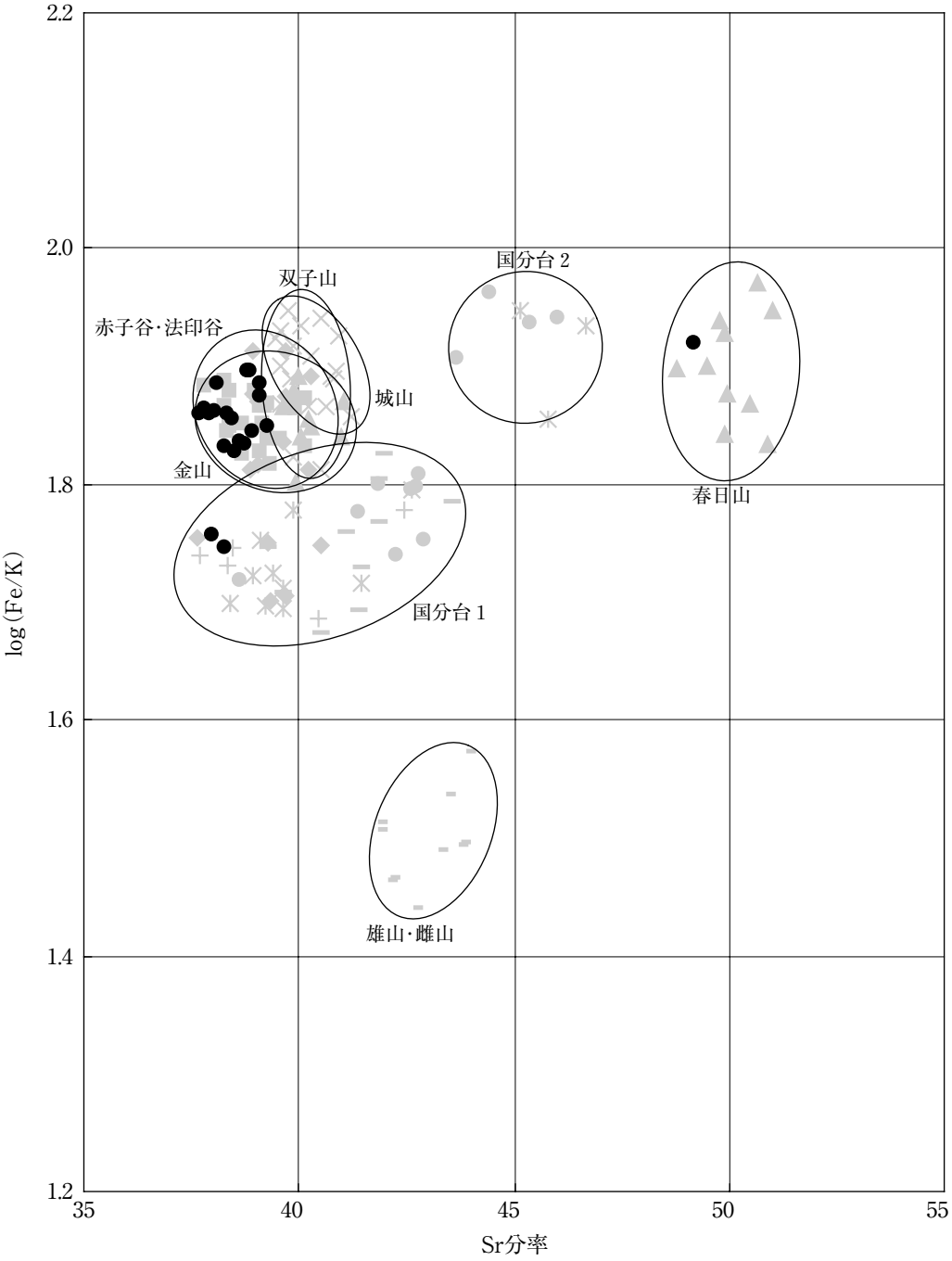
分析№	報告№	調査次数	製品名	出土遺構	Rb分率	$\frac{Mn\times100}{Fe}$	Sr分率	$\log\frac{Fe}{K}$	判別群	エリア
1	S3	第2次	石匙	包含層	13.02	3.55	38.05	1.86	金山	讃岐
2	S2	第2次	石鏃	SD01	12.33	3.37	37.70	1.86	金山or赤子谷･法印谷	讃岐
3		第2次	打製石剣	SD03	12.48	3.37	39.31	1.85	金山or赤子谷･法印谷	讃岐
4		第2次	剥片	SD02	12.60	3.55	39.12	1.87	金山	讃岐
5		第2次	剥片	SD02	13.03	3.69	39.09	1.89	金山	讃岐
6		第2次	剥片	包含層	13.27	3.24	38.31	1.75	国分台1	讃岐
7		第2次	剥片	SD03	12.86	3.50	38.80	1.90	金山	讃岐
8		第2次	剥片	SD03	13.04	3.60	38.08	1.89	金山	讃岐
9		第2次	剥片	SD02	13.17	3.53	37.84	1.86	金山	讃岐
10		第2次	剥片	包含層	13.54	3.64	38.66	1.84	金山	讃岐
11		第2次	剥片	SD03	13.52	3.22	37.97	1.76	国分台1	讃岐
12		第2次	剥片	包含層	13.13	3.37	38.46	1.86	金山	讃岐
13		第2次	剥片	包含層	12.84	3.44	38.54	1.83	金山	讃岐
14		第3次	剥片	包含層	11.13	3.28	49.17	1.92	春日山	二上山
15	S8	第3次	打製石包丁	包含層	12.75	3.56	38.85	1.90	金山	讃岐
16		第3次	剥片	包含層	12.24	3.61	38.31	1.86	金山	讃岐
17	S7	第3次	石鏃	包含層	12.66	3.53	38.78	1.83	金山	讃岐
18	S6	第3次	石鏃	包含層	12.65	3.60	38.93	1.85	金山	讃岐
19		第3次	剥片	包含層	13.55	3.67	37.91	1.86	金山	讃岐
20		第3次	剥片	SD02	13.59	3.39	38.28	1.83	金山	讃岐

引用文献

望月明彦（2004）用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定．かながわ考古学財団調査報告167　用田大河内遺跡，511-517，財団法人　かながわ考古学財団．



第77図　サヌカイト産地推定判別図(1)



第78図　サヌカイト産地推定判別図(2)

第2節　石製品の石材鑑定

藤根　久（パレオ・ラボ）

1．はじめに

南畝町遺跡から出土した石製品について肉眼および実体顕微鏡観察による石材同定を行った。なお、サヌカイト製石器が出土しているが、蛍光X線分析による産地推定を行っている（サヌカイトの産地推定を参照）。

2．試料と方法

試料は、1区包含層および溝から出土した石製品4試料である（第20表）。

岩石同定は、肉眼および実体顕微鏡を用いて各岩石を構成する鉱物の種類や構造を記載し、非破壊で岩石の同定を行った。

3．結果

以下に、各石製品の岩石学的特徴について記載し、岩石を同定した（第20表）。なお、第79図に各石製品の実体顕微鏡写真を示した。

第20表　出土した石質遺物とその岩石名

試料No.	報告No.	製品名	調査次	出土遺構	岩石名
1	S4	石硯	第2次調査	包含層	粘板岩
2	S5	石硯	第2次調査	包含層	粘板岩
3	S9	石皿	第3次調査	SD02	閃緑岩
4		磨石	第３次調査	包含層	流紋岩

試料No.1

やや片理を示す黒色の泥質岩である。粘板岩。

試料No.2

やや片理を示す緑灰色の泥質岩である。細粒の雲母類を含む。粘板岩。

試料No.3

透明の石英、白色の長石、黒色の輝石からなる完晶質岩石である。閃緑岩。

試料No.4

透明の石英、黄白色の柱状の長石、輝石などの斑晶からなる黄褐色の斑晶質岩石である。石基（matrix）はオリーブ色である。流紋岩。

4．考察

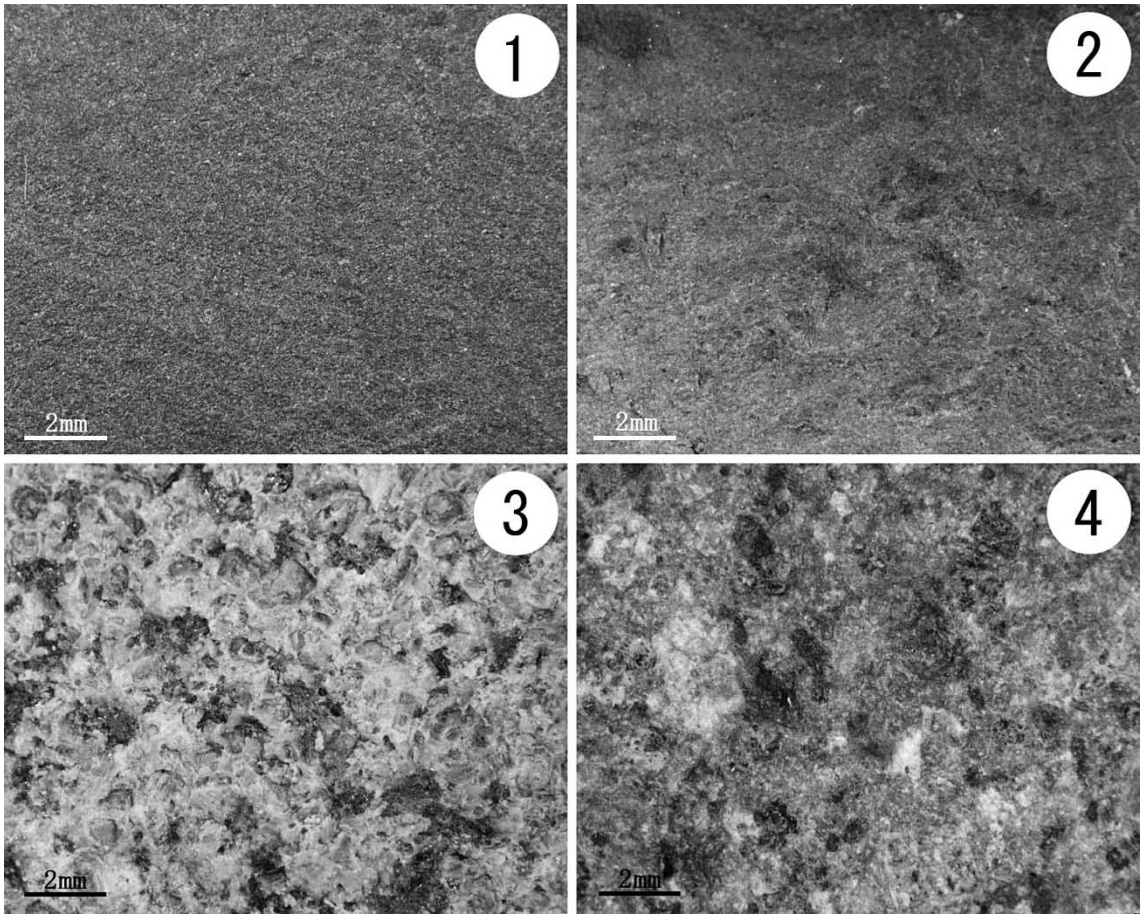
兵庫県姫路市周辺では、中生代の白亜紀－古第三紀、花崗岩類、閃緑岩類、相生層群などの流紋岩およびディサイト火砕岩類及び溶岩や安山岩類が広く分布している。また、古生代の二畳紀の舞鶴層群の千枚岩粘板岩・砂岩・チャート・石灰岩なども分布している。

なお、滑石が含まれる蛇紋岩類は、県北部地域の古生代の三畳紀変成岩類として分布している（地質調査所、1981）。

こうした周辺地域の地質学的状況から、周辺地域において石製品の石材調達は可能と考えられる。

引用文献

地質調査所（1981）20万分の１地質図．通商産業省工業技術院地質調査所．



1．粘板岩（試料No.1）　2．粘板岩（試料No.2）　3．閃緑岩（試料No.3）　4．流紋岩（試料No.4）

第79図　石製石材の実体顕微鏡による拡大写真

第5章　まとめ

第1節　南畝町遺跡

はじめに　南畝町遺跡で検出した遺構は溝が中心である。そこで、ここでは、出土土器を中心にまとめていく。南畝町遺跡では、主に弥生時代と古墳時代の土器が出土している。

1．弥生時代

当該期の土器は、中期と後期が出土している。

（1）中期

器種分類　壺・甕・鉢・高坏・器台の各器種が出土している。

壺　広口壺・受口壺・直口壺・細頸壺・無頸壺・短頸壺・水差が出土している。

広口壺　量的に最も多く出土し、その特徴も多岐にわたる。完存する個体も認められるが、多くは口縁部を中心に残存する。そこで、ここでは口縁部を中心に3タイプに分類する。

A：口縁端部を拡張し、明確な端面を有するもの。装飾性がゆたかで、以下の装飾パターンが認められる。

①凹線→棒状浮文＋円形浮文

②凹線→棒状浮文

③凹線→キザミ目

④凹線→キザミ目→棒状浮文

⑤キザミ目→円形浮文

⑥キザミ目のみ

⑦無紋

⑧凹線→キザミ目→円形浮文

⑨斜格子文→円形浮文

⑩凹線のみ

⑪凹線→円形浮文

A1：口縁部内面に突帯が貼付けられるタイプ。

A1a：内面に2条の突帯が貼り付けられるもの。突帯頂部にはキザミ目が施される。外端面には装飾が施され、①：129、②：281・284、③：108、④：177・279、⑤：106、といった装飾パターンが認められる。

また、頸部まで残存する個体については、三角突帯を貼り付けるタイプ（129・177）と指頭圧痕文突帯を貼り付けるタイプ（108・281）が認められる。

A1b：口縁端部を上下に拡張した上に、内面に2条の突帯を貼り付けたもの。この結果、内面が3条の突帯状をなすもの。280。外端面には、④の装飾パターンが認められる。

A1c：内面に1条の突帯が貼り付けられたもの。外端面には、Aの④・⑤：278の装飾ターンに加えて、⑥：103・104・370、の装飾パターンも認められる。さらに、179については⑦である。

壺

広口壺

108 A1a

280 A1b

104 A1c

271 A2

275 A3

101 A4

267 A5

252 B

276 C

受口壺

290 A

297 B

細頸壺

181

直口壺

299 A

296 B

無頸壺

352

短頸壺

162 A

294 B

250 C

水差

180

第80図　弥生時代中期の分類(1)

この他、343については、口縁部を大きく巻き込み、他とは形態を異にする。装飾パターンは⑥である。287についても、外反度が大きく、他より端部からより内側に突帯が貼り付けられている。

頸部については、三角突帯を貼り付けるタイプ（179・343・370）と指頭圧痕文突帯を貼り付けるタイプ（103・104）が認められる。三角突帯についても、1条か

ら3条まで認められる。

A2：口縁端部を上方にわずかに拡張させるタイプ。口縁外端面には、⑤:272、⑨斜格子文→円形浮文：270、⑧：274、⑥：102・354、⑦：266・271、の装飾パターンが認められる。頸部まで残存する102は、指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。

A3：口縁端部を下方に大きく拡張させるタイプ。⑩：163・⑪：130・⑧：275・277・②：199・200の装飾パターンが認められる。

A4：口縁端部を下方にわずかに拡張させるタイプ。③：178と⑦：101の装飾パターンが認められる。

A5：口縁端部をわずかに拡張させるタイプ。⑥と⑦の装飾パターンがに限られ、装飾性が希薄である。

B：口縁端部を大きく外反させ、端部が玉縁状をなすタイプ（131・252）。

C：口縁部を大きく外反させ、大きく巻き込むタイプ（276）。

受口壺　口縁部の形態において、受口部の屈曲が明確なもの（A：290・291・292・293・353）と明確ではないもの（B：297）の2タイプに分類できる。受口壺Aについては、受口部外面の装飾において、無紋（293・353）・凹線文（290・292）・斜格子文（291）の3種が認められる。

直口壺　口縁部の形態において、無頸壺に近いもの（A：299）と口縁部が明確に直立するもの（B：134・296）の2タイプに分類できる。いずれも、口縁部外面には突帯が貼り付けられている。

細頸壺　181と303の2個体が出土している。

無頸壺　233と352の2個体が出土している。両者はタイプを異にし、233は凹線文、352は突帯文を基調としている。

短頸壺　口縁部がく字形に屈曲し、甕の口縁部にちかいタイプ（A：148・162・371）、甕形に近い体部にく字形の口縁部がつくタイプ（B：294・348）、直口壺に近いタイプ（C：250・294）、に分類できる。

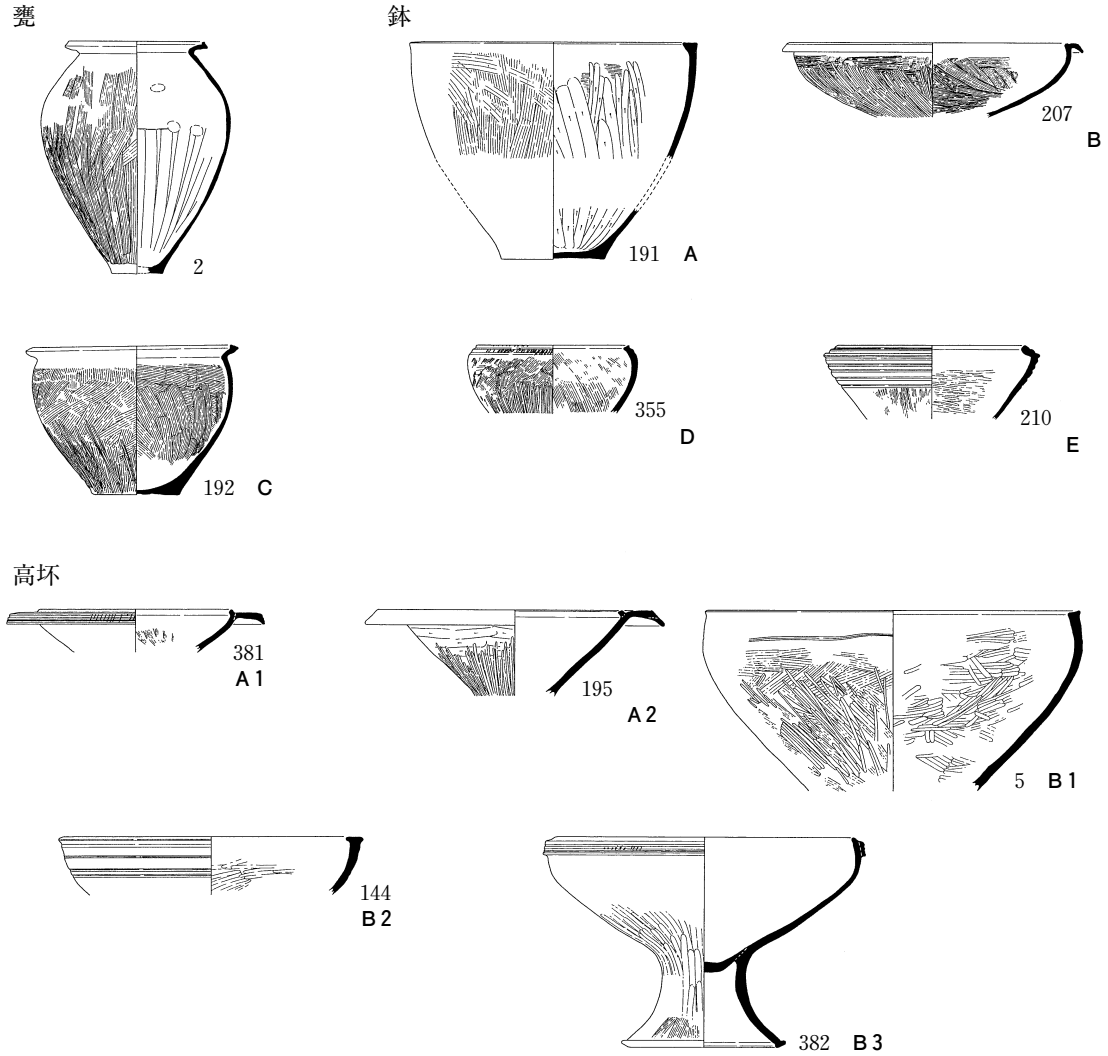
無頸壺　133・193・352の3個体が出土している。3個体とも形態を異にするが、外面に装飾が施されている。

水差　180・300・372の3個体が出土している。

甕　基本的に同タイプに分類されるものであるが、347のみ古く位置付けられるものである。347以外については、形態的には類似するが、法量的に大型・中型・小型に分類することができる。また、体部上半にキザミ目が施された個体（115・376）が認められる。

鉢　直口鉢（A：3・191・337）、浅鉢（B：4・207）、く字口縁鉢（C：192）、椀形鉢（D：194・355）、台付鉢（E：128・210・339）に分類できる。台付鉢の210については壺に分類されているが、本報告では鉢として報告する。直口壺については、大型と小型に分類できる。

高坏　水平口縁タイプ（A）と椀形タイプ（B）が出土している。高坏Aについては、口縁端面に装飾が認められるもの（A1：126・327・381）と認められないもの（A2：195・326・331）に分類できる。高坏Bについては、坏部が深い大型の高坏（B1a：5）、坏部が浅い



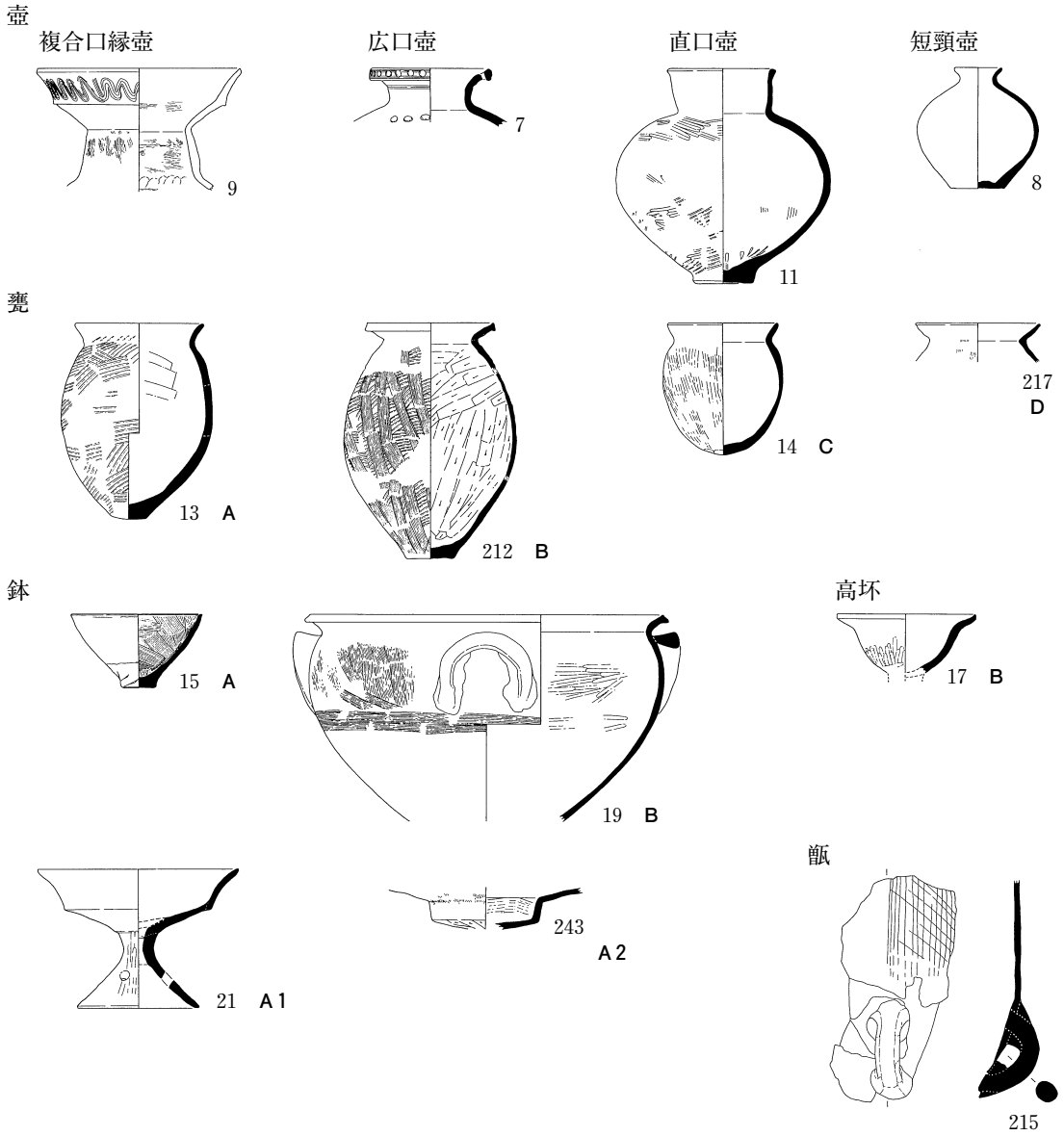
第81図　弥生時代中期の分類(2)

タイプ（B2：144・147・323・324・325)、坏部がやや深いタイプ（B3： 361・382)、に細分できる。

高坏B2については、外面に凹線を施すものや波状文を施すものが認められる。また、高坏B3については、口縁部外面に断面方形の突帯が貼り付けられている。

時期の検討　前項で分類した土器は、概ね弥生時代中期後半、いわゆる第Ⅳ様式の範囲で理解できるものである。特に、広口壺・受口壷・鉢B・鉢C・鉢E・高坏A・高坏Bは、当期を象徴するものといえよう。これらの土器から、Ⅳ－2～3期に位置付けられるものと考えられる。ＳＤ01（第2次調査)・土器溜り（第2次調査)・ＳＤ03（第3次調査）などが、当該期に位置付けられるものと考えられる。一方、ＳＤ05（第2次調査）出土資料については、上記より若干古く、Ⅳ－1期に位置付けられるものと考えられる。

なお、ＳＤ02（第2次調査）出土資料については、中期初頭に位置付けられる。



第82図　弥生時代後期の分類

（2）後期

器種分類　壺・甕・鉢・高坏・甑の各器種が出土している。中期と比べて量的には少ない。

壺　複合口縁壺・広口壺・直口壺・短頸壺が出土している。

複合口縁壺　9と10の2個体が出土している。それぞれタイプを異にする。

広口壺　7の1個体が出土している。

直口壺　11の1個体が出土している。

短頸壺　8の1個体が出土している。

甕　基本的にはＶ様式系の甕である。体部の調整等から4タイプに細分できる。

甕Ａ　一般的なＶ様式系甕である。体部内面がナデもしくはハケ調整により仕上げられている。底部は平底（Ａa）と尖り底傾向（Ａb）の2タイプが認められる。

甕Ｂ　形態的には甕Ａと同じであるが、体部内面がヘラ削りにより仕上げられている点が主な特徴である。底部は、明確な平底ではなく、やや尖り底傾向にある。212。

甕C　Ｖ様式系甕とは異なり、外面全面がハケ調整により仕上げられている。底部は丸底傾向にある。14。

甕D　いわゆる布留式傾向甕である。217の1個体が出土している。

鉢　直口鉢（A：15・16）と外反口縁鉢（B：18・19・385）に分類できる。鉢Bについては、大型と小型に細分でき、大型のタイプには把手が付く。

高坏　大きく、有稜高坏（A）と椀形高坏（B）に分類できる。椀形高坏は17の1個体に限られる。有稜高坏は、坏部の形態を中心に2タイプに細分可能である。

高坏A1　水平もしくは斜方向にたちあがる体部に対して口縁部が外反するもの。口縁部の外反度により、それぞれタイプを異にする。

高坏A2　体部が直立し、その後口縁部が外反するタイプ。243の1個体である。

甑　215の1個体が出土している。いわゆる山陰型甑の一部と考えられる。

時期の検討　当該期の土器については、良好な一括資料は認められない。このため、各器種について時期を特定することは困難である。このなかで、複合口縁壷・甕B・高坏A1・高坏A2については、庄内併行期に位置付けられるものである。また、甕Dについては布留式初頭に位置付けられるものである。

この他、直口壷・甕A・甕C・鉢Aについても、後期後半に位置付けられるものと考えられる。

2. 古墳時代

須恵器　当該期の土器で注目されるのが、45の須恵器である。つまみは完存しないが、高杯の蓋と考えられる。当該期の蓋と比べて深い点が特徴として指摘することができる。ただし他に例をみない。形態的な特徴から、初期須恵器に分類されるものである。

この蓋については、色調等の特徴から、宮山古墳出土須恵器に近い特徴を持つものである。市川流域に生産窯が存在する可能性が考えられる。

第2節　西延末遺跡

はじめに　西延末遺跡では、検出した遺構は限られる。しかし、弥生時代を中心に良好な資料が得られている。そこで、弥生土器を中心にまとめていく。

1．弥生時代中期

出土土器　壺・甕・鉢が出土している。

壺　短頸壺・水差が出土している。水差は、櫛描直線文と櫛描波状文で飾るもので、中期前半に位置付けられる。

甕　口縁部が如意形をなすものである。中期中葉以降に位置付けられる。

鉢　大型の把手付鉢が出土している。口縁部は凹線文で飾られるもので、中期後半（Ⅳ－3）に位置付けられる。

出土土器　以上から、水差が出土したＳＤ05が中期でもやや古く位置付けられ、他のＳＤ04・ＳＤ06は中期の中葉以降に位置付けられる。

2．弥生時代後期

はじめに　ここでは、ＳＨ01出土土器・ＳＨ02出土土器・ＳＤ11出土土器を検討する。

ＳＨ01　壺と高坏が出土している。壺からの時期の特定は困難であるが、高坏の特徴から、後期初頭に位置付けられるものと考えられる。

ＳＨ02　甕と小型丸底土器・椀が出土している。甕については庄内式に位置付けられるものであるが、小型丸底土器と椀については布留式以降に位置付けられるものである。以上から、布留式に位置付けたい。

ＳＤ11　壺・甕・鉢・高坏・器台が出土している。

壺　直口壺・広口壺・長頸壺が出土している。直口壺は、1の1個体が出土している。長頸壺は、広口長頸壺に分類されるもので、後期中葉以降に位置付けられる。広口壺についても、数個体出土しているが、基本的に同タイプに分類されるものである。

甕　基本的にＶ様式甕に分類されるものであるが、内面がヘラ削りにより仕上げられるもの（24）と、ナデ調整により仕上げられるもの（23）とが認められる。また、24・25については底部が尖り底化の傾向が顕著である。

鉢　大型のく字口縁鉢が出土している。底部は平底をなすが、退化傾向が認められる。

高坏　ほぼ完形に復元できる有稜高坏が出土している。坏部の形態から、中期中葉後半に位置付けられる。

器台　完形に復元できる1個体（30）が出土している。後期中葉に位置付けられるものである。

時期　以上から、弥生後期のＳＤ11出土土器をみると、長頸壺・鉢・高坏・器台は、いずれも後期中葉後半以降に位置付けられるものである。さらに、甕についても底部の特徴から庄内期に近い特徴が認められる。以上から、ＳＤ11出土資料については後期後半に位置付けたい。

なお、当溝からは布留式以降の土器も出土している。布留式・古墳時代後期・平安時代後期の土器が出土しており、弥生時代後期以降、徐々に埋没していったものと考えられる。

3. まとめ

以上から、西延末遺跡は弥生時代中期まで遡る集落跡であったことが明らかとなった。特に、ＳＨ01は後期初頭に位置付けられ、当該期の良好な資料に位置付けられる。また、ＳＨ02から出土した庄内式甕についても、播磨における出土遺跡の一つとして加えることができる資料である。

この他、包含層から出土した形象埴輪については、当遺跡内に古墳は想定しがたく、南側に周知されている手柄山古墳群に由来する可能性がたかいのではないかと考えられる。

最後に、集落の中心については、今回報告した調査地より北側と推定され、基本的には現在の西延末集落と平面的に重なるものと考えられる。

〔参考文献〕

大手前大学史学研究所『弥生土器集成と編年－播磨編－』2007

報　告　書　抄　録

ふりがな	のうねんちょういせき・にしのぶすえいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	南畝町遺跡・西延末遺跡発掘調査報告書
副　書　名	ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ
巻　　次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第381冊
編著者名	山田清朝・竹原弘展（パレオ・ラボ）・藤根　久（パレオ・ラボ）
編集機関	兵庫県立考古博物館
所　在　地	〒675－0142　加古郡播磨町大中1丁目1－1　TEL079－437－5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所　在　地	〒650－8567　神戸市中央区下山手通5丁目10－1　TEL078－362－3784
発行年月日	2010年（平成22年）3月31日

所収遺跡名(県遺跡番号)	所在地	コード 市町村	コード 調査番号	北緯	東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
南畝町遺跡(020456)	姫路市南畝町(ひめじしのうねんちょう)	280201	990202	34°49′41″	134°41′00″	平成11年8月17日～10月29日	1159㎡	ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業
			2000282	34°49′39″	134°41′00″06″	平成12年5月22日～8月11日	380㎡	
			2002068			平成14年7月12日～8月9日	259㎡	
			2003157			平成15年9月16日～9月26日	276㎡	
西延末遺跡(020444)	姫路市西延末(ひめじしにしのぶすえ)		990165	34°49′29″	134°40′31″	平成11年7月5日～7月15日	271㎡	
			2000294			平成12年10月17日～平成13年3月16日	1690㎡	
			2007066			平成19年6月18日～9月6日	1000㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南畝町遺跡(のうねんちょういせき)	集落跡	弥生時代中期	溝	弥生土器	
		古墳時代中期		須恵器・土師器	初期須恵器
		古墳時代後期		須恵器・土師器	
西延末遺跡(にしのぶすえいせき)	集落跡	弥生時代後期	竪穴住居跡	弥生土器	
		古墳時代中期	溝	形象埴輪	

概要	南畝町遺跡と西延末遺跡の調査報告。南畝町遺跡では、弥生時代中期から古墳時代後期にかけての集落跡を検出。ただし、主要な検出遺構は溝に限られる。遺構の大半は弥生時代に限られ、古墳時代の遺構は未検出であるが、中期以降の各型式の須恵器が出土している。 西延末遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居跡2棟を検出。集落の南縁部と考えられる。

写 真 図 版

写真図版1　第1次調査

全景　南上空から

全景　西上空から

A区全景　南から

B区全景　南から

写真図版3　第1次調査

B区全景　北から

B区南壁　北から

B区旧河道断面
北から

1～7：旧河道出土土器

写真図版5　第1次調査出土土器

8

9

11

13

12

14

8・9・11～14：旧河道出土土器

15

18

16

20

17

21

19

①

15～21：旧河道出土土器　①：19把手

写真図版7　第1次調査出土土器

23

26

24

27

25

28

23～28：旧河道出土土器

29

32

30

34

36

31

37

29～32・34・36・37：旧河道出土土器

写真図版9　第1次調査出土土器

38

43

39

44

40

45

41

47

42

49

38～45・47・49：旧河道出土土器

48

50

51

55

56

57

58

59

48・50・51・55～59：旧河道出土土器

写真図版11　第1次調査出土土器

60

61

62

63

64

65

66

67

60～67：旧河道出土土器

68

70

69

71

72

68～72：旧河道出土土器

写真図版13　第1次調査出土土器

73

76

74

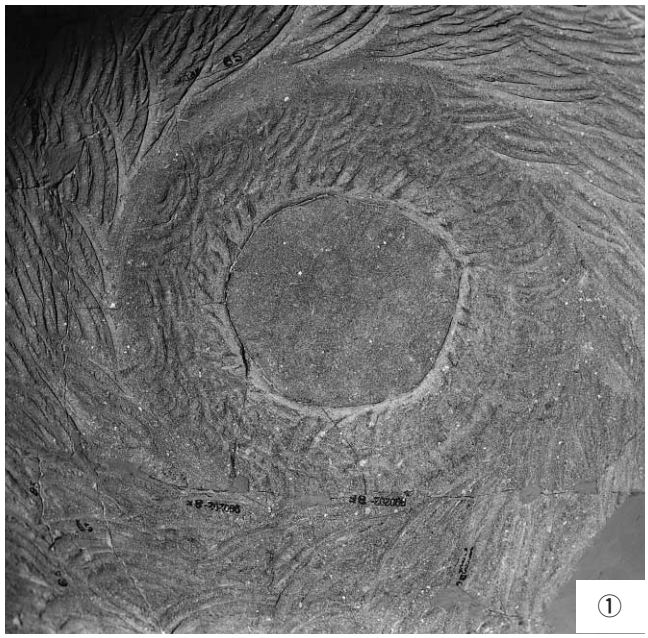
77

78

75

80

73～78・80：旧河道出土土器



82・83：旧河道出土土器　86・87：旧河道出土土製品　①：82充填部内面

写真図版15　第1次調査出土土製品

88

91

89

92

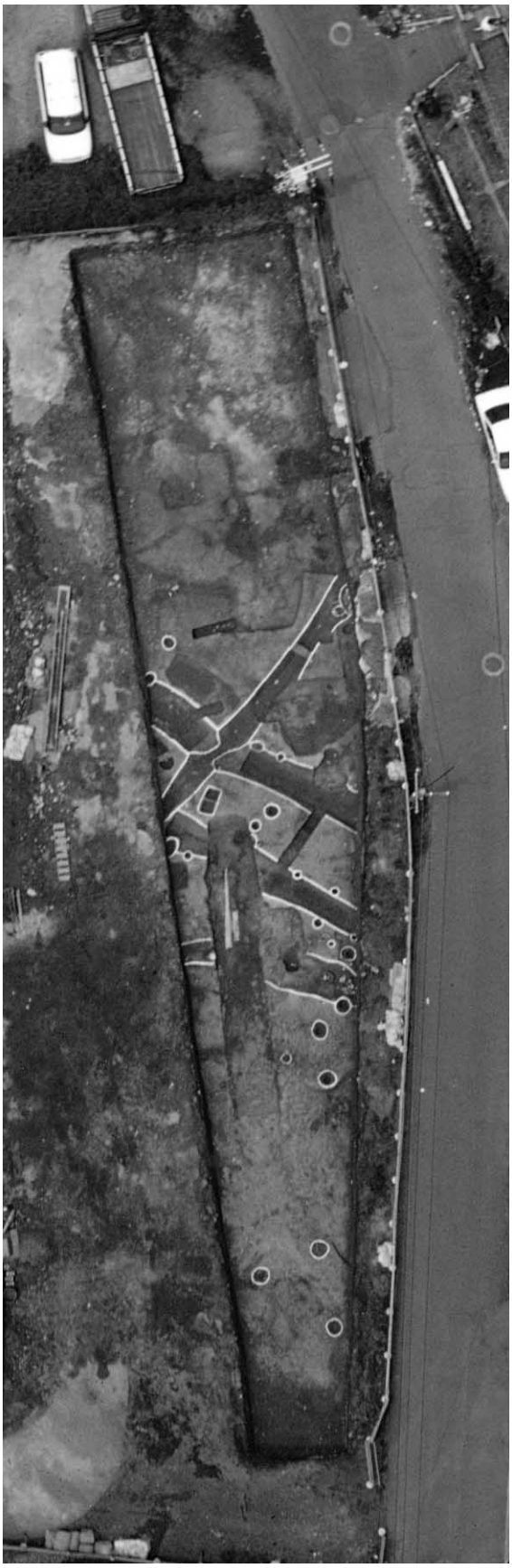
90

93　94

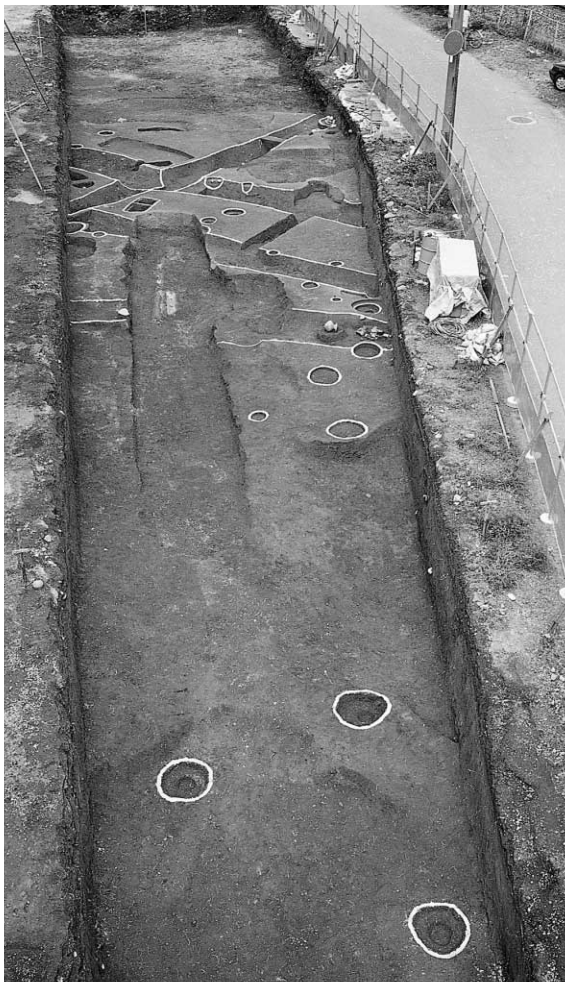
88～94：旧河道出土土製品

S1：旧河道出土石製品

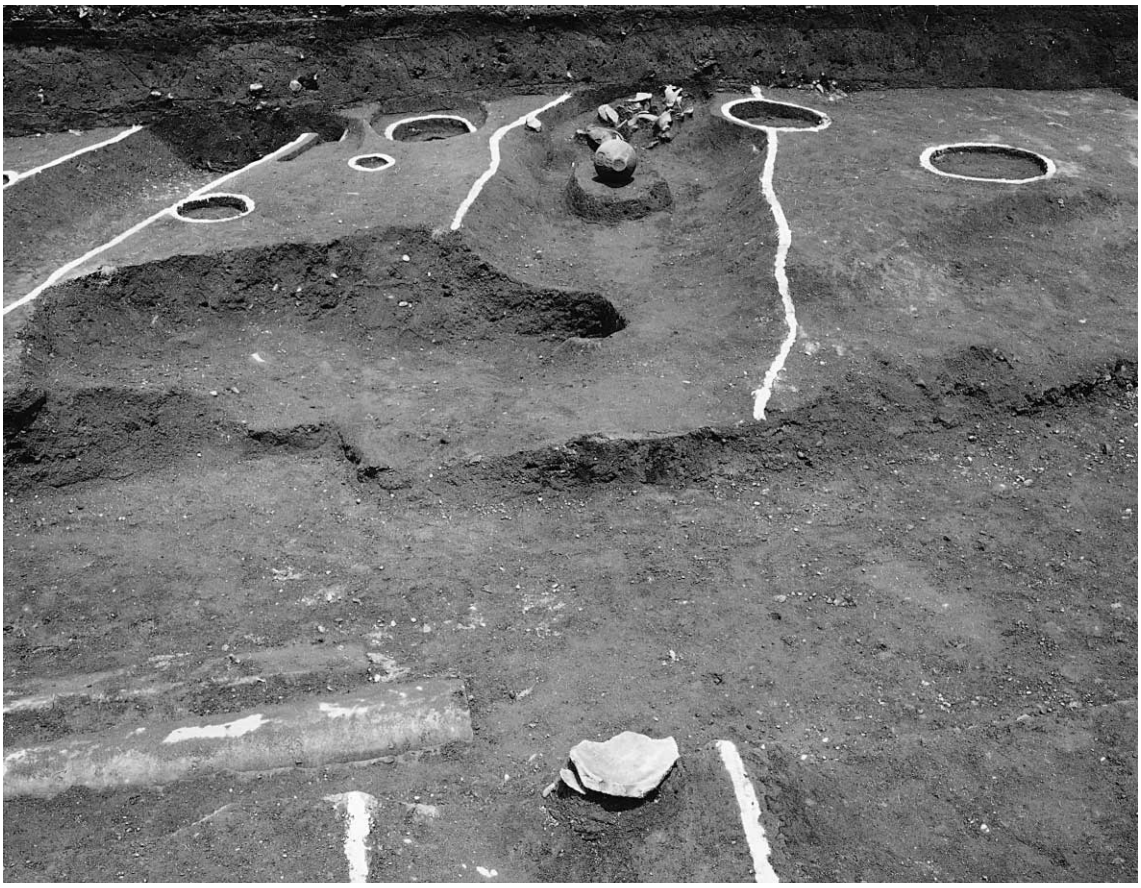
写真図版17　第2次調査



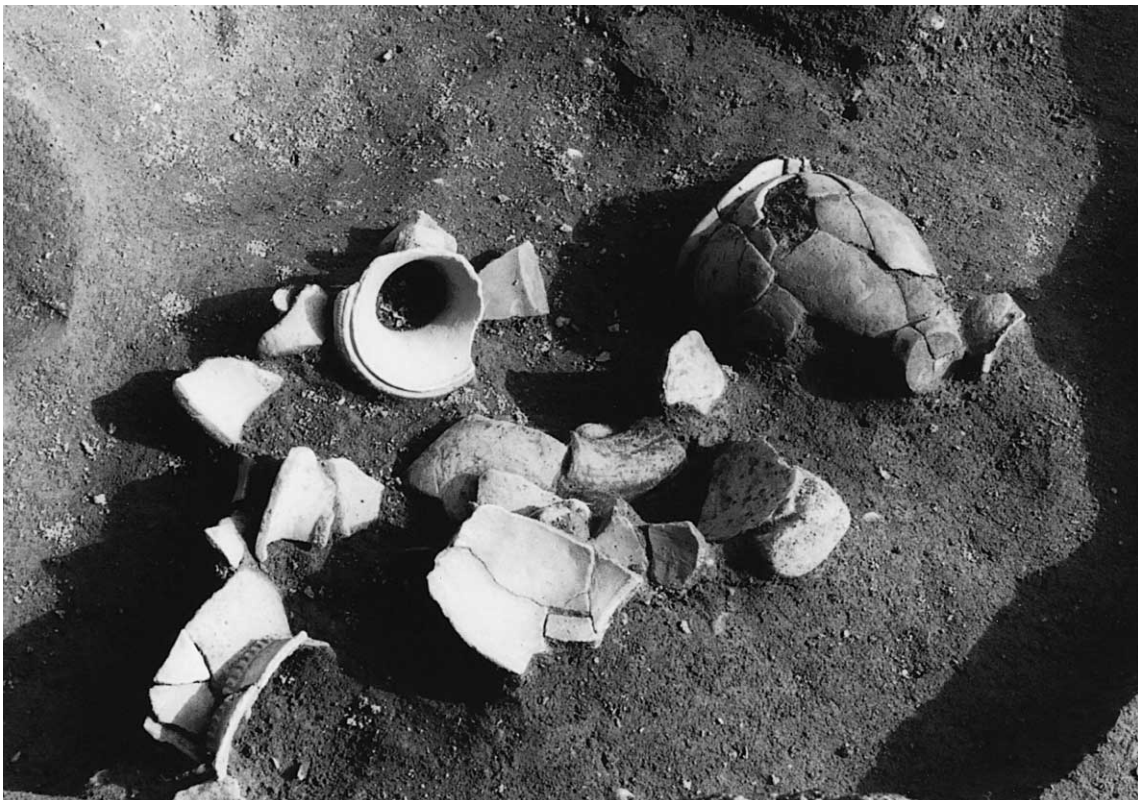
東半部全景　西から



（左）
俯瞰　上空から
（右）
全景　東から



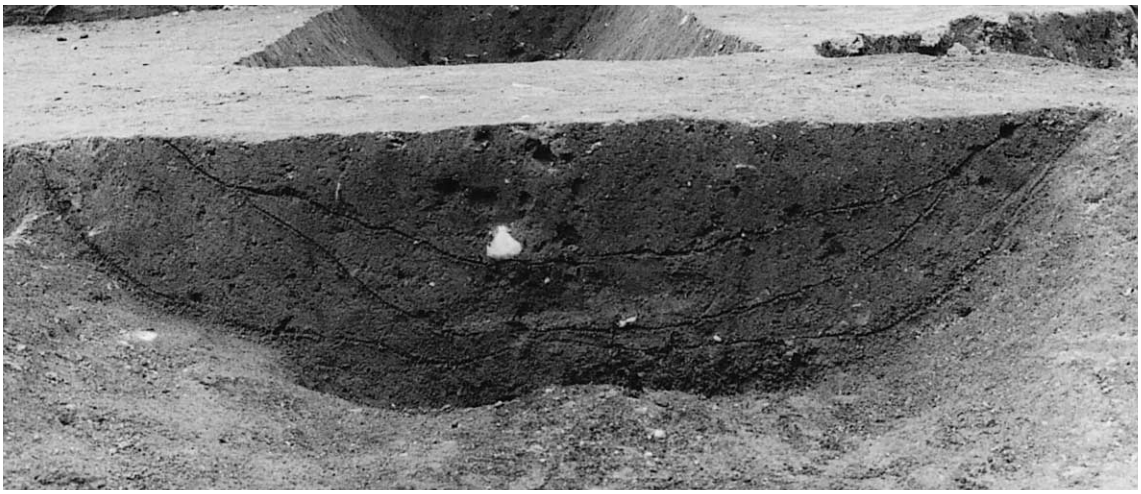
ＳＤ01　南から



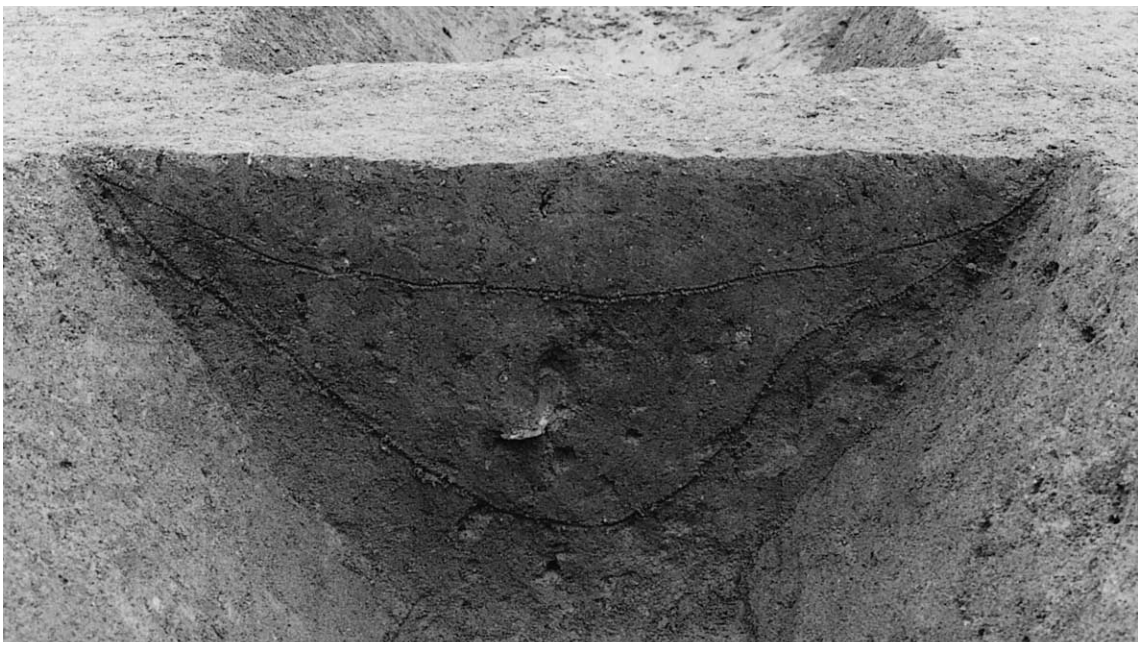
ＳＤ01
土器出土状況　北から

写真図版19　第2次調査

ＳＤ01～ＳＤ03
南から



ＳＤ02断面　南から



ＳＤ04断面　南から

102

103

104

107

108

115

118

102～104・107・108・115・118：ＳＤ01出土土器

写真図版21　第2次調査出土土器

127

131

129

133

161

160

127：ＳＤ01出土土器　129・131・133：ＳＤ02出土土器　160・161：ＳＤ04出土土器

163

179

176

180

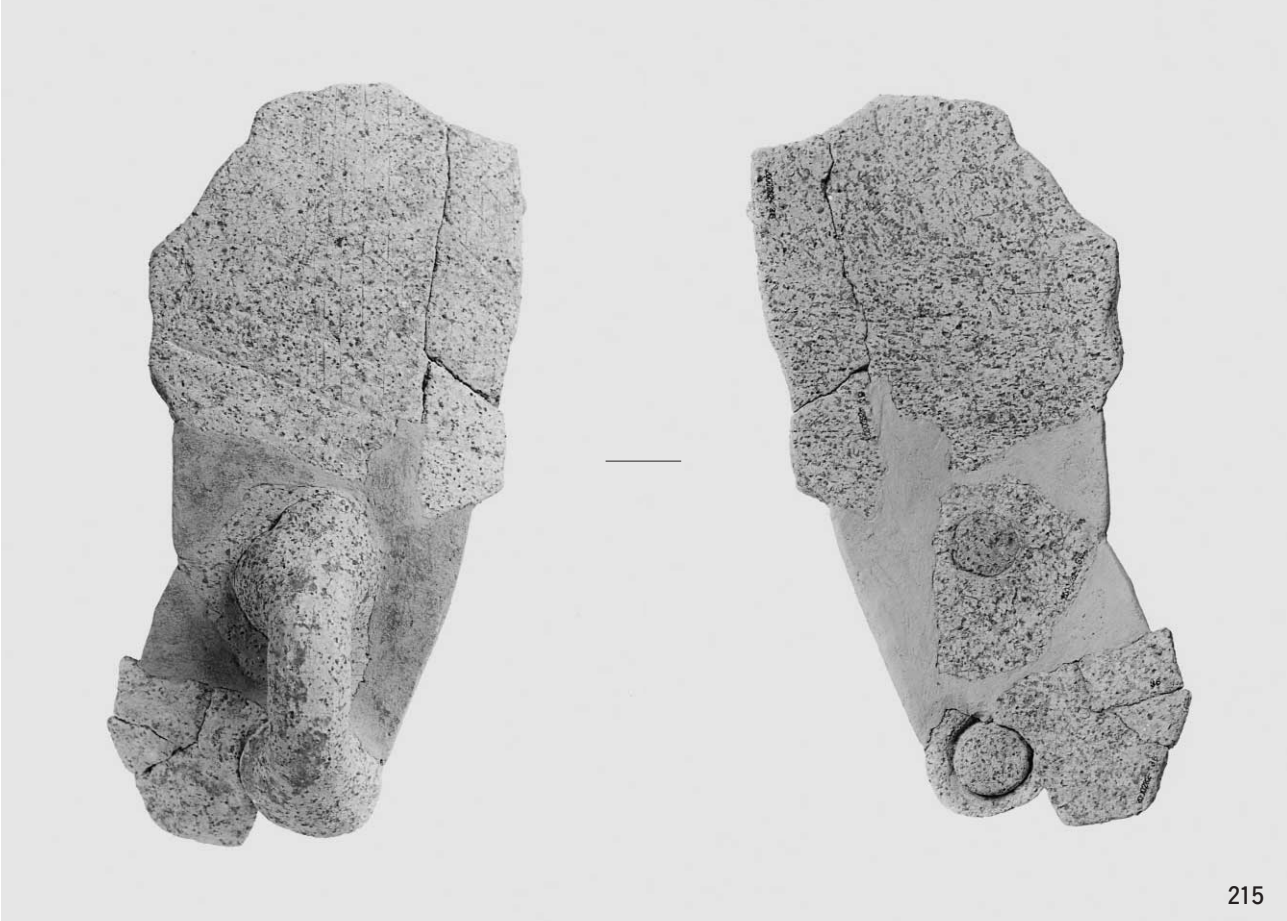
177

188

163・176：ＳＤ05出土土器　177・179・180・188：土器溜り出土土器

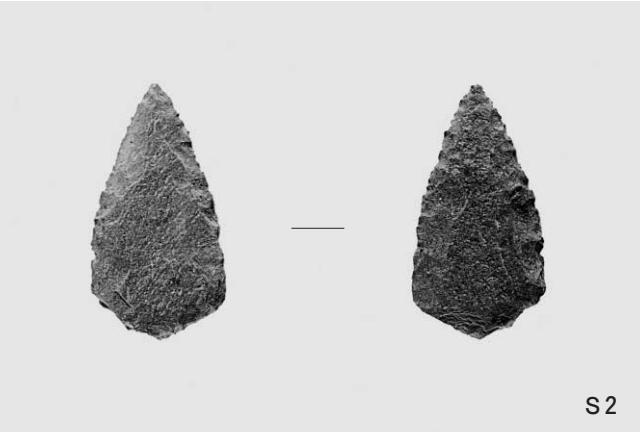
写真図版23　第2次調査出土土器

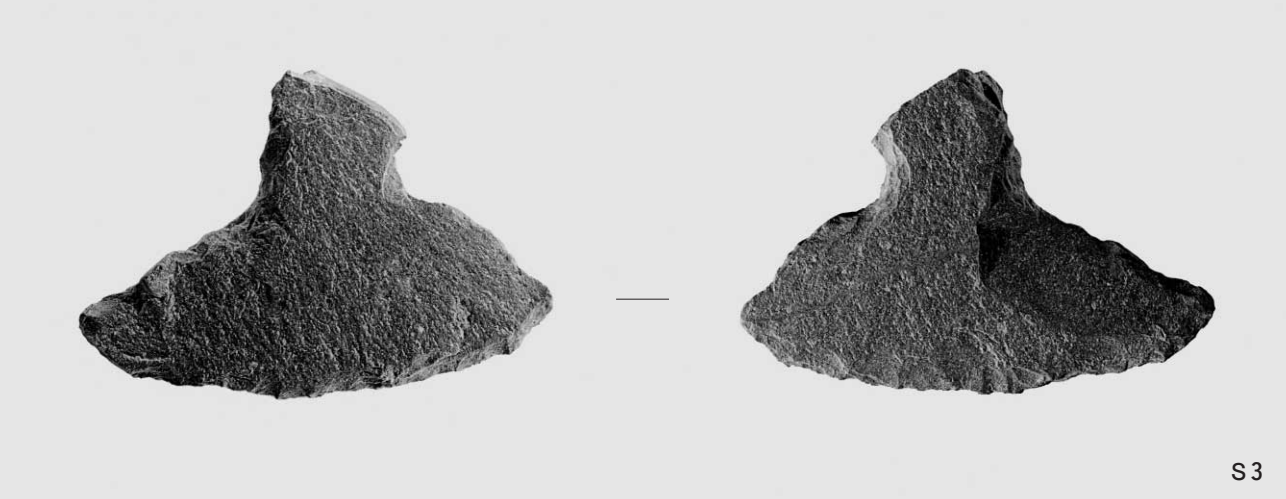
189・192～194・196：土器溜り出土土器



197：土器溜り出土土器　208・215：包含層出土土器

写真図版25　第2次調査出土土器・石製品





220・224・225：包含層出土土器　S 2：ＳＤ01出土石器　S 3：包含層出土石器

S4

S5

S4・S5：包含層出土石器

全景　北上空から

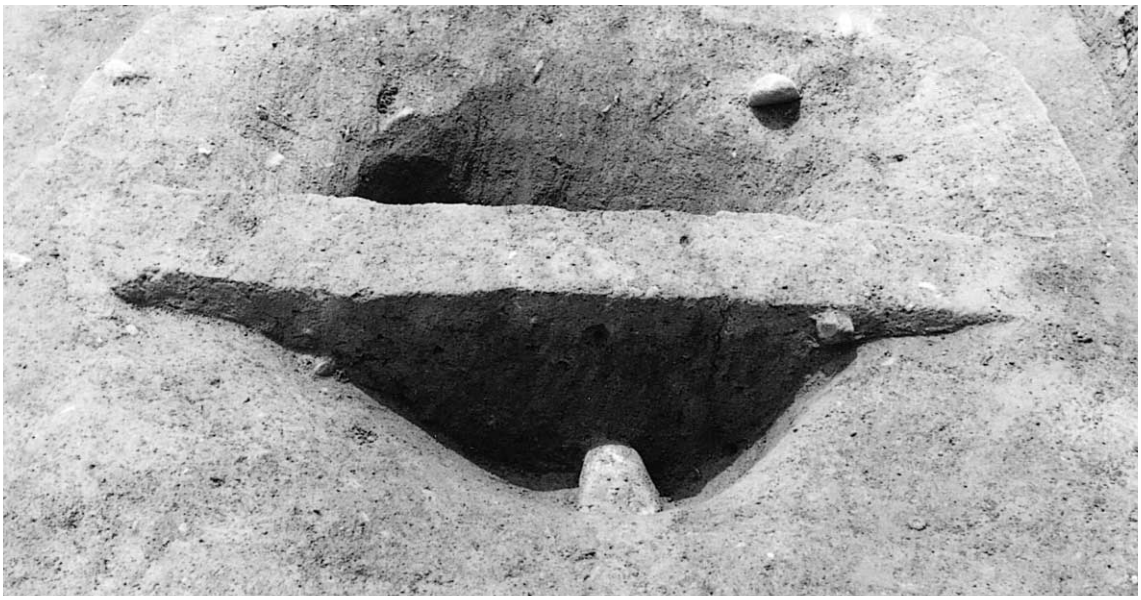
全景　東から

俯瞰　東上空から

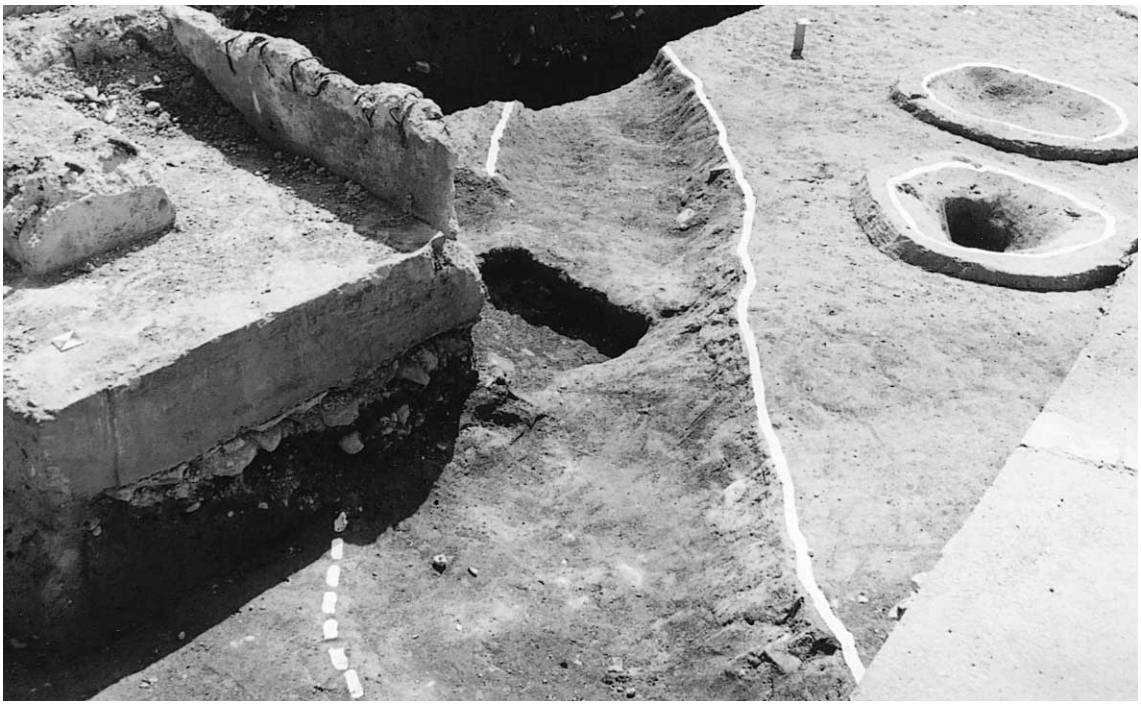
写真図版29　第3次調査

ＳＫ01断面　西から

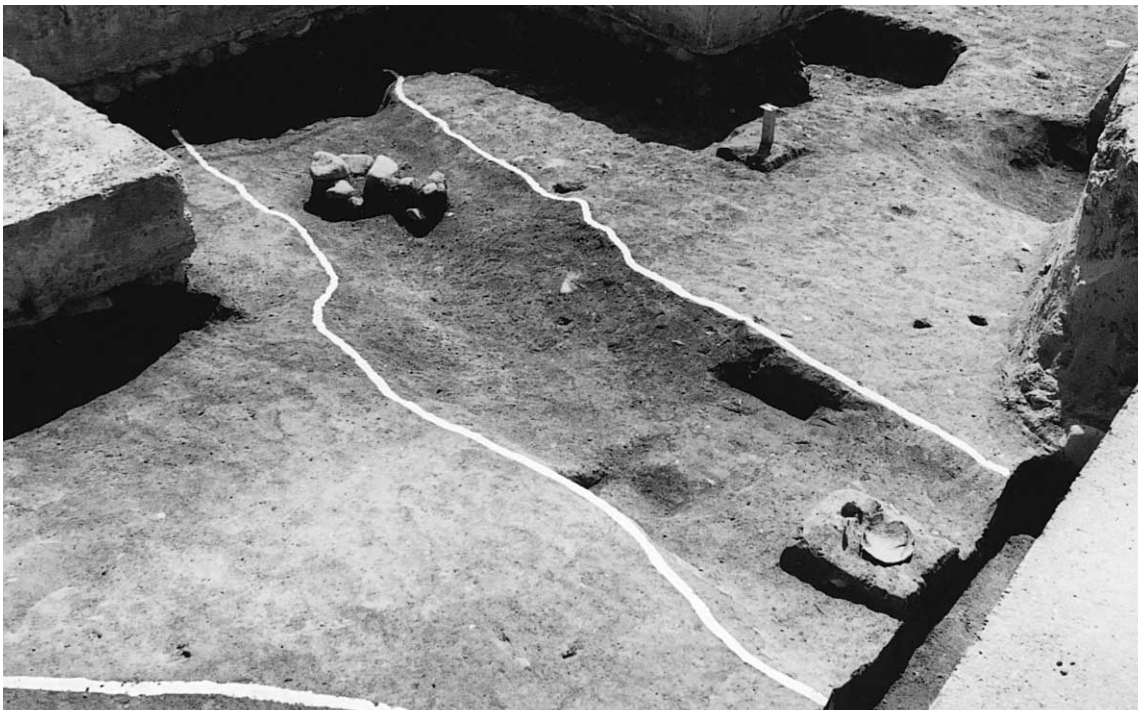
ＳＫ02断面　西から



ＳＫ03全景　東から



ＳＤ01全景
南西から



ＳＤ03全景
南西から

ＳＤ03土器出土状況
南から

写真図版31　第3次調査

ＳＤ03・04全景
南西から

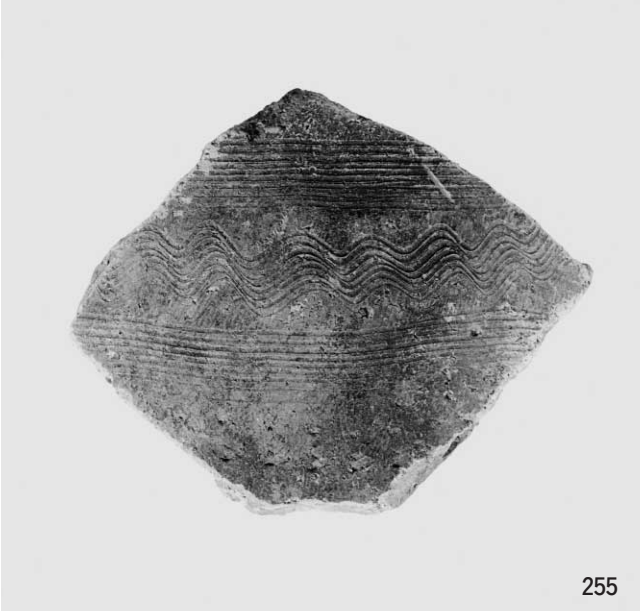
ＳＥ01全景　西から

246

247

254

263


255

271

272

246・247：ＳＤ01出土土器　254・255・263：ＳＤ02出土土器　271・272：ＳＤ03出土土器

写真図版33　第3次調査出土土器

279

283

280

289

284

281

①

279～281・283・284・289：ＳＤ03出土土器　①：281体部中位施文

291

292

301

294

313

291・292・294・301・313：ＳＤ03出土土器

写真図版35　第3次調査出土土器

328

340

329

341

344

350

347

328・329・340・341：ＳＤ03出土土器　344：ＳＤ04出土土器　347・350：包含層出土土器

351

352

360

355

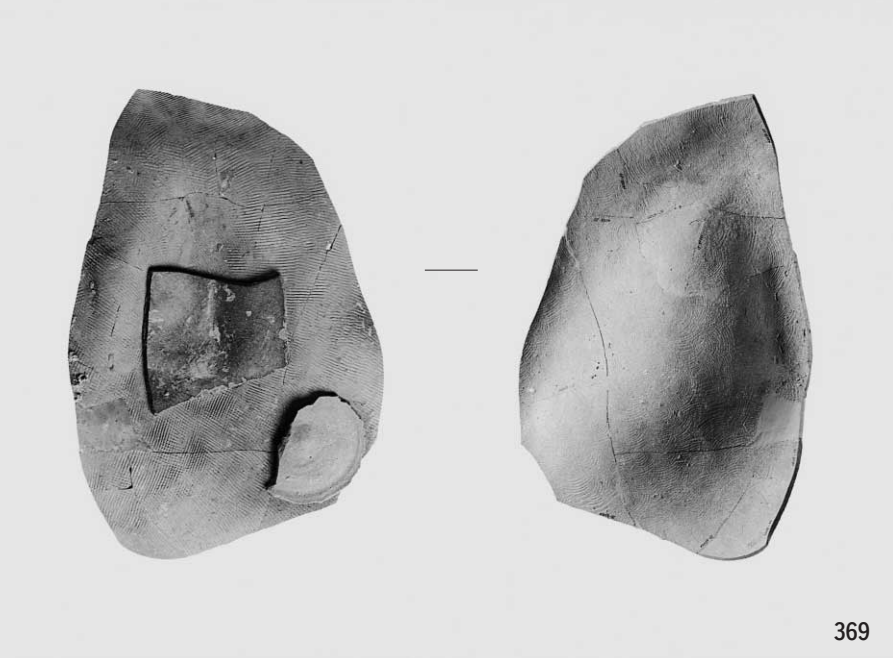
361

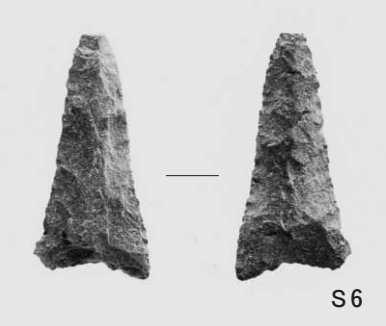
357

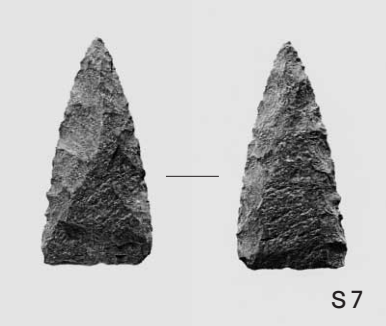
368

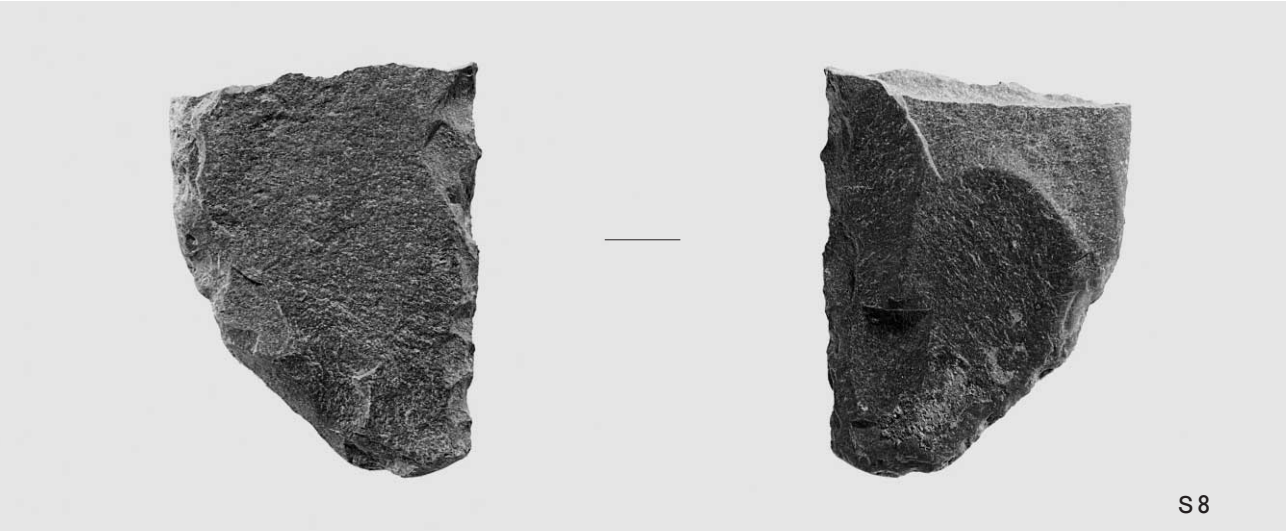
351・352・355・357・360・361・368：包含層出土土器

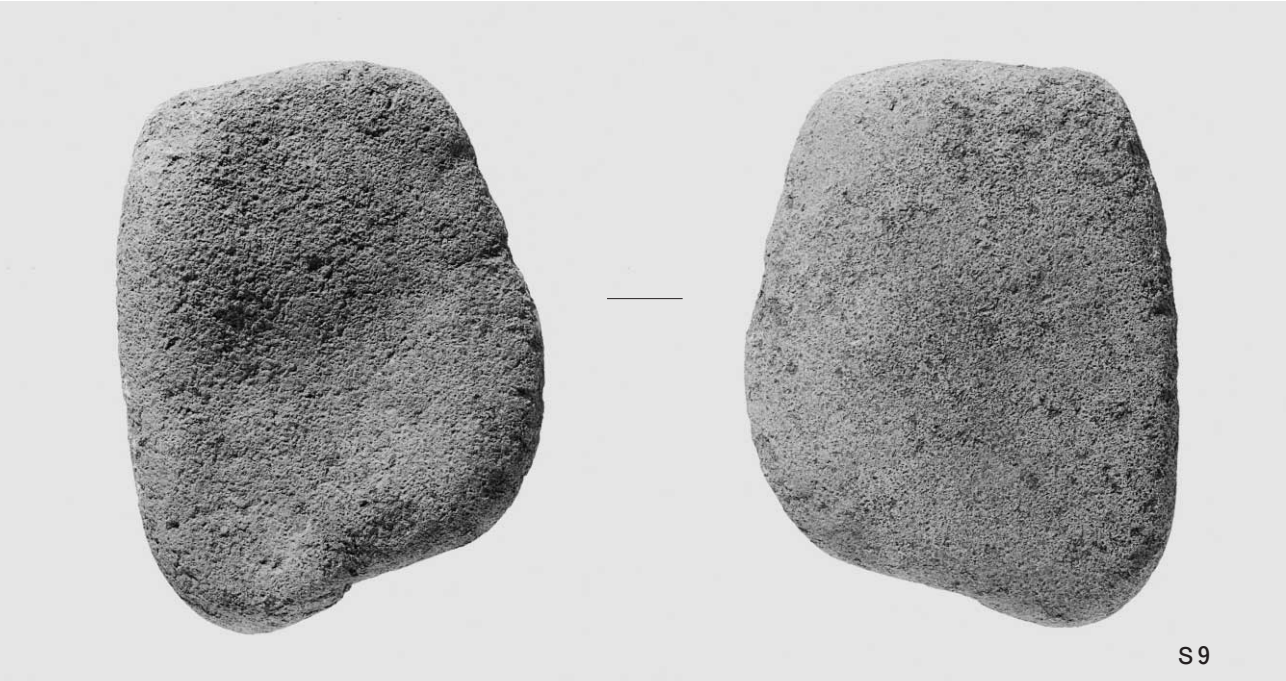
写真図版37　第3次調査出土土器・石製品











369：包含層出土土器　S6・S8：SD05出土石器　S7：包含層出土石器　S9：SD02出土石器

全景　東から

ＳＤ01　北から

写真図版39　第4次調査出土土器

370

382

372

384

380

387

370・372・380・382・384・387：包含層出土土器

遺跡俯瞰
南上空から

遠景　西から

写真図版41　遺跡

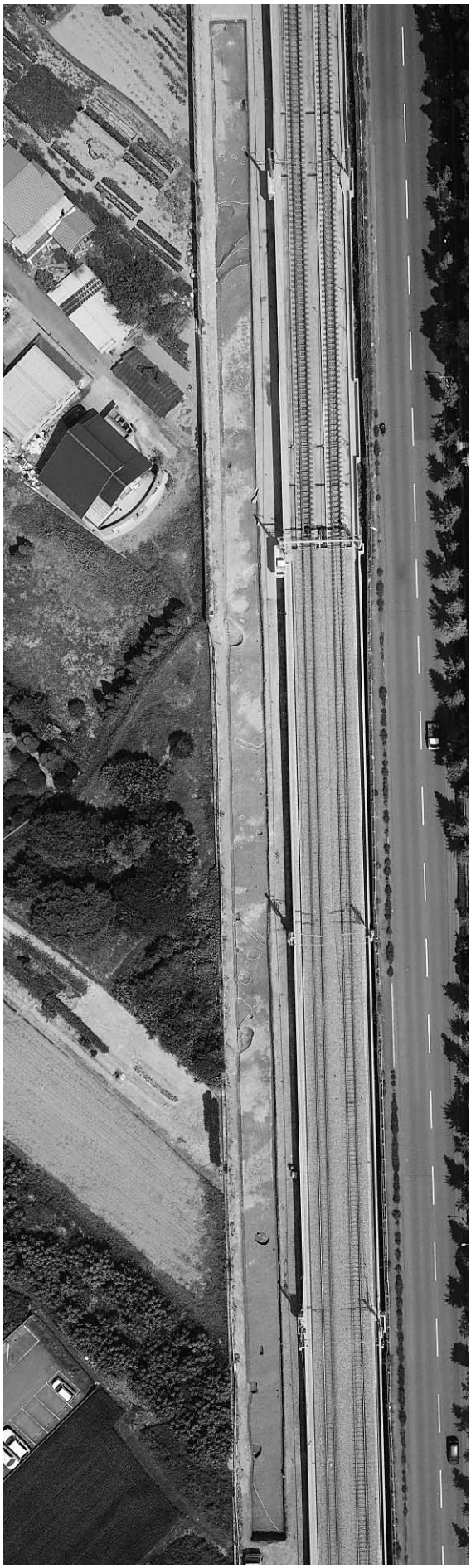
近景　北東上空から

近景　北上空から

（左）
第2次調査全景
北東上空から
（右）
第2次調査全景
南西上空から

第2次調査全景
北東から

写真図版43　遺構



（左上）
第3次調査全景
北東から
（左下）
第3次調査中央部
南西から
（右）
第3次調査俯瞰
南西上空から

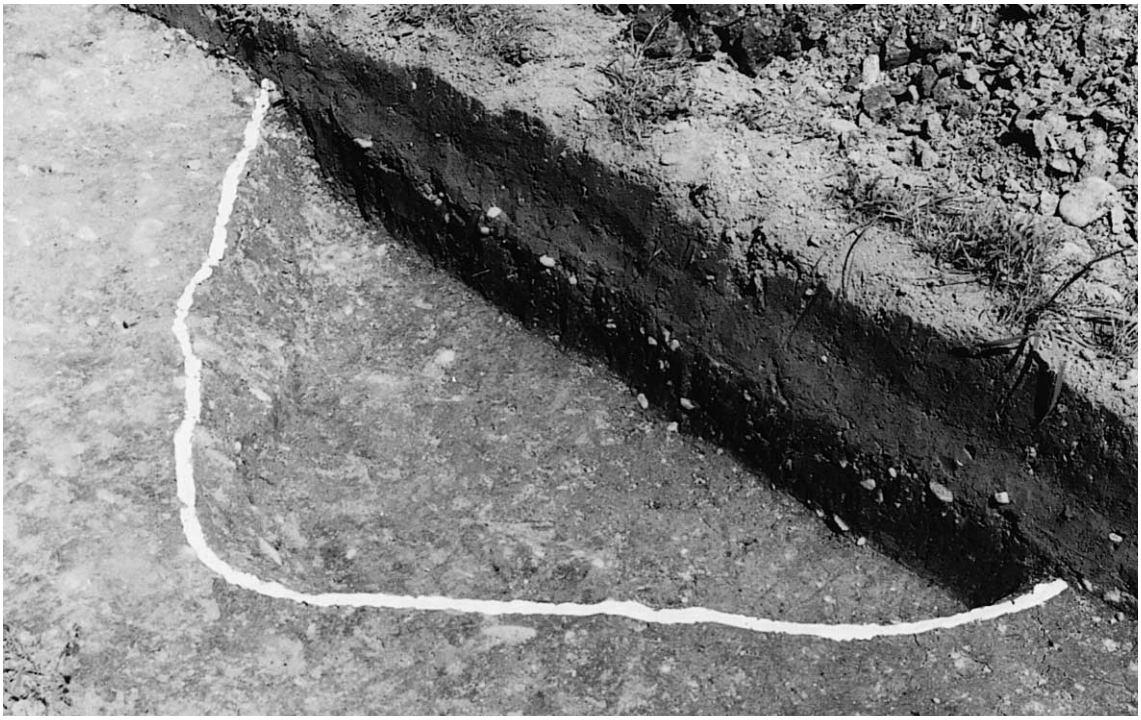
ＳＨ01　北西から

ＳＨ01　南東から

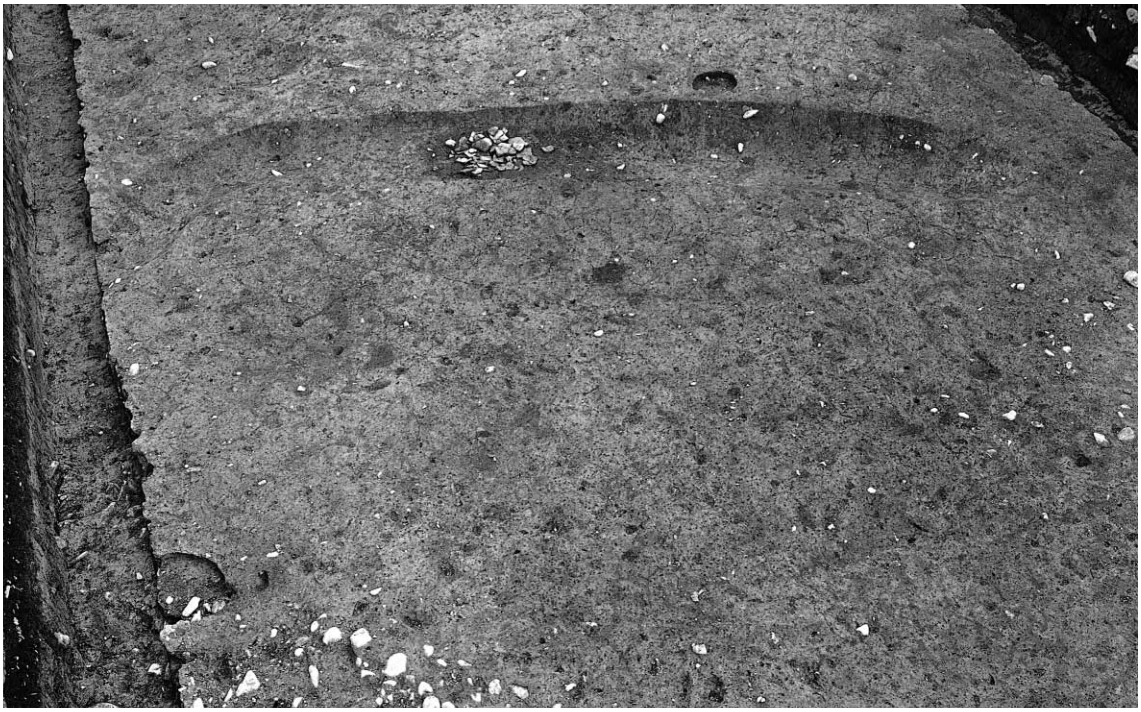
（左）ＳＨ01
土器出土状況
西から
（右）ＳＨ01
土器出土状況
東から

写真図版45　遺構

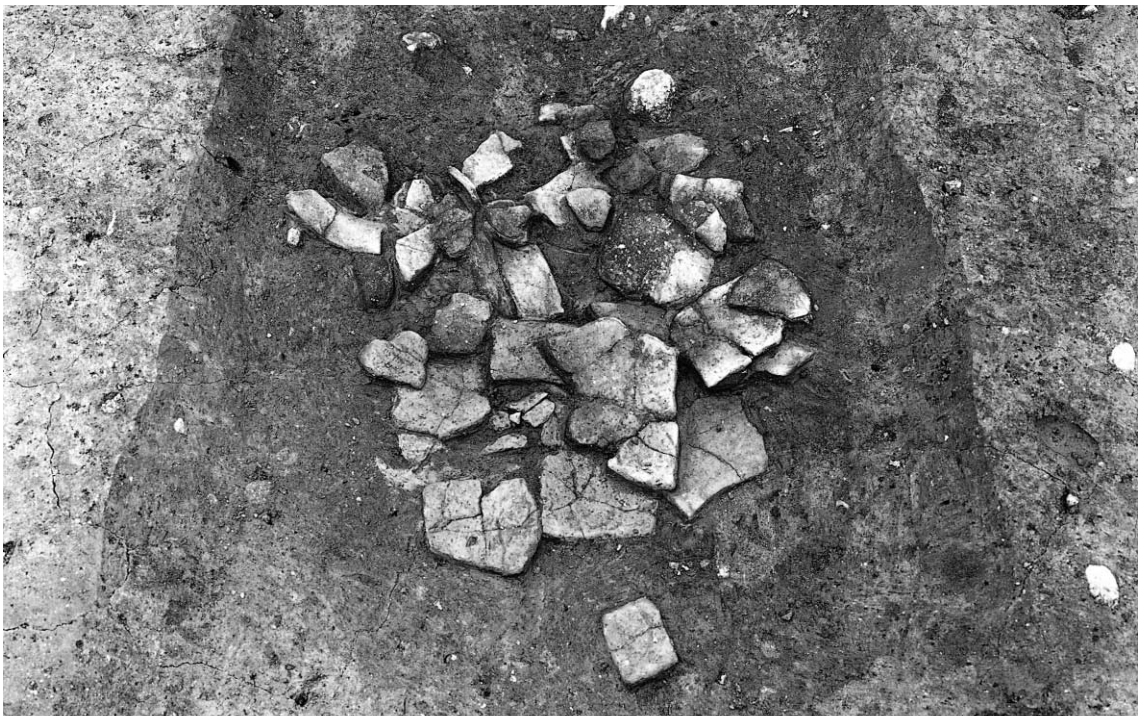
ＳＨ02全景（第3次）
南東から



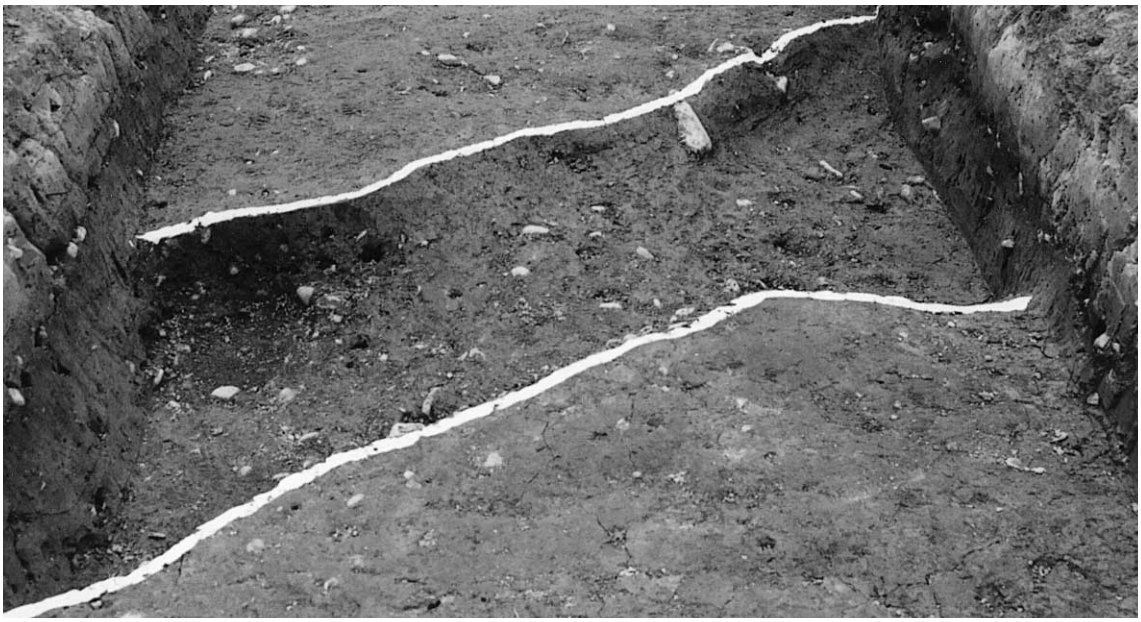
ＳＨ02全景（第1次）
北から



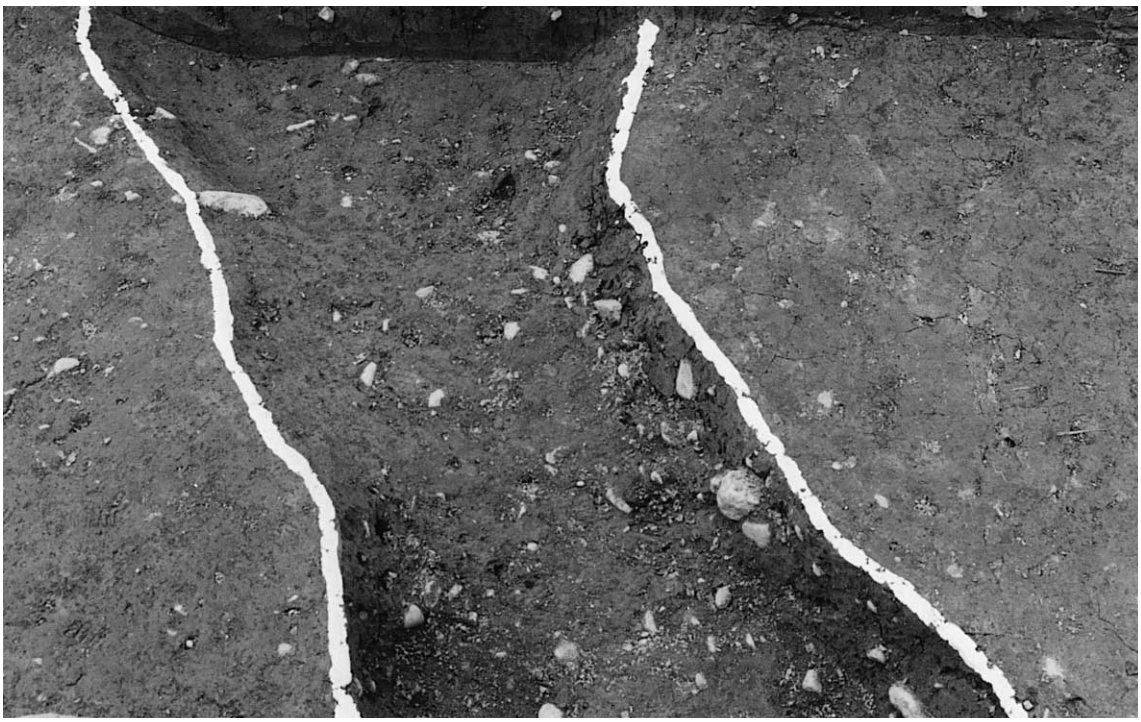
ＳＸ01全景（第3次）
東から



ＳＸ01（第3次）
土器出土状況
北から



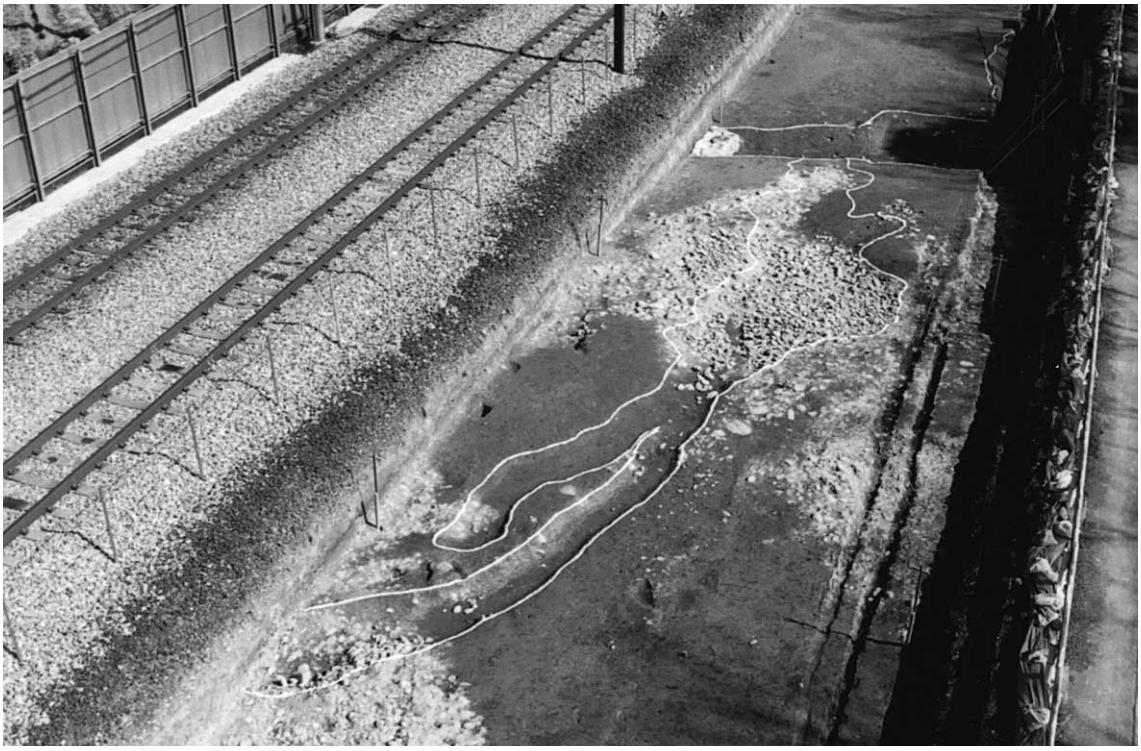
ＳＤ03全景（第1次）
北東から



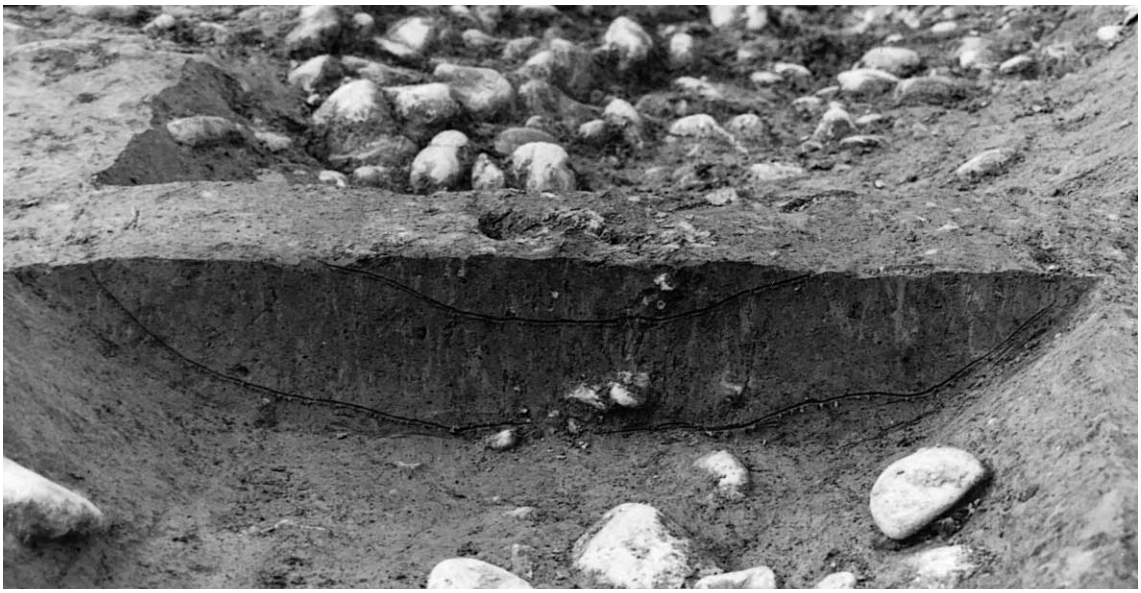
ＳＤ03全景（第1次）
南東から

写真図版47　遺構

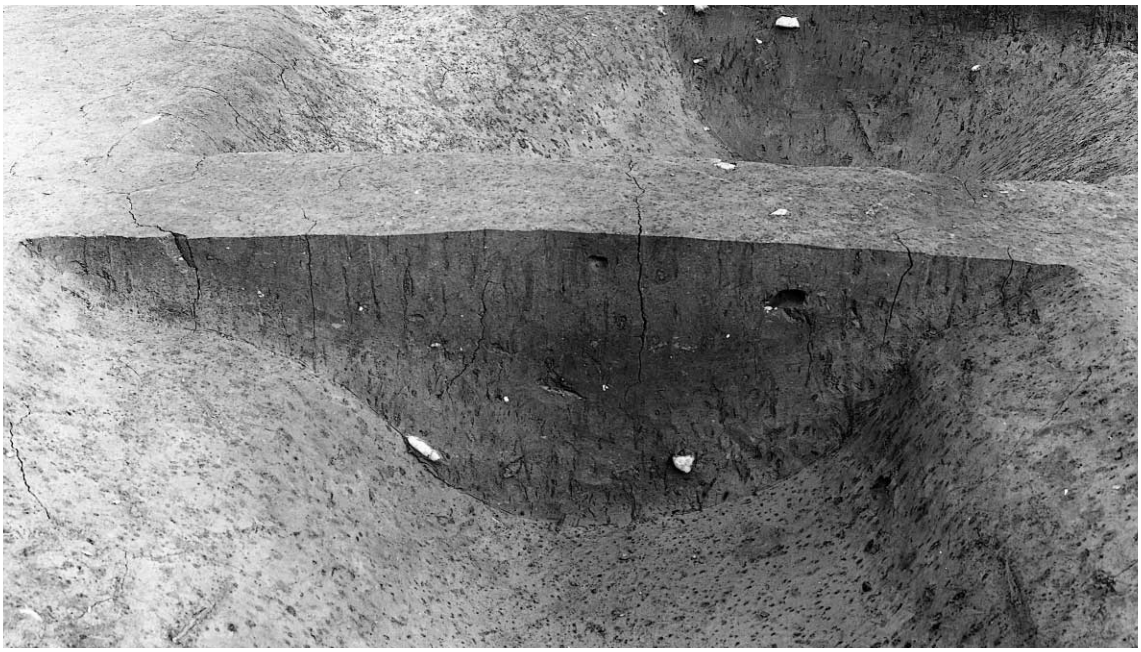
（左）ＳＤ04・06
（第1次）北東から
（右）ＳＤ04・06
（第3次）北東から



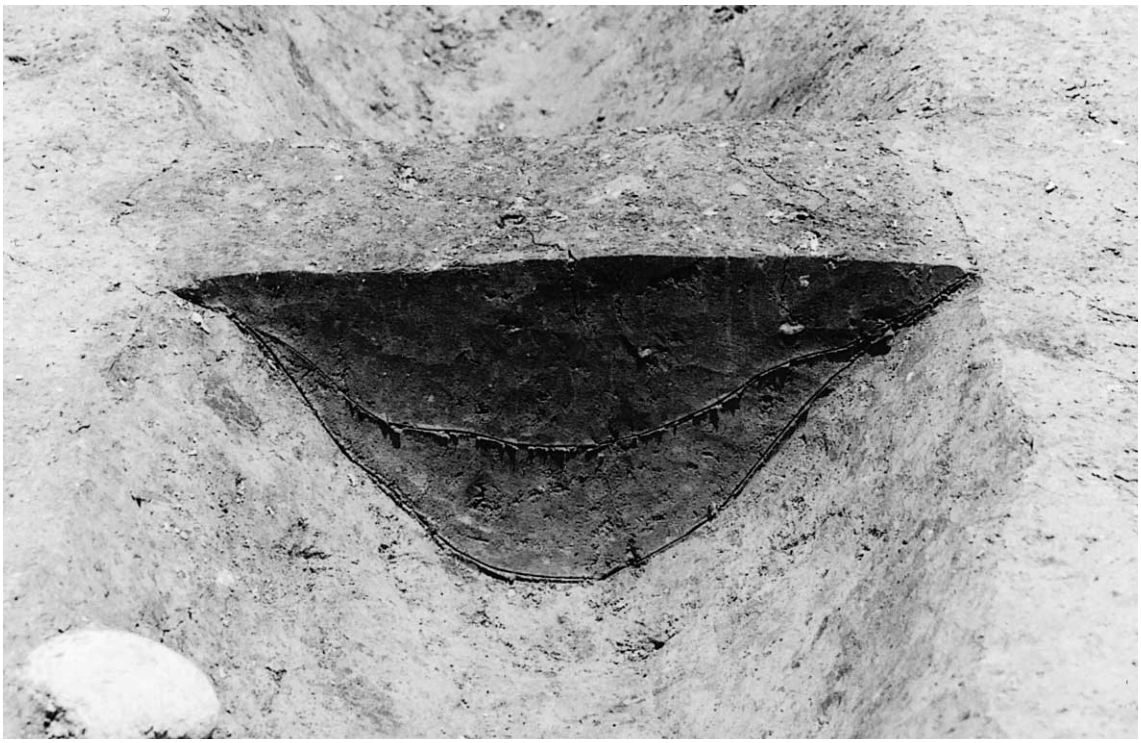
ＳＤ05全景
南西から



ＳＤ05断面
北東から



ＳＤ06断面
北西から



ＳＤ09断面　南から

ＳＤ10全景
北東から

ＳＤ11全景
南西から

ＳＤ11断面
北東から

（左）
ＳＤ11土器出土状況
（右）埴輪出土状況

ＳＫ01全景
南東から

写真図版51　遺物

1

8

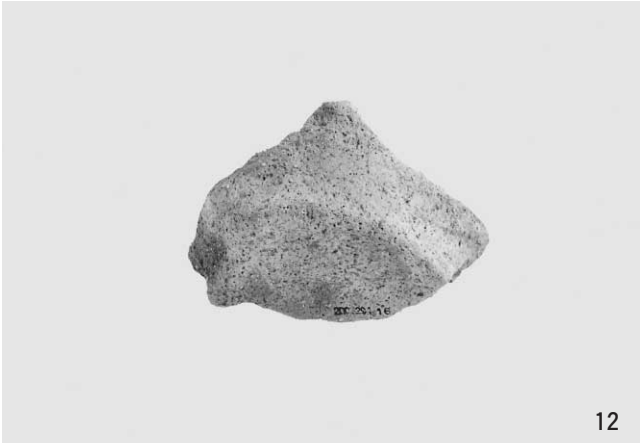
2

①

3

10

5


12

1～3：ＳＨ01出土土器　5：ＳＨ02出土土器　8・10：ＳＤ04出土土器　12：ＳＤ02出土土器　①：8接合部

13

16

18

14

21

22

23

13：ＳＤ05出土土器　14：ＳＤ06出土土器　16：ＳＤ10出土土器　18・21～23：ＳＤ11出土土器

写真図版53　遺物

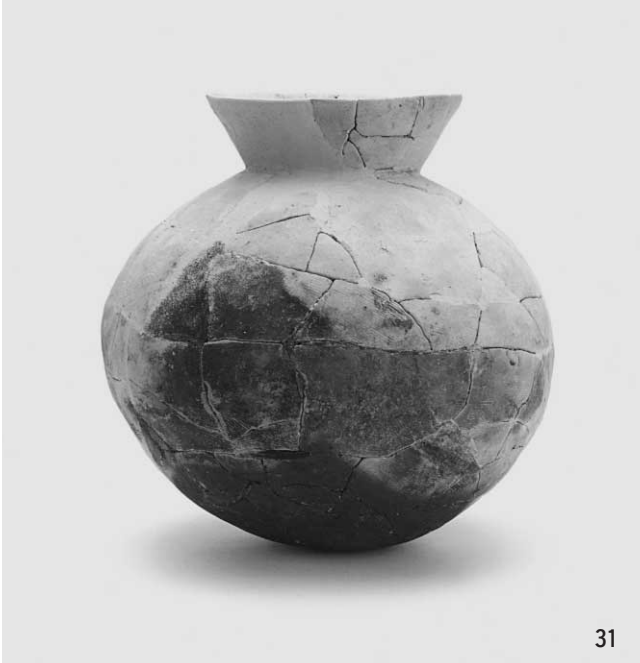
24

28

25

30

27


31

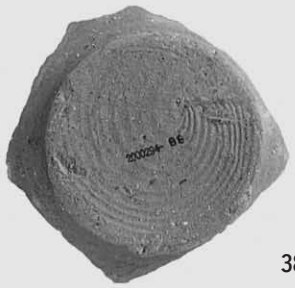
24・25・27・28・30・31：ＳＤ11出土土器

20

17

19

26


38

33

35

34

36

17・19・20・26・33～36・38：ＳＤ11出土土器

写真図版55　遺物

32・37・41：包含層出土土器

兵庫県文化財調査報告　第381冊

姫路市
南畝町遺跡･西延末遺跡

ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成22年３月31日　発行

編　集　兵庫県立考古博物館
〒675－0142　加古郡播磨町大中1丁目1番1号

発　行　兵庫県教育委員会
〒650－8567　神戸市中央区下山手通5丁目10－1

印　刷　福田印刷工業株式会社
〒658－0026　神戸市東灘区魚崎西町4丁目6－3